

駒場

2008



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部



KOMABA 2008 SUPPLEMENT

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2008
SUPPLEMENT



表紙に使われているロゴデザインは、平成11年に、教養学部創立50周年を記念して、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の新たなシンボルとして作成された。東京大学の伝統的なシンボルであるイチョウを3枚重ねることにより、学部前期・後期・大学院の3層にわたる教育の融合と創造、学問の領域を越えて世界に発展する駒場の学問の未来をイメージしている。制作は(株)禅の石塚静夫氏。

骨格標本 ニホンイシガメ *Mauremys japonica*
作成年不明 骨格本体14cm×21cm×6cm

写真のカメの骨格標本は、旧制第一高等学校の資料である。柴山自然科学研究所から移管されたものと思われる。

自然科学博物館には、現在、25種30体余りの骨格標本が保管されている。これらの骨格標本は、収容するための木箱が用意されているものがほとんどである。木箱は1面がガラス面になっているものが多く、頻繁に出し入れせずに、箱に入れたままガラス越しに見て観察したのではないかと考えられる。木箱の外側には「一高生物学教室」の焼印があり、当時分類整理するために貼られたと思われるシールも残っている。現在ではこの木製の箱も標本と共に貴重な資料である。

第一高等学校の旧蔵資料は、駒場図書館からすでに電子化され一部公開を始めている。2009年3月には教育用掛図も加わる。生物の掛図の中には、骨格標本と対応する絵も残されている。カメもその一つで、ほかにはコウモリがある。所蔵品展では掛図の複製パネルと合わせて展示することが多い。

2008年夏には、駒場博物館で自然科学博物館主催の「進化学の世界」展を開催した。進化学の世界展では写真のイシガメの他、ニワトリ、アオダイショウ、スズキ、カンガルー属の一種、タイワンザル、ドブネズミ、コウモリなど8体の第一高等学校の骨格標本が、動物の進化のコーナーの中で展示された。

カメ類は、背筋・腹筋が消失し、背骨・肋骨と皮膚層が融合し甲羅を形成している。ニワトリなどの標本とイシガメの標本を比べれば、他の生物の背骨・肋骨と甲羅の各部位の対応づけを試みることができる。第一高等学校では、「博物」の授業で、これらの標本や掛図を用いて、相同について理解を促していったのだろう。以前は、教養学部でも、これらの骨格標本を使い、学生にスケッチをして観察させる授業が行われていた。

本種は、1835年、ライデン博物館のテミンク (Coenraad Jacob Temminck 1778-1858) とシュレーゲル (Hermann Schlegel 1804-1884) によって、*Emys vulgaris japonica*として記載された。シュレーゲルは日本固有種であるシュレーゲルアオガエルに名前が冠されているから、ご存じの方も多いただろう。日本の大型脊椎動物には、シーボルトの『日本動物誌』編纂に携わったこのコンビによって学名が命名されたものが多い。

その後、大英博物館のグレイ (John Edward Gray 1800-1875) によって、亜種から格上げされ、*Emys japonica*とされた (1844年)。1862年には、ロシアのストラウチ (Alexander Strauch 1832-93) が所属を変更し、*Clemmys japonica*とした。さらに、1964年、米ラトガス大学のマクダウェル (Samuel B. McDowell) によって *Mauremys* 属に分類直された。本種を含むグループは近年分子系統学的検討が進められていて、再分類の必要が唱えられている。

標本プレートには、混乱が見受けられる。まず、学名 *Clemmys japonica* Gray の種小名 *japonica* は *japonica* の単純ミスだろう。また、上記の経緯からすると、*Emys japonica* Gray もしくは *Clemmys japonica* Strauch となっていなければならない。標準和名も現在ではニホンイシガメであるが、プレートでは単にイシガメとなっている。

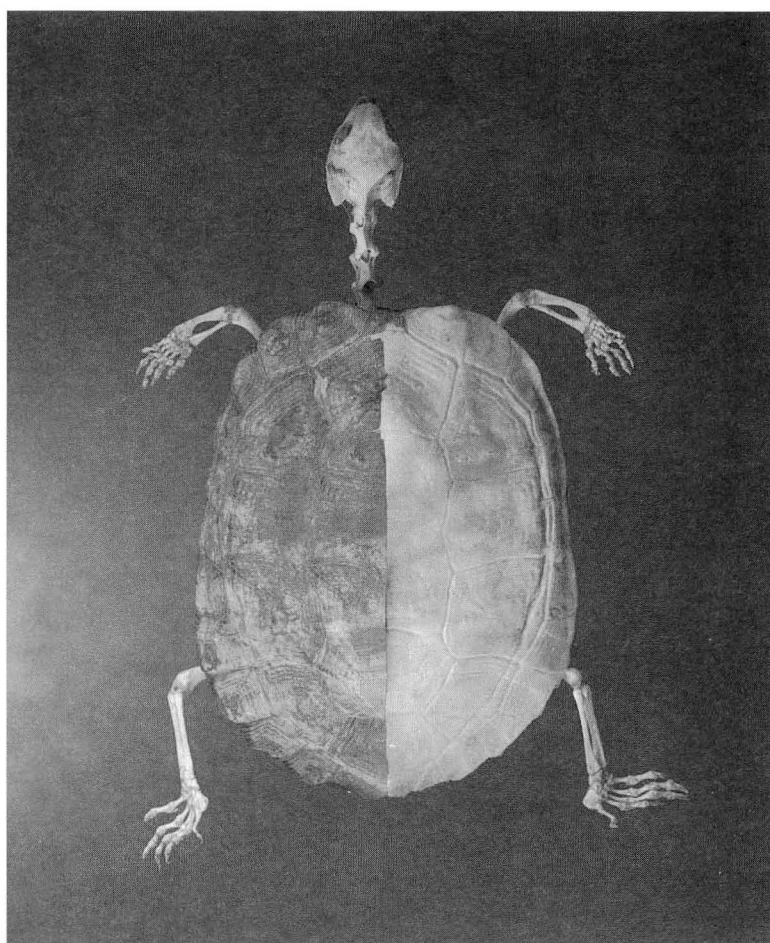
本種は日本固有種であり、本州・四国・九州に生息している。ただし、北関東以北は人為的導入の可能性が高い。ミシシッピーアカミミガメなど外来種の侵入や生息場所の減少のため、かつてありふれていたニホンイシガメもだいぶ個体数を減少させたようだ。山口県などでは準絶滅危惧種に指定されている。環境省レッドデータでは「情報不足」となっている。

幼体の甲羅は扁平な円形で、江戸期には文銭を思い起こさせるため、銭亀と呼ばれた。しかし、銭亀として売られる子亀は、日本産クサガメの幼体に、そして養殖できる外国産のクサガメの幼体に順次置き換わっていった。これも、減少により、ニホンイシガメの幼体が入りにくくなったことのあると考えられるだろう。

本骨格標本は教育用であり、生物資料としてよりは、歴史史料としての価値が高い。しかし、そのうち貴重種の標本となってしまうのかもしれない。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2008
SUPPLEMENT



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部

まえがき

本書「駒場2008」は、大学院総合文化研究科・教養学部の年報であり、前年度発行した「駒場2007」のSUPPLEMENTである。2008年度の活動報告を記した第Ⅰ章、08年4月以降に着任した専任教員と特任・客員教員を紹介する第Ⅱ章、および付属資料1、2で成り立つ本書には、リベラルアーツの理念を掲げる駒場の教育および研究活動の実態が余すところ記されている。特に「駒場2007」に比べ、第Ⅰ章の分量と付属資料2に記されたシンポジウムと講演会の量が大幅に増えていることは、2009度に教養学部設立60周年を迎える駒場での教育と研究活動が、ますます活発となっている証と言えよう。

各教員にとって本書は、改めて東大駒場の様々な活動や将来計画を認識し、新しい駒場のメンバーを知るためのよき媒体となるであろう。また、学生のみなさんにとって本書は、「駒場2007」との併読により、多様な側面をもつ駒場の制度・組織や、授業で出会う様々な教員の主要な研究テーマとバックグラウンドなどについての貴重な情報源となるであろう。

駒場に集うすべての人々のために、多くの方々の協力を得て編まれたこの書物が、より多くの読者の方々に活用されることを願ってやまない。

2009年2月
広報委員会

I

2008年度における大学院総合
文化研究科・教養学部

1 研究科長・学部長の交代にあたって

大学院総合文化研究科長・教養学部長が、2009年2月16日付けで小島憲道教授から私こと山影進に交代しました。以前なら定年退官の歳になる今年に、このような重責を担うことになるとは夢にも思っていませんでした。そのような私事はさておき、今年は、1949年の新制東京大学の発足と同時に設立された教養学部の60周年にあたります。また、これから2年の任期中に、第1期中期目標・中期計画の結果を出すとともに、第2期のそれを策定することになります。ある意味で節目となる時期の研究科長・学部長に選出されたことに、身の引き締まる思いがしております。

小島研究科長の時代の大学院総合文化研究科・教養学部（以下、東大駒場）についてご紹介したいことが多々ありますが、それらについては、年報『駒場2007』及びこの小文が載っている『駒場2008』に詳しく説明されているので、是非お読みいただきたく存じます。この2年間、学部教育、大学院教育そして研究、さらにはキャンパス環境についてめざましい変化がありました。それらは教職員が一丸になっての努力が引き起こしたものです。このようなエネルギーが今後とも持続することを確信しております。

以下の文章は、これまで自分の狭い専攻の教育研究とごく限られた学内行政とを辛うじてこなしてきた平教員が、はじめて東大駒場なるものを管見しながらの独り言です。もし目障りな文章があれば、予めお詫び申し上げます。

東大駒場は複雑な組織です。学部1、2年生に対する学部前期課程教育、3、4年生に対する学部後期課程教育、そして大学院教育の全てを担当して、教育における3層構造を形成しているとともに、文系・理系に亘る広範な研究分野を専攻する教員を擁して、伝統的な学問の継承・発展から先端的・融合的な学問の創成まで多面的な研究活動の場となっています。この意味で、東大駒場自体が、東大全体の中のミニ総合大学としての特徴を有していると言えましょう。また、東大の学部生全員に対する前期課程教育の責任母体であるという東大駒場の特徴は、全国的に見ても、ユニークなものと言えましょう。

ちなみに、大学院総合文化研究科・教養学部を東大駒場と言い換えるのは必ずしも正確ではありません。大学院総合文化研究科・教養学部は、東大キャンパスの3拠点の一つとしての駒場地区キャンパスの全部ではなく、その約半分にあたる駒場第1キャンパスにあり、さらにこのキャンパスの一角には大学院数理学部研究科もあって、そこに所属する教員は学部前期課程の数学教育を担当しています。とは言え、ここでは大学院総合文化研究科・教養学部を東大駒場と呼ぶことにします。

かつて、井の頭線には駒場と東大前という2つの駅がありました。キャンパスから南西と南東のところどころです。今でも、その名残を線路に沿ってあちこちに見つけることができます。この2つの駅が廃止・統合されて、ちょうど中間に新駅が生まれるとき、駅名を東大駒場前とすべきだという声が東大駒場の教員の一部からあがったという伝説を若い頃聞いた記憶があります。真偽のほどを確かめたわけではありませんが、もし実現していたら東大駒場という言葉はどのように使われていたのでしょうか。閑話休題

上で述べた東大駒場の特徴は、リベラルアーツ重視という教育理念に繋がっています。リベラルアーツは、もちろん日本語では教養と訳される言葉ですが、一般的な用法から見ると、東大の制度を考える上で誤解を招きかねない訳語です。すなわち、教養教育は第2次世界大戦前の制度では高等学校が担うものとされ、戦後の制度では一般教育を担当する大学教養部が担うものとされたからです。しかし東大では、4年制のリベラルアーツ・カレッジとしての教養学部が設置されました。10学部を擁する東大の前期課程が6つの科類に分けられていること、さらに授業を受ける単位としては実質的には4つにしか分かれていないことに、リベラルアーツ教育の理

念が体现しています。そして何よりも、少人数授業と狭い専門に特化しないカリキュラムを特徴とする学部後期課程の存在は、教養教育が学部1、2年生で完了するわけではないことを象徴してきました。教養学科として発足した後期課程の名称や構成は、その後、大きく変わりますが、リベラルアーツ・カレッジとしての教養学部という東大の中でのユニークさは今後とも活かされていくべきではないでしょうか。

リベラルアーツという基盤を利用して、当時は新奇だった学際的な学問を日本の学界に持ち込んだのも東大駒場でした。具体的には、地域研究という外国語を介しての外国の（文学・語学ではなく）文化・社会への接近、国際関係論、科学史科学哲学、文化人類学、人文地理学のコースが相次いで立ち上がりました。当時はアイデンティティを確立すべくさまざまな議論がなされたようですが、どれも今日では違和感を覚えない学問として定着しています。また、新制大学院の制度ができた1953年には、早くも教養学部を世話学部とする課程として、西洋古典学、比較文学比較文化、国際関係論が設置されました。このような草創期における教養学部の東大全体の中での存在（プレゼンス）が、今日、総合文化研究科・教養学部の特徴として強調されている学際性と国際性に継承されているのだと思います。

こうしたリベラルアーツ・カレッジとしての教養学部とその上の総合文化研究科という東大駒場の構成は、もちろん古典的な意味でのリベラルアーツ重視ということではなく、アメリカの高等教育におけるリベラルアーツ・カレッジと研究大学院という構成に近いものです。ちなみに、東大駒場の英語名称は、The College of Arts and Sciencesであり、The Graduate School of Arts and Sciencesです。これは教育内容の実態を表しているとは思いますが、ときに外国人から誤解を受けるようです。なぜなら、アメリカでは、Universityの学部レベル全体の名称が前者であり、専門職大学院（医科、法科、経営、公共政策など）つまりProfessional Schoolsを除く大学院全体が後者であることが普通だからです。つまり、専門職大学院を除く東大の中核が、東大駒場であると思わせてしまうことがあるようです。学位号である博士（学術）の英語名称Doctor of Philosophyも、いかにもそのような誤解を産みかねない東大駒場に相応しいですね。

制度的な実態としては、教養学部は7,000人近くの前期課程学生と400人以上の後期課程学生とに対する教育を提供しています。総合文化研究科についても、1,400人もの学生が日夜勉学にいそんでいます。この3層構造の教育のために、300人以上の教員が東大駒場に所属しています。もしも一貫した4年制リベラルアーツ・カレッジとして1学年200人合計800人の学部学生を抱えていたならば、教員数は現状よりはるかに少ないものとなり、その結果、後期課程で見られるような少人数の濃密な授業を提供することは不可能となるでしょう。また、大学院教育と密接に結びついた研究面でも、現状のような広範で活発な活動は期待できないでしょう。教員サイドからは3層構造の中での授業負担の重さに対する苦情・不満が聞こえてくることがあります。研究に割きたい時間のことを考えれば、理解できないこともありませんが、高校までの教育と受験準備に染まって入学してきた若者をリベラルアーツ教育で染め直す喜びをもっと味わってもらいたいものです。そして学生にとっての教育環境という観点からは、多種多様な学問的刺激が用意されており、とくに後期課程については奇跡的と表現して良いほど、恵まれていると言えるでしょう。

もちろん、一高時代と同じ大きさのキャンパスで、その当時の学生の何倍もの学生が勉学・研究をはじめとするさまざまな活動をしているわけですから、過密・混雑・スペース不足といった物理的問題が東大駒場にとっての懸案でした。しかし幸いなことに、私の学生時代はもちろん数年前と比べても、この問題は大きく改善したと実感しています。また、景観についても見違えるくらいに改善しました。東大出身の来訪者は異口同音にこの点を指摘しますから、よほど今のキャンパスが印象深いのでしょう。

要するに、矢内原忠雄教授に始まり小島憲道教授に至る歴代の研究科長・学部長の下で教職員が不断の努力を払ってきたことが実って、東大駒場の現在があるわけです。だから私は安心して、その延長線上でこれからの仕事をしていけば良いのだと思います。

直面している具体的な課題のひとつは東大駒場の国際化でしょう。国際社会から眺めた際の

東大駒場の魅力とは、大学院だけでなく学部でもそして教員団でも、どれだけ外国人が普通に溶け込んでいるかという指標で近似できるのではないかと思います。それを実現するためには、キャンパス内外のインフラ整備を一層進める必要があります。もっとも、国際化というのは外国人が増えるということだけを意味しません。英語での授業が増えれば良いというわけでもないでしょう。国際化の必要性について、私が授業していていつも感じるのは、日本人学生からの質問の極端な少なさです。講義やゼミ発表を聴きながら、終わった瞬間にいくつもの質問を出し、ディスカッションをできるような勉強態度をなるべく多くの日本人学生に身につけさせたいものです。それは留学する先だけでなく、国際社会で生き延びる上で不可欠の能力ではないかと思うからです。

もうひとつの課題は、急速に変化している研究の最先端・フロンティアを大学院教育はもちろん、リベラルアーツ教育に制度的に反映させることです。これは授業内容の見直しにとどまらず、前期課程、後期課程の制度改革にも及ぶ課題です。前期課程については全学的な調整も必要ですが、後期課程は東大駒場がイニシアティブをとることが可能です。21世紀の東京大学が社会に送り出す学生の身につけるべき教養とは何なのかを指し示すような理念を掲げる必要があるでしょう。それは、言うまでもなく、新しい風潮・流行を追いさえすればよいというものではありません。むしろ、現時点では予測できないような新しい困難で複雑な状況に対しても自分の分別で立ち向かえる能力の涵養でしょう。

もちろん喫緊の課題に取り組むという点では、従来からの不断の努力を今後とも続けていく必要があるでしょう。当たり前のことですが、教育環境・研究環境・労働環境・生活環境をさらに改善することが課せられていると認識しています。教職員や学生のエネルギーが沸きかえり、その交通整理さえしていれば東大駒場が研究教育の場として一層すばらしいものになることを信じながら、無事に任期满了の日が来ることを待ち望むことにします。最後に、自戒を込めて控えめに言いたいのですが、狭い専門に関心の偏りがちな教員が教えていても、東大駒場というところは、個々の学生を（少なくとも私よりは）幅広い知識を持ち豊かな教養を兼ね備えた大人にして社会に送り出して来たし、これからもそういう教育のできる場でありつづけると確信しております。

(大学院総合文化研究科長・教養学部長 山影 進)

2 運営諮問委員会(第3期第1回会議)

大学院総合文化研究科・教養学部の教育研究計画やその実践に関して、審議、助言を行っていく運営諮問会議の第3期が2008年9月に発足した。第3期の運営諮問会議の委員は以下の6名の方々である(50音順)。

石井紫郎委員(学術振興会相談役)
 小倉和夫委員(国際交流基金理事長)
 川本皓嗣委員(大手前大学学長)
 北澤宏一委員(JST理事長)
 小泉英明委員(日立製作所フェロー)
 室伏きみ子委員(お茶の水女子大教授)



第3期第1回会議は、「教育の国際化」を諮問事項として10月9日(木)に開催された。委員6名全員の出席に加えて、学内から、研究科長をはじめとする研究科長室のメンバや専攻長・系長が出席し、諮問事項に関連して、外国語教育に携わる前期課程外国語部会主任、教育の国際化に関連するプログラム委員長等も加わった。

会議は、小島研究科長の挨拶の後、議長として選出された川本委員の司会により進められた。まず、第一回目にあたり、長谷川副研究科長から大学院総合文化研究科・教養学部の概要説明が行われ、続いて、木村副研究科長から、教育の国際化に関連して、前期課程の外国語教育、EALAI (East Asia Liberal Arts Initiative) 及びAIKOM (Abroad in KOMaba) プログラムについて概要説明が行われた。

その後、委員の方々から、様々な質問や提言を頂いた。以下はそれを論点にしたがって整理したものである。総合文化研究科・教養学部側からの発言内容も盛り込んであるが、その発言者名は下線を引いてある。

語学教育を中心とした教養教育の情報発信

- ・ 駒場の外国語教育に関する様々な取り組みを他大学に提供していくという視点を持つてほしい(石井)
- ・ 教養学部は学際性の拠点として、様々なディシプリンを架橋・融合する力を持っている。この架橋・融合の経験等を世界に発信していくべきである(小泉)
- ・ リベラルアーツへの回帰とあわせて、教養学部の成果を他大学でも活かせるよう情報発信をしてほしい(室伏)

国際化の進め方

- ・ 国際化=アメリカ化となっていないか。カリキュラムをみてもアメリカ、ヨーロッパに比べ、アジア、アフリカが少ない(小倉)
- ・ 英語教育と国際化は分けて進めなければならない。大学が一流であって、バリアがなければ、大学は自然と国際化する。そのバリアのひとつが授業を英語で行っていないことである(注:前期課程ではALESSの119クラスとその他の2科目、後期課程では31科目が英語での授業となっている)ので、この点を考えてゆくべきである(北澤)
- ・ AIKOMについては、理系への拡大、人数の増加を考えていくべきである。加えて、学生の交流を深めることも重要である(室伏)
- ・ 東アジア四大学フォーラムを通じて、東アジアにリベラルアーツを発信している。歴史問題を考えるための各大学の先生を招いてのテーマ講義、教科書やブックガイドの制作、集

中講義の形での東アジアへの我々のリベラルアーツの輸出等を精力的に進めている（刈間）

語学教育のあり方

- ・ 大学に入学してからの英語教育では遅い。世界一の大学となるために、入試において他大学よりも高い基準を受験生に課すことも検討すべきである。例えば、TOEFLの点数で選抜するような方針もありうる（小倉）
- ・ 日本の外国語教育は成果を出していない。学際性と同様、様々な領域（言語教育学、言語学、認知科学、神経科学）の架橋・融合を通じて、新しい語学教育を考えていくべきである（小泉）
- ・ ALESSのような自ら学び研鑽する機会を与える授業は重要である（室伏）



教育の運用について

- ・ 独自のカリキュラムを初めとした様々な全学的な取り組みには敬意を表するが、一方で、大規模クラスの問題や教員の負担の問題がある。これらの問題を軽減するための全学的な支援体制を考える必要がある（室伏）
- ・ 東大の国際化はたしかなビジョンのもとに全学・全学部体制で取り組むべき問題であり、英語など外国語教員の判断や努力に多くを委ねるのは、やや筋違いではないか（川本）
- ・ 教員の学問レベルが国際化や教育全体の保証となる。目先の改革等にとらわれすぎず、しっかり勉強をする必要がある。語学教育においてもある種のアウトソーシングやカリキュラムの工夫で省力化し、勉強の時間をつくるべきである（川本）

次回以降の課題

- ・ 以下の項目について、次回以降の諮問会議で議論すべきとのご意見を頂いた。
大学院重点化以降の基本的なコンセプトの変化と進学振り分け（石井）
グローバル化の中での地域研究（リージョナルスタディ）のすすめ方（小倉）
歴史教育についての考え方（小倉）
知性に対して、感性の教育や意欲についてどう考えているのか（小倉、小泉）

具体的な提案を含めて様々な意見を頂き、議論の時間が足りなくなる程、充実した2時間の会議であった。頂いた提言を重く受け止め、外国語教育を含む教養教育の充実、教育の国際化に取り組んでいく。第3期運営諮問委員会は、二年間、年二回ずつ四回の諮問会議を開催する予定で、次回第2回会議は、2008年度末を目処に「後期課程における教育」を諮問事項として開催される予定である。

（学部長室 加藤恒昭）

3 新カリキュラム・新しい進学振分け制度の学生評価

平成20年3月は、2年前の4月に導入された新カリキュラムで学んだ学生が専門学部(後期課程)に進学する時期にあたったことから、教養学部では、これらの学生(前期課程の修了生)全員を対象に「教養教育の達成度についての調査」を実施した。具体的には、3月21日～28日までの期間、教養学部の教務電算システム(UTask-Web)の上で実施した。冬学期の成績を確認するためにインターネットでアクセスした2年生に、教養学部長名でこの調査への協力を求め、ネット上で回答してもらった。この手法は教養学部では初めての経験だったが、回答数は約720で、およそ22%の学生が回答してくれた。

今回の調査の目的は、平成18年度の改革で導入されたカリキュラムが、果たして目標通りの成果をあげているかを点検することであった。質問票の作成にあたっては、ハーバード大学のシニアサーベイなどを参考にし、(1)教育達成をどの程度身についたかというアウトカム視点から聞く設問になっていること、(2)カリキュラムや授業内容だけでなく、教室や図書館をはじめとする施設、さらに窓口での教職員の学生支援などを含めた、大学の教育活動全体について成果を聞いていることに特色があった。

調査項目と自由記述以外の集計結果を次頁に示す。

主要な結果を要約すると、知識(Q1)や論理的、分析的に考える力(Q2)については身についたという回答がそれぞれ75%、64%に達し、20年度のカリキュラム改革が一定の成果を達成できたことが示された。他方、討議力(Q3)については約8割の学生が身につかなかったと答え、課題発見能力や主体的に行動する力についても、達成度は約5割にとどまり、課題が明らかになった。カリキュラムや授業に関する評価は概ね肯定的だったが、教員との接触については8割近い学生が不十分であると答え、事務の対応についても行き届いていないと回答した学生は5割を切った。また、学生相談関係の対応についてはほぼ6割が肯定的であった。施設面では、教育施設、福利厚生施設とも9割に近い学生が整備されていると評価している点は、特筆すべきであろう。対して、学生交流施設に対しては整備が遅れていることが浮かび上がった。自由記述では、学生からの率直で真摯な意見が多数聞かれた。全意見を教授会で教員に配布し、ファカルティ・デベロップメントにとって貴重な材料であることが、確認された。

出口調査は、今後、継続的に定点調査していくことに意義がある。明らかになった課題に対応しながら、教育改革を進めていきたい。

(学部長室 長谷川寿一)

	1.とても身についた	2.ある程度、身についた	3.あまり身につかなかった	4.身につかなかった	合計
Q1：あなたは教養学部での学習を通して、学問的知識がどの程度、身についたと思いますか？	87	457	146	31	721
	12.1%	63.4%	20.2%	4.3%	100.0%
Q2：あなたは教養学部での学習を通して、論理的・分析的に考える力がどの程度、身についたと思いますか？	87	373	202	56	718
	12.1%	51.9%	28.1%	7.8%	100.0%
Q3：あなたは教養学部での学習を通して、自分の知識や考えを表現する力がどの程度、身についたと思いますか？	53	279	313	72	717
	7.4%	38.9%	43.7%	10.0%	100.0%
Q4：あなたは教養学部での学習を通して、他者と討論する力がどの程度、身についたと思いますか？	18	122	357	221	718
	2.5%	17.0%	49.7%	30.8%	100.0%
Q5：あなたは教養学部での学習を通して、問題を発見し、解決する力がどの程度、身についたと思いますか？	58	302	268	88	716
	8.1%	42.2%	37.4%	12.3%	100.0%
Q6：あなたは教養学部での学習を通して、主体的に行動する力がどの程度、身についたと思いますか？	82	252	285	100	719
	11.4%	35.0%	39.6%	13.9%	100.0%

	1. そう思う	2. どちらともいえない	3. そう思わない	合計
Q7：教養学部のカリキュラムは、Q1～Q6であげた知識や能力を学生に養わせるという目的と総合的に整備され、実施されていると思いますか？	113	353	251	717
	15.8%	49.2%	35.0%	100.0%

Q8：そのように思う理由を具体的に記してください。【記述式250文字以内】

Q9：教養学部での学習からあなたが最も学んだこと、残念に思ったことを書いてください。【記述式250文字以内】

教養学部のカリキュラム、教職員、施設や設備について、あなたの評価を聞かせてください。	1. そう思う	2. ややそう思う	3. あまりそう思わない	4. そう思わない	合計
Q10：履修しやすいカリキュラムになっている	116	291	199	98	704
	16.5%	41.3%	28.3%	13.9%	100.0%
Q11：授業が充実している	207	320	129	51	707
	29.3%	45.3%	18.2%	7.2%	100.0%
Q12：教員と学生が接触する機会が十分ある	25	139	333	210	707
	3.5%	19.7%	47.1%	29.7%	100.0%
Q13：事務の窓口での対応が行き届いている	85	237	239	145	706
	12.0%	33.6%	33.9%	20.5%	100.0%
Q14：学生相談所、進学情報センターなどの相談窓口が整っている	93	328	226	56	703
	13.2%	46.7%	32.1%	8.0%	100.0%
Q15：教室や図書館、情報教育棟、スポーツ設備などが整っている	360	262	57	25	704
	51.1%	37.2%	8.1%	3.6%	100.0%
Q16：食堂や書店、購買部などの施設が整っている	390	212	73	27	702
	55.6%	30.2%	10.4%	3.8%	100.0%
Q17：学生間の交流活動を促す環境が整っている	57	208	326	115	706
	8.1%	29.5%	46.2%	16.3%	100.0%

Q18：Q10～Q17でお聞きしたことについて、特にご意見があれば自由に書いてください。【記述式250文字以内】

	1. 希望通り決定した	2. ほぼ希望通りだった	3. 希望通りではなかった	合計
Q19：進学振分けについてお聞きします。進学先の決定は希望通りでしたか？	540	121	43	704
	76.7%	17.2%	6.1%	100.0%

Q20：進学振分けについて意見があれば、自由に記入してください。【記述式250文字以内】

	1. 満足している	2. どちらともいえない	不満である	合計
Q21：総合的に判断して、あなたは、教養学部で学んだことについて満足していますか？	346	254	96	696
	49.7%	36.5%	13.8%	100.0%

Q22：教養学部のあり方をもっとよくするために何が必要と考えますか？ お考えがあれば、聞かせてください。【記述式250文字以内】

4 法人評価(暫定)の実施と教養学部の対応

平成20年度(資料がすべて元号なのでそれに従う)、大学評価機構によるいわゆる「法人評価(暫定)」が国立大学法人東京大学に対して実施された。結果は本稿執筆時点では未確定である。このいわゆる「暫定評価」が実施されるようになった経緯は次の通りである。

- 1) 平成16年4月をもって東京大学は国立大学法人に改組され、平成16~21年度にかけて第一次中期計画を実施することとなった。第一次中期目標がどの程度達成されたかの評価は、第一次計画が終了した翌年にあたる後の平成22年度に実施されるものと当初は考えられていた。
- 2) 三年目の平成18年夏になって二つの追加的方針が明らかになった。ひとつは、計画5年目の平成20年度に、計画4年目の平成19年度末の時点で中期目標がどれほど達成されたかについて「暫定評価」を実施することである。その理由は、法人評価の結果を運営費交付金の配分に反映させるうえで、中期計画終了後の平成22年度に評価を行ったのでは、その結果を第二期中期計画の運営費交付金配分に反映させるには間に合わない、ということであった。平成22年度にはかさねて「最終評価」が実施されることとなった。
- 3) もうひとつの追加的方針は、平成20年度の暫定評価でも平成22年度の最終評価でも、「国立大学法人」全体が中期目標をどの程度達成したかの評価が行われるだけでなく、その構成部局のひとつひとつについて教育と研究の「水準評価」を実施するというものであった。「水準評価」とは目標達成度の評価ではなく、各部局がターゲットとしている「関係者」(マーケット)を定義し、その「関係者」の期待を基準として、関係者の期待を「大いに上まわる」「上まわる」「期待通りである」「期待を下回る」の四段階(俗にS、A、B、Cと呼ばれる)の評価をつけるものである。さらに各部局の研究教育につき「質の向上度の判断」を「大きく改善、向上している(又は高い水準を維持している)」「相応に改善、向上している」「改善、向上しているとは言えない」の三段階(A、B、C)で示す。

これに対して東京大学は以下のように対処した。

- 1) 評価の全学的責任者は佐藤愼一理事とし、そのもとに「評価支援室」(岡本和夫副室長)と「評価委員会」を設け、事務方は本部の総務グループ評価チームとする。「評価委員会」の下に「評価実施委員会」(第1回は平成18年9月26日開催)をおき、ここに各部局から委員を集める。
- 2) 総合文化研究科の評価責任者は木畑洋一(のち小島憲道)研究科長、西中村浩(のち長谷川寿一)副研究科長、教育研究評価委員長遠藤泰樹教授であった。ほかに取り組み(efforts)の掘りおこしと研究業績の絞り込みを中心に多数教員が参加したがとくに名を秘する。全学「評価実施委員会」委員には高橋均教授と加藤貴彦総務副課長が任命された。
- 3) この時点で教養学部・総合文化研究科はすでに何度か評価を受けており、そのデータとノウハウとを活かすことができた。平成13年度には大学評価機構による「教養教育」評価が、平成15年度には同じく「総合科学」評価があった。後者の準備に高橋は、木畑副研究科長(当時)、石井洋二郎、大沢吉博、赤沼宏史各教授とともに携わった。法人化後の平成18年度には「研究」外部評価が教育研究評価委員会により実施された。
- 4) 評価実施委員会は、平成18年度に4回、19年度に3回、20年度に2回開催された。
- 5) 教養学部・総合文化研究科は三つの「現況調査表」を作成することとなった。「教養学部・教育」、「総合文化研究科・教育」、「教養学部・総合文化研究科・研究」である。分量はそれぞれ9,000字、9,000字、6,000字と小さいが、ほとんどパラグラフごとに本文の何倍もの分量の「資料」がカコミ記事の形式で入るので、全体の分量は相当になる。とくに最後の「研究」には、「学部・研究科等を代表する優れた研究業績のリスト」(点数は構成員数の2割程度)と、それぞれの業績についての「研究業績説明書」を付するよう求められ

- た。
- 6) これら業績についてはそれが優れたものであることの「客観的根拠」を示すように求められた。ちょっと考えると理科系の業績については引用数が使えそうだが、実際にやってみると過去4年間の業績なのでまだ引用数が小さく、差が出なかった。その結果、ほとんどもっぱら掲載ジャーナルのインパクトファクターによることとなった。文科系の業績については、受賞したものをのぞけばほとんど書評によった。書評については、掲載新聞雑誌名、号数、発行年月、評者名と、具体的にどこを何と言って褒められたか、書評のその箇所を短く引用して示すように求められた。
 - 7) 実質作業に入る前、平成19年6月8日と21日に、総務グループ評価チーム員が駒場キャンパスを訪れ、長谷川・高橋・加藤との間で暫定評価における教養教育の取扱いについて調整が行われた。評価チームは、教養教育は全学で実施しているとの建前なので全学の「中期目標の達成状況報告書」で扱うこととし、現況調査表「教養学部・教育」では後期課程のことだけを書くことにしてはくれないか、との案を提示した。教養学部側では、原則はそれでよろしいが、しかし駒場の教員の業務負担率は、授業担当でいうと前期課程3、後期課程1、大学院1であり、前期課程のことを何も書かないと教育活動の水準がごく低いことになってしまう。授業評価や、教養教育開発機構をはじめとするファカルティ・ディヴェロPMENT活動などは「達成状況報告書」には書ききれないであろうから、こちらで書かせてくれないか、と提案した。結局その線で合意し、その方針の下に作業は進められた。
 - 8) 研究業績の選定は各専攻・系により平成17年夏期休暇中に行われた。「研究業績説明書」は著者に作成を依頼した。
 - 9) 最大の難関と思われた「就職先企業の本学卒業生に対する評価」については、後期課程理系三学科が毎年実施している「企業説明会」（平成19年12月8日）の席で、参加企業の代表者に対する「雇用者インタビュー」を実施してデータとした。
 - 10) 学生による教育評価は、学部前期課程においては毎年の「授業評価」と平成20年3月に実施した「新カリキュラム出口調査」のデータを使った。学部後期課程と大学院については、全体評価は実施していないが、実施している一部学科・専攻のデータをあげてもらってこれを使った。
 - 11) 「質の向上度の判断」では、中期計画期間中の取り組みにより研究・教育の質が向上したことを具体的「事例」によって示すことを求められた。選定した「事例」は以下の通りである。
 - 「教養学部・教育」 1)「前期課程教養教育の一層の充実と高度化（教養教育開発機構、前期課程カリキュラム改革、生命科学構造化センター、駒場コミュニケーションプラザ新営）」、2)「教育の国際化の一層の進展（EALAI、第二期運営諮問会議、AIKOM拡充）」
 - 「総合文化研究科・教育」 1)「大学院教育における学際性・社会貢献の一層の高度化（人間の安全保障プログラム、科学技術インタープリター養成プログラム）」、2)「大学院教育における国際化の一層の進展（欧州研究プログラム、日独共同大学院プログラム、新UTCP教育プログラム）」
 - 「教養学部・総合文化研究科・研究」 1)「国家と文化の壁を超えた領域横断的学知創成の一層の高度化（新UTCP、DESK）」、2)「学問分野の壁を超えた領域横断的学知創成の一層の高度化（生命科学構造化センター、21世紀COEプログラム『心とことば—進化認知科学的展開』）」、3)「領域横断的学知創成による国際社会貢献の進展（人文社会科学振興プロジェクト「ジェノサイド研究の展開」）」
 - 12) 各都局は現況調査表の案を本部に三回提出し、その都度本部が査読・検討の上意見を添えて差し戻し、徐々に練り上げていくこととされた。第一次案の締切は平成17年9月であった。評価支援室・評価チームがこれに朱を入れ、不十分な取り組みやデータを補強するように注文をつけたものを返された。第二次案の締め切りは平成18年2月、第三次案の締切は同年5月であった。その都度、とくに研究科長補佐の先生方には多大な負担をかけた。第三次案に基づいて最終調整したものを本部は6月末に文部科学省に提出した。

- 13) 平成20年10～11月、各大学2日間ずつのスケジュールで訪問調査が行われた。東京大学では10月20～21日に評価者8名により実施された。教養学部による前期課程教育と進学振り分けは東京大学独特の制度なので評価者の質問もそこに集中し、駒場キャンパスを訪問したいとの申し出もあったと聞くが、実現しなかった。
- 14) 平成21年1月14日、評価結果が内示され、意見申し立てをする機会が与えられたが、教養学部・総合文化研究科は意見申し立てをしないこととした。
- 15) 平成21年度には法人評価とはまた別の、文科省による「認証評価」が行われる。このための評価書は本部が作成するが、各部局はそのための情報提供を求められた。

以上の総括として、いくつかの感想を述べる。

- 1) いちばん重要なのは、必要以上に大ごとにしなないことである。とくに、あまり早くから会議などを開いて情報を出せと催促するのは禁物である。結局のところ平成19年度末のデータは平成19年度末にならないと出てこないから、作文作業は原理的に短期決戦にならざるを得ないのである。要所要所のアンケート（授業評価、教育評価、雇用主評価など）だけとっておけば、作文はその年の『駒場20XX』の原稿が集まってからでよい。（今回は研究業績を夏期休暇に集めたが、このタイミングもやや早すぎた。10月～3月の半年間にたくさん新しい業績が出たし、学術雑誌に新たに書評が出たものも多かったので、最終段階で作文チームは差し替えに追われた）。
- 2) 作業開始までは作文チームはむしろ受信に徹し、自分で成果を発信している取り組みをとりこぼさないことをめざすべきである。総合文化研究科は巨大部局なので、その活動の全貌をひとわり把握するだけでも容易ではない。『駒場20XX』のバックナンバーをよく読み、教授会で配布される各取り組みの出した印刷物（冊子だけでなくワンリーフのパンフや通知まで）も集めて目を通しておく。しかし何といても、こういう情報が最もよく集まるのは研究科長室なので、作文チームの長は頻繁に顔を出す必要がある。
- 3) その年の『駒場20XX』の原稿が集まった段階で作文作業が始まる。大学評価機構が複数の「観点」を示してくるので、手持ちの取り組みをそれらに割り振る。「観点」は毎回微妙に違うので、そのつどストーリーは変わってくる。この作業で手薄な「観点」があぶりだされるから、それらについて取り組みの掘り起こしをする必要が生じる。掘り起こしの作業は最初から絨毯爆撃式にやっても、各部署に無用の負担をかけるばかりで効果が薄い。この段階で初めての的をしぼって行うべきである。
- 4) 「掘り起こし」は、会議を開いてもいいが、むしろ頼りになるのは研究科長室周辺での口コミである。具体的には、評価担当の副研究科長が、ありそうな取り組みの担当者に研究科長室においていただき、作文チームが陪席して面談し、その上で打ち合わせをして囲み記事を出してもらうのが最も効率的である。この場合をはじめ、作文チームはあくまでスタッフなので、すべての情報提供の依頼は担当の副研究科長の手を経て行うべきである。作文チームが直接に声をかけても、梨のつぶてでレスポンスがかえってこない場合がある。この段階でものをいうのはラインであり、スタッフの仕事はラインが無駄に動くことのないよう、事前に手持ちの情報の範囲で十分な瀬踏みしておくことである。
- 5) この場を借りて皆様のご協力に感謝申し上げます。

（地域文化研究専攻 高橋 均）

追記 その後現況評価結果（暫定）が以下のように確定した。上に記したとおり水準判定はSABCの四段階、質の向上度の判断はABCの三段階である。

（教養学部・教育）教育の実施体制A、教育内容B、教育方法A、学業の成果B、進路就職の状況B、質の向上度の判断A

（総合文化研究科・教育）教育の実施体制A、教育内容B、教育方法B、学業の成果B、進路就職の状況B、質の向上度の判断A

（教養学部・総合文化研究科・研究）研究活動の状況A、研究成果の状況A、質の向上度の判断A

5 第10回東アジア四大学フォーラム・北京会議

「東アジア四大学フォーラム」は、東京大学、ソウル大学校、北京大学、ベトナム国家大学ハノイ校の4大学が、毎年、交互に持ち回りで主催校となり、大学教育、とりわけ教養教育のあり方に関して討議を行い、かつ4大学間の交流を図ることを目的として開催されているものである。北京・ソウル・東京・ハノイの英語名称の最初の2文字をとってBESETOHAとも呼ばれるこの会議は、東アジアという内部に文化的・歴史的な差異を持ちながらも、ある種の文化的共通性をも分かち持っている地域の4つの大学が、その文化的・歴史的な差異を相互に理解・尊重しながら、共通の基盤を認識し合って、新しい東アジアの共通文化の創成を目指すことを発足の当初から指針としている。そのために会議の運営は、日本語、中国語、韓国語、ベトナム語の4言語でなされ、各言語へ同時通訳をつけることを原則としてきた。

2008年度の3ラウンド目の第2回目にあたる第10回会議は、北京大学が主催校となって行われた。ただ、北京大学の都合もあり、例年と異なって11月6日、12月23日、そして2月6、7日の3回に分けて開催された。

11月6日には「東アジアにおける大学の教育交流」をテーマとする学長フォーラムが北京大学の英傑交流中心で開催され、本学からは小宮山宏総長、田中明彦国際連携本部長のほか、駒場から4人の教員が参加した。開会式の後、4大学の学長による基調講演が行われたが、小宮山総長は、環境問題やグローバリズムといった人類全体が直面している緊急の課題に世界の大学が協力して対応するためには、さまざまな教育研究の領域ですでに存在している大学間のネットワークを統合する仕組み、すなわちNetwork of Networksを作り出す必要があり、東アジア四大学フォーラムがこのNetwork of Networksの重要な一環をなすNetworkとなるには4大学がさらに連携を強めていく必要があることについて論じた。

12月23日には、4大学の教養教育と遠隔教育に関わる教員が参加する、教養教育に関するワーキング・セッションが北京で開催された。本学からは小島憲道学部長以下、教養学部の教職員9名が参加した。午前中はホテルの会議場で、各大学からの挨拶の後、それぞれの大学における教養教育をめぐる状況や、E-Lectureや共通教科書の作成などを通して、4大学が共同で教養教育を行う方法について議論が行われた。本学に関しては、まず小島学部長が東京大学における教養教育を紹介した後、兵頭俊夫教授が文系の学生向けの理系教科書に関する取り組みを紹介し、清水剛准教授が今年度の冬学期に教養学部がソウル大学校と共同で行ったE-Lectureについて報告した。その後、各大学からの報告の内容についての質疑がなされ、さらにE-Lectureによる共同授業のやり方に関して活発な意見交換がなされた。午後には、北京大学内の網絡教育学院(School of Distant Learning)に会場が移され、北京大学による中国国内での遠隔教育に関する活動の紹介が行われた。

このフォーラムではいままで参加4大学の教育、とりわけ教養教育のあり方についてそれぞれの大学の特徴を踏まえた上で、これからの東アジアの大学における教育・教養教育を共同で開発していく方向について真剣な討議が続けられてきたが、今回の2回の会議の収穫としては、E-Lectureによる授業の共同実施や共通教科書の共同開発に関する議論など、これまでの成果を4大学の具体的に教育の現場で実践していく方法について本格的な検討が始まったことが挙げられる。とりわけE-Lectureについては、すでにこの冬学期に教養学部とソウル大学との間で東アジアの経済に関する共同授業が行われ、教養学部とベトナム国家大学ハノイ校の間では地域研究と日本文化にかんする共同授業が試行的に行われているが、今回の北京会議では、各大学で若干の温度差はあったというものの、E-Lectureによる共同授業実施の取り組みが、将来の4大学間の共同の授業実施という方向への最初の重要な一歩であることが確認されたことの意義は大きい。4大学はそれぞれの地域で、国際標準(global standard)にふさわしいだけでなく、東アジア地域のさまざまな地域の多様性を踏まえた東アジアのregional standardとなるにふさわしい





教養教育を構築していかなければならないが、その際に東アジア四大学フォーラムでの4大学の連携は大きな意味を持つだろうと思われる。

フォーラムの最後のセッションである学生パネルは、2月6、7日に本学駒場キャンパスで開催された。このパネルは4大学の交流を教職員だけではなく、学生にも広げるために、昨年度の東京会議から本格的にはじめられたものである。今年度は北京・ソウル・ハノイから各4名の学生を招待し、本学教養学科の学生12名とAIKOMの留学生4名が参加し、「東アジアの若者と就業問題——金融危機で混迷する社会に生きる」というテーマで2日にわたって議論がなされた。このパネルは本学の学生が中心となって学生自身で企画・運営されるもので、他のセッションと異なり英語で行われるが、今回の議論のテーマの設定や議論の活発さから、現在の経済状況がそれぞれの地域差はありながらも、東アジアの学生たちにとって共通する大きな関心事となっていることが感じられた。今後も学生たちの交流をさらに促進していくために、4大学の学生が共通に持っている多様な問題について議論するさまざまな機会を提供していくことが必要であろう。

なお、今回の北京での2回の会議への参加に関しては大和証券から寄付を受けたことを付記しておく。また、学生パネルを東京で開催するに当たっては、大和証券から全面的なご協力をいただき、また教養学部の多くの教職員の協力を得ることができた。ここに深く感謝する次第である。

(言語情報科学専攻 西中村 浩)



6 学術俯瞰講義

学術俯瞰講義は、世界初の試みとして、2005年度冬学期から小宮山総長の発案でスタートした。学問の入り口にいる大学1、2年生が、「知」の大きな体系や構造をより広い視点から見ることに、それぞれの学問領域の全体像や学問領域同士の有機的なつながりを実感できることを目指している。この講義が、学生達が駒場で開講している授業科目の意義や位置づけを認識し、更に将来の研究についての展望を見いだすきっかけとなることを期待している。

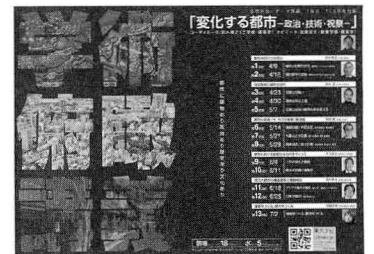
本学教員を中心に、それぞれの学問分野をリードする世界的に著名な研究者が講義を分担して担当し、学生の学習に大きな刺激をもたらしている。

2008年度には、以下の4つの講義を開講した。

●夏学期 「変化する都市—政治・技術・祝祭」

コーディネータ 鈴木博之（工学系・教授）、ナビゲータ 加藤道夫（総合文化・教授）

1. 「都市の近代とは何か」 鈴木博之
2. 「技術進歩と都市の近代」 鈴木淳（人文学系・准教授）
3. 「都市と政治—今、再びの首都・東京論」 御厨貴（先端研・教授）
4. 「都市における仮設なるものをめぐって」 木下直之（人文学系・教授）
5. 「現代大都市の機能更新と景観保全」 西村幸夫（先端研・教授）
6. 特別講義「建築をつくる、都市をつくる」 安藤忠雄（特別荣誉教授）



●夏学期 「心に挑む—心理学との出会い、心理学の魅力」

コーディネータ・ナビゲータ 丹野義彦（総合文化・教授）

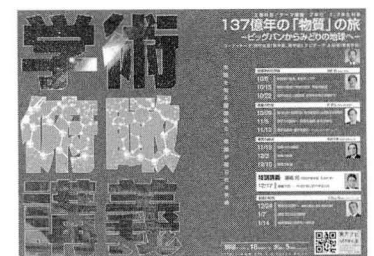
1. 「認知のメカニズムを探る」
高野陽太郎、佐藤隆夫、横澤一彦（人文学系）、岡田猛（情報学環）
2. 「社会のしくみと個人の心」
ジル・スティール、唐沢かおり（人文学系）、秋山弘子（ジェロントロジー寄付研究部門）
3. 「臨床心理学と異常心理学」
能智正博、下山晴彦（教育学）、丹野義彦
4. 「心の発達と教育の心理学」
市川伸一、針生悦子、遠藤利彦（教育学）
5. 特別講義「情動Emotion—体と心を動かすもの」 下條信輔（カリフォルニア工科大学）



●冬学期 「137億年の「物質」の旅 —ビッグバンからみどりの地球へ—

コーディネータ 岡村定矩（副学長）、ナビゲータ 永田敬（総合文化・教授）

1. 「物理学的世界観」 須藤靖（理学系・教授）
2. 「物質の性質」 家泰弘（物性研・教授）
3. 「物質の創成」 柴崎正勝（薬学系・教授）
4. 特別講義「物華天宝」 藤嶋昭（特別荣誉教授）
5. 「物質の利用」 小宮山宏（総長）



●冬学期 「グローバル化する社会に生きる—地球規模での競争の時代における日本」

コーディネータ 廣松毅（総合文化・教授）、ナビゲータ 荒巻健二（総合文化・教授）

1. 「経済・社会のグローバル化と日本」 廣松毅
2. 「カネの動きに関わるグローバル化と日本」 岩田一政（内閣府経済社会総合研究所・所長）
3. 「グローバル化と産業競争力」 藤本隆弘（ものづくり経営研究センター・センター長）



4. 特別講義「グローバル化の中での日本における人文社会科学のあり方」 岩井克人（経済学・教授）
5. 「食と農のグローバル化」 生源寺眞一（農学系・教授）
6. 「経済のグローバル化とひとびとの暮らし」 白波瀬佐和子（人文学系・准教授）
7. パネルディスカッション

どの講義も、文系理系を問わず多くの学生が受講し、学問を俯瞰するということを考えるきっかけとなったといえるだろう。

学術俯瞰講義は、インターネットを通じて学内にライブ中継されるほか、講義を収録したDVDが駒場図書館の視聴覚コーナーで講義終了の数日後から閲覧できる。また、東京大学のオープンコースウェア（UTOCW）で、講義映像や講義資料が広く一般に公開されているほか、Podcastで視聴することも可能である。

学術俯瞰講義ホームページ：<http://www.gfk.c.u-tokyo.ac.jp/>

（大学総合教育研究センター 大瀧友里奈）

7 駒場における教養教育開発の推進

世界のトップ大学は、現在CTL (Center for Teaching and Learning) の拡充に力を注いでいる。これは、教員のための教育支援と、学生のための学習支援の双方を含めた活動を行う組織で、ファカルティ・ディベロップメントから学習相談までを視野に入れ、それぞれの大学の特色を活かした幅広い活動を行っている。

東京大学の前期課程(教養教育)でこの機能を担うのは、「教養教育開発機構」である。世界のトップ大学のCTLと連携を深めつつ、最先端の教育モデルの開発から学生の「学習コミュニティ形成」支援までを含め、東京大学のみならず全国の大学が採用し得る教育モデルの開拓に努めている。

教養教育開発機構の今年度の主たる活動は、以下の通りである。

- (1) 理科生のためのアカデミック・ライティング・コース (ALESS)
- (2) PISA対応の討議力養成プログラムの開発 (教育GP)
- (3) 最新のICTを用いた新しい教育モデルの実践 (現代GP)
- (4) NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門 (NEDO特別部門)
- (5) 「教養教育への囲碁の活用」事業の推進
- (6) 初年次教育への「食」の導入
- (7) 学部初年次教育プログラム拡充のための取組み

これら以外にも、教養教育開発機構は、

- (8) 学術俯瞰講義の実施
- (9) 駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)
- (10) 「高校生のための金曜特別講座」などによる高大連携の推進
- (11) 駒場博物館 (美術博物館・自然科学博物館) を通じた教養教育の発信
- (12) 初年次活動センター

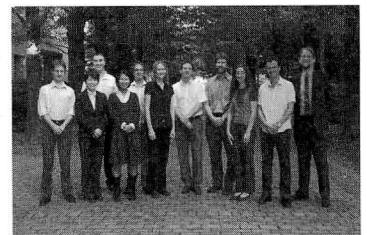
にも深く関わっているが、(8)～(12)については、本章のそれぞれの記事を参照されたい。

1. 理科生のためのアカデミック・ライティング・コース (ALESS)

2008年4月、東京大学教養学部は、理科生(理科Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類)1年生全員が夏学期か冬学期のどちらかの1学期履修しなければならない必修授業としてALESSプログラムを開講した。ALESSはActive Learning of English for Science Studentsの略。授業はすべてネイティブ・スピーカーが担当する少人数クラス(1クラス15名程度)で、独自に開発されたカリキュラムにしたがって、プログラム・マネージング・ディレクターのコーディネーションの下で運営される。同ディレクターはまた、一方で駒場の英語部会、他方で本郷諸学部と駒場の理工系教員からなるALESS連携協議会との連絡を密にすることで、駒場の英語教育のなかでのプログラムの位置づけを明確にし、理工系の専門的立場からのカリキュラム内容についての具体的なアドバイスを受ける体制になっている。このプログラムのために、夏学期には6名の比較的若手で高度な資格を有するネイティブ・スピーカー教員が新規に赴任し、冬学期にはさらに4名が赴任し、計10名の特任教員による教育体制となった。

「読む」近代化から「書く」グローバル化へ

欧米に追いつき追いつくことを目標に掲げた近代化が終焉を迎えた今日、もはや科学技術は海外から学びとるものではなくなった。科学技術はグローバルな地平において共に創出し共に享受すべきものとなったのである。近代化からグローバル化という大きな時代の変化に即応して、英語という外国語学習の役割と形態もまた変わらざるを得ない。近代化においては海外の



ALESSプログラム関係教員

知見をいち早く学びとることが重要で、そのために「読解・翻訳」という受動的な能力の養成に焦点が当たっていた。今日のグローバル化に際しては、しかし、世界の人々と共に議論し世界の人々に創見を説くことが求められ、そのためには「書く・話す」という能動的（アクティヴ）な能力の涵養が必要となる。

「コミュニケーション」と「英作文」から「アクティヴ・ラーニング」へ

能動的「書く・話す」英語能力といっても、和文英訳を主とした「英作文」では用を足さず、「コミュニケーション」も日常会話程度では意味がない。「英作文」に代わって求められるのは、理工系科学論文作成法の基礎（分析的思考と論理的表現）をシステムティックに形式化し（「アカデミック・ライティング」）、その形式を、実際に英語を書きながら学ぶことなのである。単なる「コミュニケーション」に代わって必要とされるのは、発言の論理的構築性であり議論に際しての対等の倫理観である。ALESSプログラムは、これらすべての要請を、ネイティブ・スピーカーによる少人数クラスという形で実現した。

開設までの経緯

1. 「英語Ⅰ」革命から

教養学部英語部会による英語教育のカリキュラム改革については、まず1993年のカリキュラム改革において、「英語Ⅰ」革命と呼ばれる大学の英語教育に全国的な影響を持つことになるオリジナル統一テキストによる大規模統一授業が始まり、そこでは以下のことが実現された。(1) 定員増を許されないという過酷な条件下において、1クラス平均60名を越えていた状況を打破すべく、クラスを大小に分割して、一方で「マルチメディア大規模授業」（「英語Ⅰ」）を考案することにより他方で「英語Ⅱ」の少人数クラスを作り出した。(2) 「英語Ⅰ」では、レベルの高い統一教材とそれに連動した視聴覚教材を自主生産した。(3) 生み出された少人数クラスの「英語Ⅱ」は、カリキュラム全体のなかでの位置づけを得て、内容的に整備されるはずであったが、実質的には殆ど手をつける余裕のないまま、ただ「少人数」という状態で放置せざるを得なかった。

2. 新たな段階への飛躍へ

この間、10年以上を経た「英語Ⅰ」プログラムは、「大規模統一授業」ゆえの然るべき問題に直面せざるを得ず、2年間必修であるところを半減させて1年間としたが、加えてさまざまに改変を試みて今日に至っている。他方、懸案となっていた「英語Ⅱ」のカリキュラム内容における整備の問題は、ようやく2006年のカリキュラム改革により、技能別の「Presentation」（プレゼンテーション中心のPOとライティング中心のPWの2つのカテゴリーからなる）、及び「Reading」・「Comprehension」という形で、かなり実現に近づいたかのように思われた。しかし、POにおける1クラス人数過多の問題（平均23名程度）およびPWにおける開講クラス数過少の問題は、困難な検討事項としてなお残ることになった。この窮屈な状況は、「英語Ⅰ」改革時における過酷な条件（「定員増を許されない」）がすでになくなっているにもかかわらず、公明正大に定員増の要求をしないままにカリキュラム改革を断行してしまったことに起因すると言わざるを得ず、したがって、今回のALESSプログラムでは、大幅な定員増の要求を柱として実効のあるカリキュラムが構想されることになった。

2005年、教養教育開発機構が発足するに際して、その文系の中心的プロジェクトとしてCWP（Critical Writing Program）が設置されたが、それは2002～3年度にかけて文部科学省の委嘱を受けて行われた「英語教育に関する研究」（大学における英語教育）の成果を受けてのものであり、今回のALESSプログラムは、理念的にはその延長線上に位置するものである。すなわち、ALESSプログラムは、突如構想されたものでは毛頭なく、キャンパス内外での実践と経験と研究に裏打ちされて成ったものに他ならない。

3. 理系分野のニーズの緊急性と全学的理解

対象学生を理科生に限定したのは、教養教育開発機構CWPがALESSプログラムの計画段階で実施したパイロット授業において、理科生が「アカデミック・ライティング」にとりわけ強い興味とモチベーションを示したことによる。これはすなわち、理系分野において英語のライティング・スキルが如何に必要とされているかを如実に物語るものであり、どちらかと言えば文系よりも喫緊の程度が高いと判断されたのである。

このような経緯を経て、教養学部は、ALESSプログラム実施に向けて、全学的理解を得る努力を時間をかけて行った。その結果、幸い、総長室および理系諸学部の絶大なる支援のもと、学内概算を通じて予算措置を認められるところとなり、平成20年4月よりALESSプログラムを開設する運びとなった。

以下、ALESSプログラムの具体的な内容（2008年度）について記すこととする。

達成目標

1学期間のALESSプログラムを履修した学生には以下のことが期待されている。

- ・書き言葉としての英語のアカデミック・ライティングの主要な特性を理解すること。そこには明確な目的意識、フォーマルな言語の使用、引用や言及の方法も含まれる。
- ・科学論文のレトリックと論理的構造を理解すること。
- ・アカデミック・ライティングにおけるパラグラフの構造と役割を理解すること。
- ・各自が以下のスキルを身につけないしはすでにあるスキルを上達させること。書き言葉としての英語テキストのフォーマットの方法、フォーマルな書き言葉としての英語の文法、科学的な語彙とその使用法。
- ・オリジナルな研究プロジェクトに基づく短い英語の科学論文を執筆すること。
- ・オリジナルな研究論文について、5分間の口頭発表をする準備をして実施すること。

課題

課題1：科学的テーマについて1パラグラフを書く（150～250語）

第1稿（1週間）

最終稿（1週間）

課題2：科学的研究プロジェクトのためのプロポーザルを書く

第1稿（1週間）

最終稿（1週間）

課題3：6～8パラグラフで論文を書く

- ・自ら考案した実験ないしは観察を背景、方法のパラグラフを書く訓練と同時進行で数週間にわたって行う。
- ・Backgroundのパラグラフ（初稿のために1週間）
- ・Methodsのパラグラフ（初稿のために1週間）
- ・Resultsのパラグラフ（初稿のために1週間）
- ・Introduction（Abstract）と結論部のパラグラフ（初稿のために1週間）
- ・最終版の準備（数値や図表、引用などを含む／1週間）

課題4：5分間の口頭発表のための準備とその実施（2週間）

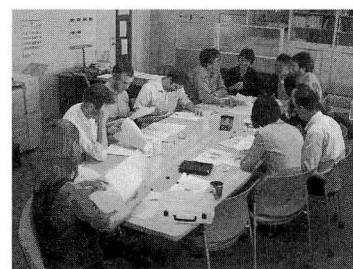
成績評価

課題1：10% 課題2：15% 課題3：50%* 課題4：15% 授業参加度等：10%

*課題の全体を通して判断される

ファカルティ・ディヴェロップメント

ALESSプログラムを学生にとって常に新鮮かつ意義深いものにするために、毎週開かれる教員ミーティングでカリキュラム改訂や刷新に関する話し合いや計画が行われる。ミーティングの焦点のひとつに、カリキュラム中の科学に関連する部分（特に学生がよりよい研究プロジェ



ALESSプログラムFDワークショップ
(2008年10月)

クトを考案、実施するための教育技法)の改良があげられる。ALESSカリキュラムにおけるいくつかの重要課題をより深く追求するため、2008年10月には2日間の教員ワークショップが開催された。

TAによる教育支援体制

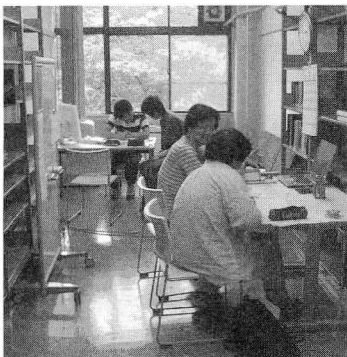
ALESSプログラムと同時に、小規模な「ライティング・センター」も設置され、大学院言語情報科学専攻に開設されたディプロマ・コースにおいて、アカデミック・ライティング教授法の理論と実践の特別な訓練を受けた常駐TA(「ティーチング・アシスタント」)による個別支援体制を整えてもいる。

「アクティヴ・ラーニング」のさらなる展開に向けて

既に触れたように、理科生のためのアカデミック・ライティング・プログラムを開講したのは、CWPの活動を通じて、より緊急性が高いと判断したからである。したがって、2006年度のカリキュラム改革を経て、今回のALESSプログラム開設によって、東京大学の駒場の英語教育が万全のものになったと考えているわけではない。「アクティヴ」をキーワードにしたカリキュラム改革、あるいは「アクティヴ」であるために必須といえる英語各授業の少人数化はようやくその端緒に着いたというのが正しい現状認識であろう。さらにどこまで英語教育を「アクティヴ」なものへと変えていけるかが問われているのである。

いま現在、議論の俎上にあがっているプロジェクトとして、英語に限らず他の諸外国語や日本語を含む「書く」能力を養成するための文科生のためのプログラムの開設や、「ライティング・センター」というアメリカ合衆国の創案になるものなかでも大いに参考とすべき教育システムを、日本の大学にふさわしい形態で「移植」することがある。

(ALESS実行委員会委員長・英語部会 内野 儀)



ライティング・センター

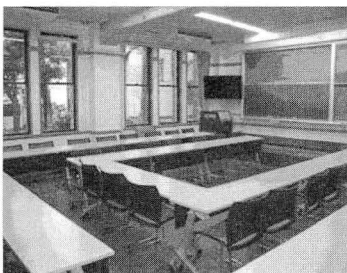
2. PISA対応の討議力養成プログラムの開発(教育GP)

2008年9月、文部科学省の補助事業「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に、本学の「PISA対応の討議力養成プログラムの開発：日本における国際先端の教養教育の実現」が採択された。これは、同省が設定した課題のうち、「教育方法の工夫改善を主とする取組」として選定されたものである。

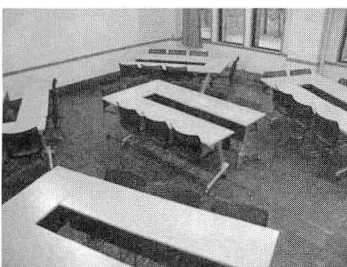
本取組は、他者と討論する力(討議力)を教養学部前期課程の学生に養成することを目的とする。OECDがPISA(学習到達度調査)やDeSeCo(コンピテンシーの定義と選択)プロジェクトを通じて示したように、国際化や高度情報化が進行した現代社会においては、単に知識を身に付けるだけでなく、それを能動的に用い、他者とコミュニケーションをとるといった能力が重要となる。しかし、2008年3月に教養学部が実施した、教養課程を修了した学生に対する「教養教育の達成度についての調査」において、「他者と討論する力」が「身についた」と答えた学生の割合は、「学問的知識」「論理的・分析的に考える力」などの他のコンピテンシーに比べ著しく低かった。

討議力は知識・論理・表現などの能力の総体であって自然に身につくものではなく、多くの大学教員がその養成のためのスキルを持たないのが現状である。本取組では、学生の討議力を養成するための手法を、既存の授業に組み込めるモジュールのかたちで開発し、平成21年には文系の40の授業で、平成22年には文理各40ずつ、計80の授業で、実際にそのモジュールを埋め込んだ授業を展開する。これによって討議力を備えた「市民的エリート」たる人材育成機能の強化を図ることを目指している。この目的に沿って、指導方法やカリキュラムの問題点を洗い出し、ファカルティ・ディベロップメントの手法によるスキルや経験の共有、海外の先進的な教育機関における実践的研修等を行う。

本年度は、本事業を推進するための教員組織を立ち上げ、次年度以降に授業に埋め込むための討議力養成モジュールの開発に着手すると同時に、授業の中でそれらを展開するのに適した



1号館に整備された討議力養成プログラム用教室(コの字型レイアウト)



同上(グループディスカッション用レイアウト)

教室環境を整えた。主な活動は以下の通りである。

- (1) 移動の容易な椅子・机、組み合わせ式小型ホワイトボード、パーソナルレスポンスシステム（PRS）など、授業内でのディスカッションを容易にするための機器を1号館1階西側の6教室に導入した。
- (2) 上記の新設備を用いて模擬授業を行い、授業の中で討論を行うための手法を検討した。
- (3) 授業内での討論の推進に関して先駆的な取組を行っているハーバード大学に教職員を派遣し、学生に対する働きかけやファカルティ・ディベロップメントの実施状況を視察した。
- (4) 教員向けに、討議力養成のための手法の事例集を作成した。

3. 最新のICTを用いた新しい教育モデルの実践(現代GP)

2007年7月、文部科学省補助事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に、本学の「ICTを活用した新たな教養教育の実現：アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築」が採択された。これは、文部科学省が設定した6つの課題のうちの「教育効果向上のためのICT活用教育の推進」の1つとして採択されたものである。教養学部、大学院情報学環、大学総合教育研究センターの連携によって2007年10月より2年半にわたって推進される。

本取組の目的は、Tablet PC等のICTを活用する能動的かつ高次の学習活動「アクティブラーニング」を導入した教養教育の授業モデルの構築を行うことにある。アクティブラーニング、すなわち、学生が能動的に、インプットした情報の分析や統合を行い、成果をアウトプットするような学習活動を通して、複雑な人間活動と多様な情報が氾濫する現代社会に通用する国際的な知識や能力を身につけることをねらいとしている。具体的な取組内容としては、駒場アクティブラーニング・スタジオ（KALS）を中心に、文系・理系・語学の3領域でICT活用アクティブラーニング型授業を開発、実施し、その効果を評価する。

本年度の活動を以下に述べる。

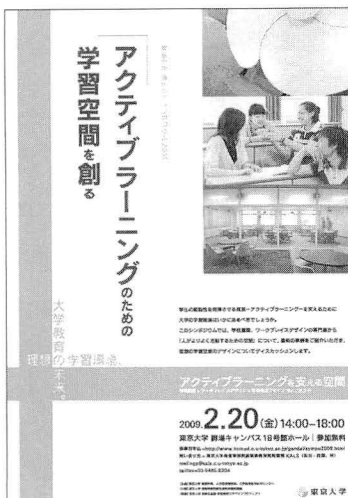
- (1) 学生によるICTを活用した制作活動などを可能とするために、ビデオやボイスレコーダ、ヘッドフォン、マルチメディア編集ソフト、ファイルサーバーなどを整備し、KALSにおけるICT基盤を拡充した。
- (2) 「基礎演習」（齋藤希史准教授、岡本拓司准教授）では、大学総合教育研究センターのマイクロソフト先進教育環境寄附研究部門が開発したMEET Video Explorerを使用した、NHKアーカイブスの番組の探索・視聴活動を取り入れ、学生が多様なリソースを参照出来るようにした。また、昨年度開発したWeblogシステムを用いて、学生による調査活動の報告や、相互コメントをネット上でを行い、教室外のコミュニケーションをサポートした。

「全学自由研究ゼミ：生命科学β」（笹川昇特任准教授）では、ICT利用と、教室で出来る簡易な実験を組み合わせた授業を実施した。分子構造の3Dモデルを操作するソフトウェアや、DNA配列の解析ツールなどの活用により、目で見ることのできないミクロな現象を探索的に学習することが可能となった。また授業のアンケートやワークシートをCMS（Contents Management System）上に用意し、授業と連携した情報提供・交流に活用した。

「中級英語（LS）」（山本久美子特任准教授）では、英語リスニング用のデジタル・コンテンツをリソースとして学生が能動的なディスカッションや発表を行った。「英語Ⅱ列C」（Tom Gally准教授）では、学生たちはグループで自ら調査・取材を行い、パソコンを使って英語の音声番組を制作するプロジェクト型の学習活動に従事した。「英語Ⅱ列PO」（内野儀教授）では、プレゼンテーション実施用に組み替えられたKALSで、学生たちはICTを活用して英語プレゼンテーションを実施し、即時型アンケートシステムであるPRSを用いて相互評価を行った。これらはICTの活用により、英語情報のインプットを豊富にしたり、制作活動や相互評価などによって、アウトプットの質を高めたりしよ



KALSにおける授業風景



シンポジウム「アクティブラーニングのための学習空間を創る」

とする試みであった。

- (3) 9月に、アクティブラーニングを支援するためのICTツールや授業方法について、学内外よりアイデアを持ち寄って共有し、洗練しあうことを目的として、KALSサマーキャンプと題した研究会を実施した。ツールや方法の開発に取り組んでいる研究者や開発者にデモを行ってもらい、参加者と共に様々な観点から討議した。また、2月20日には、シンポジウム「アクティブラーニングのための学習空間を創る」を開催し、学校建築家の工藤和美氏（シーラカンズK&H代表、東洋大学工学部教授）と、ワークプレイスデザインの専門家である岸本章弘氏（ワークスケープ・ラボ代表、オフィス研究情報誌『ECIFFO』編集長）から、「人がよりよく活動するための空間」に関する最新の事例をご紹介いただき、アクティブラーニングを支えるために大学の学習環境はいかにあるべきかについて議論した。

4. NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門(NEDO特別部門)

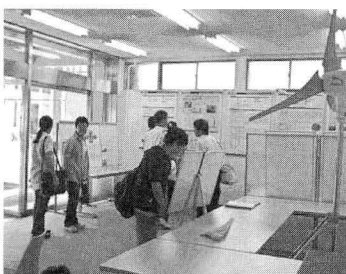
2007年6月1日に、教養教育開発機構に設置された「NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門（以下、NEDO特別部門）」では、先端科学技術研究センター、生産技術研究所と連携しながら、以下の教育プロジェクトを実施している。

- (a) エネルギー環境に関わる学際的・総合的な教育カリキュラムの設計。
- (b) 現場に根差した教育プログラムの実施。環境エネルギー問題に取り組む国際的なネットワーク形成。
- (c) 異分野融合の人的ネットワークの構築と教育実施・支援体制の整備。
- (d) 新たな環境エネルギー教育に関する教材作成・情報発信。

環境エネルギー問題の解決に必要な分野横断的・学際的な総合力をつけることを目的として、2008年度は、前年度の授業数5を大きく上回る16の授業を夏学期・冬学期合わせて開講した。授業内訳は、総合科目：3、テーマ講義：3、全学自由研究ゼミナール：7、全学体験ゼミナール：3である。

夏学期：[総合科目] 地球環境論（環境と社会の仕組み）（丸山康司特任准教授）/[テーマ講義] 環境・エネルギー問題解決へのビジョン～研究開発の現場から～（山本光夫特任講師）/[全学自由研究ゼミ] 地球温暖化と経済学（山口光恒・先端科学技術研究センター特任教授、通年）/[全学体験ゼミ] 「海の森」再生の最前線を体験する（山本）

冬学期：[総合科目] 環境・エネルギー工学（環境エネルギー問題解決への工学的実践）（山本）、人間・環境一般（環境エネルギー科学基礎論）（飯田誠特任講師）/[テーマ講義] 再生可能エネルギーと社会（丸山・飯田）、環境の世紀14～バイオマスから「環境問題」を考える～（瀬川浩司・先端科学技術研究センター教授）/[全学自由研究ゼミ] 海洋による二酸化炭素吸収について考える（山本）、地球環境問題の科学と政治（米本昌平・先端科学技術研究センター特任教授）、サステナブルなキャンパスを構想する（丸山）、再生可能エネルギーを通じて環境エネルギーを考える（飯田）/[全学体験ゼミ] エネルギー環境実習：建築と環境演習（加藤道夫教授）、地域再生とエネルギー（丸山・飯田）



NEDOギャラリー（105号館1階）

総合科目では特に分野横断性の理解を目的とした授業を開講。テーマ講義では、最新かつ幅広い分野の環境エネルギーの話題を扱い、オムニバス形式で各トピックスについて専門家による講義を行った。ここでは新たな教材の形を志向して、昨年導入したビデオアーカイブシステムで各授業を収録し、受講者の自己学習への活用も行った。一方で、全学自由研究ゼミナール・全学体験ゼミナールでは、昨年度の授業内容を更に発展させる形で、環境問題解決の方策をキャンパス内でのCO₂削減や小型風車設置の可能性など身近な対象を例に自分で考えること（全学自由研究ゼミ）、そして実際の環境対策現場を体験すること（全学体験ゼミ）に主眼を置いた。特に全学体験ゼミナールは、8月に北海道増毛町にて、2月に青森県鯉ヶ沢町で開講し、環境エネルギー対策の現場に根ざした授業を開講した。増毛町の授業においては、課題となっている海洋環境問題である磯焼け対策の実証試験現場視察を行い、地元漁業協同組合や潜木士の方に

よる現場の声を伺うなど現場でしか体験できない授業を行った。

以上のNEDO特別部門の授業を受講した学生に対して環境エネルギー問題に対する意識の変化に対するアンケート調査も行い、受講した学生の環境意識の高まりを示す結果を得ることができた。

環境エネルギー問題へのネットワーク形成と情報発信の活動としては、「新環境エネルギー講座」の実施および「駒場NEDO特別部門ギャラリー（NEDOギャラリー）」の開設を行った。3回開催した「新環境エネルギー講座」の第1回目には、国際的なネットワーク形成への第一歩としてバイオマスエネルギーの研究開発に携わる中国の大学教授を招待している。また「NEDOギャラリー」は、105号館1階コミュニケーション・プラザ側に設置。常設展示として、NEDO特別部門の教員が研究対象としてかかわる環境エネルギー問題に関する情報発信、特別展示として学内団体の環境エネルギーに関係する活動を紹介する展示を行っているほか、環境映像の放映も常時行っている。またこのNEDOギャラリーの活動を通じて、環境三四郎やAGS-UTSCなどの学生団体との連携も行っている。更にNEDOギャラリーを教員と学生とのコミュニケーションの場と位置づけ、環境活動に取り組む文化人・アーティストなどを招いて交流を行う企画も立案し、2009年度より開催できることとなった。

このようにNEDO特別部門設置2年目となった今年度は、1年目に計画・立案した事業内容を実際の形にする活動を行ってきた。来年度はビデオアーカイブシステムに加え、現在準備を進めている独自の映像教材を作成し、これらを有効活用した新しい授業実施をはじめとして、キャンパス内での風車の設置など更に充実した授業開講・内容としていく予定である。今年度に行ってきた事業内容を発展させることに加え、来年度は新しい発想に基づいた教材開発・教育カリキュラムの設計も推進していく予定である。

5. 「教養教育への囲碁の活用」事業の推進

2006年10月に教養教育開発機構内に設立された「教養教育への囲碁の活用（日本棋院・日能研）寄附研究部門」は日本の伝統文化であり、創造性や集中力などを高める効果があるといわれる囲碁を教育ツール（手段）として利用し、教養教育に活用する方策を研究、実践することを目的とした部門である。2008年度は以下のような教育・研究活動をおこなった。

(1) 全学体験ゼミナール「囲碁で養う考える力」

教養学部での正規授業として、全学体験ゼミナール「囲碁で養う考える力」（担当：兵頭俊夫教授）を従来からの継続で開講した（履修者2008年度夏・冬学期、それぞれ定員36名）。

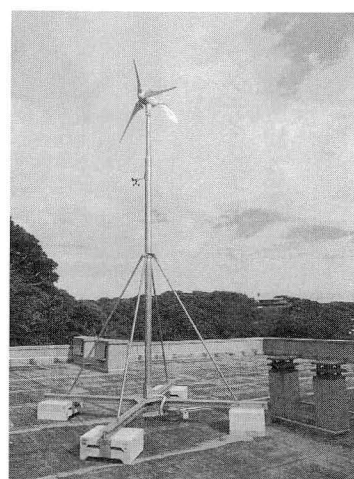
プロ棋士である石倉昇九段、黒瀧正憲七段、梅沢由香里女流棋聖の3名を講師として、囲碁を全く知らない学生に19路盤での対局ができる実力を身につけさせることを目標とした授業である。本授業では、「石埋め碁」でルールへ慣れ、「決め打ち碁」で布石と終局まで打つことを学び、「囲碁の心得」で囲碁の基本的考え方を言葉から学ぶという「東大教養方式の囲碁入門」を実践した。また、石倉九段が5月に特任教授に、梅沢女流棋聖と黒瀧七段が12月にそれぞれ特任准教授、特任講師に着任した。

(2) 囲碁の教育効果の脳科学的、心理学的研究

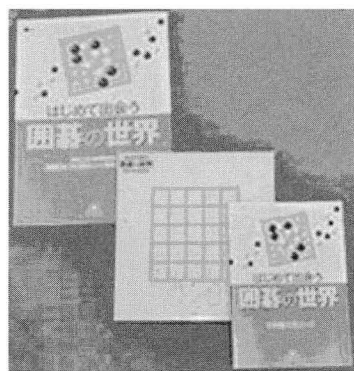
囲碁習得による教育効果を科学的に測定する研究を昨年度より継続して実施した。小学生および大学生を対象に囲碁に必要な認知機能、および囲碁の熟達過程での認知能力の変化を明らかにすることで囲碁が持つ教育効果を数値化し、より効果的な教育プログラム開発への応用が期待される。

(3) 囲碁の魅力や教育効果、囲碁習得法の情報発信

本部門の成果（特に「東大教養方式の囲碁入門」の内容とその実践方法など）や、囲碁の魅力を広く社会へ還元することを目的として、様々なイベントを開催した。4月5日には公開講演会「囲碁の魅力Ⅱ－わかりやすい囲碁入門とは」を開催し、来場者は130名以上を教えた。8月23日には「親子で学ぶ囲碁の世界2008」として、梅沢由香里女流棋聖と王唯任四段による親子向け囲碁教室を開催し、約90名の参加者があった。10月28日、および11月24日に「公開指導碁」



18号館横に設置される風車（予定）



「6路盤対局ガイド」および「碁盤・碁石セット」

イベントを初年次活動センターにて開催し、40名以上の参加者があった。また、上記公開講演会内容をまとめた報告書、および昨年度に作成した「6路盤対局ガイド」、「紙製碁盤・碁石セット」を全国の日本棋院支部（813ヶ所）へ配布し、「東大教養方式の囲碁入門」の情報発信を実施した。その反響として、各支部や支部と交流のある小学校・自治体などから囲碁普及活動のためにガイド・碁盤セットの利用申し込みが多数あり、ガイド約1,000冊、碁盤約800セットの追加配布をおこなった。

6. 初年次教育への「食」の導入

教養教育開発機構では、全国の大学の先駆的モデルとするべく東京大学教養学部における学部初年次教育を牽引してきた。2008年度は学部初年次教育への「食」の導入を試みた。駒場の初年次教育における「食」とは、単なる栄養学的観点から学生の日々の食事を見直すということにとどまらない。食の安全、日本の低い食料自給率、世界で起こっている飢餓等、「食」をめぐるさまざまな問題に囲まれながら、それらを自分とは切り離れた次元で考えている学生たちの姿に鑑み、身近な「食」を通して社会で起こっている「食」に関する問題を考える、あるいは日々の「食」から学術的な問題意識を発展させる、といった視点を与えることで、文科理科を問わず学生たちに新しい学びの姿勢を獲得させることを目指すものである。

(1) 「食」を考える：KIRIN・東京大学パートナーシッププログラム

その試みの一つは、KIRINホールディングス株式会社とともに10月に発足させた「『食』を考える：KIRIN・東京大学パートナーシッププログラム」である。10月7日に、このプログラムのキックオフとして、本学卒業生で自ら農園を経営するエッセイスト玉村豊男氏を招いて「駒場で『食』を考える」と銘打ったシンポジウムを開催し、「食」に対する多面的な視点を提示した。ひき続き、11月6日から月1回のペースで、2008年度は4回のワークショップを開催した。第1回は、本プログラムのカウンターパートであるキリン食生活文化研究所の太田恵理子所長が、さまざまな年齢層の人々の食に対する姿勢や食卓事情に関する調査データに基づいた報告を行った。第2回は農水省中央農業総合研究センターの津田新哉上席研究員が、研究者の立場から農作物の生産・流通上の問題点を指摘した。第3回は本学教養学部のロバート・キャンベル教授が、江戸時代の大飢饉の際に知識階級が果たした啓蒙的な役割を畑銀鶏の書を通じて語った。第4回は本学卒業後農水省勤務を経て現在自営農として精力的な仕事をなさっている土門秀樹氏が、自らの体験を語ってくれた。各回ともに、ゲスト報告に直接関係する食材や料理を学生たちに口にしてもらうことを併せて行っている。このような従来の教室での授業の枠を超えた学びの場を提供する工夫により、着実に参加者が増えている。また後期課程の学生や大学院生の参加も恒常的に得られており、学年や専門分野を超えた意見交換が、前期課程の学生にとって大いに刺激になっている。



シンポジウム「駒場で『食』を考える」

(2) ハーバード大学からの招聘シンポジウム

初年次教育における「食」の導入を学内外に向けて提起するため、フード・リテラシー（「食」を通じた教養）にいち早く取り組んでいるハーバード大学から、プロジェクトを牽引しているハーバード大学ダイニングサービス取締役テッド・メイヤー氏と、プロジェクトを担当しているテレサ・マッカラ氏を招き、10月11日に国際シンポジウム「大学教育に『食』を摂取する」を開催した。お二人からは、ハーバード大学のみならず米国の大学におけるフードリテラシープロジェクトの概要が語られるとともに、東京大学での取組に対する有益な助言もいただいた。また、このシンポジウムには駒場キャンパス内でレストラン「ルヴェ・ソン・ヴェール駒場」を経営する伊藤文彰シェフにもパネリストとして参加していただいた。全国の大学関係者の強い関心をひき、遠方の大学からの参加者も多く見られた。またフロアからの積極的な質問が次々と寄せられた。

(3) 教養学部の授業の中での食体験

1月22日に村松真理子准教授による総合科目B「イタリア文化論：食べること、読むこと」において、レストラン「ルヴェ・ソン・ヴェール駒場」の協力のもと、チーズと生ハムの体験授



シンポジウム「大学教育に『食』を摂取する」

業が展開された。教養教育開発機構はこれを全面的にサポートした。授業ではまず映画を題材にイタリアの歴史的農村共同体の生活と食肉加工やチーズ作りがいかに密着したものであるかが説明されたあと、風土を生かしたハムやチーズの種類・製法に関する専門家の講義があり、その後、販売されている塊そのままの生ハムおよびチーズを展示しながら、数種類を学生たちにテイスティングしてもらった。文学作品の中で文字として読んだり、写真や動画の中で見るのとは異なる体験型授業は、学生たちにとってイタリア文化を実感する非常に有益な機会となった。



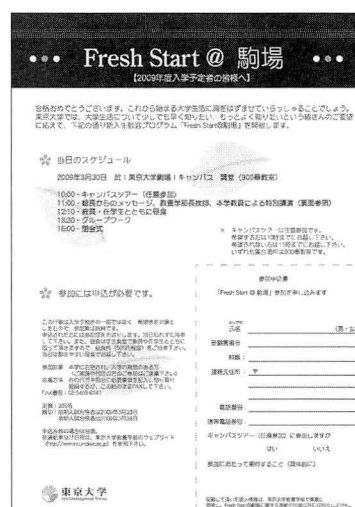
キリンホールディングスと共催のワークショップの様子

7. 学部初年次教育プログラム拡充のための取組み

4月15日に京都大学医学研究科高次脳機能総合研究センターから美馬達哉氏を迎えて「脳と主体をめぐる鏡の国の冒険」と題する講演会を開催したのを皮切りに、6月17日にカリフォルニア工科大学の下條信輔教授による「情動 (Emotion: 体と心を動かすもの)」、7月2日に東京大学特別栄誉教授・建築家の安藤忠雄氏による「建築をつくる、都市をつくる」と、今年度は3度の新生歓迎講演会を行った。

また、高校までと異なる「自分で時間割を作成する」という作業にとまどう新生が多いことから、1年生の履修登録の時期に合わせて、2年生以上の文科・理科の学生が新生の時間割作成に関する相談に応じる「ピア・アドバイジング」を教務課窓口前にコーナーを作って開催した。

さらに、一昨年、昨年に引き続き「FRESH START@駒場」を3月30日に開催した。入学予定者にいち早く大学での学びや生活を体験してもらうこのイベントは、初回以来着実に参加希望者を増やしており、本年度は200名の参加者を受け入れた。同時にこのイベントを企画・運営する在学生ジュニアTAについても、募集定員を大幅に上回る応募があった。大学が新生向けのイベントを用意するだけの初年次プログラムではなく、教員・職員および在学生がともに新生をサポートする理想的な初年次教育のかたちが定着しつつある。



Fresh Start@駒場2009

8 国際ジャーナリズム寄付講座の開設

2008年4月より、教養学部には国際ジャーナリズム寄付講座が開設された。読売新聞東京本社が提供する外部資金によって設けられたこの講座は、今後3年にわたり、前期課程と後期課程の学生に、国際ジャーナリズム関連の授業を提供する。

「最近の若者は新聞を読まなくなった」、「安易なインターネット情報に流されて、しっかりと国際問題を考えなくなった」などという批判がよく聞かれる。その一方で、東京大学には、ジャーナリストになって国際的な現場から報道にたずさわりたいことを志す学生が少なくない。事実、毎年、新聞社やテレビ局などに就職し、世界各地で活躍する卒業生がいる。メディアの形態が多様化しているといえ、学生のあいだで国際ジャーナリズムへの関心は高いようだ。

しかし、これまで東京大学教養学部の前期課程では、国際ジャーナリズム関連の授業はほとんど開講されてこなかった。後期課程には超域文化科学科の言語情報科学分科にメディア論関連の科目は設けられてはいるものの、必ずしも毎年開講されてこなかった。ジャーナリストとして国際的な仕事をしたいと希望する学生は多いのにもかかわらず、実際にそれがどのような職業であるのか、またグローバル化する現代における国際メディアの意義とは何か、などについての考察を深める機会は限られてきたのが実情である。

このような状況をふまえ、本講座では教養学部の学生に国際ジャーナリズム関連の授業を毎学期開講する。とくに読売新聞東京本社国際問題編集委員の伊熊幹雄氏を客員教授として迎え、国際的に活躍してきたジャーナリストとしての視点から授業を行ってもらっている。

伊熊客員教授はイギリスやポーランドで特派員として活躍し、読売新聞社のロシア支局長を歴任した。1997年には英国の政治と社会に関する一連の記事で、国際的に活躍するジャーナリストに与えられる、ボーン・上田記念国際記者賞を受賞した。

2008年度は、前期課程では歴史部会の授業として総合科目「近現代史」を担当した。「国際政治と国際報道」というテーマで、過去20年の国際的な大ニュースを取り上げ、「現代世界で何が起きているのか」について論じ、さらに様々な国の報道を紹介し、世界のメディアが特定の事象をどのように報道してきたかを比較し、国際ジャーナリズムの意義と役割についても分析した。

後期課程では言語情報科学分科のメディア・コミュニケーション論の授業などで、現代社会と国際報道について考察した。東西冷戦終結後のヨーロッパ、ソ連邦の崩壊とロシア共和国の成立、アメリカのブッシュ政権の外交と安全保障、アメリカの大統領選挙などに注目し、現代の世界状況を論じ、国際社会におけるメディアの役割などについて、学生とともに毎週活発な議論を行った。また、東京在住の特派員などを授業に呼び、現代の国際情勢とジャーナリズムの意義について講演してもらった。学生は課外授業でイギリスのデビッド・ミリバンド外相と会う機会にも恵まれた。

伊熊客員教授に加え、国際ジャーナリズム寄付講座には教養学部の山内昌之教授と矢口祐人准教授が協力教員として参加している。それぞれイスラーム世界・中東地域と北アメリカ・太平洋地域を研究分野とする教員が関わることで、より多面的にグローバルな時事問題について検討を進めている。また冬学期には若手中東研究者である森まり子氏を特任准教授として、中国・アジア研究者の安田震一氏を特任講師として迎え、中東や中国地域などの歴史と現状に関する授業を前期課程で提供した。さらに本講座の助教である瀧知也（ロシア・トルクメニスタン研究）と佃陽子（現代アメリカ移民研究）がそれぞれの専門的見地から国際ジャーナリズムの意義についての考察をすすめている。

さらに国際ジャーナリズムへの学生の関心と理解を一層深めるために、授業のみならず、シンポジウムや講演会なども行った。6月に開催された創設記念シンポジウム「2008年の選択 世界はどこへ行くのか」では、山内教授と伊熊客員教授に加え、古城佳子教養学部教授、小倉和

夫氏（国際交流基金理事長）、谷内正太郎氏（前外務事務次官・東京大学大学院総合文化研究科客員教授）が変動する世界情勢について、国際ジャーナリズムの観点などを交えて論じた。また定期的に開催された公開講演会では、主にアメリカ在住の研究者が、グローバリゼーションや移民研究などの見地からジャーナリズムの意義と役割について論じた。

以上のように教養学部国際ジャーナリズム寄付講座は、21世紀のグローバルな社会においてますます複雑化する国際情勢とジャーナリズムがいかなる関係にあるのかを多角的に分析することで、学生の国際ジャーナリズム理解を養うことを目指している。

（地域文化研究専攻 矢口祐人）

9 科学技術インタープリター養成プログラム

科学技術振興調整費人材養成分野に採択され平成17年（2005年）にスタートした「科学技術インタープリター養成プログラム」は、4年を経過し、教育カリキュラムの一層の充実と、多方面への人材輩出に努めている。ここでは、これまでの成果を振り返りつつ、今年度の活動を紹介したい。

「科学技術インタープリター」とは

科学技術インタープリターとは、社会における科学技術の意義を考え、さまざまな手段を用いて一般社会と科学技術コミュニティとの間の双方向コミュニケーション（科学コミュニケーション）を促進し、科学技術と社会のより良い在り方について提起できる人材である。

現代社会においては、誰もが科学技術の恩恵により生活の利便性を得ている一方で、その適切な利用方法や情報の解釈・信頼性を巡る問題も拡大している。同時に、急速な科学技術の発展に伴い、ごく一部の専門家にしか理解できない情報が増えており、このことが人々を科学技術から遠ざけることにもなっている。また研究領域の細分化により「研究のたこつぼ化」と言われるような、研究者間のコミュニケーション不足も指摘されている。このような中で、研究者自身がアウトリーチ活動を行い説明責任を果たすことの重要性が認識されるとともに、専門家と非専門家間の橋渡しとしての役割を担う人材養成が、大学や科学博物館などを中心に活発化している。

一般に、こういった人材は「科学コミュニケーター」と称されるが、本プログラムでは、単にわかりやすい表現で情報発信するだけでなく、科学技術を社会との関連性という観点から主体的に考え解釈することを重視して、「科学技術インタープリター」という呼称にこだわっている。

プログラムのこだわり

このこだわりは、本プログラムのキーワード「何を伝えるか、どう伝えるか」にも通じる。科学コミュニケーター養成においては、「どう伝えるか」というハウツー的な部分がフォーカスされがちだが、そこから一歩踏み込んで「何を伝えるか」に、より力点を置くのが、本プログラムの最大の特徴である。興味喚起や啓蒙的な視点に留まらない、科学技術について自ら考え判断する社会の形成に貢献できる人材養成に取り組んでいる。

他の多くの人材養成プログラムが、科学コミュニケーション活動を業として、あるいは目に見える形で実践する人材の輩出を目的としているのに対し、本プログラムでは、本専攻の知識に加えて先述のような科学技術インタープリターとしてのマインドをしっかりと持った人材を育て、社会のあらゆるセクションに送り出すことを目指す。このマインドは、いわば、より良い社会を築いていくための「教養」であり、どんな場面でも活かされ得るものである。彼らがそれぞれの持ち場で活躍することで、このマインドが徐々に浸透し、ひいては科学技術と適切に向き合える社会風土の醸成を期待している。

本プログラムは総合文化研究科に設置されているが、専攻を問わず、学内のすべての大学院生を対象とした副専攻プログラムであり、授業と修了研究の計20単位を最短18ヶ月をかけて履修する。書類および面接による選抜試験を経て毎年10名程度の学生を受け入れ、今年度は9名を新たに迎えた。スタート以来、45名（在籍中含む）が受講し、平成19年度までに13名（中退者含む）を輩出した。受講生の本専攻分野は、生命科学・環境科学・工学・農学から人文社会・法学まで多岐にわたる。また輩出先も、研究機関・企業・メディア関連・官公庁など、多方面に広がっている。本専攻での研究活動や就職・進学準備も重なる時期にこのような副専攻プログラムを履修するのは必ずしも楽ではないが、敢えてそれにチャレンジする学生の意識は高



通常の授業風景



公開ワークショップ

い。

プログラムの運営にあたっては、総合文化研究科を中心とする13名の担当教員と2名の助教からなる執行委員会が組織され、カリキュラムの策定および教育の他、学内外との連携や情報発信などを進めている。「社会の中の科学」をさまざまな角度から捉え、それを伝える意義を考えることを主眼に構成されたカリキュラムでは、科学コミュニケーションの理論的考察、科学技術の基礎知識や先端の研究開発動向、科学技術政策および理数教育の現状、科学史・科学哲学、モノや文章による表現、メディアリテラシーなどに関する授業・演習の他、学内外の有識者による講演や科学博物館などの見学、科学イベントへの参加なども積極的に取り入れている。

これまでの活動と成果

・教科書の出版

科学コミュニケーションに関する教育や人材養成が各所で盛んに行われている反面、この分野の重要性が明確に認識されたのは比較的最近であり、実はその方法論や理論の体系化はなかなか進んでいない。それぞれが独自のやり方で試行錯誤している中であって本プログラムでは、基本的な理論や科学コミュニケーションをめぐる世界的な背景・潮流を包括的に学ぶための教科書の作成に取り組み、今年度10月には「科学コミュニケーション論」（藤垣裕子・廣野喜幸編）として東京大学出版会より出版された。

・シンポジウムの開催

平成18年度より毎年、一般公開のシンポジウムを企画・開催している。これは、科学コミュニケーションやそれに資する人材養成の在り方についての議論を深めることを目的としており、情報発信・意見交換の場としての機能も果たしている。

平成18年度の「研究を『正しく』伝えるとはどういうことか～理解増進と評価の落とし穴」（約180名参加）、平成19年度の「科学技術コミュニケーター養成プログラムの目指すもの～これからの社会に何を残すか」（約120名参加）に続き、今年度は「科学技術インタープリターによる社会への発信～修士生からのメッセージとプログラム間の交流」（125名参加）を開催した。本プログラムと同様に科学技術振興調整費人材養成分野の枠組で実施している北海道大学や早稲田大学のプログラム修了者の活動状況も紹介しつつ、今後求められる人材養成の方向性を展望した。

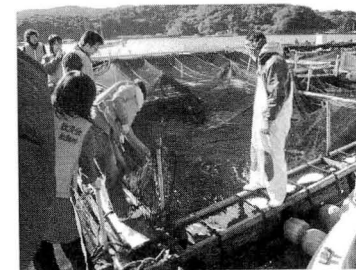


シンポジウム

・課外研修

毎年1泊2日で行われる課外研修は、研究施設などを実際に訪れ、そこで行われている研究に関して学生各自が事前に調査した内容をもとに研究者と直接ディスカッションをするものである。カリキュラムにおいては「課外」の扱いになるが、研究現場を体感する貴重な機会として重視している。

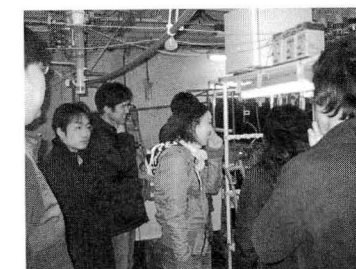
これまで、神岡宇宙素粒子研究施設（スーパーカミオカンデ）、農業・食品産業技術総合研究所（遺伝子組換え作物圃場）、六ヶ所村原子燃料サイクル施設を訪問し、今年度は12月に、養殖研究所および三重県漁業協同組合連合会（養殖漁場）を見学した。今回は特に事前・事後学習にも力を入れ、公開ワークショップなどを通して、生産者・消費者・研究者など様々な立場の養殖に対する考えを知るとともに、養殖研究・技術を食の安全や食料自給、地域振興などの問題もからめて考察した。



養殖漁場見学

・社会人講座の開講

科学技術インタープリターのマインドをさらに広く共有するために、社会で科学コミュニケーション活動に携わろうとする人々を対象とした社会人講座を昨年度より半期毎に開講している。それぞれの講座は、本プログラムや学内の教員による6～7回の講義からなる。今年度の春・秋期も含めてすでに4期の講座を実施し延べ190名が受講した。この講座ではさまざまな科学技術の話題を取り上げているが、単なる教養講座ではなく、科学コミュニケーションの観点から科



養殖研究所見学



社会人講座

学技術について考え、自らの活動のヒントを得ることを目的としている。そのため、各講座とも50名程度の定員を設け、書類選考による受講者の選抜を行っている。またレポート等の課題提出を各講義で課した上で、修了証を発行している。

受講者は、教育・研究機関、サービス業、製造業、マスメディア、博物館、官公庁など、いろいろな職種・立場・目的で科学コミュニケーションに関与しており、相互にその多様性を知る機会ともなっている。また、受講者間の情報交換も発展的に行われ、人的ネットワーク形成の場ともなっている。

プログラムでは、これらの社会人講座の書籍化も進めている。昨年度の春期講座の講義録は、講談社サイエンティフィックより「社会人のための東大科学講座」（石浦章一、黒田玲子、長谷川寿一、藤垣裕子、松井孝典、村上陽一郎著）として、今年度5月に出版された。今年度春期の講座についてもまもなく出版される予定である。

今後に向けて

本プログラムは5年間の期限付きのため、残念ながら今年度が学生受け入れの最終年となる。しかしながら科学コミュニケーション教育はこれからますます重要になっていくと考えられ、本プログラムにはその先駆者としての社会的役割も期待されている。残りの期間をかけて、カリキュラムの精査も含め学内での教育活動をさらに充実させ、より質の高い科学技術インタープリター養成に努めることはもとより、ここで蓄積された知見や成果を積極的に学内外へフィードバックすることにも注力していきたい。

言うまでもなく、教育や人材養成には継続性が求められ、その効果は長期的に検証する必要がある。科学技術インタープリターの理念をいかに学内での教育に継承し、社会に根付かせていくかも、本プログラムに残された課題だろう。

(科学技術インタープリター養成プログラム 山科直子)

10 生命科学構造化センター

生命科学構造化センターは東京大学全学の支援の元に、平成18年4月に誕生し、その拠点を駒場キャンパス17号館1階においている（平成22年3月まで）。創立目的は、東京大学全体の生命科学の知を集結させ、東京大学教育支援ネットワーク及び同研究支援ネットワークの支援のもと、東京大学の知を集めて大学初習者向けの生命科学教科書を作るとともに、全学の生命科学研究の知を構造化することである。平成20年度は19年に引き続き石浦章一がセンター長（総合文化研究科教授・兼任）を務め、柴崎芳一（特任教授）、青野由利（客員教授）、笹川昇（特任准教授）、高橋秀治（特任准教授）、柳野伸太郎（特任助教）、伊藤弓弦（特任助教、平成20年9月30日まで）、関根康介（特任助教）、大間陽子（特任助教）のメンバーで活動を行った。平成20年12月1日からは原本悦和（特任助教）が新しく加わった。

教科書の編纂・改訂

生命科学構造化センターの主な仕事は、急速に進展しつつある生命科学情報をリアルタイムに構造化し、大学における教養として、また専門家育成の基礎となる生命科学の教科書を作成することである。私たちは、教育内容の異なる理工系学生向け（理科一類向け）、医歯薬農理系学生向け（理科二・三類向け）、文系学生向け（文系選択授業「現代生命科学」用）の3種類の教科書を作成した。特に、理科一類向けの「生命科学」教科書は進化を続けており、平成20年度には各章に新たに問題を追加し復習が容易になるようにした改訂第二版を刊行したが、生命科学の知は予想をはるかに上回るスピードで蓄積しており、内容を改良した改訂第三版の執筆にも着手している。

また、生命科学学習を容易に開始するためのDVDも昨年度作成したが、本年度には新しく「遺伝のしくみ」などのいくつかの章を追加し、総合的な力の養成を目指した。これらが収録されたDVDは、平成21年度入学の理科生に配付する予定である。

英語版生命科学教科書の作成

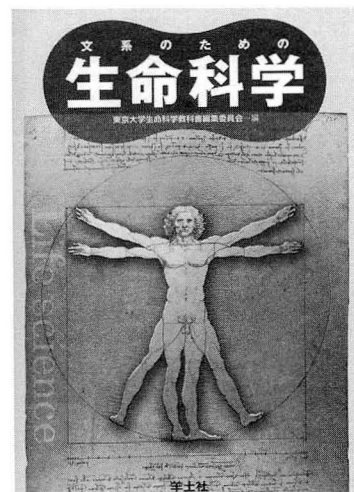
留学生30万人計画が提案され、留学生のための生命科学教科書の必要性が叫ばれている。そのため構造化センターでは、まず理科一類向け「生命科学」の英語化を行った。この英語版生命科学は、将来のインターネット配信も考慮に入れてすべての図を新しく作り直した。東京大学の著作権とともに世界に発信する予定である。

生命科学写真集の上梓

平成20年度には、全く新しい試みとして生命科学に関係する生物や細胞などの鮮明な写真、実験材料、実験器具、生命科学に貢献した研究者、などを網羅した写真集「写真でみる生命科学」（東京大学出版会）を出版した。特に、いろいろな生物種、細胞分裂時の染色体、細胞内小器官などの鮮明な写真を集めており、学生が生命科学を理解する補助になるだけでなく、付属のCD-ROMによって教員も授業に使いやすい形にした。大学の生命科学教育が教科書だけでなく、インターネット、携帯電話、DVD、書籍などいろいろな方向から行われる素地を作ったので、数年後の効果判定に役立つものと考えている。

社会人向け生命科学の一般教養書の作成

平成20年度には、東京大学「科学技術インタープリター養成プログラム」（黒田玲子代表）が行っている社会人講座とタイアップして「生命科学の今」を伝える一般教養書を作成した。これには、センター長である石浦、科学技術インタープリター養成プログラム構成員である黒田玲子（教授）、村上陽一郎（特任教授）、藤垣裕子（准教授）、廣野嘉幸（准教授）、に加えて総



合文化研究科から松田良一（准教授）、嶋田正和（教授）が参加し、21世紀の生命科学が抱える問題点を議論した。

新たな教材LSキューブの改変

平成20年度には、前年度に続いて自習教材の改定を行い、充実したコンテンツを作成した。インターネット上にある教材に各ユーザーが自らのアカウントでアクセスし、問題を解きながら履修内容を再確認するLSキューブを平成19年度に立ち上げたが、これは全く新しいインタラクティブな教材であり、教科書に準拠したものは我が国初めての試みであった。実際に使用した理科一類生の反応を見ながら、問題に改良を加えた。また、このLSキューブを携帯電話からでもアクセスできる形態にすることも試みており、新しい教材として多方面から注目されている。

生命科学構造化センターでは、平成19年度に引き続いて、これら教材による知識定着の効率を見るために、教員（笹川）が実際に授業を行い、それを各種教材にフィードバックするシステムをとっている。授業中の学生の反応を見て、生命科学として重要な点、教科書だけではわかりづらい箇所、もう少し自習してもらいたい点、などリアルタイムに取り入れており、リニューアルした結果が書籍では改訂第二版になった。また、LSキューブも毎年改定を行っている。

CSLSサーチ

生命科学情報を格段に速く論文を検索するシステムであるCSLSサーチの使用が2年目に入った。辞書機能を含め、前年度より格段に進化している。HP (<http://www.cscls.c.u-tokyo.ac.jp/>) にアクセスしていただき、クラスタリングサーチ（検索結果が類似度で階層的に分類表示される）の威力を、ご自分で確かめていただきたい。

IT講義教材作成の準備

生命科学構造化センターでは、駒場の教養教育開発機構の実験授業教室であるKALS授業にも協力し、教材作成の第一歩として生命科学の教材作成にも協力している。平成19年度に引き続いて、笹川が冬学期に全学自由研究ゼミナールとして「生命科学β」の授業を開講した。ここでは、KALS教室を使ったインタラクティブな生命科学授業を展開しており、インターネットによる遺伝子検索や種間の相同性などの検討、分子モデルによるタンパク質の立体構造の可視化などを題材にして学生参加型の授業を行っている。このように生命科学構造化センターは教養教育開発機構に実施部隊を派遣し、KALSのコンテンツ作りを補助する予定である。

生命科学構造化センターの組織

生命科学構造化センターでは役割分担が確立し、石浦は全体の統括、柴崎は英語版教科書の監修、青野は主に教科書内容のチェック、笹川は渉外関係、高橋は予算関係を主に受け持った。一方、柳元はIT関係の仕事を受け持ち、携帯版LSキューブの作製、ホームページの管理、英文化を行った。特任助教の伊藤（後に原本）、関根、大間は、LSキューブに入れるための理科二・三類向けの「生命科学」教科書用の問題の選択と模範解答の作成を担当した。

生命科学構造化センターが設置されている17号館1階には生命科学教育ネットワークの特任助教2人（小沼泰子、辻真吾）も常駐している。生命科学教育支援ネットワークは、全学の生命科学教員有志が作った組織を総長室が統括しているもので、現在の主な仕事は、4月と9月に開催される大学院生向けの「東京大学生命科学シンポジウム」の開催や、退官教員の最終講義の収録や特別な専門をもつ教員の講義収録のアーカイブ化、そして東京大学の生命科学研究者名簿の作成、などである。辻と小沼は、これらの仕事の他に、コンピュータ関連、渉外など私たちの仕事に協力してくれた。生命科学構造化センターは、今後も生命科学教育支援ネットワークと協力して、東京大学の生命科学定着に寄与していきたい。

（生命環境科学系 石浦章一）

11 複雑系生命システム研究センター

設立の経緯

複雑系生命システム研究センターは、平成16年度学内措置により総合文化研究科に設立され、本年度で5年目を迎えた。まず設立の経緯を紹介したい。本部署の中でも、基礎科学科は、かねてより複雑系研究の世界的研究拠点として注目されていた。折り良く、20世紀COE「複雑系としての生命システムの解析」(H11-15)が立ち上がったのを機に、実験と理論が密な連携をとりつつ、構成的アプローチにより生命システムの本質に迫り、様々な階層・スケールに貫く生命現象の基本原理の理解を目指すプロジェクト研究を早くから展開した。また、その後を受けてスタートした21世紀COE「融合科学創成ステーション」においても、構成的アプローチを中心とした生命システム研究の方向性を受け継ぎ、優れた成果を上げるとともに、生命科学研究の新たな潮流を生み出した。このように、我が国で、しかも駒場キャンパスがその中核的拠点となり、成果を挙げてきた研究の方向性ではあるが、ここ数年のうちに、我々のアプローチと方向性が極めて近い国家的プロジェクトが、欧米で続々と立ち上がりつつある。黎明期から世界をリードしてきた我が国の本分野におけるイニシャチブを維持し、さらに、この新しい複雑系生命科学を発展させていくため、学内的措置により複雑系生命システム研究センターが設立された。

研究体制

平成20年1月に、複雑系生命システム研究センターから申請をしていた教員採用可能数再配分が本部で承認され、平成20年4月1日からセンター専任の教授1名、准教授1名が着任し、新たな陣容で充実した研究体制が整った。

センターの6部門と部門責任者

複雑系理論部門 金子邦彦（センター専任教授）、福島孝治

本部門では、「生命組織化のダイナミクス」を扱うため、これまでの統計力学や熱力学だけでは扱えない理論を整備し、各部門で考えるべき概念を整理、問題提起する。

人工複製系合成部門 菅原正（センター長）

生命の起源や原始細胞の進化を理解するために、基本的有機分子からなる自己複製反応システムをつくる。次いでそれを複製型プロト細胞へと展開し、何代にもわたる複製反応の間にみられる分化・進化を解析することを通じて、生命システムの構成的理解へと導く。

発生過程解析部門 道上達男、澤井哲

本部門では、細胞集団の協調的機能分化の解析や、臓器の人工合成実験を通して、多細胞体制の創発現象の原理や、発生・分化における再生可能性などを明らかにすることを目指す。

生体系計測部門 小宮山進、若本祐一（センター専任准教授）

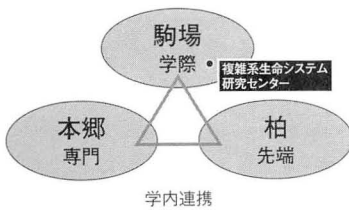
ナノテクノロジー・マイクロファブリケーション技術の本プロジェクト共通の方法論として提供し、単一分子や単一細胞の計測が可能な操作技術・計測技術により、「単体」が集合して形づくられる生命現象に迫る。

共生・進化解析部門 磯崎行雄、嶋田正和（副センター長）

生命システムの振る舞いの中でも、特に、共生を中心とする進化現象にみられる普遍性を、実験的分析、数理モデル、シミュレーション解析により、統合的に研究する。

脳情報システム部門 池上高志（副センター長）、酒井邦嘉

本部門では、真の文理融合を目指して、言語情報処理を中心とするコミュニケーション・システムの原理解明および実践応用のための分野横断的なアプローチを追究する。



また、東京大学内における各部局や学外の関連分野の研究者に、構成員、連携教員、研究員として、センター内の研究活動に参画していただき、学内外の連携をさらに拡充した。一方で、東京大学の関連部局で指導的立場にある先生方に諮問委員会をお願いし、当センターの研究活動・成果に対しての客観的評価と、今後の研究展開への意見を提供していただくための体制を整備した。

国際連携

当センターの重要なミッションのひとつとして、世界を先導する研究を遂行すると同時に、国際的研究拠点として、海外で関連研究を行っている拠点との連携も進めている。これまでに、サンタフェ研究所（米）やルール大学ポッフム（独）、ISTC（認知科学技術研究所、伊）との提携が行われるなど、国際連携の体制も整いつつある。

センター内で昨年度行われた具体的な国際研究交流の一部として、以下のような活動が挙げられる。

- 1) センター専任教授金子邦彦が、サンタフェ研究所夏の学校(アルゼンチン)において、「Introduction to Complex Systems Biology: Dynamical Systems Approach to Cell Reproduction and Differentiation」および「Consistency Principle for Biological Systems: Relevance of Fluctuation to Evolution of Robustness and Generic Adaptation」という題目でチュートリアル講義を行った。
- 2) 嶋田正和が、スイス・ローザンヌ大学のTadeusz Kawecki准教授を日本に招聘し、研究交流を行うとともに、第27回個体群生態学会（東京、2008年10月）にて国際シンポ（基調シンポ）「Rapid Adaptation: From Learning and Plasticity through Population Dynamics to Evolution」を開催した。
- 3) 菅原正が、フランス・プロヴァンス大学のPierre Pontarotti教授の主催する、進化生物学に関する国際ワークショップ、12th Evolutionary Biology Meeting at Marseilles（フランス）に招待され、「Minimal Cell Model to Understand Origin of Life and Evolution」という題目で、講演を行った。



センター教授金子邦彦がチュートリアル講義を行ったサンタフェ研究所夏の学校での集合写真

平成19年度 複雑系生命システム研究センター報告会

下記の通り、複雑系生命システム研究センター報告会を開催いたします。
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成20年4月26日（土）自10時30分 至17時
場所：アドバンスドラボラトリー4階会議室

1	平成19年度 研究業績報告	センター長 菅原 正
2	平成19年度 研究業績報告	
10	4:00 複雑系理論部門 複雑系理論と演習、演習、進化の普遍性	金子邦彦
11	1:10 人工知能系応用部門 ウェアラント・センシングと人工知能	菅原 正
11	1:40 進化理論研究部門 シグナル伝達経路を用いたシミュレーションによる進化	遠上雄典
12	1:00	
13	1:30	～休憩～
13	3:30 招待講演 日常生活の中の複雑性：行動の最適化と意思決定の理解へ向け	野村 孝司 山本 博
14	1:10 生物系計算部門 バクテリアのバスターンスタンス後継-1細胞計測によるアプローチ	菅原 正
14	3:00	～休憩～
15	0:00	
15	0:00 共生・進化部門 生命の起源・進化と宇宙との相互作用	横山 隆
15	3:00 脳・神経システム 動きが生命をつくる	池上 英志
16	0:00 総括討論	

諮問委員会プログラム

センターを中心とした研究交流とその成果

センターを中心とした緊密な研究交流の充実と、自発的な共同研究の萌芽をサポートするため、昨年度には、諮問委員会と研究会を開催するとともに、駒場部局内での月一回の定期研究会をスタートさせた。また学外から関連研究を行っている研究者を招聘し、不定期の研究セミナーも開催した。

これらの研究活動・交流を通じて、実際にセンター構成員、連携教員の間で、複数の学際的共同研究がスタートしている。これらが、他に類を見ない特色ある生命科学研究として近い将来結実し、生命システムの基本原理の解明につながることを期待している。

1) 諮問委員会（平成20年4月26日開催）

センター構成員の研究成果報告を行い、諮問委員の先生方から研究内容に対する講評をいただいた。この中で、センターで行われている研究は、きわめて独創性が高いと評価された。また、駒場キャンパスにとどまらず、学内全体に向けて情報を発信してもらいたいという要望を受けた。

センター諮問委員

医学系研究科	清水孝雄
薬学系研究科	福山透
理学系研究科	福田裕穂
農学生命科学研究科	正木春彦
工学系研究科	大垣眞一郎

教育学研究科	山本義春
数理科学研究科	桂利行
新領域創成科学研究科	高木利久
先端科学技術研究センター	小宮山眞

2) センター研究会「多次元複雑システムの観測科学」(平成20年12月20日開催)

センターの研究活動を他部局にも発信するとともに、学内の関連する研究者との連携をさらに強めるため、大学院新領域創成科学研究科複雑理工学専攻に協力をいただき、初めて駒場を離れ、柏の地でセンターの研究会をもった。この研究会では、複雑系理論、脳・神経科学、地球科学、統計力学、分子細胞生物学分野の研究発表とともに、「高次元の情報をどのようにして測り理解するか?」という普遍的な問題を活発に議論し、有益な意見交換を行うことができた。

3) 定期研究会

駒場部局内のセンター構成員を中心に定期的に成果報告、情報交換を行う場として、月一回程度のペースで定期研究会を行っている。この研究会では、センターの複数の部門に共通する技術的・理論的課題を、様々な専門研究分野のセンター構成員の間で議論する「ディスカッションセッション」を毎回設定している。これまでに「遺伝子発現などの多次元のデータをどう取得し、理解するか」「発生における分化ポテンシャルをどう計測するか」などに関して、活発な意見交換を行っている。

(複雑系生命システム研究センター長 菅原 正)



センター定期研究会

12 アメリカ太平洋地域研究センター(CPAS)



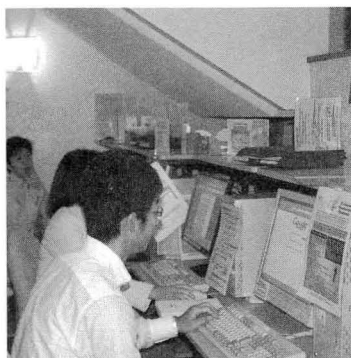
本センターは、1967年に設置された東京大学教養学部附属アメリカ研究資料センターの蓄積をもとに、2000年4月に改組され、総合文化研究科附属のセンターとして設置されたものである。その際、資料センターから研究センターへの改組により研究部門が飛躍的に強化されるとともに、研究対象もアメリカ合衆国だけでなく、従来手薄であったオセアニアやカナダを新たに加え、広く「アメリカ太平洋地域」を対象とするユニークな研究センターとなった。

日本でも近年、「アジア太平洋」地域に対する関心が高まっているが、多くの場合、関心の中心はアジア側の太平洋地域、つまり、西太平洋地域に限定されがちであるのに対して、本センターでは北米やオセアニアとアジアを接合し、文字通り「太平洋地域」の全体を研究対象としている。

運営は、総合文化研究科の各専攻の委員だけでなく、他の文系研究科からも委員を迎え、全学的な構成をもつ運営委員会が決定した年間方針に従って進められている。スタッフは、教授3、准教授1、オーストラリアからの外国人客員教授1、助教1、職員1、機関研究員1、非常勤職員3で構成されている。

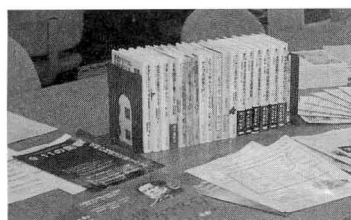
センターの活動は、研究部門と情報基盤部門の2部門からなる。研究部門の主要な活動としては、共同研究の推進、研究叢書（既に13冊刊行）や研究年報『アメリカ太平洋研究』の刊行、年2回の『CPASニューズレター』の発行、年1～2回の公開シンポジウム開催、年10回を越える研究セミナーの開催などが挙げられる。

現在、主要プロジェクトとして、2007年4月から開始された、三つの日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究（A）「アメリカの世界戦略と文化外交に関する学術的研究」、「現代アメリカ・ナショナリズムの複合的編制をめぐる学術的研究」および「公共文化の胎動」が展開されている。いずれのプロジェクトも、従来のアメリカ研究の学問的枠組みを超える領域横断的な研究であり、全国から多くの一線研究者の参加に加えて、海外の優れた研究者の協力も得て進められており、その成果をシンポジウムや研究会、出版を通じて広く公開してゆく予定である。



研究成果を広く社会に還元することは、本センターの重要な使命であり、今年度はその一環として9月に、公開シンポジウム「アメリカ太平洋とイギリス帝国」を開催した。今回のシンポジウムは、これまで本センターが培ってきた文字通り環太平洋的な研究関心を反映し、太平洋地域における「イギリス帝国」からアメリカのヘゲモニーに至る権力関係の変遷をテーマとした。この大きな主題をめぐる、アメリカ、オーストラリア、日本から招かれたパネリストたちが、学生や一般市民を含む100人以上の参加者を前に、歴史学、政治学、文化人類学、表象文化論にわたる学際的な論議を活発に交わした。なおこのシンポジウムの報告と討論は、年報『アメリカ太平洋地域研究』第9号に掲載されることになっている。

本センターの情報基盤部門には、アメリカ合衆国の歴史、政治、経済、文化に関する専門書を中心に、近年急速に蒐集を進めてきたオセアニア、カナダ関係の書籍を含め、約7万冊の蔵書がある。加えて、資料センター時代から蓄積してきた一次資料や新聞・雑誌、マイクロフィルム、オーディオ・ヴィジュアル資料も充実しており、近年は『ニューヨーク・タイムズ』や『ワシントン・ポスト』などの主要紙の電子検索システムも導入し、電子資料の整備に努めている。本センターでは、こうした膨大な史資料を他大学の研究者や学生にも公開し、貸し出しの便宜を図っており、全国各地から年間約4,000人の利用者を迎えている。



また、特別のコレクションとしては、日本におけるアメリカ研究のパイオニアであるとともに、第二次世界大戦前における民間レベルの太平洋地域協力の先駆的機関であった「太平洋問題調査会」の運営にも深く関与され、戦後の日米関係の修復にも多大な貢献をされた高木八尺教授の寄贈による「高木八尺文庫」と「高木八尺関係文書」がある。後者については、現在着々

と整理とマイクロ化の作業が進んでおり、近く一般に公開される予定である。この他にも、アメリカ文学研究、日米比較文化研究の関連図書を広く集めた「佐伯彰一文庫」、大正から昭和初期の英文学翻訳書を多く集めた「滝口直太郎文庫」などが貴重である。

研究部門、情報基盤部門、いずれの日常的活動に関しても、上述の『CPASニューズレター』で定期的に報告しているが、ホームページ (<http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/>) も開設して、研究セミナーや公開シンポジウムのお知らせを随時行っているのも、そちらもご覧いただきたい。

(アメリカ太平洋地域研究センター 古矢 旬)

13 東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ (EALAI)



Hanoi E-Lecture

東アジア・リベラルアーツ・プログラム (EALAI) は、東京大学が蓄積してきたリベラルアーツ教育を東アジアに向けて発信するとともに、東アジアの大学との双方向の教育交流を通じて、ともに高めあうなかで、東アジアにおける共通の教養教育の実現を目指すことを目標とする海外教育プログラムである。その事業は、東アジアへの発信と東アジアからの着信の二つからなり、教育を通じて東アジア共同体の土台となる相互理解と人材育成を担う、新しい国際貢献のプロジェクトでもある。

東京大学は、東アジアの三つの主要な大学である北京大学、ソウル大学校、ベトナム国家大学ハノイ校と、1999年から東アジア四大学フォーラム (BESETOHA) を開催してきたが、EALAI は、その実施機関として位置づけられている。本年も、同フォーラムの各事業に取り組んできたが、なかでもE-Lectureによる共同講義の実施は、四大学間の共同講義の新たな展開として、重要な一歩となるであろう。また、リベラルアーツの中国における重点展開として、引き続き南京大学で「表象文化論」集中講義を正規科目として開講し、多くの講演会を開催した。さらに、関連テキストのアジア言語への翻訳を進め、ホームページを充実させるなど、コンテンツの発信にも努めた。

本事業は、2005年に大学教育の国際化推進プログラムに採択され、その活動を行ってきたが、その4年目にあたり、連携校である南京大学の協力を得て、最終評価を実施した。今後の東アジアとの教育交流の展開に資するべく、事業の総括を行うとともに、次年度以降の事業の継続に向けて、新たな体制の整備を行っている。

今年、EALAIが行った主な活動は、次のとおりである。

東アジア四大学フォーラムの開催

本年の東アジア四大学フォーラムは、第三クールの二回目として北京大学で開催された。総長セッションが、2008年11月6日に四大学の総長出席のもとに開かれ、学生交流をテーマに議論が交わされた。小宮山総長をはじめ、本学の教員は、翌日から北京大学が主催する北京フォーラムにも出席し、発表を行っている。教育交流に関する討議は、日と会場を改めて、12月23日に北京郊外の国際会議場で、ワーキングセッションが開催された。本年は、本学とソウル大やハノイ大との間で、すでにE-Lectureが実施されていることもあり、小規模ながら熱のこもった議論が行われ、次年度のさらなる展開が約束された。また、本学の理系教科書の紹介に対して、ソウル大から関心が寄せられるなど、今後の教育コンテンツの交流にも道を開く会となった。また、セッションとは別に、ソウル大やハノイ大と個別に来年度のE-Lectureの展開や共通教科書に関する意見交換を行った。

BESETOHAでは、フォーラムの開催に合わせて学生パネルを開催することになっているが、本年は、昨年に引き続き東京での開催となり、2009年2月5日から8日まで駒場キャンパスで開かれた。すでに実施中のE-Lectureの講義に参加している各大学の学生が参加するなど、教育交流と結びついた新たな展開を見せた。おりからの国際的な金融危機を受けて、経済問題に関する学生の関心は高く、経済問題と若者の雇用をめぐる、活発な議論が展開された。また、本年からBESETOHAのプロジェクトには、大和証券グループから支援が寄せられており、学生パネルの参加者も大和証券グループを訪問し、経済情勢についてレクチャーを受ける機会を得た。

2009年の東アジア四大学フォーラムは、ソウル大学校で開催される予定である。フォーラムの詳細については、同フォーラムの報告の項を参照されたい。

教養教育の東アジアへの発信

リベラルアーツの東アジアへの発信として、引き続き南京大学において「東京大学リベラル

「アート・プログラム」を実施した。これは、2004年に開設された東京大学リベラルアーツ南京交流センターを通して行うもので、2008年は3月10日から25日にかけて、表象文化論集中講義が5名の教員によるリレー講義として開講された。講義題目は、「シェイクスピアと表象の問題」（河合祥一郎）、「東西を走る20世紀の踊る身体」（ドゥ・ヴォス・パトリック）、「見られる身体、見せる身体」（清水晶子）、「〈表象=上演〉史としてのオペラ」（長木誠司）、「表象の歴史としてのロシア映画」（浦雅春）である。演劇と映画を中心に組まれた講義には、学生の関心も高く、教室には今年も多く多くの学生が集まり、質疑応答が活発に行われた。講義は日本語で行われたが、日本語未修学生も多く集まったため、昨年と同様に南京大学日本語科の学生による同時通訳が行われた。E-Lectureの一環として同講義の駒場への中継も一部で実施された。



南京集中講義08

この集中講義は、2009年3月には四回目の記念の講義が実施される。6名の教員によるリレー講義の題目は、以下のとおりである。「蒼眼が観た歌舞伎入門」（ドゥ・ヴォス・パトリック）、「オペラとナラティブ」（長木誠司）、「クシア映画論」（清水晶子）、「日本の現代演劇」（内野儀）、「写真による都市表象の分析」（田中純）、「《近代の超克》と表象の構造」（高田康成）。今回は特別講演会（高橋哲哉）が組まれるとともに、集中講義の開催に合わせて、坂東玉三郎氏による歌舞伎のレクチャーが初日に開かれることになっている。さらに、今回から講義資料の配布やBBSによる質疑応答が、EALAIのホームページで行えるように工夫されている。

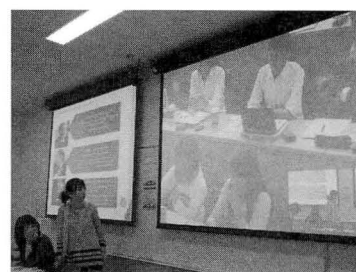
南京大学では、この集中講義の他に、理系の教育交流として、小島憲道学部長による講演が、2008年6月に実施されている。

コンテンツの発信として、『教養のためのブックガイド』の韓国語版が、韓国放送通信大学出版部から2008年10月に出版された。これで、同書は中、越、韓の三ヶ国版がそろったこととなった。また表象文化論叢書の中国語版もその編集が南京大学で進んでいる。

発信事業としてホームページのさらなる充実を図ったことも、重要である。日・中・韓・越・英の五ヶ国語で発信しているが、とくにBBSを充実させ、次で紹介するテーマ講義の教育効果を高めるよう努めた。各講義の報告集も多言語で掲載されている。

教養教育の東アジアからの着信

前期課程学生の国際的なキャリアの育成等を目指して、引き続きテーマ講義を夏学期に開講した。「アジアの自然災害と人間の付き合い方」（担当教員：小河正基・加藤照之）は、本学のアジア研究者の学内ネットワークASNETとの共催で開かれた。自然災害を理系、文系それぞれの専門領域の研究者がどのように解明しているかを示す講義で、おりしも続発したアジアの自然災害を、すぐさま講義に折り込み、さらにBBSを活用して学生との質疑応答を行うなど、学生の知的興味をかきたてるものとなった。本講義は、地震研究所との共同講義だが、前期課程向けの講義を付属研究所と共同で行う際のひとつのモデルとなるであろう。



Seoul E-Lecture

冬学期は、E-Lectureによる共同講義がソウル大とハノイ大との連携によって、主に後期課程の学生を対象に開講された。「東アジア経済協力を理解する」（担当教員：清水剛、安徳根）は、東アジアの経済を日本と韓国の視点から捉え、講義と学生の討議を組み合わせた共同講義で、使用言語は英語である。東大とソウル大の学期や授業コマの開講時間がずれるなど、技術的な障害を含め、いくつかの課題を克服して開講された。担当講師が事前に相互に訪問しあうなど、周到な準備を重ねて成功に導いたもので、同講義はハノイ大にも中継された。

ハノイ大とは、本学のベトナム学の一環として、2008年11月と1月に、ハノイ大教員による講義と質疑応答がE-Lectureで行われ、3月にもネット中継による質疑応答が予定されている（担当教員：古田元夫）。講義題目は「ベトナム戦争と北部における社会主義建設」と「経済の伸長と社会的公平」である。その際、ハノイ大から提供された講義の録画映像に日本語の字幕をつける作業を行い、コンテンツの充実を図った。また、日本学の講義として、「浦島太郎の説話学」（担当教員：齋藤希史）がハノイ大日本語学科を対象として、12月に行われた。これも、事前に本学の講義映像をハノイ大に提供し、それにもとづいて講義と質疑応答が行われた。

海外の連携校との講演会等の活動は、2008年7月に教養教育開発機構との協賛で、ソウル大学校国際大学院の教員・学生を迎えて「日韓合同セミナー2008」が実施されている。

文科省の補助金を得たプログラムとして、その最終年度にあたり、南京大学より張栄副学長、趙亜軍国際交流合作処主任の二人を迎えて、最終評価が2009年2月に行われた。南京大学はEALAI事業の連携先であり、集中講義など多くの活動を行ってきたが、評価活動を通して、本学の教養教育の全体像とEALAIの活動の関連を理解していただき、今後の交流の継続に向けて、双方の理解をより深めることができた。

EALAIは本学の自己資金と外部資金を活用して、今後もその活動が展開される。南京大学におかれた東京大学リベラルアーツ南京交流センターも、本学の海外拠点として次年度も継続されることになっている。EALAIは、この4年間の成果を基礎に、今後も東アジアの教養教育の交流に、より大きく寄与していくことであろう。

EALAIの活動は、ホームページ (<http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp/>) に詳しく紹介されており、これを参照されたい。

(超域文化科学専攻 刈間文俊)

14 ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)

ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)の活動は、大学院総合文化研究科に設置された「欧州研究プログラム(ESP)」(修士課程)、「日独共同大学院プログラム(IGK)」(博士課程)という二つの教育プログラムを軸に展開されている。

欧州研究プログラムは、ドイツ・ヨーロッパ研究センターを主たる調整組織とする大学院修士課程の教育プログラムである。本プログラムには、大学院総合文化研究科文系専攻の修士課程に所属する学生が登録できる。現在の登録学生数は17名である。この欧州研究プログラムに参加する学生は、所属専攻のカリキュラムに加えて、本プログラムのプログラム科目を規定の方法で履修した場合、「修士(欧州研究)」の学位を取得できる。本プログラムは、「欧州研究」という名称の学位を授与する教育プログラムとしては、日本ではじめて設置されたものである。

欧州研究プログラムでは、主として現代欧州の政治、経済を研究対象とする学生に、ディシプリンに基づく方法と最新の知識を幅広く身につけさせることを目的とするプログラム科目が開講されている。必修科目は、プログラム全体を俯瞰する輪講「現代欧州研究の方法」(2単位)、基本文献の講読を通じて欧州研究の基礎を身につける「スーパーヴァイズド・リーディングス I・II」(4単位)の計6単位である。さらに、欧州研究の基礎を講義で身につける選択必修科目(欧州統合史、欧州政治論、EU法、欧州公共秩序思想、現代ドイツ基層論)から2科目(4単位)以上、演習形式で研究を深める展開科目もしくは各種セミナーへの参加やインターンシップなど実践的な学修成果が認定される発展科目から2科目(4単位)以上の計8単位を履修する。以上の計14単位の科目履修に加えて、各自の関心にもとづいた研究テーマを設定し、修士論文を作成することが課される。

2008年度には、主としてこの欧州研究プログラムに参加する学生を対象として二つの海外学生セミナーが開催された。ひとつは、昨年度に引き続き、ドイツ・ザールラント州のヨーロッパ・アカデミー・オツェンハウゼンにて9月に実施された「European Fall Academy」(使用言語:英語)である。この秋期セミナーは、ASKO欧州財団(在ザールブリュッケン)、ヨーロッパ・アカデミー・オツェンハウゼン、トリア大学、ドイツ・ヨーロッパ研究センターの四者の協力によるものである。「グローバルアクターとしてのEU」をテーマに実施された今年度のセミナーでは、トリア大学のJ・シルト教授、H・W・マウル教授らによる講義と演習が行われたほか、欧州議会、欧州委員会などブリュッセル、ルクセンブルクの欧州諸機関の視察もプログラムに組み込まれた。単なる文献研究の枠組みを超えて、現代欧州の最新知識を経験にもとづいて取得することを重視する欧州研究プログラムにとっては、プログラムの趣旨に合致した重要なセミナーである。

さらに今年度は、新たに、姉妹センターである北京大学ドイツ研究センター(ZDS)と協力して、DESK-ZDS合同法学入門セミナー(使用言語:ドイツ語)も開催された。11月に北京大学で実施された本セミナーでは、ドイツ学術交流会(DAAD)派遣講師でもある大学院法学政治学研究科のTh・ヘネ客員准教授が講師をつとめ、両センターに関わりのある学生が日中両国から参加した。セミナーのテーマはドイツ法入門であり、講師による公開講演、講習、模擬裁判の三部から構成された。連邦制にはじまり、言論の自由、民法上の意思表示から刑法上の弁明理由にまでおよぶ幅広い問題に目を配り、法解釈学、法制史、法理論の三つの観点を深く結び合わせながら、しかも日中独の三カ国の視点を織り交ぜて行なわれる充実したセミナーとなった。

この欧州研究プログラムに加えて、ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、大学院総合文化研究科博士課程に専攻横断的に設置されている日独共同大学院プログラムのコーディネーターも担っている。日独共同大学院プログラムは、日本学術振興会とドイツ研究協会(DFG)が進める国際共同大学院プログラムのプロジェクトのひとつであり、ドイツのマルティン・ルター・ハ



日独共同大学院プログラム
(少人数討論風景)



European Fall Academy 2008



DESK-ZDS合同法学入門セミナー

レ・ヴィッテンベルク大学（ハレ大学）の第一哲学部をパートナーとして、学生の長期留学支援、相互研究指導、共同セミナー等の共同教育を行なうものである。

日独共同大学院プログラムが重視するのは、大学院博士課程における学生交換、教員交換の規模拡大と恒常化である。プログラムに登録した学生はそれぞれが所属する大学で最終的に学位を取得することになるが、その過程で、パートナー校に長期（1学期以上）に留学し、パートナー校の指導教員による研究指導を受ける。2008年度には、大学院総合文化研究科のプログラム登録学生20名のうち6名をハレ大学に派遣し、ハレ大学からも1名が来日した。同じく教員についても、集中講義や共同研究のための滞在が相互に行なわれている。また、こうした人的交流の促進とならんで、国際共同教育の制度と方法論を確立すべく、日独双方で開講される科目を含む独自のプログラム科目を開設し、共同教育のカリキュラム化にも努めている。さらに、春季（東京）、秋季（ハレ）の2回、日独双方のプログラム参加教員と学生が一堂に会して、教員の講義、少人数討論（ワーキンググループ）、全体討論、学生の個別研究報告等を組み合わせた一週間ほどの集中的な共同セミナーも開催し、共同研究テーマ「市民社会の形態変容－日独比較の視点から」について集中的に議論を深める場を設けている。こうした共同教育、共同研究の成果は、ゆくゆくは論文集にまとめて日独両国で刊行される予定である。この日独共同大学院プログラムは、国際的なパートナーシップのなかで短期間で優れた博士論文の作成を目指すという点において、大学院博士課程の国際化、若手研究者養成の効率化に大きく貢献するものといえる。

ドイツ・ヨーロッパ研究センターの教育プログラムには、正規学位を授与する上記の二つのプログラムのほかに、学生に論文作成のための現地調査旅費を支援する奨学助成金プログラムや日独会議通訳養成プログラムなどがある。2008年度も、多くの学生がこの奨学助成金プログラムに基づいてヨーロッパでの現地調査を実施した。

教育プログラムとならんで、ドイツ・ヨーロッパ研究センターのもう一つの活動の柱である研究プロジェクト分野では、今年度も多くのシンポジウムやセミナーが開催された。とりわけ、日仏会館、大学院経済学研究科現代ヨーロッパ経済史研究教育ユニットとの協力の下、二日間にわたって開催された国際シンポジウム「欧州統合の半世紀と東アジア共同体」（4月18、19日）は、独仏両国から招いた4名ずつのゲストに日本からの報告者を加えた盛りだくさんのシンポジウムとなり、半世紀にわたる欧州統合の歩みを欧州統合の推進力となった独仏関係を軸にふりかえるとともに、欧州統合の現状と今後の展望について議論した。また、2008年はドイツ・ヨーロッパ研究センターの最大の支援者であるドイツ学術交流会の東京事務所開設30周年にあたるため、記念行事の一環としてドイツ学術交流会との共催で公開セミナー「風力発電と代替エネルギー政策」（11月7日）を開催した。ドイツ・ヨーロッパ研究センターではこれまでも環境関連の催事をいくつか手がけてきたが、本セミナーを端緒として、大学院総合文化研究科の理系専攻のみならず、大学院工学研究科ほか、理系の研究者との本格的な提携が進展することが期待される。

ドイツ・ヨーロッパ研究センターではこのほかにも、随時、日本を訪問した研究者や要人を招いて講演会やセミナーを実施している。たとえば、ドイツのW・ティーフェンゼー交通・建設・都市開発大臣の来日時にも講演会を企画し、大臣の講演「気候変動とモビリティ」に引き続き、大学院工学研究科の中村英夫名誉教授（武蔵工業大学学長）、先端科学技術センターの山口光恒特任教授らとのパネルディスカッションが行なわれた（10月22日）。そのほかにも、ドイツ学術交流会のCh・ボーデ事務総長（5月29日）、デイ・ツァイト紙元共同発行人のT・ゾンマー氏（4月15日）の講演会等を開催した。

ドイツ・ヨーロッパ研究センターの活動は、ドイツ学術交流会が支援するアジア初のドイツ・ヨーロッパ研究センターとして2000年10月に前身であるドイツ・ヨーロッパ研究室が活動を開始したときから数えて9年目を迎えた。この間にドイツ・ヨーロッパ研究センターが関わる教育プログラムは飛躍的に充実し、安定感を増してきた。ドイツ学術交流会による支援は2010年をもって終了する見通しだが、その先の展開を視野に入れ、これまでの活動のなかで築いた教育研究、社会連繫、国際協力の枠組みをさまざまな形で強化しながら、一層精力的な活動を展開



ティーフェンゼー交通・建設・都市開発大臣講演会「気候変動とモビリティ」

していくこととしたい。

なお、ドイツ・ヨーロッパ研究センターとその関連活動についての詳細は下記ウェブサイトをご参照いただきたい。

ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK) <http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

欧州研究プログラム (ESP) <http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/esp.html>

日独共同大学院プログラム (IGK) <http://igk.c.u-tokyo.ac.jp/>

(ドイツ・ヨーロッパ研究センター 川喜田敦子)

15 「人間の安全保障」プログラム(HSP)

平成16年度(2004年度)に大学院総合文化研究科の全5専攻を横断する形で発足した大学院教育プログラム「人間の安全保障」プログラム[以下、略称HSPを用いて表記する](修士課程・博士課程)も、2008年度に5年目を迎えることになった。2008年度の活動の概要を報告する。HSPの活動の詳細については、ホームページ(<http://human-security.c.u-tokyo.ac.jp>)を参照して頂きたい。

教育

HSPは2008年度第3代目の修士課程修了生を送り出した。また、新たな博士号授与者はいなかったが、準備段階としてプロポーザル・コロキウム、リサーチ・コロキウムの修了者が数多く現れ、近い将来の博士号量産が期待される。本年度の入進学者は、修士課程が16名[社会人特別選抜2名、一般選抜14名(うち外国人2名)]、博士課程は8名[社会人特別選抜4名、一般選抜4名(うち外国人1名)]である。

HSPでは、運営委員である高橋哲哉と山影進を編者として『人間の安全保障』と題した教科書を、4月に東京大学出版会から刊行した。構成は以下のとおりである。まえがき、序／地球社会の課題と人間の安全保障(山影進)、Ⅰ歴史の教訓、〈誰〉をめぐる問いかけ～マダガスカルから(森山工)、なぜ独立国家を求めるとか～ギリシアからソコトまで(柴宣弘)、ジェノサイドという悪夢(石田勇治)、Ⅱ文化の潜勢力、差別・暴力の表象と他者～エドワード・サイードのメッセージ(林文代)、読み書きと生存の行方(中村雄祐)、点字の歴史と構造～音声言語と盲人をめぐるリテラシー(吉川雅之)、Ⅲ経済発展の未来、貧困削減をめざす農業の試練(木村秀雄)、環境と向き合う知恵の創造～沖縄農業の挑戦(永田淳嗣)、サステナビリティと地域の力(丸山真人)、Ⅳ社会の再生、越境する人々～公共人類学の構築に向けて(山下晋司)、深化するコミュニティ～マニラから考える(中西徹)、「つながり」から「まとまり」へ～中国農村部の取り組み(田原史起)、Ⅴ平和の実現、崩壊国家のジレンマ(遠藤貢)、平和構築論の射程～難民から学ぶ平和構築をめざして(佐藤安信)、新しい日本外交～「人間の安全保障」の視点から(大江博)、平和構築の現場～日本は東ティモールで何をしたのか(旭英昭)、結／人間存在の地平から～人間の安全保障のジレンマと責任への問い(高橋哲哉)。

研究

HSPの母体である「国際研究先端大講座」は外部資金を導入して、さまざまな共同研究を実施してきた。まず、本プログラムを母体にした共同研究「『破綻国家』の生成と再生をめぐる学際研究」(文部科学省科学研究費補助金基盤研究A)を実施した。この成果の一部は、社会連携のところで述べるさまざまなシンポジウム・セミナー等で活用・発表されており、社会に対して積極的に発信されている。

また、社団法人青年海外協力協会より、「国際協力におけるボランティア事業の有効性の検証」を引き続いて受託し、研究会・報告会を開催すると同時に、アフリカの4地域(ザンビア、ウガンダ、マダガスカル、タンザニア)において現地調査を実施した。この受託研究の成果は2009年夏に最終報告書としてまとめられると同時に、秋には大規模な公開シンポジウムが開催される予定である。

社会貢献

本プログラムでは毎年数多くのシンポジウム・セミナー・講演会・フォーラムを開催していたが、2008年度も以下に列挙する活動を行ってきた。

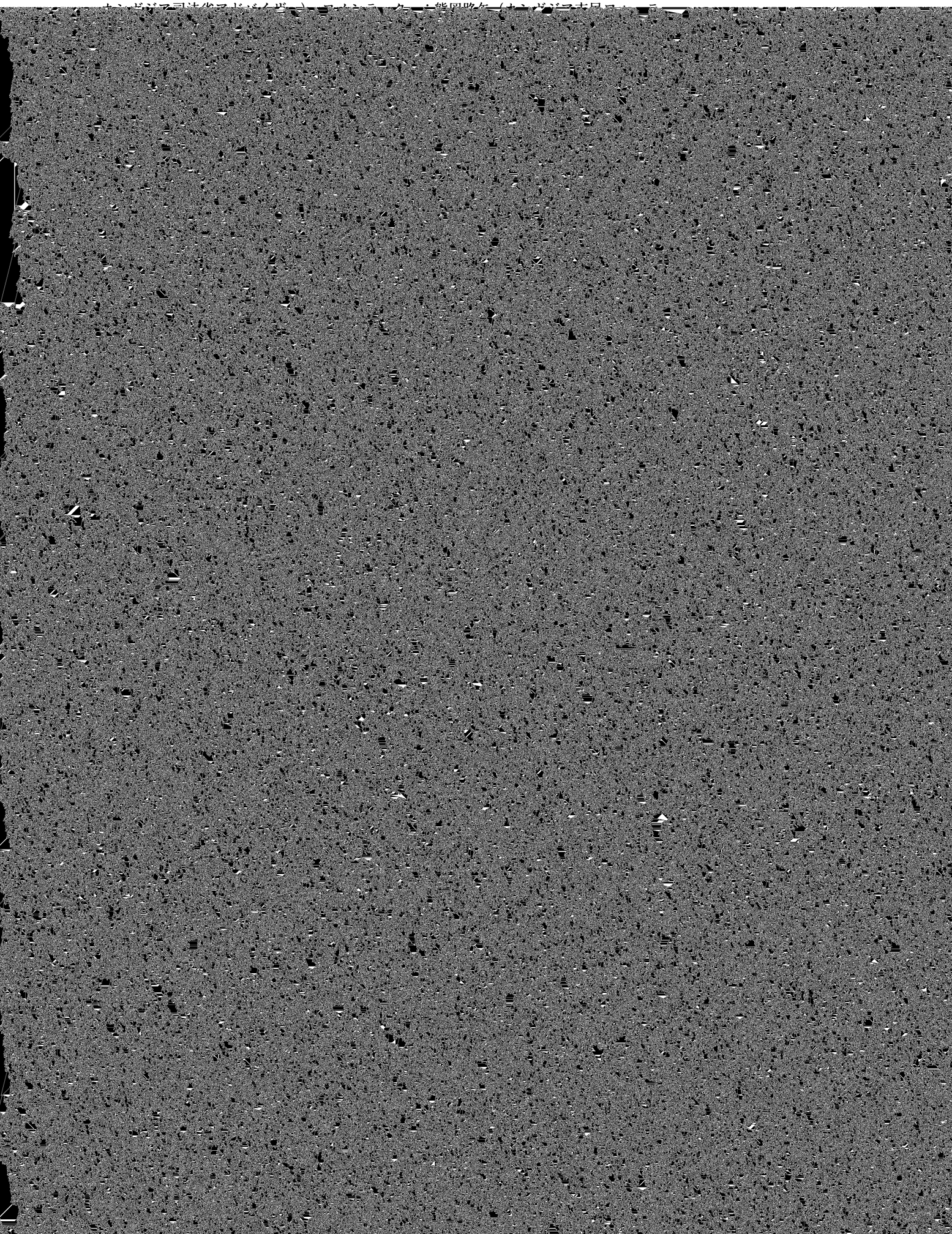
1 HSP主催シンポジウム

- ・ロバート・ゼーリック世界銀行総裁との政策対話 (05/30)「世界銀行の使命と人間の安全保障」モデレーター：船橋洋一 (朝日新聞主筆)、第一部「ゼーリック総裁を囲むパネルディスカッション」パネリスト：佐藤安信 (HSP)、中西徹 (東京大学)、第二部「ゼーリック総裁と学生とのディスカッション」
- ・HSPシンポジウム2008春 (06/28)「『人間の安全保障』の世紀へ」総合司会：山影進 (HSP)、開会挨拶：小島憲道 (東京大学教養学部長)、基調講演「『人間の安全保障』の未来～『人間の安全保障委員会』最終報告書から5年を経過して」緒方貞子 (国際協力機構理事長)、第一部「『人間の安全保障』に人文知は何かができるか？」パネリスト：柴宜弘 (HSP)、林文代 (HSP)、森山工 (HSP)、菅野稔人 (津田塾大学)、第二部「『人間の安全保障』は持続可能か？」パネリスト：遠藤貢 (HSP)、佐藤安信 (HSP)、丸山真人 (HSP)、長有紀枝 (ジャパン・プラットフォーム代表理事)、閉会挨拶：木村秀雄 (HSP)
- ・HSPシンポジウム2008秋1 (11/03)「人間の安全保障と国際法」(東京大学教養学部教養教育開発機構、東京大学教養学部アイコム委員会 共催) 総合司会：山影進 (HSP)、開会挨拶：木村秀雄 (HSP)、木畑洋一 (東京大学)、[第一部] 特別講演「人間の安全保障と国際法」：小和田恒 (国際司法裁判所判事)、司会：旭英昭 (HSP)、[第二部] パネル討論「人間の安全保障から見た国際法秩序と国内法秩序」司会：佐藤安信 (HSP)、パネリスト：小寺彰 (東京大学)、濱田邦夫 (弁護士、元最高裁判事)、フィリップ・オステン (慶応義塾大学)、野口元郎 (国連アジア極東犯罪防止研究所教官、外務省国際局付検事、カンボジア特別法廷最高裁判所国際判事)、[第三部] パネル討論「グローバル化する世界における人間の安全保障」司会：遠藤貢 (HSP)、長有紀枝 (難民を助ける会理事長)、ヨハン・セルス (国連難民高等弁務官事務所駐日代表)、土井香苗 (ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京ディレクター)、戸田隆夫 (JICA研究所上席研究員)、閉会の挨拶と総評：山影進 (HSP)
- ・HSPシンポジウム2008秋2 (11/08)「国際問題としての国家破綻」開会挨拶：山影進 (HSP)、第一部「未承認国家と破綻国家」司会：山影進 (HSP)、パネリスト：柴宜弘 (HSP)、中井和夫 (東京大学)、遠藤貢 (HSP)、第二部「アメリカの武力行使と国家破綻」司会：吉川元 (上智大学)、パネリスト：石田淳 (東京大学)、酒井啓子 (東京外国語大学)、田中浩一郎 (財団法人日本エネルギー経済研究所中東研究センター長)

2 HSPセミナー (駒場2007に未掲載の前年度分を含む)

- 第44回 02/05 「防災分野での世界銀行の取り組み」(遠隔セミナー) 講師：サロージ・ジャー (世界銀行防災グローバル・ファシリティGFDRR事務局長)
- 第45回 02/19 「国連安保理における意思決定過程の分析視角2」(講演会) 報告者：松浦博司 (外務省経済局経済統合体課長)、(共催)「科学研究費補助金『破綻国家』の生成と再生をめぐる学術研究」
- 第46回 05/20 「紛争地における赤十字国際委員会」(ワークショップ) 報告者：藤井卓郎 (赤十字国際委員会)、長嶺義宣 (赤十字国際委員会、HSP博士課程)、司会：旭英昭 (HSP)
- 第47回 05/29 「『白バラの祈り ゴフィー・ショル、最期の日』鑑賞会」(ワークショップ) 冒頭解説：石田勇治 (東京大学)、研究発表：鈴木洋一 (学習院大学4年)、司会：佐藤安信 (HSP)
- 第48回 06/05 「ストリートチルドレン支援活動を通して見えてきたバングラデッシュの可能性：エクマットラ活動報告」(講演会) 講師：渡辺大樹 (エクマットラ)
- 第49回 06/18 「アフリカの国家変容の現実と理論：ソマリアを事例として」(講演会) 報告者：遠藤貢 (HSP)、(共催)「科学研究費補助金『破綻国家』の生成と再生をめぐる学術研究」
- 第50回 07/11 「チャドの国家破綻とダルフル紛争」(講演会) 報告者：武内進一 (JETROアジア経済研究所)、(共催)「科学研究費補助金『破綻国家』の生成と再生をめぐる学術研究」

- 第51回 09/14 「地雷除去に挑む：豊かで平和な大地への復興」（講演会）講演者：雨宮清（山梨日立建機株式会社）、コメント：長有紀枝（難民を助ける会）、（共催）東京大学産学連携本部、平和構築研究会
- 第52回 10/22 連続セミナー（JOCAオープンカレッジ）「JICAボランティアと国際協力活動」第1回「JICAボランティアと人間の安全保障」講師：木村秀雄（HSP）、岡部恵子（JICA帰国隊員支援室）、（共催）青年海外協力協会（JOCA）
- 第53回 10/25 「HSP学生による2008年夏期休暇中のフィールドワーク発表と懇談会」（ワークショップ）ファシリテーター：佐藤安信（HSP）
- 第54回 11/05 「ミレニアム・ビレッジ」（講演会）講師：ベンジャミン・ボドナー（コロンビア大学医学部）コーディネーター：遠藤貢（HSP）、（共催）コロンビア大学地球研究所、ミレニアム・プロミス・ジャパン
- 第55回 11/14 「Formalization of Customary Land Rights and Development Issues in Africa: The Case of Tanzania」（講演会）、講演者：Hiromi Amemiya (Toyama University)
- 第56回 11/21 「Law Reform Technical Cooperation for Human Security: IDLO's Experiences」（講演会）、講演者：Bill Loris (International Development Law Organization)
- 第57回 11/26 連続セミナー（JOCAオープンカレッジ）「JICAボランティアと国際協力活動」第2回「JICAボランティアと国際保健」講師：崎坂香屋子（東京大学医学系研究科助教）
- 第58回 12/05 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第1回「ゲルジア：今何が起きているのか？ 分割・独立と国内避難民を中心に」講師：墓田桂（成蹊大学）
- 第59回 12/06 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第2回「私は行った、見た、感じた～中東から考える人間の安全保障・難民の視点から」講師：藤屋リカ（JVC）
- 第60回 12/08 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第3回「Current Situation of Refugee Assistance and Refugee Studies」講師：Barbara Harrell-Bond (American University in Cairo)
- 第61回 12/10 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第4回「民族と国家：共存は可能か？ 民族構成がマケドニアにおける地方自治や難民政策に及ぼす影響を中心に」講師：中内政貴（平和・安全保障研究所）
- 第62回 12/12 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第5回「旧ユーゴスラビアにおけるNGO活動と難民・避難民：政府の手の届かない場所における市民社会の役割とは」講師：須田浩之（国際ボランティア連絡会議）
- 第63回 12/17 連続セミナー（JOCAオープンカレッジ）「JICAボランティアと国際協力活動」第3回「グローバル・ヘルスのための人間の安全保障アプローチ」講師：神馬征峰（東京大学医学系研究科教授）
- 第64回 01/09 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第6回「パレスチナ難民の法的地位と保護をめぐる問題－ナクバ60年後に求められる支援の諸側面－」講師：錦田愛子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／中東地域研究）
- 第65回 01/14 連続セミナー（JOCAオープンカレッジ）「JICAボランティアと国際協力活動」第4回「農村女性のエンパワーメントと社会変容」講師：藤掛洋子（東京家政学院大学准教授）
- 第66回 01/16 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第7回「難民の負担分配と国際法－難民にはどこに行ってもらおうのか？ コソヴォ難民の「航空移送」を手がかりに」講師：山本哲史（HSP特任研究員／国際法）
- 第67回 01/23 連続セミナー「難民を保護するのは誰か」第8回「難民保護の新形態？ EU境界線における庇護手続の現在の実行および難民の出身国における保護を中心に」講師：佐藤以久子（桜美林大学／国際難民法〔庇護法〕、国際人権法、国際法）
- 第68回 02/08 「カンボジアから考える平和構築」（講演会）講師：コル・バンニャー（カンボジア自由公正選挙委員会事務局長）、坂野一生（カンボジア市民フォーラム世話人／



17 進化認知科学研究センターの設立

21世紀COEプログラム「心とことば—進化認知科学的展開」の終了

21世紀COEプログラム「心とことば—進化認知科学的展開」(平成15年度～19年度)は、2008年3月をもって終了した。5年間を通じて事業推進担当者(23名:うち3名は部分参加)が発表した研究成果は、査読付き学術論文392編、著書18冊、翻訳書6冊、国際学会/シンポジウムでの招待講演49件、国際学会/シンポジウムでの発表273件であった。さらにプロジェクト担当教員(5名)、拠点形成特任研究員(PD;36名)、拠点形成アシスタント(学術研究支援員、RA;46名)も合わせると、研究成果の合計は、査読付き学術論文511編、著書24冊、翻訳書8冊、国際学会/シンポジウムでの招待講演65件、国際学会/シンポジウムでの発表330件である。これらの業績数は、文理融合領域としては、十分なものであり、業績面でみても拠点形成の目的は達成できた。

具体的研究成果としては、「事象関連電位法を用いた語形成の脳内メカニズム(伊藤)」、「乳幼児や自閉症児の認知神経科学的研究(開、長谷川)」、「エチオピア産人類化石資料を対象とした進化研究(諏訪)」、「類人猿比較ゲノム解析(石田)」などが、多数の国際レベルの研究成果を産出した。また、特任研究員・博士課程学生など若手研究者による新たな研究テーマも多数創出された。たとえば、「自閉症児におけるあくびの伝染」や「チンパンジーの脳活動計測」は世界に類を見ない先端的研究といえ、前者は、ロイター、BBCをはじめとして海外の主要メディア多数で紹介された。これらの研究成果は、「生物としてのヒト」というスローガンを追求した結果であり、当初目的である「人間統合科学の創成」における基盤が現時点において確立されていることを示している。なお、人材育成の成果として強調すべきは、若手研究者が、「文部科学大臣表彰若手科学賞」を含む計56件もの受賞、顕彰を受けたことである。

プログラム終了後、事後評価を受けたが、その結果は2008年12月に次のように公表された。

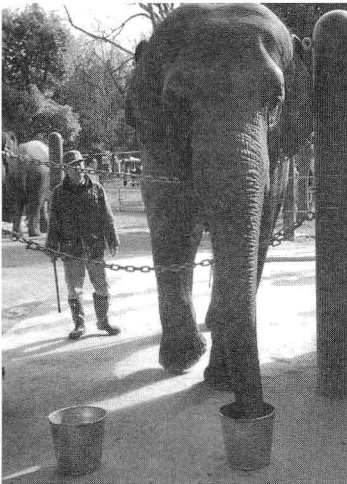
「研究の場の提供、教育プログラムの設定など、拠点形成の基礎的な支援が行われ、そのうち、特にCOEラボは活動の拠点として研究者間の密な交流と研究の進展に重要な役割を果たすなど、拠点形成の目的は概ね達成された。人材育成面については、学外からも広く集めた若手研究者の研究活動は、COEラボを中心に極めて活発に行われ、その結果、量的にも質的にも優れた成果をあげている。国内及び国際学会での発表、多数の賞の受賞など、国際的な展開が著しい。この他研究の立案、多様な研究交流、成果の公表など、研究の内外への発信が活発であり、若手研究者による積極的な活動が目立つなど、人材養成の実をあげている。

研究活動面については、これまで心理学と言語学、臨床科学など各分野で活発な研究が行われてきたが、本プログラムによって進化と認知科学の視点を導入し、各分野の研究に従来になかった研究を触発し、同時にこれまで別個の領域とされてきた研究をきり結ぶなどの努力を重ねてきている。その結果、複眼的学際的な研究を心理学、言語学、認知科学、臨床科学などの領域で多数生んでいる。全体を統一したような概念形成や、各分野の総合化についてはやや課題を残しているように見受けられるが、今後、内外の研究に対して理論及び方法論の両面で大きな貢献をすると期待できる。

事業終了後については、これまでの活動の経験を生かして、ハード面ソフト面の工夫が行われることは本プログラムの成果であると同時に、進化認知科学研究センター設立上の課題であるが、センター設立の決定については、本研究の重要性と研究成果を評価した大学及び学内構成員の姿勢であり、本プログラムの成果として評価でき、研究の一層の進展が期待できる。今後さらに分野間の交流と統合が計られることに期待したい。」

進化認知科学センターの設立

上述のような21世紀COEプログラムの教育研究上の成果と資産を受け継ぎ、2009年1月1日付



アジゾウの計数能力に関する実験風景

けで、学内措置の研究センター「進化認知科学研究センター」が設立された。センターの研究目的としては、大きく次の三点を掲げた。1) 20世紀後半に発展した融合科学としての認知科学を超えて、認知脳科学、言語科学、進化人類学・進化心理学、遺伝学、情報科学の連携により、ヒトの心について「機構」「機能」「発達」「進化」の各レベルから理解を深め、21世紀型の領域横断的統合人間科学の構築を目指す。2) 研究の場を提供することによって学際的・複合的な視野を持ちうる優秀な若手研究者を養成すると同時に、最先端の研究内容を学部・大学院における授業等の教育にフィードバックして行く。3) 現代人が抱える心の諸問題の解決、心身双方のバリアフリー社会の実現を目指した基礎研究を行う。

進化認知科学研究センターでは、先端技術研究センターをはじめとする他部局からの人間科学分野の研究者を迎え、さらに21世紀COEのポスドク経験者、理化学研究所、京都大学こころの未来研究センター等を中心とする学外研究者との交流も継続することによって、人間研究の開かれた拠点を目指していきたい。また、現在、議論が進んでいる後期課程改革においても、副専攻として履修できるプログラムを提供する予定である。

本年度のセンターの活動のうち、アジゾウの認知能力に関する研究は、世界各国のマスコミで大きく取り上げられたので、ここでも簡単に紹介しておこう。アジゾウは体重の大きさの影響を割り引いてもなおヒトやチンパンジーに準じる程の大きな脳を有し、長寿命で、複雑な社会生活をする事から、高次な知性を持っているだろうと長年予想されてきた。しかし、実験動物としては扱いが難しいため、実証的な調査がほとんどなされてこなかった。本センターでは、21世紀COEに引き続き、日本各地の動物園でアジゾウの実験を行い、その結果、数の大小判断実験や足し算実験を通して、アジゾウの数量認知能力が他種と比べても優れていることを示した。足し算の能力については、たとえば $5+1$ と $3+4$ といった和の大小判断をさせたところ、7割から9割の正答率だった。また、ゾウがコミュニケーションに低周波音を用いていることは知られていたが、(株)熊谷組との共同研究で音源探査装置「音カメラ」を用いて、低周波音利用のコミュニケーションの詳細を検討し、従来の報告とは違って、見える範囲の短距離でも用いられていることがわかった。これらの結果は、New Scientist、Times、Discovery Channel、NHK「ニュース7」、共同通信社「時の人」、テレビ朝日、ニッポン放送、J-waveなどで報道された。

(生命環境科学系 長谷川寿一)

18 美術博物館

2008年度に美術博物館で開催した展示会・関連イベントは以下の通りである。

「所蔵品展 古写真に残された一高」

本展示会は2008年3月28日（金）から6月30日（月）まで開催された。旧制第一高等学校（以下一高と略称する）は教養学部の前身にあたる。さかのぼれば明治7（1874）年の東京英語学校の設立以来、組織と呼称の変更を繰り返し、場所を神田一ツ橋から本郷向ヶ丘、そして昭和10（1935）年には駒場へと移して、昭和25（1950）年の廃校に至るまで長い歴史を紡いできた。

一高は近代国家建設のための人材育成を目的として創設されたとはいえ、その学生生活は学業だけに尽くされるものではなかった。教養学部が新生を迎える新年度の時期に開かれた本展示会は、古写真が捉えた当時の学生たちの多様な姿を通して、一高の歴史に触れ、駒場キャンパスの成り立ちに目を向ける機会となるべく企画されたのである。

展示は当館が所蔵する一高資料のなかから、明治期を中心に初公開のものも含め写真49点を選び、そこに10点の関連資料を加えて構成した。戸外で撮影された写真以外に、スタジオで取った肖像写真も含まれている。大半は感光液に卵白を用いた鶏卵紙に焼き付けられたもので、現在のものに比べるとサイズが格段に大きく、最も大きなものは縦43センチ、横30センチにも達する。写真が貴重であった時代に、一高の学生たちがいかに厚遇されていたかがよく分かる。

全体の構成は、初めに校舎など建造物の写真を並べて一高の歴史をひもとき、続いて野球、端艇（ボート）、柔道、撃剣（剣道）、文芸といった各種の部活動の記念写真、軍事教練の一環として行われた東京郊外への行軍の様子、そして最後に卒業写真というセクションに分けて展示した。今回展示できなかったものも含め、当館が所蔵する一高関係の写真には端艇と野球関連のものが群を抜いて多く、それらの当時の人気ぶりが窺える。

プロフェッショナルの競技団体が存在しない時代、学生スポーツは人々に娯楽を供し、それを通して欧米諸国のスポーツが日本に移入されたのである。例えば、ベースボールに野球の訳語をあてたのが、写真のなかにも登場している一高出身の中馬庚で、初出が明治28（1895）年の学内誌『校友会雑誌号外』であったという事実も、そのことの一環である。写真に残された情報のひとつひとつは些末なものかもしれないが、本展示会を通して、一高の古写真が単なる学校の記録という性格を超えて、日本近代を考察する上で重要な示唆を与えてくれるものが見えてきた。

なお本展示会は所蔵品展であるため来館者の調査はしていない。土・日曜日を休館としたため、会期は64日間であった。

「behind the seenアート創作の舞台裏」

本展示会は、2008年10月11日（土）から12月7日（日）まで、主催「behind the seen アート創作の舞台裏」実行委員会、美術博物館、共催大学院情報学環・学際情報学府、教養学部附属教養教育開発機構で開催された。

この企画は、通常美術展でみられるような作品（the seen）ではなく、その裏側（behind）にある、「作品が作り上げられるプロセス」にスポットを当てた美術展で、認知心理学の研究室が、篠原猛史と小川信治という二人の現代アーティストを対象に行った二つのケース・スタディに基づき、構成されている。

「循環と波動」をキーワードに、多様な作品を創作している篠原猛史氏のケース・スタディでは、美術博物館が所蔵しているマルセル・デュシャン「花嫁は彼女の独身者達によって裸にされて、さえも」（通称「大ガラス」東京ヴァージョン）に、イメージを喚起されて新しい作品アイデアの模索が始まり、それが形になるまでの数カ月間の創作プロセスを紹介した。



小川一眞「校友会 ベースボール」
明治23(1890)年



会場内には、新しく制作された篠原氏の作品を、「大ガラス」東京バージョンとともに展示した。さらに、作品制作途上に生み出された篠原氏直筆のメモや写真、実際に作品を制作している場面の記録映像等、多数の資料を展示し、その完成度の高い作品の背後に、圧倒されるような量の思考の積み重ねが存在していることを示した。

他方、緻密な絵画や映像作品の創作を通して、長年にわたり「世界とは何か」という問いを探求している小川信治氏のケース・スタディでは、約10年にわたる作品シリーズの展開の様子に焦点を当てた。「without you」、「perfect world」といった小川氏の代表的な作品とその創作エピソードを紹介することによって、長期的な作品展開のプロセスを展示した。

これらふたつのケース・スタディを通して、アーティストの創造活動の秘密を、認知心理学の立場から解き明かそうというのが、本展のねらいであった。

本展覧会開催にあわせて、様々な関連企画も行われた。

まず、篠原猛史氏と小川信治氏自身によるギャラリートークが、それぞれ一回ずつ行われた(篠原猛史氏10月25日開催、小川信治氏11月8日開催)。

その他に、本展覧会企画者 岡田猛氏(大学院情報学環、大学院教育学研究科所属)と篠原猛史氏による講演会「behind the seen アート創作の舞台裏」(10月24日、高校生のための金曜特別講座)と、シンポジウム「behind the seen 熟達者の表現を支えるもの」(11月29日開催)が催された。

また、WEB上に本展への来場者に限定したシークレット・コンテンツを開設し、アーティストへのインタビューなど、本企画展のさらなる裏側(behind)を紹介する情報を配信した。

50日間の会期中にのべ4,307人(一日平均86人)の来館者を迎えることができた。

(美術博物館館長 池田信雄)

19 自然科学博物館

2008年の展示は2つの企画展

- ① 2008年3月28日（金）～5月23日（金）
「平賀譲とその時代 一高生から東大総長へ」
- ② 2008年7月18日（金）～9月23日（火・祝）
「進化学の世界ーダーウィンから最先端の研究までー」

これに加え、以下の所蔵品展を行なった。

- ③ 2008年10月14（火）～12月5日（金）
「進化学の世界（抜粋）」・「第一高等学校の実験機器」

上記以外の期間は展示換え期間および資料整理期間として、所蔵品の保守管理や次回の展示の準備などを行った。また、駒場図書館と連携し図書館内の展示の設営、図学資料や教育用掛図資料のデジタルアーカイブ化の作業を協力して行った。授業や研究会の利用も受け入れている。

「平賀譲とその時代 一高生から東大総長へ」

平賀譲（1878～1943）は、東京大学教養学部の前身たる第一高等学校から東京帝国大学造船学科に進み、卒業後、海軍に入り、イギリス留学を経て大艦巨砲主義時代の軍艦の設計者として縦横に腕をふるうとともに、東京帝国大学工学部で後進の育成に努め、工学部長、総長を歴任、戦時期の大学運営に尽力した人物である。2008年は東京大学創設と平賀生誕から数えて130周年にあたる。そこで平賀家のご遺族から東京大学柏図書館に膨大な資料（平賀譲総長文書）が寄託される運びになった。それらの資料を元に呉市海事歴史科学館ならびに、東京大学柏図書館、東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻、東京大学大学院工学系研究科環境海洋工学専攻の協力を得て、平賀の足跡をたどる展覧会を開催した。また同時期に一般公開する予定であった、東京大学が構築した“平賀譲デジタルアーカイブ”の公開を発表する場としても活用することができた。（<http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/hiraga/>）

関連イベントとしては、特別開館日を設け講演会と公開講座を下記のように開催した。

1) 第一回講演会 共催：平賀研究会

3月29日（土）13:00～15:00

〈講演者と講演内容〉

1. 内藤初穂（作家）「平賀譲の一生を追って」
2. 畑野 勇（東京大学）「平賀譲研究の現代的意義」

2) 第二回講演会 共催：日本海事史学会

4月19日（土）13:00～15:00

〈講演者と講演内容〉

1. 戸高一成（呉市海事歴史科学館）「日本海軍の作戦構想と平賀式軍艦」
2. 川瀬 晃（日本海事史学会）「平賀譲と第四艦隊事件」

3) 公開講座 高校生のための金曜講座

5月9日（金）17:30～19:00

〈講演者と講演内容〉

安達裕之（東京大学）「平賀譲とその時代」

なお、この展示と前後して柏図書館1F展示スペースの平賀譲資料の常設展示コーナーの展示協力も行った。

また、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）でも本展覧会をふまえ、2008年12月17日（水）～2009年2月2日（月）の期間に「特別展 軍艦設計の天才 平賀譲 一戦艦大和への道をひら





いた東大総長一」の展示を行った。この展示に際しての展示協力も行った。この呉市での展覧会開催時に際して発行する運びとなった図録「平賀 名軍艦デザイナーの足跡をたどる」の制作にも協力した。

開催期間は42日間、入場者数はのべ2,379人（講演会424人含む）を記録した。

「進化学の世界ーダーウィンから最先端の研究までー」

生物の持つ特性はさまざまあるが、「進化」する能力は生物の重要な特性の1つである。生物進化についての学説は、ダーウィンの時代より数多くの研究者の寄与により発展し、今や、不確実な「進化論」ではなく、理論構築と実証研究により支えられている確固たる「進化説」となっている。2009年のダーウィン生誕200周年、および「種の起源」出版150周年をひかえ、2008年8月22日～24日まで駒場キャンパス内で行われる日本進化学会第10回大会とも連携し、夏休み企画の特別展としてこの展示を開催した。

この特別展では、「進化説への道程」、「進化の証拠」、「進化のメカニズム」のコーナーで現代の進化説について理解できるような展示・解説を行った。また、「動物の進化」、「植物の進化」、「多様な進化」というコーナーを設け、そこでは実際の生物進化について、駒場博物館の所蔵品を中心に、生体展示も含めできるだけ実物展示を行い、進化を実感できるようにした。また東京大学内で行われている最新の進化学研究の成果として「クジャクの羽根の進化」（総合文化研究科・長谷川研究室）、「葉の進化」（理学系研究科・塚谷研究室）なども実物をまじえて展示し、最先端の研究を公開した。

この展覧会では、普段なかなか見ることのできない次のような展示品を一同に陳列した。

- ・シーラカンス（東京工業大学所蔵）
液浸（ホルマリン漬け）標本
プラスチックネーション（樹脂加工）標本
*この展示に際し、シーラカンスの稚魚のプラスチックネーション標本が作成され初公開した。
- ・昆虫（生体展示）
コノハマシ、メダマカレハカマキリ、ヤリカマキリ、ハナビラカマキリ、ニセハナマオウカマキリ。
- ・食虫植物（生体展示）
武蔵工業大学と京都府立植物園の協力を得て、系統別に様々な食虫植物を展示した。
- ・剥製
ニホンオオカミ（農学部所蔵）
アナグマ、ツキノワグマ、テン、ニホンカモシカ、リス、タヌキ（農学部秩父演習林所蔵）
また、目黒区教育委員会、渋谷区教育委員会の後援も得て、近隣の小中学校等に広報活動を展開した。

期間中のイベントとしては、ギャラリートーク、公開講座、講演会等を行った。

- (1) ギャラリートーク：毎週土曜日 14時～
 - 1) 「昆虫の進化とコノハマシ」7月19日
加藤俊英（東京大学大学院総合文化研究科）
 - 2) 「食虫植物の世界」7月26日
倉田薫子（武蔵工業大学知識工学部）
 - 3) 「昆虫の多様性と擬態」8月2日
神保宇嗣（東京大学大学院総合文化研究科）
 - 4) 「陸上動物の祖先？車軸藻の秘密」8月9日
坂山英俊（東京大学大学院総合文化研究科）
 - 5) 「口器の進化と多様性」8月16日
宇津木望（東京大学大学院総合文化研究科）



- 6) 「脊椎動物への進化とナメクジウオ」 8月23日
窪川かおる (東京大学海洋研究所)
- 7) 「大量絶滅の科学」 8月30日
磯崎行雄 (東京大学大学院総合文化研究科)
- 8) 「昆虫の社会性の進化」 9月6日
土畑重人 (東京大学大学院総合文化研究科)
- 9) 「息子・娘を産み分ける寄生蜂：ゲーム理論で解く進化学」 9月13日
嶋田正和 (東京大学大学院総合文化研究科)
- 10) 「ボルネオ島で観察された植物と昆虫」 9月20日
倉田薫子 (武蔵工業大学知識工学部)
神保宇嗣・宇津木望・加藤俊英 (東京大学大学院総合文化研究科)



(2) 高校生のための金曜特別講座

「生物進化の科学 — 駒場博物館進化展—」 7月18日 (金) 17時30分～
伊藤元己教授 (自然科学博物館館長)

(3) 日本進化学会第10回大会 8月22日 (金)～24日 (日)

1) 高校生のポスター発表「みんなのジュニア進化学第3回」 8月22日 (金) 17:30～20:30

2) 公開講演会 8月23日 (土) 13:00～16:10

3) 進化学・夏の学校

8月23日 (土)

9:00～11:30 成瀬 清

「メダカの生物学—発生、遺伝、進化から環境科学まで—」

8月24日 (日)

9:00～11:30 「地球環境変化と進化学」 河田雅圭

13:00～15:00 「MEGA4による分子系統解析」 田村浩一郎

15:15～17:15 矢原徹一「植物の生態学」

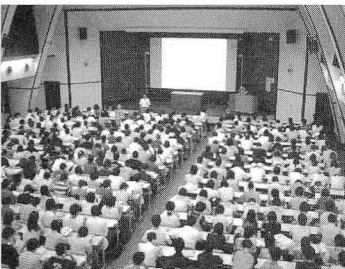
この展覧会は夏休みの特別展として土日祝日開館、火曜休館で計63日間開催し、のべ6,991人の入場者数を記録した。リーフレット等持ち帰れる紙資料も作成し、会場内で無料配布をした。

(自然科学博物館館長 伊藤元己)

20 高校生のための東京大学オープンキャンパス2008



東京大学の2008年度オープンキャンパスが、夏学期終了直後の2日間、本郷キャンパス（7月31日）と駒場キャンパス（8月1日）で開催された。駒場キャンパスでの開催も今年で6度目となり、過去に参加された方も多いのではないだろうか。本稿では、教養学部・大学院総合文化研究科が行う大きなイベントの一つとして、駒場地区で開催された「東京大学オープンキャンパス2008」の詳細を紹介したいと思う。



オープンキャンパスは、国公立を問わず各大学が高校生向けに行っている大学案内のイベントだが、多くの大学では授業期間終了直後の7月、8月に開催されている。東京大学では各学部の授業日程等を勘案して、今年は7月31日に本郷キャンパス、8月1日に駒場キャンパスで開催することが決定した。例年、事前準備は大学本部広報グループの音頭の下で4月中頃からスタートする。駒場地区においては、教養学部を中心に、数理科学研究科、生産技術研究所（生産研）と先端科学技術研究センター（先端研）の計4部局（学部や研究所）でイベントが企画される。今年の場合、6月下旬に本郷を含めた各部局からの企画が出揃って、6月27日（金）から募集期間2週間の予定でHPによる事前参加登録が開始された。ところが、実際には申込みが殺到してしまい、駒場キャンパスの受入定員（2,200名）をすぐにオーバーしてしまったため、2日間で事前登録を早々に締め切る事態となった。定員を増やすことも検討したのだが、2,200名という定員は、限られた教職員が手作りで対応するギリギリの数として設定された数字であり、事前登録の早期締め切りは止むを得ない措置だった。一方、事前準備の方は順調に進み、2,200部の配付資料を手作業で袋詰めする作業も前日までに完了して、天気予報を気にしながらオープンキャンパス当日を迎えた。



当日は、午前9時30分の受付開始にも関わらず、すでに8時の段階で駒場1キャンパス正門前に受付待ちの行列ができており、9時には列が坂下門近くまで達してしまった。安全上の観点から、予定を変更して受付を20分前倒して入場を開始する措置をとった。午後になってからも入場する人が沢山あり、終日好天にも恵まれて、最終的な参加者総数は2,133名と過去最高を記録した（昨年は1,823名）。企画の方も盛りだくさんで、午前中は、教養学部の3つの大教室を使って、主企画のキャンパス紹介と、教員との談話会が並行して行われ、午前中の最後には2つの総合講演が行われた。理系の講演は、駒場博物館で開催されていた「進化学の世界展・ダーウィンから最先端の研究まで」と関連して、進化学が専門の嶋田正和教授（広域科学専攻）にお願いした。文系の講演は、ラマール・クリスティーン教授（言語情報科学専攻）に、言語科学研究の最先端を判りやすくご講演いただいた。また、コミュニケーションプラザ2階では、父母・引率者を対象としたキャンパス紹介も実施された。参加者の中には非常に遠方（九州、沖縄）から来られた方もあって、東京大学オープンキャンパスの認知度・関心度の高さがうかがわれた。昼休みには、昼食をとるための長蛇の列が生協食堂から建物の外まで続き、中に制服姿の高校生が多かったこともあって、授業期間中とはかなり違った雰囲気となっていた。

午後の部では、数理科学研究科、生産研、先端研での模擬講義や研究所見学など、実施企画の数も増え、どれも大変好評であった。教養学部の教室では、午後7つの模擬講義（文系3コマ、理系3コマ、文理融合系1コマ）と4つの実験デモ（物理実験、化学実験、生物実験、認知科学実験）が開講された。会場をのぞいてみたが、多くの高校生が模擬講義や実験デモの説明に目を輝かせながら聞き入っていた。理系教員である私自身も、普段あまり聞く機会の無い文系の講演を大変興味深く拝聴することができた。さらに、教養教育開発機構の協力で今年から実現した新企画、KALS（駒場アクティブラーニングスタジオ）ワークショップとNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）ギャラリーの自由見学、そして、駒場博物館、駒場図書館、情報教育棟の各施設における見学、ガイドツアー、特別企画等が複数並行して実施され、午前、午後を通じて各施設ともにたくさんの高校生でにぎわっていた。各施設や教室を何度か廻って

いると、なかには暑さのピークとなる午後に生協食堂2階（休憩スペース）でくつろいでいる参加者も見かけた。そうしたなかで特に印象に残っているのは「先輩たちへの質問コーナー」にいた高校生である。終了間際になっても、受験勉強やキャンパス生活の詳細について、ジュニアTAの東大生たちと話し込んでいた高校生の姿が大変印象的であった。

一般に広く認知されるようになり、大きなイベントとして定着した感のある「東京大学オープンキャンパス」だが、依然として大学本部からの予算措置はない。私立大学のように「イベント会社へ委託してほしい」とまでは言わないが、教職員が手作りで企画・実施するにしても、印刷や清掃、パネル設置などへ充当する程度の一部予算化を強く希望したい。定期試験の採点期間にもかかわらずボランティアで対応してくださった教員の方々、夏休み期間にも関わらずジュニアTAとして手伝ってくれた在學生、朝早くから準備に駆け回っていただいた事務職員の方々など多くの皆さんの協力があって、今年も大きな事故なく、成功裏にオープンキャンパスを終了することが出来た。最後に、この場を借りてご協力いただいた関係者の皆さんに深く感謝申し上げる。

(学部長室 栗栖源嗣)



高校生のための東京大学オープンキャンパス2008 駒場地区キャンパスプログラム 2008年8月1日(金)
 (催しものは、準備状況等により、予告なく変更・中止される場合があります。あらかじめご了承ください。)

午前の部											
第一会場 900番教室(700名) 司会:エリス俊子 教授			第二会場 1323教室(600名) 司会:渡邊雄一郎 教授			第三会場 1313教室(350名) 司会:永田 敬 教授			施設見学		コミュニケーション プラザ2階
受付(9:30-10:00)											
10:00-10:10	【挨拶】教養学部紹介 小島憲道 教養学部長		10:00-10:10	休憩		10:00-10:20	休憩		図書館 情報教育棟 駒場博物館 NEDO KALS 自由見学 『進化化学の世界・ ダーウィンから最先端の研究まで』展 自由見学&ガイドツアー 『顕微鏡でみる科学の歴史』 自由見学『遠隔講義室の紹介』	※ ¹ ※ ² ※ ³ ※ ⁴	10:00-12:20 (父母対象) スライドショーによる駒場キャンパス紹介 (司会)山本 泰 教授(北館2階 多目的教室4)
10:10-10:20	数理学研究科紹介 宮岡洋一 数理学研究科副研究科長		10:10-10:20	【挨拶】教養学部紹介 長谷川壽一 教養学部副学部長		10:20-10:30	【挨拶】教養学部紹介 小島憲道 教養学部長				
10:20-10:40	駒場Ⅰキャンパス紹介 木村秀雄 教養学部副学部長		10:20-10:30	駒場Ⅱキャンパス紹介 森川博之 教授 (先端科学技術研究センター)		10:30-10:45	「東大における女性の活躍」 男女共同参画室室長 村嶋幸代 教授(医学部)				
10:40-10:50	休憩		10:30-10:40	数理学研究科紹介 宮岡洋一 数理学研究科副研究科長		10:45-11:00	教員との懇談会 全体 (長谷川壽一教授 他9名)				
10:50-11:05	「東大における女性の活躍」 男女共同参画室室長 村嶋幸代 教授(医学部)		10:40-10:50	休憩		11:00-11:30	教員との懇談会 個別 (長谷川壽一教授 他9名)				
11:05-11:15	駒場Ⅱキャンパス紹介 川口健一 広報委員長 (生産技術研究所)		10:50-11:10	駒場Ⅰキャンパス紹介 木村秀雄 教養学部副学部長		11:30-11:40	休憩				
11:15-11:40	休憩		11:10-11:25	「東大における女性の活躍」 男女共同参画室室長 村嶋幸代 教授(医学部)		11:40-12:20	「動物の発生の仕組みを探し続けて40年」 映像講義 浅島 誠				
11:40-12:20	「多言語社会にも 楽しみがいっぱい」 総合講演:ラルム・クリスティーン		11:25-11:40	休憩							
			11:40-12:20	「息子・娘を産み分ける寄生蜂:ゲーム理論で解く進化化学」 総合講演:嶋田正和							

※¹ NEDOとは、(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の支援により教養学部で実施中の「新しい環境・エネルギー科学創成のための人材育成・異分野融合拠点化事業」が提供する環境教育のためのNEDOキャリアをさします。105号館にあります。
 ※² KALSは、「駒場アクティブラーニングスタジオ」の略称で、教養教育の多様な教育内容に応じた能動型学習活動を実現するために、新設されたスタジオ型教室です。
 ※³ KALSのワークショップは11:00-、12:00-、14:00-、15:00-の4回実施します。場所は17号館2階のKALSです。定員40名。

・昼食は、生協食堂、イタリアントマトとファカルティハウスのレストランが営業しています。生協食堂2階は休憩スペースとして開放します。

午後の部																		
	模擬講義						質問コーナー			実験デモ		施設見学				駒場Ⅱキャンパス 施設見学 (先着100名)		
	13号館			11号館			13号館	11号館	1号館	15・16・17号館 ホール	図書館	情報教育棟	駒場博物館	NEDO	KALS		数理学研究科 (理学部数学科)	
	1312教室	1313教室	1331教室	1323教室	1106教室	1108教室	1102教室	1311教室	1101教室	112・3教室							地階大講義室	2階コモンルーム
13:30-14:10	『生き物が動くしくみ』 豊島陽子	『ハイテク・快適ライフの立役者』 物性物理 前日京剛	『デイズニー文化とアメリカ』 能登路雅子	『光と分子ー太陽光を使うために化学のできる事』 村田 滋	文系学生への質問コーナー 『先輩に聞こう』	理系学生への質問コーナー 『先輩に聞こう』	学生団体主催 『東大ガイダンス2008@オープンキャンパス』	実験デモンストラーション (物理実験・化学実験・生物実験・低温実験・認知実験)	企画展示『顕微鏡でみる科学の歴史』	自由見学&ガイドツアー 『自由見学』 『駒場のコンピュータグラフィックスを体験しよう』	『進化化学の世界・ダーウィンから最先端の研究まで』展	自由見学	※ ³ ワークショップ 『未来の教室で考えるー大学って何だ』	※ ⁴ 自由見学『遠隔講義室の紹介』	学部学生・大学院生・教員との質問コーナー(懇談会) 『4次元球体の体積』 古田幹夫	14:30	地階大講義室集合	※ 午前部の終了時、第一・二会場の前で整理券を配付 ・先端科学技術研究センター(RICAST)
14:30-15:10	『錯覚から判る脳の仕組み』 村上郁也	『岩倉使節のアメリカ体験』 ロバート・キャンベル	『国際社会と法』 小寺 彰															
(～16:30) 終了																		

※¹ NEDOとは、(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の支援により教養学部で実施中の「新しい環境・エネルギー科学創成のための人材育成・異分野融合拠点化事業」が提供する環境教育のためのNEDOキャリアをさします。105号館にあります。
 ※² KALSは、「駒場アクティブラーニングスタジオ」の略称で、教養教育の多様な教育内容に応じた能動型学習活動を実現するために、新設されたスタジオ型教室です。
 ※³ KALSのワークショップは11:00-、12:00-、14:00-、15:00-の4回実施します。場所は17号館2階のKALSです。定員40名。
 ※⁴ 午後にも午前と同じ自由見学『遠隔講義室の紹介』が継続しています。参加企画は13:00-と14:30-の2回実施します。

(当日配布資料より)

21 第7回ホームカミングデイ

卒業生とその家族・友人を大学キャンパスに迎え、大学内で催す様々な企画に参加いただくことで、交流を深め、一層の親睦を図ろうという「東京大学ホームカミングデイ」が、毎年行われている。2008年度のホームカミングデイは11月15日（土）に本郷・駒場両キャンパスで開催された。駒場キャンパスでは、教職員OBを含めキャンパスとゆかりのある方々を会員とする駒場友の会との共催で行われ、卒業生やその家族に加え、駒場友の会会員を迎えて実施された。当日のプログラムは以下の通りである。

12:20～12:30 オープニングセレモニー

小島憲道教養学部長の挨拶

会場：駒場コミュニケーション・プラザ北館2階音楽実習室

12:30～14:00 第4回教養学部選抜学生コンサート

会場：駒場コミュニケーション・プラザ北館2階音楽実習室

14:00～15:30 駒場の樹木を楽しむ会（講演会とイベント）

講演会「温暖化と樹木・森林」梶幹男教授（北海道演習林長）

会場：駒場コミュニケーション・プラザ北館2階多目的教室3

駒場の樹木をめぐるイベント

14:00～15:30 中高年のための美しく立つ教室

渡會公治准教授

会場：駒場コミュニケーション・プラザ北館3階身体運動実習室

15:30～16:30 講演会「スポーツ科学が社会に果たす役割」

小林寛道（新領域創成科学研究科特任教授・

同研究科附属生涯スポーツ健康科学研究センター名誉センター長、
名誉教授）

会場：駒場コミュニケーション・プラザ北館2階多目的教室1

16:45～17:45 講演会「数学卒の『変人』人生」

高橋洋一（東洋大学経済学部教授）

会場：大学院数理科学研究科棟大講義室

17:30～ レセプション

会場：駒場ファカルティハウス

終日開催 特別展「behind the seen アート創作の舞台裏」

会場：駒場博物館

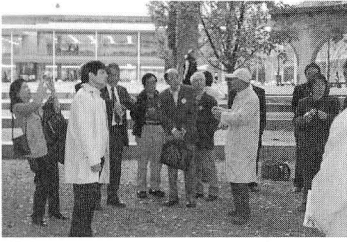
終日開催 企画展「一高蔵書展」

会場：駒場図書館1階ロビー

当日は、コミュニケーション・プラザでのオープニング・セレモニーで幕を開けた。その挨拶の中で小島憲道教養学部長は穏やかな調子でこの建物が建築協会賞（BCS賞）を受賞したことに触れられ、駒場の変化を語ると共に卒業生の方々に歓迎の意を表した。続いて行われた第四回教養学部選抜学生コンサートでは、スタインウェイのグランドピアノを用いて、ピアノ独奏四曲とピアノ五重奏二曲が奏でられ、その華やかで圧倒的な曲の響きに会場いっぱいの聴衆が魅了された。

恒例となった「駒場の樹木をめぐるイベント」では、梶幹男北海道演習林長による「温暖化と樹木・森林」と題した樹木の分布の不思議に迫る興味深い講演と、先生の引率によるキャン





バス内の樹木へのネームプレート添付が行われた。講演の後の質疑応答は聴き手の皆様の衰えることのない知的好奇心を感じさせるものであった。小林寛道名誉教授による「スポーツ科学が社会に果たす役割」と題した講演会も多くの聴衆を集め、それに先立って行われた渡會公治准教授の「中高年のための美しく立つ教室」と合わせて、高齢化社会と自らの高齢化に備えたトレーニングの大事さが説かれ、多くの方々の心を動かしていた。

大学院数理科学研究科棟大講義室では「数学卒の『変人』人生」と題した高橋洋一東洋大学経済学部教授による講演が行われ、駒場博物館では特別展「behind the seenアート創作の舞台裏」、駒場図書館では企画展「一高蔵書展」が終日催された。夕刻のレセプションは、退職者のOB会であるベテラン会と合同で行われ、こちらにも多数の参加を頂き、和やかな雰囲気の中で、大先輩方から最近卒業された方までが、駒場の過去と現在、そして未来を語り合う姿が見られた。

また、この日に合わせて同窓会を開催していただくとうと教室を同窓会会場として提供している。今年度は、これを利用して開催された同窓会は「科哲の会」のひとつであり、渡會公治准教授のイベントに合わせて行われた「42SⅡⅢ3Bクラス会」とあわせて、2件にとどまった。

時折小雨がばらつく曇天であったにもかかわらず、のべ参加者数450名という多数の参加をいただき、盛況のうちに終えた一日であった。同窓会の開催数が今ひとつ少なかったことだけが残念であったが、今後は様々な同窓会をこの日に合わせて開催していただければと願っている。来年以降も、事前の周知にも更に配慮し、多くの同窓会の開催を含めて、より多くの卒業生とその家族・友人、そして駒場友の会会員の方々に参加していただけるように進めていきたい。

(学部長室 加藤恒昭)

22 社会連携への取り組み

大学に於ける教育研究活動の成果を直接に社会へ還元するため、総合文化研究科・教養学部では、初等中等教育との連携プログラムや、オープンキャンパス、研究室公開、博物館の展示会、公開オルガン演奏会などの活動を行なっている。2008年度は別記するオープンキャンパスや博物館の展示を行ったほか、「高校生のための金曜特別講座」を毎週開催した。また昨年度に引き続き「高校で行う教養教育特別講座」、「直島キャンプ」が開催された。これらの活動は社会連携委員会が教養教育開発機構教養教育社会連携（ベネッセコーポレーション）寄付研究部門と連携して実施、運営している。同部門で実施している「科学リテラシーの普及事業」についても併せて報告する。

1. 「高校生のための金曜特別講座」

本講座は、2002年4月に始まった。当初は運営を含め全てが教養学部教員のボランティアで実施されていたが、教養教育社会連携寄付研究部門の設置により強力な実施体制が確立し、運営、情報発信、講義内容の公開など多くの面で飛躍的な発展を遂げている。特に、講座のウェブサイト立ち上げにより、講義予定等の情報に加えて過去に行われた講義の要旨、そしてハイライト映像（一部は全編）が閲覧できるようになっている。さらに、2007年度から、インターネット回線を利用した双方向同時中継を本格的実施し、地方の高校からの要望に応えることができるようになった。北海道から沖縄まで全国38校（2008年10月現在）の高校生に、教養学部ならではの学問の幅広さ・奥深さを発信している。駒場会場での参加者は100名から180名程度あり、そのうち高校生がほぼ7割で、社会人も3割程度参加している。会場、配信校からの質問も多数あり、予定時間を過ぎてしまうことも多い。また、博物館の特別展示に関連した講義を実施し、その後、展示会場で展示会を楽しむという企画もあった。2008年度からは生産技術研究所が共催として加わった。URL <http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>

2008年度の実施プログラムは以下の通り。

日時：毎週金曜日 17:30 - 19:00

場所：東京大学教養学部18号館ホール

夏学期

4月11日	竹内 渉	空から地球の健康状態を診断する (生産技術研究所人間・社会系部門)
4月18日	高橋 均 (スペイン語)	キューバの歴史～いろいろな見方～
5月9日	安達裕之 (情報・図形)	平賀譲とその時代 ——一高生から東大総長へ——
5月16日	池上俊一 (フランス語)	魔女とサバト
5月18日	五十嵐健夫	コンピュータで絵を描こう (情報理工学研究科；コンピュータ科学)
6月6日	大貫 隆 (古典語・地中海諸言語)	新発見の『ユダの福音書』について
6月13日	羽田野直道	電子の量子力学 (生産技術研究所基礎系部門)
6月20日	佐藤安信	持続可能な平和をどう造るか？ (「人間の安全保障」プログラム)
6月27日	松尾基之 (化学)	物質の化学状態から環境を見る！ ——堆積物中に記録された過去の情報を解読する——

- 7月11日 中島隆博（中国哲学） 中国哲学の亡霊
 7月18日 伊藤元己（生物学） 生物進化の科学——駒場博物館進化展——

冬学期

- 10月3日 山本 泰（社会学） 市場経済は生き残れるか？
 10月10日 秋山 仁（東海大学；数学） 定理探しの実況中継——多面体の考察——
 10月24日 岡田 猛（情報学環）、
 篠原猛史（画家、現代美術家） behind the seen アート創作の舞台裏
 10月31日 能登路雅子（英語） デイズニー文化の地域性とグローバリゼーション
 11月7日 竹内昌治（生産技術研究所 マイクロメカトロニクス国際研究センター）
 サイボーグはできるか？
 ——生体分子と機械の融合——
 11月28日 桜井英治（日本史） 100=97の世界——中世日本の貨幣経済
 12月19日 鈴木秀幸 数理モデリング：世の中を数学で探究する
 （生産技術研究所 情報・エレクトロニクス系部門）
 1月9日 廣松 毅（統計学） 統計とは何だろう？—社会を測る
 1月23日 工藤一秋 生体は精密化学工場——どこまで迫れるか？
 （生産技術研究所 物質・環境系部門）
 1月30日 木畑洋一（英語） 世界史のなかのヨーロッパ統合
 2月6日 ラマール・クリスティーン 中国語って日本語に似てる？
 （中国語） ——はじめての人のための言語類型論——

2. 高校で行う教養教育特別講座

本講座は教養教育の社会連携を目的として本学教養学部教員が全国の高校に出向いて講義を実施するもので、2007年度から開始した。生徒に対して講義を行うばかりではなく、「教養教育の社会連携」をテーマに高校教員との意見交換会を実施することが本講座の大きな特徴である。これらの活動を通して「15歳からの『学び』の促進」を実践するとともに、高校現場における教育課題の共有によって、実状に即した教養教育の提言・発信が可能になることを期待している。2008年度は3校で実施した。

- 8月30日（土） 秋田県立秋田高等学校
 下井 守（化学） 「変な元素、ホウ素の化学」
 9月27日（土） 宮崎県立宮崎大宮高等学校
 後藤則行（国際関係） 「地球温暖化とはどんな問題？」
 下井 守（化学） 「変な元素、ホウ素の化学」
 12月6日（土） 石川県立金沢泉丘高等学校
 大越義久（法学） 「刑事司法システムの実際」

3. 直島環境キャンプ 海と空の間で「人間の場所」について考える



高大連携による新しい教養教育の実践として、瀬戸内海に浮かぶ直島を舞台に「考えること」を体験する機会を提供した。2008年度は環境をテーマに、丸山康司准教授（教養教育開発機構 NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門）、瀧川洋二客員教授（教養教育開発機構）、下井守教授（化学）、山本泰教授（社会学）、宮本結佳氏（奈良女子大学社会生活環境学専攻）が講師をつとめ、8月6日から9日までの4日間にわたり、国内外の高校生21名を対象に開催した。環境問題に関するレクチャー、直島と豊島で稼働している産業廃棄物処理施設の見学、地域活性化活動に取り入れられた現代アートの鑑賞、ベネッセコーポレーション福武總一郎会長によるレクチャーなど、多彩なプログラムを通じて環境問題を多面的に捉えることを目的とした。高校

生たちは講師との議論や参加者同士でのグループディスカッションによって考えを深め、最終日には環境問題の解決に向けて導き出した意見について発表会を行った。

4. 「科学リテラシーの普及」事業

科学リテラシーを広く普及させるためには、学校教員のみならず、多様な分野で指導的な立場にある人材の実験開発能力、演示能力を向上させることが不可欠である。社会連携寄付研究部門では特に大学生の育成に注目し、教育・研究活動を実施している。2007年度冬学期から教養学部1、2年生向けの全学自由研究ゼミナール「心を動かす表現法——科学メディア・理科実験の研究」を開講し、本活動を通じて大学生を媒介とした科学リテラシーの普及について研究および実践を進めている。

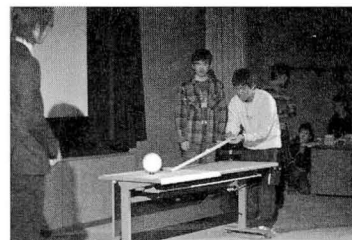
2008年7月14日「分かる表現、伝わる表現」をテーマに月刊誌「子供の科学」編集長柏木文吉氏を迎え、駒場コミュニケーションプラザ南館3階ラウンジでサイエンスカフェを開いた。6月に学生が訪問しインタビューしてきた月刊誌「Newton」編集部に関しても学生が報告した。参加者は約30名であった。

2009年1月26日には、第二回東大生によるサイエンスショー「ニュートンの眼アインシュタインの閃き」をアドミニストレーション棟3階学際交流ホールで行った。光は波か粒子かをテーマに、ニュートン、アインシュタインが切り開いた光の世界が現代の人々の生活の基礎になっていることを約10の実験とともに紹介した。参加者は85名であった。

また、「科学読み物シンポジウム」を2回開催した。日本の科学リテラシーを普及する上で、大人も子どもも科学の本を読む社会にすることが大切であるが、子ども向け科学の本は年間400冊程の新刊が出ながら、物理や化学に分類される本は年数冊しかなく、本屋の店頭には科学読み物はほとんど置かれていないのが現状である。本シンポジウムでは、そのような現状を踏まえ、大人も子どもも科学の本を読もうという呼びかけを行った。NPO法人ガリレオ工房、科学読物研究会、ファラデーの本棚などこのジャンルで活躍してきた団体の協力を得て実施した。第1回は2008年7月5日13号館1313教室で、第2回は2008年11月8日に7号館743教室で開催し、それぞれ、約100名、120名の参加で行われた。

このシンポジウムには新聞社も大きな関心を寄せ、夏休みには2社で計4回科学読み物の特集が生まれ、第2回シンポジウム前後には3社が記事として科学読み物や科学読み物シンポジウムを取り上げた。

(社会連携委員会委員長 下井 守)



5. オルガン演奏会・ピアノ演奏会

オルガン委員会は、2008年に4回の演奏会を開催した。いずれも、会場は900番教室、一般公開。プログラムは以下の通り。第114回演奏会（5月14日）では、本学教員と学生がプロの演奏家と共演した。

2008年4月24日 第113回オルガン演奏会

オルガン：武久源造、三味線：簗田弘大、尺八：中村仁樹、箏：衣袋聖志

2008年5月14日 第114回オルガン演奏会

オルガン：グレゴリー・ダゴステイーノ、フルート：安西信一（地域文化研究科准教授）、オーボエ：本多啓佑、ヴィオラ：小倉萌子、チェロ：磯野太佑（経済学研究科大学院生）

2008年10月3日 第115回オルガン演奏会

「17世紀初期イタリアのオルガンとアンサンブルの音楽」

オルガン、ポジティブ、チェンバロ：鈴木雅明；ソプラノ：野々下由香里、クリステン・ウィットマー；リコーダー：森吉京子、野崎剛右；ヴィオラ・ダ・ガンバ：福澤 宏；リュート：佐藤亜紀子

2008年11月13日 第4回室内楽演奏会

ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ

ピアノ委員会は、コミュニケーションプラザ北館音楽実習室において、コンサート用グランドピアノ（スタインウェイ、D-274）を用いた演奏会を5回開催した。そのうち3回は、第一線で活躍中の著名な演奏家による演奏会で、学内者限定の入場予約制とした。残り2回は、ピアノ委員会によるオーディションで選ばれた学生が出演する教養学部選抜学生コンサートで、一般公開した。そのうち1回（11月15日）はホームカミングデイの行事の一部として開催した。

2008年1月10日 第4回演奏会 「バッハに縁取られたアラベスクとアレンジメント」

ピアノ：高橋悠治

2008年4月23日 第3回教養学部選抜学生コンサート

ピアノ：山崎翔（理一）、松原薫（文三）、中川航（文）、松本雄也（理）、世古隆蔵（文一）

2008年6月18日 第5回演奏会 辛島文雄ジャズピアノトリオ

ピアノ：辛島文雄、ベース：川村竜、ドラム：高橋信之介

2008年11月15日 第4回教養学部選抜学生コンサート

ピアノ：山崎翔（理一）、新妻友機（経）、松原薫（文三）、松尾雄生（フランス科）、世古隆蔵（文一）、北口景子（お茶の水女子大）、ヴァイオリン：Ariel Jeong（総合文化）、森朱理（東京藝術大）、北口善教（農）、羽深由理（東京藝術大）、ヴィオラ：渡辺美穂（文三）、羽深宏樹（法科大学院）、チェロ：榎本竜蔵（明治大）、布施佑馬（理三）

2008年11月19日 第6回演奏会

ヴァイオリン：ジェラルド・プーレ、ピアノ：浜口奈々

（オルガン委員会・ピアノ委員会 小川桂一郎）

23 初年次活動センターの開設

前期課程学生に対する様々なサポートを展開する初年次教育の拠点となることを目指して、初年次活動センターが2008年10月に開所した。初年次活動センターは、駒場Iキャンパスの中でも、教室や研究室の集まるアカデミック区域と、課外活動施設が集まる福利厚生区域のちょうど境界に位置しており、学生が学習コミュニティを作るための居場所となるべく設計・建設されている。60平米、ガラス張りの建物で、プレゼンテーション設備と小キッチンを備えており、20名程度までの各種活動に対応できる。

初年次教育とは、主として新入生を対象として、大学という新しい学習・生活環境に積極的に適応し、知的・人間的な能力を十分に開花させるように促す総合的な教育プログラムであり、近年では世界各国の大学教育でも重要な位置付けがなされている。

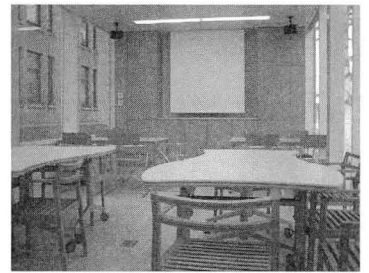
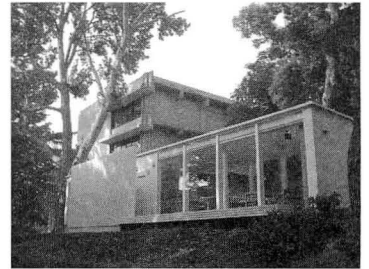
具体的な活動内容は大学によって様々であるが、ガイダンス、自校教育、学習スタイルの転換を図る初年次少人数教育、キャリアデザインなどが挙げられる。教養学部はこれまでも、文部科学省海外先進教育実践支援プログラム援助を受けてハーバード大学やペンシルバニア州立大学へ教職員を教養教育の視察のために派遣するなど、初年次教育に関する調査や開発を重ねてきた。そして、一昨年からは、3月末に入学直前の新入生約二百名を十名ずつの小グループに分け、教員と上級生がグループごとに工夫をこらしたキャンパスガイドを行うFRESH START@駒場や、教務課職員による履修ガイダンス、上級生による履修相談などを初年次教育として実施してきている。

初年次活動センターは、このような初年次教育の拠点となるもので、既にこれまでも、英語教員や留学生が、前期課程学生と昼食をとる「英語でしゃべランチ」、前述のFRESH START@駒場の企画を練る全学自由研究ゼミナール、基礎科学科教員によるサイエンスカフェ、「教養教育への囲碁の活用」寄附研究部門主催の日本棋院棋士による囲碁体験指導、学生相談所主催のキャンパス・アイデンティティ・グループなどが実施されている。今後は、授業やイベントで利用されない時間帯にTAが駐在し、学生諸君が気楽に立ち寄れるようにしていく。

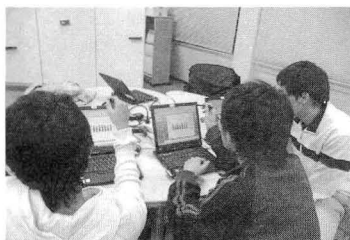
教養学部は教養教育の改革を積み重ねてきたが、初年次活動センターは、前期課程学生に対する様々なサポートを展開する拠点となることが期待されている。

初年次活動センター竣工式典は、10月11日（土）午後からアドミニストレーション棟ウッドデッキ横において行われ、本学教職員を中心に約50名が出席した。小島憲道教養学部長の挨拶、小宮山宏総長及びテッド・メイヤー氏（ハーバード大学ダイニングサービス取締役）の祝辞の後、テープカットが執り行われ、その後センター室内の見学が行われた。

（学部長室 長谷川寿一）



24 駒場アクティブラーニングスタジオ(KALS)



2007年5月に駒場キャンパス17号館に開設された「駒場アクティブラーニングスタジオ(KALS)」では、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして、東京大学が掲げる「理想の教養教育」を目指した新しいタイプの授業が実践されている。従来の教室で行われている、板書あるいはプロジェクタとノートによる聴講型の授業に対して、KALSで行われる授業では、データ・情報・映像などの様々なインプットに対して、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価を行い、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習活動、すなわち「アクティブラーニング」に重点が置かれる。授業中に“その場”での協調学習を採り入れることによって、学生の能動的な授業への参加を促進している点も、KALSで行われる授業の特徴である。



KALSは、最先端の情報コミュニケーション技術 (ICT) を活用して、アクティブラーニングの効果を最大限に引き出す設計がなされている。ICT設備の詳細については、本書p.28を参照されたい。KALSで実施される授業は、ICTを活用したアクティブラーニングによって、学生自らがデータ・情報を整理して課題を見つけ出し、その解決を目指して様々な視点から課題に取り組むことにより、広い視野から問題に対応する能力を養うことを目標としている。2008年度にKALSで実施された学部前期課程の授業一覧を下表に示す。

KALSを利用した新たな教育手法の開発は、「ICTを活用した新たな教養教育の実現」として2007年度から文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定されており、現在、2名の常駐スタッフが授業の運用を支援すると共に、「基礎演習」にNHKアーカイブスの映像資料や、Weblogシステムを取り入れたり、生命科学に関する全学自由研究ゼミで、蛋白データの3Dモデルや配列解析ツール等を利用したりするなど、積極的にICTを活用した新しい授業モデルを実施・評価している。

KALSホームページ：<http://www.kals.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>

(学部長 長谷川寿一)

2008年度にKALSで開講された学部前期課程の授業

	授業科目	講義題目	教員名
夏学期	基礎演習	Media Literacy Workshop Media Literacy Workshop 「60 Minutes」を聞く、語る 「60 Minutes」を聞く、語る 初年次プログラムを企画しよう	岡田晃枝
	基礎演習		岡本拓司
	基礎演習		齋藤希史
	基礎演習		清水 剛
	基礎演習		古田元夫
	基礎演習		村上郁也
	基礎演習		山本 泰
	英語二列C		Tom Gally
	英語二列C		Tom Gally
	中級英語(LS)		山本久美子
中級英語(LS)	山本久美子		
全学自由研究ゼミナール	岡田晃枝		
冬学期	総合科目	物理科学 I (文科生) データ分析 史料論 生命科学β 自分を知る教育学	兵頭俊夫
	方法基礎		繁榊算男
	方法基礎		古田元夫
	英語一列		Tom Gally
	英語一列		Tom Gally
	英語Ⅱ列PO		内野 儀
	英語Ⅱ列PO		内野 儀
	全学自由研究ゼミナール		笹川 昇
	全学自由研究ゼミナール		西森年寿

25 キャンパスの整備

2008年度の施設・環境整備の概要

本年度は102号館および学生会館の耐震改修工事が行われた他、初年次活動センターが竣工し(別項で詳述)、前年度の130周年記念事業の継続として、池の整備、駒場バラの小径の整備等が進められ完成をみた。さらに多目的ホール裏の環境整備が進行中である。また別項で述べる理想の教育棟の基本計画が完成し、鍬入れ式が行われた。なお、駒場コミュニケーション・プラザが、二つの大きな建築賞を受賞したので併せて報告する。

102号館と学生会館の耐震改修工事

駒場1キャンパスの耐震改修工事では、5号館を皮切りに、6、7、8号館と教育棟の改修を先行して実施してきたが、2008年度は、教室を持たない102号館と学生会館の改修が行われた。

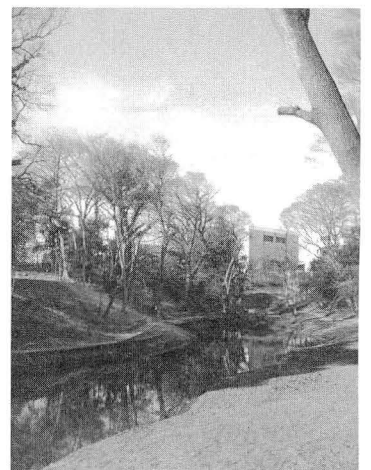
102号館は、学生諸君にはあまりなじみがない建物であるが、保健センターの西に位置し、1階に非常勤講師控室、2階に各種会議室、3階に教授会室が入るアドミニストレーション機能を備えた建物である。今回の改修では、外壁の耐震補強工事に加えて、機能改修として、省エネ対策のペアガラス化、バリアフリー対策としてスロープの設置、会議室の間仕切りの変更、床・壁のリフォームなどの工事が行われた。なお、耐震工事期間中、9～12月の教授会は、数理科学研究科の大講義室にて行われた。

第1グラウンドに隣接する学生会館は、昭和37年に建造され、学生のサークル活動の拠点として長く利用されてきた建物である。しかし、近年、老朽化が著しく、雨漏り、給水の濁り、配水管のつまり等が恒常化し、さらに耐震強度の測定の結果、大地震の際に危険であると診断された。今回の工事では、耐震補強に加えて、給排水の更新、内外装整備、共用部分のエアコン設置、音楽練習室の増設等を進めている。省エネルギー対策としては、太陽電池パネルの設置と壁面緑化についても、現在計画中である。改修に先立ち学生団体「環境三四郎」が「学生会館エコ改修と運営のための特別講座」を企画開催した。その報告書は、教養学部のホームページに掲載されている。改修工事は2009年の春に終わる予定であるが、この間の学生のサークル活動は、隣接する旧生協食堂に部室を移して続けられた。

なお、学生団体の活動は、18号館に隣接する旧物理倉庫でも行われているが、この老朽建造物は、理想の教育棟の建設に伴い2009年度には撤去が予定されている。旧物理倉庫に部室を構える学生団体は、基本的に新装の学生会館に移動する予定である。ただし、学生会館と旧物理倉庫を拠点とする運動会アメリカンフットボール部ウォリアーズについては、ラグビー場の北にクラブハウスを新営することとし、その工事が進められている。ウォリアーズの移転によって生じる学生会館内のスペースに関しては、学生会館に移ってくる諸団体のためのスペースとして活用する。これらの移転とスペースに関する諸問題は、学生会館運営委員会、学友会、学生自治会、および関係する学生諸団体等との協議の上、進めている。

駒場池(愛称、一二郎池)周辺の環境整備

キャンパスの東端に位置する池周辺は、駒場Iキャンパスでももっとも自然が残されている一帯である。しかし、旧駒場寮の奥に位置することもあり、長年、整備が遅れていた。130周年記念の学内整備事業にあたって、この池を再生させ、緑豊かな散策路を整備するためプランが立案され、2008年度には整備を終えることができた。工事は、池周辺に繁った樹木の伐採と枝払い、ヘドロの浚渫、漏水対策、遊歩道設置等周辺環境整備の順で行われた。その結果、池周囲が明るい雑木林となり、長年の懸案であった漏水も止まった。池の周囲は散策可能なエリアと、教育研究のための保護エリアに分けられ、憩いの場であると同時に教育研究施設として利用される。なお、池の公式名称について2008年夏に公募し、名称検討のためのワーキンググル



ープで審議の結果「駒場池」が選ばれた。これまで通称として用いられてきた「一二郎池」も、愛称として引き続き用いることとした。

駒場バラの小径



正門脇から数理学研究科棟に抜ける歩道沿いには、2006年に「駒場ばら園」(所在地：駒場一丁目)から寄贈されたものを主体に約60本のバラが植えられている。「駒場ばら園」は現存する日本最古のバラ園として、我が国にバラを普及させるのに、大きな役割を果たしてきた。2005年に大幅に縮小されるのを機に、同園の歴史的伝統、ゆかりの品種を後世に伝えるため、ボランティア・グループ「駒場バラ会」の尽力により同園のバラが駒場キャンパスに移植された。これが創立130周年記念事業「知のプロムナード」の一環として全面的に整備され、新たに「駒場バラの小径」(KOMABA Rose Path)と命名された。

2008年7月25日(金)、新しく整備された「駒場バラの小径」において、銘板の除幕式が行われた。除幕式には、「駒場ばら園」の園主である入澤嘉代(いりさわ・かよ)さんのほか、バラの育成管理でご協力をいただいている「駒場バラ会」の皆様にも多数ご参加いただくことができ、この小径の完成を盛大に祝うことができた。

バラの株の脇には品種プレートが立てられ、レンガとインド砂岩が敷かれた趣のあるステップに踏み込むと、それぞれのバラを間近でみるができる。バラはほぼ一年を通じて楽しむことのできる花期の長い植物であり、四季折々の彩りと香りが小径を行く人々に日々安らぎを与えてくれている。

今後の予定

2008年度補正予算によって、9号館(西)、10号館および図書館収蔵庫の耐震改修工事が予算化された。9号館では現在、スポーツ・身体運動部会、人間の安全保障プログラム(HSP)、ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)、東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ(EALAI)、理系アカデミック・ライティング・コース(ALESS)などが研究室を構え活動を展開している。この耐震改修では、耐震に加えて、給排水設備やエアコンの交換の他、エレベーター設置も予定されている。なお、9号館東半分は建設年度が1年新しいため、耐震改修の対象建物から外れたが、この機会に西半分に準じた改修を行う。

10号館には現在、語学関係の視聴覚教室を含む各種教室、英語Iの教材作成支援室、科学技術インタープリタープログラムの教員室、事務室、教室などが置かれているが、改修後はALESSなど英語を中心とした語学教育の教室や諸設備を集中させる予定である。

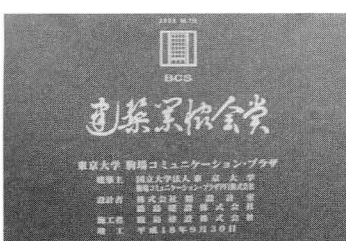
学内措置としては、第2グラウンドの人工芝化工事の予算を本部経費、学部経費および寄付によって確保することができた。この工事は、近隣住民からの砂塵対策の要望に応えるものである。同グラウンドでは、現在、スポーツ・身体運動部会の授業の他、ホッケー部、ラクロス部、ソフトボール部などが練習や試合で利用している。

駒場コミュニケーション・プラザの東京建築賞と建設業協会賞のダブル受賞

2008年度、駒場コミュニケーション・プラザは、二つの大きな建築賞を受賞した。社団法人東京都建築士事務所協会の第34回建築作品コンクールにおける東京建築賞最優秀作品賞(一般部門二類)と第49回建設業協会賞(以下「BCS賞」と略記)である。前者は、関東甲信越地区の優れた建築作品を顕彰する賞であるが、コミュニケーション・プラザについては、「旧駒場寮の跡地を含む敷地を整備し、大学交流の場として活用すべく、PFI事業として計画された施設は、地域の住民も取り込んだ「開かれた大学」として成功している。広場を囲む回廊空間と諸施設は、端正で心地よいデザインでまとめられている。」との評価を受けた。

BCS賞は、ホームページによれば、「優秀な建築物をつくり出すためには、デザインだけでなく施工技術も重要であり、建築主、設計者、施工者の三者に理解と協力が必要である」という初代理事長の竹中藤右衛門の発案により1960年に創設された。いわば、その年を代表する日本の優れた建築物を選定する賞であるが、2008年はコミュニケーション・プラザのほか国立新美術館に加えて、東京ミッドタウンなどの二件の特別賞を含む十五作品が選ばれた。東京大学として、またおそらく全国のPFI事業による建築物としても初受賞であり、喜ぶたい。

(学部長室 長谷川寿一)

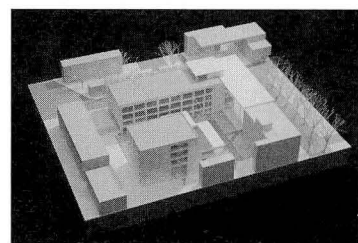


26 「理想の教育棟」の着工

「理想の教育棟」の目的と効果

東京大学アクションプランの冒頭に謳われる、理想の教養教育とは、1) 確固たる論理に支えられた基礎学力、2) 問題を自ら発見し解決していく能力、3) ITを活用した主体的学習能力を磨き上げることを目指す教育である。

これらを実現する学びの舎となる、「理想の教育棟」では、課題の発見と解決を促すオープンスペース・ラボ、ICT（Information and Communication Technology）支援型協調学習教室、理系の基礎実験室、教員と学生とのインタラクティブな授業を可能にする新設計の講義室などを整備する。これらの施設整備によって、授業時間帯以外にも学生諸君が積極的に利用する「滞在型の学習空間」を実現することができる。



「理想の教育棟」の概要

老朽化が著しい理系基礎実験室（6号館）、一般講義室（7号館）を移設し、さらに現在、駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS）で試行中のICT支援型協調学習教室を発展、拡充させた、学びやすさと環境基準に配慮した理想の教養教育施設（約12,000平米）を105号館と旧生協食堂を撤去して設置する。「理想の教育棟」は、教養学部の前期課程の基礎科目、総合科目、主題科目（全学ゼミとテーマ講義）に広く活用されると共に、本郷他学部との連携、社会発信活動のための中心施設として機能する予定である。

基本計画の策定

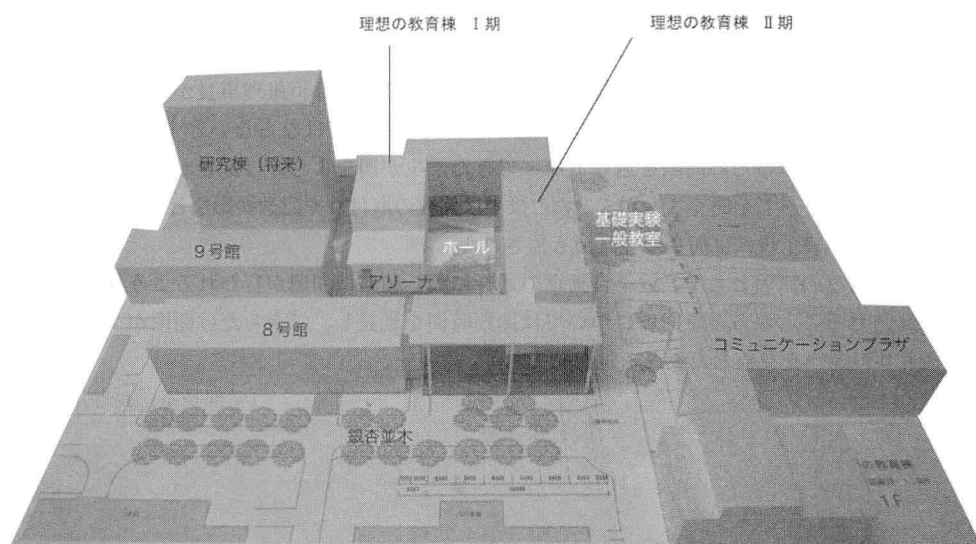
理想の教養教育棟の具体化に向け、これまで教養学部では、理系副学部長と理想の教育棟担当学部長アドバイザーの永田敬教授と加藤道夫教授を中心に、若手教員で構成されるワーキンググループが一丸となって、施設設計の仕様の検討を重ね、その準備のために国内外の施設の視察も行ってきた。さらに本年度は、予算確保に向けて本部との折衝を重ね、工期を2期に分けて進める基本計画を策定することができた。

設計上の基本計画にあたっては、理想の教育の理念を踏まえた上でさらに、以下の諸点を満たすよう留意した。1) 滞在型の学習空間を実現させるために、学生の利用率の高いコミュニケーションプラザと空間的連続性を保ち、意匠的にも一体感を持たせる。2) 緑豊かなキャンパスの景観を末長く保全するために、将来にわたって銀杏並木に沿った建物は低層（4階）のままで押さえる。3) 省エネルギー、衛生安全管理、屋上緑化、樹木保存を含めて環境と安全に十分配慮する。4) キャンパス計画室が策定した軸線（道路軸）に従って建物を配置する。5) 容積確保のために、積極的に地下を利用する。6) 第Ⅰ期棟では、理想の教養教育を体現する先進的施設を整備する。

これらを具体化した完成模型写真を見ていただくとわかるように、「理想の教育棟」は、地下2階地上4階（一部5階）建ての2つの教育棟（西の第Ⅰ期棟と東の第Ⅱ期棟）をガラス張りのオープンスペース・ラボ、サンクンガーデン（地下広場）によってつなぎ、北側地階にはレクチャーホールを配する構造となる。第Ⅰ期では、西側の建物とオープンスペース・ラボ、サンクンガーデンまでを完成させ、レクチャーホールの基礎工事を行う。第Ⅰ期棟の施設としては、オープンスペース・ラボ、駒場アクティブラーニングスタジオで試行中のICT支援型協調学習教室、教員と学生とのインタラクティブな授業を可能にする新設計の講義室、全学利用施設などを含み、理想の教養教育を象徴するオープンスペース・ラボには、筆頭寄付者である森稔氏（森ビル社長）にちなんだ名称を冠する予定である。理系の基礎実験室や一般教室、大屋根とそこに連なるカフェ等は第Ⅱ期工事で整備する。なお建設予定地に現存するクスの巨木は、「理想の教育棟」のシンボルツリーとして大屋根とオープンスペース・ラボの間に保存される。

2008年度内には、実施設計に着手し建設予定地の整地を開始する。2009年2月20日には小宮山総長、森稔氏をはじめ関係者を迎えて建設予定地で安全祈願祭を実施した。

(学部長室 長谷川寿一)



27 正門門扉の復元と竣工

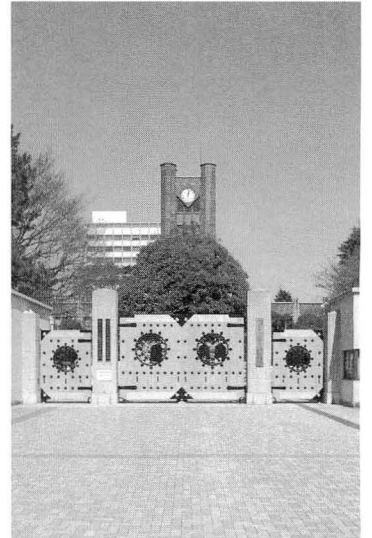
教養学部正門の門扉は、1938年頃の設置以来、学部の顔として長い間親しまれてきたが、長年の風雨と開閉の振動などから老朽化が著しかった。このため教養学部では、一高・東京同窓会をはじめ多方面からの寄附を得て門扉の復元をすすめ、2008年3月24日（月）に竣工をした（この間の経緯については「駒場2007」を参照されたい）。門の傍らの桜の花も美しい4月4日（金）、竣工披露式典が行われた。

今回の復元は図面が存在しなかったため、取り外した門扉を分解して部品を採寸し、これを元に新たに部品を制作して組み立てるという宮大工の手法ですすめられた。素材には木曽檜が用いられ、仕上げには柿渋を塗って色を落ち着かせた。校章については傷みが激しく再利用できなかったため、型をとってアルミダイカストで新たに作成している。なお旧校章は駒場博物館に保存される。

披露式当日はさいわい天候にも恵まれ、青空の下、正門前広場脇のスペースで10時30分より行われた。小島憲道研究科長の挨拶に続き、一高同窓会の若井恒雄理事長からいただいた式辞の中では、往時は寮生がかならず正門を通過して入構しなくてはならないとする「正門主義」があったことや、そのため門限を過ぎて帰ってきた学生が門をよじのぼる姿が見られたといった興味深いエピソードを聞くことができた。後半は銘板の取付けや記念撮影なども行われ、約30分のセレモニー終了後には簡単な昼食会も催された。

旧門扉の傷みの原因として、近年自動車の通行に際し頻繁に開閉が行われるようになったことが考えられることから、新門扉については開門時間を延長し、できるだけ開閉が少なくなるよう運用ポリシーを見直したことを付記しておく。

（学部長室 長谷川寿一）



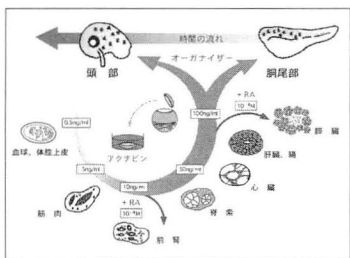
28 浅島誠特任教授文化功労者顕彰記念講演会



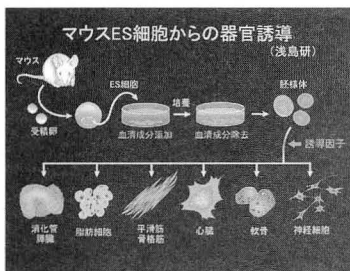
総合文化研究科特任教授（理事・副学長）の浅島誠先生が、2008年度文化功労者に選出されたことを記念して、1月7日に学際交流ホールにて文化功労者顕彰記念講演会が開催された。会場には約150名の聴衆が集まった。

講演に先立ち、小島憲道研究科長が挨拶に立ち、顕彰のお祝いの言葉を述べられた。

浅島先生の講演は、まず先生ご自身が胚発生研究を行う上での研究背景から始まった。脊椎動物胚のボディパターンは受精時には明確に決定されておらず、受精後にある一部の細胞群が周囲の細胞に働きかけそれらを運命づけるという、いわゆる“誘導”と呼ばれる現象によって胚の基本的なパターンが決められる。先生は、1924年にシュベーマンとマンゴールドによって発表されたこの「誘導」現象について概略を分かりやすく説明されると共に、半世紀以上もの間多くの研究者が関わってきたにもかかわらず誘導の実体となる物質を誰も発見することが出来なかったこと、そしてそれらの研究が「誘導物質は実は存在しないのでは」という主張によって否定されてきたこと、などについて丁寧に、また時には熱く語られた。様々な試行錯誤を経た後、アクチビンタンパク質に強い中胚葉誘導活性が存在することを先生は発見された訳だが、これは誘導現象が“実体”を伴うことを示したという点で非常に大きな発見であり、上記の否定を大きく覆すものであった。先生のご講演では、アクチビンの誘導活性発見に至るまで高いモチベーションを維持してこられた理由が非常によく分かる一方で、これらの研究が一筋縄ではいかず、いかに困難な作業であったかという点が聞いている側にひしひしと伝わってくるものであった。



講演の後半部分では、アクチビン発見後、90年代以降先生が明らかにしてきた内容について具体的に述べられた。上述のように、アクチビンは中胚葉誘導活性を有する。例えば、両生類胚の未分化細胞群として知られるアニマルキャップにアクチビンを作用させると、脊索などの中胚葉性組織が誘導される。ところが、作用させるアクチビンの濃度を変化させると、中胚葉性組織だけでなく、外胚葉性組織や内胚葉性組織など、体のほぼ全ての部分に分化させることができることを先生は見出した。この研究を発展させる形で、先生はイモリ・ツメガエルといった両生類胚の未分化細胞から心臓や膵臓、腎臓や目といった臓器・器官を誘導することに成功された。更には誘導した臓器を胚に移植し、それらが成体にまで成長する様子が具体的に提示された。非常に残念なことに、心臓が動く様子などを示すはずだったいくつかの動画が動かず、発表されていた先生が「うーん、これは困るなあ」と何度も言われていたのが印象的だったが、研究内容の興味深さはそれを差し引いても十分に伝わってきた。



2000年に入ると、先生はマウスなど哺乳動物の未分化細胞である胚性幹細胞（ES細胞）を用いた臓器誘導系の確立にも研究を展開された。言うまでもなくその理由の一つは、いわゆる「再生医療」と呼ばれる、未分化細胞から新たな臓器を誘導しそれらを患者に移植する、という治療法への応用を見据えたものである。これらについて、心臓・膵臓などをはじめとした具体的な誘導例を示された。また、最近マスコミで多く取り上げられるiPS細胞についても触れられ、将来的な医療応用にはそれらの“標準化”、すなわちこれまでに国内外で多く確立されてきた様々な種類のES・iPS細胞株の分化指向性・増殖能などの比較検討について述べられた。これは、単に「組織が誘導された」という国内外から出される多くの知見に対するいわば警鐘であり、具体的な臨床応用を見据えた上では極めて重要な考え方である。

このように浅島先生の講演は、20世紀の最初に勃興した発生生物学の基本的な仕組みというテーマから始まり、最後は医療応用など将来の発生学に至る、一世紀以上という非常にスパンの長い研究分野に先生ご自身が関わってこられたことを示す大変興味深いものであった。

講演会に続いては、ファカルティーハウスで祝賀会が行われ、60人以上の参加者が浅島誠先生の文化功労者顕彰をお祝いした。
(生命環境科学系 道上達男)

付属資料1

2008(平成20)年度授業日程表

4月9日(水)～7月17日(木)	第1・3学期授業
7月18日(金)～7月31日(木)	第1・3学期試験前半
8月1日(金)～8月31日(日)	夏季休業
9月1日(月)～9月3日(水)	第1・3学期試験後半
9月4日(木)～10月5日(日)	秋季休業
10月6日(月)～12月24日(木)	第2・4学期授業前半
12月25日(木)～平成21年1月6日(火)	冬季休業
1月7日(水)～1月30日(金)	第2・4学期授業後半
2月2日(月)～2月13日(金)	第2・4学期試験

教養学部の授業時間

1時限	9時00分～10時30分
2時限	10時40分～12時10分
3時限	13時00分～14時30分
4時限	14時40分～16時10分
5時限	16時20分～17時50分

2008(平成20)年度志願・合格・入学状況

教養学部前期課程

(平成20年4月1日現在)

科 類	募集 人員	志願 者数	受験 者数	合格 者数	入学 者数 (内数として後期 日程試験)	特別選考入学者					入学 者 総数
						第1 種	第2 種	国費 外国 人留 学生	政府 派遣 留學 生	日韓共 同理工 系学部 留學生	
文科一類	401	1,342	1,199	401	427(26)	0	8	4	1		440
文科二類	353	1,320	1,071	354	359(5)	4	4	2	1		370
文科三類	469	1,692	1,406	479	479(2)	1	4	7			491
理科一類	1,108	3,045	2,763	1,129	1,162(37)	4	3	19	2	5	1,195
理科二類	532	2,266	1,859	547	570(27)	3	2	2			577
理科三類	90	418	355	90	90(-)	0	0	0			90
全科類(理科三 類を除く)	100	3,485	413	100							
合計	3,053	13,568	9,066	3,100	3,087(97)	12	21	34	4	5	3,163

(備考)

- 「志願者数」、「受験者数」、「合格者数」、及び「入学者数」には特別選考の数は含まない。
- 「入学者数」については前期日程試験、及び後期日程試験の合計人数を記載している。また、()書きの数は後期日程試験入学者を内数にて表す。
- 「合計」欄の数字については前期日程試験、及び後期日程試験の合計人数を表す。
- 特別選考入学者の「第1種」及び「第2種」は、外国の学校を卒業した外国人及び日本人を対象とした選抜により入学した者で、次の分類による。
 第1種 外国人であって日本の永住許可を得ていない者
 第2種 日本人及び第1種以外の外国人

教養学部後期課程

学 科	平成20年度進学者	学士入学者等
超域文化科学科	21	
地域文化研究学科	37	
総合社会科学科	36	
基礎科学科	31	
広域科学科	11	
生命・認知科学科	20	
計	157	

大学院総合文化研究科

専 攻	修士課程			博士後期課程		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
言語情報科学	76	31	30	50	23	22
超域文化科学	122	38	38	48	19	19
地域文化研究	100	40	38	65	38	37
国際社会科学	137	35	35	52	19	19
広域科学	219	111	97	78	64	61
(生命環境科学系)	(99)	(44)	(38)	(25)	(21)	(19)
(広域システム科学系)	(48)	(30)	(28)	(22)	(17)	(17)
(相関基礎科学系)	(72)	(37)	(31)	(31)	(26)	(25)
計	654	255	238	293	163	158

2009(平成21)年度進学内定者数

2008年10月8日

学部学科	定数	内定者							合計	外国人留学生(定数外)内訳				
		文一	文二	文三	理一	理二	理三	小計		A	B	C	D	計
法	415	279<4>	2	10	3	1		295<4>	420<4>	3	1		4	
		119	3	1	1	1		125<0> 0<0>						
医学	100				1	12	62	75<0>	101<0>				0	
							26	26<0> 0<0>						
		健康科学 ・看護学	40		2		7	9<0>						20<0>
	1				3	4<0> 7<0>								
工	945	1	6	10	564<20>	72	653<20>	974<20>	10	5	5	20		
					270	36	306<0> 15<0>							
文	385	1	11	212<3>	13	9	246<3>	373<4>	2	2		4		
		3	21	75	3<1>	3	105<1> 22<0>							
理	297				168<1>	59<1>	1	228<0>	312<0>				0	
					51	31	82<0> 2<0>							
農	290	1	7	6	21	155<4>	190<4>	278<4>	1	2	1	4		
			5	1	8	70	84<0> 4<0>							
経済	340	4	195<7>	25<1>	13	6	243<8>	345<8>	2	1	5	8		
			81	15	4	2	102<0> 0<0>							
教養	183	8	19	45<2>	32	20	124<2>	189<3>	3			3		
		2	13<1>	23	15	8	61<1> 4<0>							
教育	97	1	2	51<2>	4	5	63<2>	103<2>	1	1		2		
		1	9	22	2	3	37<0> 3<0>							
薬	80				19	37<2>	56<2>	85<2>	1	1		2		
					5	24	29<0> 0<0>							
計	3,172	295<4>	242<7>	361<8>	838<20>	383<6>	63<0>	2,182<45>	3,200<47>	23	3	16	5	47
		126<0>	132<1>	137<0>	359<1>	181<0>	26<0>	961<2> 5<0>						
総計	3,172	426<4>	382<8>	509<8>	1,219<21>	574<6>	90<0>	3,200<47>	3,200<47>	23	3	16	5	47

備考 1. < > は外国人留学生(定数外)で外数

2. 上段:第一段階 中段:第二段階 下段:再志望

3. A:日本政府(文部科学省)奨学金留学生 B:外国政府派遣留学生 C:外国学校卒業学生特別選考第1種 D:日韓共同理工系学部留学生

定員の推移 2003(平成15)年度～2008(平成20)年度

教養学部前期課程入学定員

年 度	平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006		平成19 2007		平成20 2008	
	科	文科一類	605	415	415	415	415	415	415	415	415	415
	文科二類	365	365	365	365	365	365	365	365	365	365	365
	文科三類	485	485	485	485	485	485	485	485	485	485	485
類	理科一類	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147	1,147
	理科二類	551	551	551	551	551	551	551	551	551	551	551
	理科三類	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
計	1,455	1,788	1,265	1,788	1,265	1,788	1,265	1,788	1,265	1,788	1,265	1,788
		3,243	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053	3,053

教養学部後期課程受入定員

年 度	平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006		平成19 2007		平成20 2008	
	学	超域文化科学科	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
	地域文化研究学科	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35
	総合社会科学科	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
科	基礎科学科	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
	広域科学科	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
	生命・認知科学科	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
計	140	140	140	140	140	140	140	140	140	140	140	140

大学院総合文化研究科入学定員

年 度	平成15 2003		平成16 2004		平成17 2005		平成18 2006		平成19 2007		平成20 2008		
	課 程	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士
専	言語情報科学	33	26	37	27	37	27	37	27	37	27	37	27
	超域文化科学	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29	41	29
	地域文化研究	43	27	47	28	47	28	47	28	47	28	47	28
	国際社会科学	34	23	38	24	38	24	38	24	38	24	38	24
攻	広域科学*	102	62	106	63	106	63	106	63	106	63	106	63
	(生命環境科学系)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)
	(広域システム科学系)	(27)	(16)	(31)	(17)	(31)	(17)	(31)	(17)	(31)	(17)	(31)	(17)
	(関連基礎科学系)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)
計	253	167	269	171	269	171	269	171	269	171	269	171	
		420	440	440	440	440	440	440	440	440	440	440	

*印 広域科学専攻は3系からなり、各系の入学定員は目安である。

2008(平成20)年度クラス編成表 (1年)

(2008年5月1日現在)

	文科一類		文科二類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A	1		2		3
2 C	2		3		5
3 E	1	1	1		3
4 G	7		9	2	18
5 I	6		3	1	10
6 H	16		18	2	36
7 H	16		18		34
8 H	16		18		34
9 H	17	2	17		36
10H	15		19		34
11 F	18		19		37
12 F	18	1	18		37
13 F	18	1	18	1	38
14 F	17	2	19	1	39
15 F	17	1	19	2	39
16 F	18		18		36
17 F	18	1	18		37
18 F	17		19		36
19 B	23	1	12		36
20 B	22		12	1	35
21 B	21	1	13	1	36
22 B	21	1	13		35
23 D	23		13	1	37
24 D	23	1	13	1	38
25 D	23	1	13		37
26 D	24	1	12	2	39
27 D	22	2	13	2	39

(合計844)

	文科三類		計
	入学	留年	
1 A	2		2
2 C	3		3
3 E			
4 G	16	1	17
5 I	12		12
6 K	25	1	26
7 K	24		24
8 H	35	2	37
9 H	34		34
10 F	30	2	32
11 F	30	5	35
12 F	29	1	30
13 F	29	3	32
14 B	31	2	33
15 B	31	1	32
16 B	30	2	32
17 D	34	2	36
18 D	31	2	34
19 D	31		31
20 D	34		34

(合計516)

A : ドイツ語既修クラス
 B : ドイツ語初修クラス
 C : フランス語既修クラス
 D : フランス語初修クラス
 E : 中国語既修クラス

F : 中国語初修クラス
 G : ロシア語初修クラス
 H : スペイン語初修クラス
 I : 韓国朝鮮語初修クラス
 K : イタリア語初修クラス

総計3,339名

	理科一類		計
	入学	留年	
1 A	2		2
2 C		1	1
3 E	3		3
4 G	33	3	36
5 I	26	5	31
6 H	35		35
7 H	34	2	36
8 H	34	3	37
9 H	33	2	35
10H	33	2	35
11 H	33	2	35
12 F	33		33
13 F	33		33
14 F	33	2	35
15 F	32	2	34
16 F	33	2	35
17 F	33	2	35
18 F	32	2	34
19 F	32	3	35
20 F	32	1	33
21 F	32	3	35
22 B	33	5	38
23 B	33	2	35
24 B	33	2	35
25 B	33	1	34
26 B	33	4	37
27 B	33	3	36
28 B	32	2	34
29 B	32	2	34
30 B	32	1	33
31 B	32	1	33
32 B	32	1	33
33 B	32	2	34
34 B	32	4	36
35 D	37	2	39
36 D	37	1	38
37 D	36	2	38
38 D	36	2	38
39 D	36	7	43

(合計1,276)

	理科二類		理科三類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A					
2 C					
3 E	2				2
4 G	25	1	1		27
5 I	16				16
6 H	30	2	4		36
7 H	29		5		34
8 H	30	2	4		36
9 H	30	2	4		36
10 F	34	4	2		40
11 F	33	2	3		38
12 F	33	1	3		37
13 F	32	1	2	2	37
14 B	28	2	7		37
15 B	27	3	7		37
16 B	27	2	7		36
17 B	27	1	7		35
18 B	26	1	8		35
19 B	26	2	8		36
20 B	28	2	7		37
21 D	31	1	4		36
22 D	31	5	4		40
23 D	31	1	3		35

(合計703)

2008(平成20)年度クラス編成表(2年)

(2008年5月1日現在)

	文科一類		文科二類		計
	進級	留年	進級	留年	
1 A	3			1	4
2 C	3	1			4
3 E				1	1
4 G	8	1	8		17
5 I	6		4		10
6 H	18		20	1	39
7 H	18	1	22	1	42
8 H	18	1	22	1	42
9 H	16	2	23	2	43
10 F	18	1	16	1	36
11 F	18	1	16		35
12 F	18	1	16	4	39
13 F	16	1	16	5	38
14 F	15	1	15		31
15 F	16	1	14	1	32
16 F	17	2	16	1	36
17 F	16		16	3	35
18 F	17		16		33
19 B	22	2	13	1	38
20 B	22		11	1	34
21 B	20	2	12	2	36
22 B	21		12		33
23 D	18	1	16	4	39
24 D	18		16	3	37
25 D	18		15	1	34
26 D	18	2	16	1	37
27 D	18	1	14	6	37

(合計842)

	文科三類		計
	進級	留年	
1 A	2		2
2 C	5		5
3 E			
4 G	8	1	9
5 I	11	1	12
6 K	38		38
7 H	31	2	33
8 H	29	4	33
9 F	30	5	35
10 F	29	3	32
11 F	27	4	31
12 F	29	3	32
13 B	31	4	35
14 B	33	1	34
15 B	33	4	37
16 D	30		30
17 D	28	2	30
18 D	28	5	33
19 D	30	3	33
20 D	30	3	33

(合計527)

A : ドイツ語既修クラス
 B : ドイツ語初修クラス
 C : フランス語既修クラス
 D : フランス語初修クラス
 E : 中国語既修クラス

F : 中国語初修クラス
 G : ロシア語初修クラス
 H : スペイン語初修クラス
 I : 韓国朝鮮語初修クラス
 K : イタリア語初修クラス

総計3,330名

	理科一類		計
	進級	留年	
1 A	2		2
2 C	3		3
3 E	1		1
4 G	29	4	33
5 I	20	1	21
6 I	17	1	18
7 H	33	2	35
8 H	32	2	34
9 H	32	9	41
10 H	32	3	35
11 H	32	5	37
12 H	34	1	35
13 F	35	2	37
14 F	34	2	36
15 F	34	2	36
16 F	34	4	38
17 F	33	4	37
18 F	34	3	37
19 F	31	4	35
20 F	33	5	38
21 F	31	1	32
22 B	31	5	36
23 B	33	4	37
24 B	31	6	37
25 B	32	5	37
26 B	30	2	32
27 B	31	3	34
28 B	32	4	36
29 B	30	2	32
30 B	32	10	42
31 B	32	4	36
32 B	32	5	37
33 B	31	2	33
34 B	30	4	34
35 D	32	8	40
36 D	32	6	38
37 D	32	6	38
38 D	33	5	38
39 D	26	6	32

(合計1,270)

	理科二類		理科三類		計
	進級	留年	進級	留年	
1 A	3				3
2 C	3				3
3 E	1		1		2
4 G	5	1	1		7
5 I	15	2			17
6 H	26	3	6		35
7 H	26	4	6		36
8 H	25	3	5		33
9 H	24	2	5		31
10 F	26	6	4		36
11 F	31	4	3		38
12 F	31	3	3		37
13 F	30	4	3		37
14 B	28	7	6	1	42
15 B	28	5	6		39
16 B	29	2	6	1	38
17 B	31	2	5		38
18 B	31	3	5		39
19 B	29	2	5		36
20 B	31	6	5	1	43
21 D	30	2	5		37
22 D	26	3	4		33
23 D	26		5		21

(合計691)

研究生

総合文化研究科大学院研究生，外国人研究生数

(2008年11月1日現在)

専攻	大学院研究生	外国人研究生	計
言語情報科学	1	12	13
超域文化科学	3	18	21
地域文化研究	3	14	17
国際社会科学	6	7	13
広域科学	8	5	13
計	21	56	77

大学院研究生の出願資格は、総合文化研究科修士課程修了，博士後期課程修了，同課程満期退学又は同程度の学力を有する者。
外国人研究生の出願資格は、外国籍を有し，大学を卒業又は外国において，学校教育における16年の課程を修了した者。

教養学部研究生数

(2008年11月1日現在)

後期課程 9

研究生の出願資格は，4年制大学卒業又は同程度の学力を有する者。
(前期課程には，学部研究生制度がない。)

留学生

(2008年11月1日現在)

国名	学部 学生	大学院学生		学部 研究生	短期 交換 留学生	大学院 外国人 研究生	大学院 研究生	大学院 特別研 究学生	計
		修士	博士						
バングラディシュ	1								1
ミャンマー		1							1
タイ	12	4	1			1			18
マレーシア	3								3
シンガポール	3		1		1				5
インドネシア	2	1				1			4
フィリピン		1			1				2
中国(香港)		1	2		1				4
韓国	20	30	59		1	16			126
モンゴル	6	1				1			8
ベトナム	(1) 17		1		1	1			(1) 20
中国	(1) 35	16	25		4	13	1	3	(1) 97
マカオ	3								3
台湾		7	10			5		1	23
イラン			1						1
トルコ			1			1			2
イスラエル						1			1
エジプト			1						1
タンザニア	1								1
オーストラリア	(1) 2	1	1			1			(1) 5
ニュージーランド		1	1		2	1			5
カナダ	1		2		1	3			7
アメリカ合衆国	4	2	1		4	4		1	16
ブラジル	(2) 4		1			1			(2) 6
パラグアイ	(1) 1								(1) 1
チリ					1				1
ペルー			1			3			4
フィンランド	1								1
イギリス			1		2				3
ルクセンブルグ			1						1
オランダ			1						1
ドイツ		1	1			2			4
フランス		1	4		3			1	9
スペイン		1							1
イタリア			1		1	2			4
スイス					1				1
ポーランド		1	1						2
チェコ			1						1
ハンガリー			1						1
ルーマニア		1	1			1			3
ブルガリア	(1) 2					1			(1) 3
ロシア	3	3	4			2			12
スロバキア			1						1
ウクライナ		1							1
ウズベキスタン			1						1
カザフスタン	(1) 1								(1) 1
ベラルーシ	1								1
スロベニア	1		1						2
キルギス		1							1
計	(8) 124	76	129	0	24	61	1	6	(8) 421

※本表の「留学生」とは「出入国管理及び難民認定法」別表第1に定める「留学」の在留資格を受けている外国人学生を示す。

※学部学生数の()付数字は後期課程学生を内数で示す。

付属資料2

シンポジウム

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
第1回東大生によるサイエンスショー「空気は見えるか!?!」	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.1.18	滝川洋二(東京大学), 林衛(東京大学)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	運営: 全学自由研究ゼミナール「心を動かす表現法: 科学メディア・理科実験の研究」受講生
海外先進教育実践支援プログラムシンポジウム 「初年次教育の可能性」 英語, 日本語(同時通訳)	アドミニストレーション棟 3階学際交流ホール 2008.3.12	アレキサンダー・アスティン(元UCLA高等教育研究所所長), 足立寛(立教大学総長室調査役), 新妻智子(東京大学教養学部等事務部教務課長), 八木宏晃(東京大学教養学部広域科学科4年), 山本泰(東京大学教養学部附属教養教育開発機構執行委員長), 長谷川壽一(東京大学教養学部副学部長)	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部	共催: 東京大学教養学部附属教養教育開発機構
現代GPI国際シンポジウム 「ICTを活用したアクティブラーニング」 英語, 日本語(同時通訳)	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.3.17	小島憲道(東京大学), 永田敬(東京大学), Peter Dourmashkin(MIT), Daniel Gilbert(Stanford University), 美馬のゆり(公立はこだて未来大学), Tom Gally(東京大学), 山内祐平(東京大学), 望月俊男(東京大学)	東京大学教養学部・情報学環・大学総合教育研究センター	共催: 東京大学教養学部附属教養教育開発機構 後援: 東京大学教育企画室TREEプロジェクト, 東京大学教養学部附属教養教育開発機構教養教育社会連携(ベネッセコーポレーション)寄付研究部門
DESK国際シンポジウム 「欧州統合の半世紀と東アジア共同体」 ドイツ語, フランス語, 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール, 日仏会館 2008.4.18-19	R. フランク(パリ第1大学), H. ケルブレ(ベルリン・フンボルト大学), 川嶋周一(明治大学), J. シルト(トリア大学), C. ルケース(国立政治学院), J. F. エック(リール第3大学), W. ビューラー(ミュンヘン工科大学), 平野千果子(武蔵大学), H. M. ボック(カッセル大学), P. モネ(社会科学高等研究院), 西山暁義(共立女子大学), 田中明彦(東京大学), 深川由起子(早稲田大学), 坪井善明(早稲田大学)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター, 日仏会館, 東京大学現代ヨーロッパ経済史研究教育ユニット	
UTCP若手研究者シンポジウム 「いま, 共生の地平を問う」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.4.20	串田純一(東京大学), 古橋紀宏(東京大学), 大竹弘二(UTCP), 西山雄二(UTCP)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
「映画／帝国」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム3 2008.4.22	畠山宗明(東京大学), 李英載(UTCP), 前田晃一(神戸市外国語大学), 吉本光宏(ニューヨーク大学東アジア学科准教授)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
複雑系生命システム研究センター報告会 日本語	駒場キャンパス アドバンスストラボラトリー大会 議室 2008.4.26	金子邦彦(東大複雑系センター), 菅原正(東大総合文化), 道上達男(東大総合文化), 山本義春(東大教育), 若本祐一(東大複雑系センター), 磯崎行雄(東大総合文化), 池上高志(東大総合文化)	東京大学複雑系生命システム研究センター東京大学複雑系生命システム研究センター	
Intercultural and Interreligious Learning in a German Perspective 英語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.5.13	Peter Müller(カールスルーエ教育大学, 哲学及び神学研究室教授), Anita Muller-Friese(フランクフルト大学私講師)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
UTCPワークショップ 「ユダヤとイスラエルのあいだ」	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム2 2008.5.27	國分功一郎(高崎経済大学), 勝沼聡(UTCP), 早尾貴紀(UTCP)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
International Conference: From Painlevé to Okamoto	数理科学研究科大講義室 2008.6.9-13	W. Basler (Ulm), P. Boalch (ENS, Paris) 他	岩崎克則(九大), 木村弘信(熊本大), 坂井秀隆(東大数理)	
国際ジャーナリズム寄付講座創設記念シンポジウム 「2008年の選択—世界はどこへ行くのか」 日本語	駒場キャンパス 900番教室 2008.6.14	小倉和夫(国際交流基金理事長), 谷内正太郎(前外務事務次官・東大客員教授), 伊熊幹雄(読売新聞国際問題編集委員・東大客員教授), 古城佳子(東大教授)	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座	
UTCPワークショップ 「雑草・空隙・風流—彫刻家須田悦弘との対話」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム2 2008.6.18	須田悦弘(彫刻家), デンニツア・ガブラコヴァ(学術振興会特別研究員), 井戸美里(UTCP)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
スロヴェニア言語・文化シンポジウム: 500th Anniversary of the Birth of Primož Trubar & Slovenian EU Presidency 2008 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.6.21	柴宜弘(東京大学), 山本真司(東京外国語大学), 尾田泰彦(東京基督教大学), Jelisava Dobovšek-Sethna(東京外国語大学), 野町素己(北海道大学), Andrej Bekeš(リュブリャナ大学), 阿部卓也(関西学院大学)	スロヴェニア言語文化研究会	後援: 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
「人間の安全保障」の世紀へ (Human Security Now: Agenda for the 21st Century) 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.6.28	緒方貞子(国際協力機構理事長), 柴宜弘(東京大学大学院総合文化研究科), 林文代(東京大学大学院総合文化研究科), 森山工(東京大学大学院総合文化研究科), 萱野稔人(津田塾大学国際関係学科), 遠藤貢(東京大学大学院総合文化研究科), 丸山真人(東京大学大学院総合文化研究科), 長有紀枝(ジャパン・プラットフォーム代表理事)	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 財団法人東京大学出版会	共催: 東京大学教養学部附属教養教育開発機構, KOMED

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
国際研究集会 「Arithmetic and Algebraic Geometry」	数理学研究科大講義室 2008.7.3-6	森重文(京大), Frans Oort(Utrecht)他	寺柚友秀(東大数理), 斎藤政彦(神戸大), 清水勇二(ICU)	
科学読み物シンポジウム 「子供のころから科学の本を楽しもう」	駒場キャンパス 13号館1313教室 2008.7.5	滝川洋二(東京大学), 猿山直美(岩波書店), 松田良一(東京大学), 森達夫(福音館), 原田佐和子(科学読物研究会), 田克弘(東京学芸大学附属中学校), 田中久雄(ファラデーの本棚), 吉田のりまき, 土井美香子	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	共催: NPO法人ガリレオ工房
国際シンポジウム 「共生のための中国哲学——台湾研究者との対話」 中国語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.7.12	小林康夫(UTCP), 石井剛(東京大学), 佐藤将之(台湾大学哲学系助教授), 鄭毓瑜(台湾大学中文系教授), 喬志航(UTCP), 信原幸弘(UTCP), 杜保瑞(台湾大学哲学系副教授), 中澤栄輔(UTCP), 村田雄二郎(東京大学), 曾漢塘(台湾大学哲学系副教授兼主任), 蔡耀明(台湾大学哲学系副教授), 後藤絵美(東京大学), 王前(東京外国語大学), 林義正(台湾大学哲学系教授), 黃冠閔(中央研究院中國文哲所助研究員)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 台湾大学哲学系	
高校生のための現代数学講座	玉原国際セミナーハウス 2008.7.19, 26	大島利雄, 関口英子, 坪井俊, 野口潤次郎(東大数理)	坪井俊(東大数理)	群馬県下の高校生対象(協力・群馬県立沼田高等学校)
Workshop on Accessory Paramaters	玉原国際セミナーハウス 2008.8.4-7	石崎晋也(東大数理), 示野信一(岡山理大)他	大島利雄(東大数理), 原岡喜重(熊本大)	
代数幾何セミナー2008	玉原国際セミナーハウス 2008.8.11-15	安田健彦(鹿児島大), 渡辺敬一(日大)他	川又雄二郎(東大数理), 小林正典(首都大), 鈴木香織(横浜国大), 齋藤夏雄(広島市大)	
シンポジウム エンハンスメントの哲学と倫理 —脳神経科学と人類の未来のあり方を問う— 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.8.23	小林康夫(UTCP), 村田純一(UTCP), 石原孝二(UTCP), 大隅典子(東北大学), 信原幸弘(UTCP), 島蘭進(東京大学)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
JSPS-RFBR 日露ワークショップ Harmonic Analysis on Homogeneous Spaces and Quantization	玉原国際セミナーハウス 2008.8.24-30	伊師英之, 落合啓之(名大)他	V. Molchanov(Tambov), 伊師英之(名大), 野村隆昭(九大), 大島利雄(東大数理)	
学生シンポジウム 『写真の逆説』 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.9.1	博士課程大学院生を中心に6名	表象文化論研究室	
リー理論に現れる代数に関する研究集会	玉原国際セミナーハウス 2008.9.7-12	J. Chuang (City, London), 鈴木武史(岡山大)他	有木進(京大)	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト	主催者	その他
アメリカ太平洋とイギリス帝国: The British Empire, Australia and the Americas 英語, 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.9.13	フィリップ・ベル(ニューサウスウ ェールズ大学名誉教授), アラン・テ イラー(カリフォルニア大学デイヴ イス校教授), 福嶋輝彦(桜美林大学 法学・政治学系教授・学系長), デイ ヴィッド・カーター(クイーンズラ ンド大学/東京大学アメリカ太平洋 地域研究センター客員教授)	東京大学大学院総合文化研究科 附属アメリカ太平洋地域研究セ ンター	
群馬県高校生玉原数学セミナー	玉原国際セミナーハウス 2008.9.13-15	坪井俊(東大数理)	科学技術振興機構(JST)「サイエ ンス・パートナーシップ・プロ ジェクト事業(講座型学習活動)」	
東京無限可積分セミナー『ソリ トン方程式とパルヴェ方程式 (差分化と量子化)』	玉原国際セミナーハウス 2008.9.15-18	岩尾慎介, 名古屋創(東大数理), 土谷 洋平(大原大学院大)	神保道夫, 白石潤一(東大数理), 山田裕二(立教大)	
The End of Television in Australia 英語, 日本語	追手門学院大学 5号館3階5301教室 2008.9.18	香取淳子(長崎県立大学シーボルト 校教授), フィリップ・ベル(ニュー サウスウェールズ大学名誉教授)	追手門学院大学オーストラリア 研究所	共催: アメリカ太平洋地域研究センター
公開共同研究「哲学と大学」ワ ークショップ 「大学の名において私たちは何 を信じることを許されているの か」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.9.19	竹内綱史(学振特別研究員), 宮崎裕 助(新潟大学), 西山雄二(東京大学), 大河内泰樹(京都産業大学), 齊藤涉 (大阪大学), 藤田尚志(学振特別研究 員)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP)	
トランスアクションとしての医 学と他律的近代化 ——ドイツ, 日本, コリア, 台湾 日本語, ドイツ語	「駒場ファカルティ・ハウス」 セミナー室 2008.9.20	A・ラービッシュ(デュッセルドル フ大学), H・ショット(ボン大学), H・ファンゲラウ(デュッセルドル フ大学), N・グミュアー(ハレ大学), C・オーバーレンダー(ハレ大学), 鈴木晃仁(慶應大学), 香西豊子(東京 大学), 永島剛(専修大学), 金會恩(テ キサスA&M大学), 郭文華(陽明大学), 飯島涉(青山学院大学), 市野川容孝 (東京大学), 酒井シヅ(順天堂大学)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP)	
『脳神経倫理学の展望』合評会 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.9.27	河野哲也(立教大学), 村田純一 (UTCP), 高橋久一郎(千葉大学), 直 江清隆(東北大学), 石原孝二 (UTCP)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP)	
沼田市中生者のための玉原数学 教室	玉原国際セミナーハウス 2008.9.28	坪井俊, 桂利行(東大数理)	坪井俊(東大数理)	数理科学研究科・沼田市教育委員会学校教育課共催
Divided Memories: History Text- books and the War in Asia / 東ア ジアにおける戦争の記憶と歴史 教科書 日本語, 英語, 中国語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.10.2	三谷博(東京大学教授), 北岡伸一(東 京大学教授), 月脚達彦(東京大学准 教授), 川島真(東京大学准教授)他	スタンフォード大学アジア太平 洋研究センター/東京大学大学 院総合文化研究科附属アメリカ 太平洋地域研究センター, 東京 大学大学院総合文化研究科地域 文化研究専攻	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
第5回高木レクチャー	数理科学研究科大講義室 2008.10.4-5	J.-P. Bourguignon (CNRS-IHES), E. Ghys (CNRS-ENS Lyon), M. Kontsevich (IHES), N. Nekrasov (IHES)	小野薫(北大), 河東泰之(東大数理), 小林俊行(東大数理), 斎藤毅(東大), 中島啓(京大)	日本数学会・数理科学研究科共催
国際シンポジウム Philosophies de l'université et conflit des rationalités	アルゼンチン国立図書館 (ブエ ノスアイレス) 2008.10.6-7	Yuji Nishiyama (UTCP), Yasuo Kobayashi (UTCP), Patrice Vermeren (Université de Buenos Aires)	l'Institut Germain de l'Université de Buenos Aires, l'Agencia Nacional por la Ciencia y la Tecnología (ANCyT), UTCP, Centro Argentino-Canadiense de Buenos Aires (CEAC), la Section Culturelle de l'Ambassade du Canada à Buenos Aires.	
シンポジウム 「駒場で『食』を考える」 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.10.7	玉村豊男(ヴィラデストガーデンファームアンドワイナリー), 鈴木啓二(東京大学), 渡邊雄一郎(東京大学), 太田恵理子(キリン食生活文化研究所)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	共催: キリンホールディングス株式会社
日本学術振興会日仏科学フォーラム 「Perspectives in mathematical science」	数理科学研究科・慶應義塾大学 2008.10.7-9	森田茂之(東大), J.-P. Bourguignon (IHES)他	J.P. Bourguignon (IHES), 広中平祐(数理科学振興会), 松本幸夫(学習院大), 河東泰之(東大数理), 斎藤毅(東大数理), 坪井俊(東大数理), 前田吉昭(慶應義塾大)	IHES・東大・慶應義塾大・日本数学会共催
シンポジウム 「大学教育に『食』を摂取する：初年次活動プログラムの新しい可能性(FOOD IN EDUCATION: How to Nurture Insight and Knowledge on Eating)」 英語, 日本語(同時通訳)	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.10.11	Ted A. Mayer (Harvard University), 伊藤文彰(ルヴェンソンヴェール駒場), Theresa A. McCulla (Harvard University), 小島憲道(東京大学), 渡邊雄一郎(東京大学)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	
気候変動とモビリティ: W. Tiefensee 大臣講演会& パネルディスカッション ドイツ語, 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.10.22	W. Tiefensee (ドイツ連邦共和国交通・建設・都市開発大臣), 中村英夫(武蔵工業大学), 山口光恒(東京大学)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター, ドイツ学術交流会, ドイツ大使館	
環境三四郎15周年企画公開シンポジウム 「環境の世紀を切り拓く〜キャンパスからの変革」	本郷キャンパス 安田講堂 2008.10.25	小宮山宏(東京大学), 小林光(環境省), 荒川あゆみ(AGS-UTSC), 泉岳樹(環境三四郎0期), 河原圭(環境三四郎5期), 広瀬雄一郎(環境三四郎11期), 巻島隆雄(環境三四郎), 小川拓哉(環境三四郎), 竹内文乃(環境三四郎), 野上大介(環境三四郎)	環境三四郎	後援: 環境省, 東京大学AGS, 東京大学サステイナビリティ学連携研究機構(IR3S)
研究集会 「微分同相群と葉層構造」	玉原国際セミナーハウス 2008.10.27-31	松田能文(JSPS-東大数理), 三松佳彦(中央大)他	坪井俊(東大数理)	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト	主催者	その他
UTCPワークショップ レオ・シュトラウスのアクチュアリティ 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム3 2008.10.29	大竹弘二(UTCP), 國分功一郎(高崎経済大学), 合田正人(明治大学)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
世俗化する宗教 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.11.1	大貫隆, 古矢旬, 羽田正, 黒住眞, 安岡治子, 大川謙作, 後藤絵美	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻, 科学研究費補助金基盤研究(A)アブラハムの伝統の臨界: 三大一神教の哲学, 神学・政治論とその外部の地域文化研究	共催: 東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
モダニズム受容の諸相—『詩と詩論』とその周辺 日本語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2008.11.1	エリス俊子, 林少陽, 田尻芳樹, 山田広昭, 星磐守之, 佐藤元状, 脇田裕正	翻訳と文化横断性についての統合的研究(科学研究費補助金基盤研究B), 文学・芸術の社会的統合機能の研究(LAC)(田尻芳樹)	
人間の安全保障と国際法 Human Security and International Law 英語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.11.3	特別講演者—小和田桓(国際司法裁判所(ICJ)判事), 小寺彰(総合文化研究科教授), 濱田邦夫(弁護士, 元最高裁判事), フィリップ・オステン(慶應義塾大学法学部准教授), 野口元郎(国連アジア極東犯罪防止研修所教官, 外務省国際法局付検事, カンボジア特別法廷最高裁判所国際判事), 長有紀枝(難民を助ける会理事長), ヨハン・セルス(国連難民高等弁務官事務所駐日代表), 上井香苗(ヒューマンライツ・ウォッチ東京ディレクター), 戸田隆夫(JICA研究所上席研究員)	大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)	共催: KOMED, 東京大学教養学部附属教養教育開発機構, 東京大学教養学部アイコム(AIKOM)委員会
第10回東アジア四大学フォーラム北京会議総長セッション, 北京フォーラム 東アジアにおける大学の教育交流について(総長セッション) The Harmony of Civilization and Prosperity for All —The Universal Value and the Development Trend of Civilization(北京フォーラム) 総長セッション…日本, 中国, 韓国, ベトナム語 北京フォーラム…英語	総長セッション…北京大学 北京フォーラム…釣魚台賓館大会議室, 北京大学 2008.11.6-9	許智宏XU Zhihong(北京大学学長), LEE Jang-Moo(ソウル大学校総長), 小宮山宏KOMIYAMA Hiroshi(東京大学総長), MAI Trong Nhuan(ベトナム国家大学ハノイ校学長), 古田元夫(総合文化研究科教授), 田中明彦(総合文化研究科教授), 西中村浩(総合文化研究科教授), 山脇直司(総合文化研究科教授), 能登路雅子(総合文化研究科教授), 刈間文俊(総合文化研究科教授)	北京大学	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
DESKセミナー 「風力発電と代替エネルギー政策」 日本語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2008.11.7	梶英輔(北里大学), 荒川忠一(東京大学), 飯田誠(東京大学), 森利男(北海道苫前町長), 森井裕一(東京大学), 西澤真理子(リテラジヤパン), 吉田典之(読売新聞), 杉浦美香(産経新聞), 東健太郎(法政大学非常勤講師)	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター, ドイツ学術交流会	
UTCPワークショップ 生／性と権力の制度を読み解く 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.11.7	後藤絵美(日本学術振興会/UTCP), 木村朗子(津田塾大学), 萱野稔人(津田塾大学), 市野川容孝(東京大学), 内藤まりこ(UTCP)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
The Use of Objects and Instruments in the History of Science 英語	駒場博物館 自然科学博物館 2008.11.8	Bernard S. Finn(Smithsonian National Museum of American History), 夏目賢一(金沢工業大学), 山口まり(東京大学大学院総合文化研究科), 岡本拓司(東京大学大学院総合文化研究科)	日本科学技術史学会, 駒場博物館	
国際問題としての国家破綻 (State Failure as an International Problem) 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.11.8	柴宜弘(東京大学大学院総合文化研究科), 中井和夫(東京大学大学院総合文化研究科), 遠藤貢(東京大学大学院総合文化研究科), 石田淳(東京大学大学院総合文化研究科), 酒井啓子(東京外国語大学大学院地域文化研究科), 田中浩一郎((財)日本エネルギー経済研究所中東研究センター・センター長)	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 科学研究費補助金(基盤研究(A))「破綻国家」の生成と再生をめぐる学術研究」	共催: 科学研究費補助金(基盤研究(C))「国際秩序と国内秩序の共振に関する包括的研究」
科学読み物シンポジウム 「子どもに伝えたい! 科学の本の楽しさ」	駒場キャンパス 7号館743教室 2008.11.8	滝川洋二(東京大学), 海部宜男(放送大学), 高田裕行(国立天文台), 松尾みずほ(つくば市立二の宮小学校), 宗田敦美(つくば市立沼崎小学校), 坂口美佳子(科学読物研究会)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	共催: NPO法人ガリレオ工房
Space-Time Mapping Workshop 英語	駒場キャンパス 18号館コラボレーションルーム1 2008.11.8-9	坂原茂(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻・教授), 田窪行則(京都大学文学研究科・教授), 柴谷方良(Rice University. 教授), Rafael Nunez(UCSD. 准教授), Kevin Moore(San Jose State University. 講師), 古賀裕章(本研究科言語情報科学専攻・博士課程), 野田高広(同)	坂原茂	
学生シンポジウム 「権力の表象(1): イメージの作法」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム3 2008.11.21	博士課程大学院生を中心に7名	表象文化論研究室・東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト	主催者	その他
Forum 'Philosophie et Éducation' Le droit à la philosophie: la déconstruction des institutions de recherche et d'enseignement à l'époque de la globalisation フランス語	パリ高等師範学校, 国際哲学コ レージュ (フランス, パリ) 2008.11.24-25	Michel Deguy (Professeur émérite Uni- versité de Paris 8), Kazumichi Hashi- moto (Université de Tokyo), Yoshinori Tsuzaki (Université de Marc Bloch- Strasbourg), Yuji Nishiyama (UTCP) Yasuo KOBAYASHI (UTCP) Gisèle, Berkmann (CIPh) Francisco Naishtat (Université de Buenos Aires, CIPh) Marco Filoni (Polytechnique de Milan) Hisashi Fujita (Université de Hitotsub- ashi) (UTCP, パリ高等師範学校, 国 際哲学コレージュの共催)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP), パリ高等師 範学校, 国際哲学コレージュ	
Workshop on 「Stochastic Analysis and Statistical Inference III」	数理科学研究科123講義室 2008.11.26-27	M. Soerensen (Copenhagen), Yury Kutoyants (Maine) 他	吉田朋広(東大数理), 西山陽一 (統数研)	
シンポジウム 「21世紀国際ライシテ宣言とア ジア諸地域の世俗化」 日本語, フランス語	駒場キャンパス アドミニストレーション棟 学際交流ホール 2008.11.28	Jean Bauberot(フランス高等研究院 名誉院長), 羽田正(東京大学東洋文 化研究所, UTCP), 増田一夫(東京大 学大学院総合文化研究科), 島蘭進 (東京大学大学院人文社会系研究科), 中島隆博(東京大学大学院総合文化 研究科, UTCP), 近藤光博(日本女子 大学文学部)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP)	共催: 科学研究費補助金 基盤研究(A)アブラハムの伝統 の臨界: 三一大神教の哲学, 神学・政治論とその外 部の地域文化研究
科学技術インタープリターによ る社会への発信: 修了生からの メッセージとプログラム間の交 流 日本語	駒場キャンパス 13号館1313号室 2008.11.29	黒田玲子(東京大学教授, 科学技術イ ンタープリター養成プログラム代 表), 瀬名秀明(作家, 東北大学特任教 授), 倉持哲義(アステラス製薬株式 会社), 竹沢悠典(名古屋大学博士研 究員), 古谷美央(医科学研究所), 守 真奈美(北海道大学創成科学共同研 究機構研究支援部教務職員), 漆原次 郎(フリー記者)	東京大学科学技術インタープリ ター養成プログラム(代表 黒田 玲子)	
behind the seen 熟達者の表現 を支えるもの 日本語	駒場キャンパス5 号館525教室 2008.11.29	岡田猛, 植田一博, 丸山慎, 田中純(以 上, 東京大学), 森田ゆい(NPO法人 日本伝統芸能教育普及協会(むすび の会)) 吉田勘弥, 吉田清五郎, 桐竹紋 臣(文楽協会)	岡田猛, 植田一博(以上, 東京大 学), 駒場博物館	
国際シンポジウム Bacteria made Organelles made Eukaryotic Cells	駒場キャンパス 数理科学研究棟大講義室 2008.11.29-30	海外招待者: Charles F. Delwiche, Colin R. Harwood, Andreas P. Weber 国内の主な講演者: 黒岩常祥, 田中 寛, 河村富士雄, 佐藤直樹	科研費学術創成研究(代表者 田中寛)	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト	主催者	その他
UTCPセミナー 「集合知,あるいは,新自由主義 の文化的論理Wikipediaにみる社 会知の変容とネットワーク社会 としての日本社会」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1 2008.12.2	木村忠正(UTCP),石原孝二(UTCP), 村田純一(UTCP),門林岳史(日本学 術振興会・東京大学),吉田敬 (UTCP)	東京大学グローバルCOE「共 生のための国際哲学教育研究セ ンター」(UTCP)	
Representation of Pain in Beckett and His Contemporaries 英語	駒場キャンパス 18号館 コラボレーションルーム1 2008.12.6	田尻芳樹,対馬美千子,堀真理子, Mark Nixon	現代ヨーロッパ文学・演劇・思 想における身体的痛みの共有可 能性の総合的研究(科学研究費 補助金萌芽研究),文学・芸術の 社会的統合機能の研究(LAC) (田尻芳樹)	
研究集会 「Algebras, Groups and Geometries 2008」	数理科学研究科大講義室 2008.12.10-11	吉川謙一(東大数理),脇本実(九大名 誉教授)他	松尾厚(東大数理),山内博(愛知 教育大)	
代数幾何学国際研究集会 「COE-COW Tokyo」	数理科学研究科056講義室 2008.12.15-19	藤野修(名大),T. Logvinenko(Liverpool) 他	川又雄二郎(東大数理),M. Reid (Warwick)	
国際研究集会 「モチーフの勉強会第4回」	数理科学研究科大講義室 2008.12.15-19	F. Morel(Mnchen),L. Hesselholt(名大) 他	T. Geisser(USC),木村俊一(広 大),佐藤周友(名大),志甫淳(東 大数理),山下剛(Nottingham)	
平和構築と人権: 「カンボジア特別法廷の挑戦」 日本語	駒場キャンパス 7号館3階742教室 2008.12.19	熊岡路矢(カンボジア市民フォーラ ム/東京大学客員教授),野口元郎 (カンボジア特別裁判所上級審判事), 山本晋平(弁護士/ヒューマンライ ツ・ナウ),デイスカッサント:長谷 川祐弘(法政大学教授),コーディネ ーター:東澤靖(弁護士/ヒューマ ンライツ・ナウ理事)	ヒューマンライツ・ナウ/東京 大学大学院総合文化研究科「人 間の安全保障」プログラム (HSP)	後援: カンボジア市民フォーラム
複雑系生命システム研究センタ ー研究会「多次元複雑システム の観測科学」 日本語	柏キャンパス 基盤棟2階大会議室 2008.12.20	岡川真人(東大新領域),鳥海光弘(東 大新領域),能瀬聡直(東大新領域), 大森敏明(東大新領域),福島孝治(東 大総合文化),澤井哲(東大総合文化)	東京大学複雑系生命システム研 究センター,東京大学大学院新 領域創成科学研究科複雑理工学 専攻	
第10回東アジア四大学フォーラ ム北京会議ワーキングセッション BESETOHA教育交流ワークシ ョップ 日本語,中国語,韓国語,ベトナム 語	北京和園景逸大酒店 2008.12.22-25	〈北京大学〉李岩松(校長助理(国際 合作部部長)),侯建軍(網絡教育學院 院長),郭文革(教育学院教育技術系 副教授(専門:E-learning)),賈積有 (教育学院教育技術系副教授(専門: コンピュータ支援教育)),蘇彦捷(元 培學院副院長),潘慶德(国際合作部 副部長) 〈ソウル大学〉KANG Myung Koo(姜 明求)基礎教育院院長 〈東京大学〉小島憲道(大学院総合文 化研究科研究科長),刈間文俊(大学	北京大学	

題目/使用言語	会場/期日	主なパネリスト	主催者	その他
		院総合文化研究科教授), 西中村浩(大学院総合文化研究科教授), 兵頭俊夫(大学院総合文化研究科教授), 石井剛(大学院総合文化研究科准教授), 岩月純一(大学院総合文化研究科准教授), 月脚建彦(大学院総合文化研究科准教授), 清水剛(大学院総合文化研究科准教授), 矢作直之(教養学部等事務部経理課副課長) (ベトナム国家大学ハノイ校) Nguyen Ngoc Thanh(経済大学副学長), Nguyen Nam Hai(工科大学コンピュータ・センターセンター長(E-lecture担当)), Phan Hai Linh(人文社会科学大学東洋学部), Bui Thi Hong Lam(国際協力部職員)		
The Third BESETO Philosophy Conference "Philosophy in the East Asian context: Knowledge, Action, Death, and Life" 英語	駒場キャンパス 18号館4階 コラボレーションルーム1~3 2009.1.10-11	村田純一(UTCP)ほか	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 「死生学の展開と組織化」(DAL)	
入門講義とワークショップ 'Analytic Semigroups and Related Topics-on the occasion of the centenary of the birth of Professor Kôzaku Yosida'	数理科学研究科002・270・128 講義室 2009.1.13-16	G. Simonett (Nashville), A. McIntosh (Australian NU) 他	儀我美一(東大数理), 神保秀一(北大), 八木厚志(阪大), 山本昌宏(東大数理)	北海道大学数学連携研究センター後援
国際研究集会 「Arithmetic and Algebraic Geometry related to Moduli Spaces」	数理科学研究科大講義室 2009.1.19-23	G. van der Geer (Amsterdam), L. Illusie (Paris XI) 他	G. van der Geer (Amsterdam), 桂利行(東大数理), 寺柚友秀(東大数理), 金銅誠之(名大)	
第2回東大生によるサイエンスショー「ニュートンの眼, アイシユタインの閃き」	駒場キャンパス アドミニストレーション棟3階 2009.1.26	滝川洋二(東京大学), 林衛(東京大学)	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	運営: 全学自由研究ゼミナール「心を動かす表現法: 科学メディア・理科実験の研究」受講生
Mathematics: From Today to Tomorrow — Global COE Opening Symposium at Tokyo —	数理科学研究科大講義室 2009.1.30-2.1	C. Hacon (Utah), 広中平祐(数理科学振興会), V. Jones (Berkeley), Ngô B.C. (IAS), W. Werner (Paris-Sud)	河東泰之, 川又雄二郎, 小林俊行, 斎藤毅(東大数理)	
第10回東アジア四大学フォーラム学生パネル 若者と労働—混迷する世界に生きる— 英語	東京大学駒場アクティブ・ラーニング・スタジオ(KALS) 2009.2.5-8	深川由起子(早稲田大学教授), 東京大学・北京大学・ソウル大学・ベトナム国家大学の学部学生, AIKOM留学生	東京大学東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ(EALAI)	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
カンボジア：開発の光と影 日本語	駒場キャンパス 学際交流ホール 2009.2.7	コル・パンニャー(カンボジア自由公正選挙委員会(COMFREL)事務局長), 田坂興亜(カンボジア市民フォーラム共同代表世話人・アジア学院(ARI)理事), 吉岡建治(カンボジア市民フォーラム世話人・(特活)JHP学校をつくる会理事), 宇井志緒利(カンボジア市民フォーラム世話人・(財)アジア保健研修所(AHI)研修担当), 坂野一生(カンボジア市民フォーラム世話人・カンボジア司法省アドバイザー), 山田裕史(カンボジア市民フォーラム事務局長・上智大学アジア文化研究所特別研究員), 熊岡路矢(カンボジア市民フォーラム共同代表世話人・(特活)日本国際ボランティアセンター(JVC)理事)	カンボジア市民フォーラム／東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)	
Complex Geometry Workshop 2009 Tokyo	数理学研究科056講義室 2009.2.13-14	大沢健夫(名大), M. Paün(Nancy) 他	高山茂晴(東大数理)	
ワークショップ 「人文学にとって現場とは何か？」	研究空間(スユ+ノモ)(韓国, ソウル) 2009.2.15	西山雄二(UTCP), 高秉権(スユ+ノモ), 國分功一郎(高崎経済大学), 李洙榮(スユ+ノモ)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 研究空間(スユ+ノモ)	
ワークショップ 「政治的思考の地平」	延世大学ウィダン館 313号室(韓国, ソウル) 2009.2.16	西山雄二(UTCP), チョン・スンファ(延世大学), 早尾貴紀(UTCP), ハン・ボヒ(延世大学), 森田團(UTCP), 大竹弘二(UTCP), キム・ハン(高麗大学)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 延世大学韓国学術研究院	
Writing Centers in Japan: A Colloquium 英語	駒場キャンパス 18号館1階メディアラボ2 2009.2.17	北星学園大学, 大阪女学院大学, 上智大学, 津田塾大学, 早稲田大学, および東京大学のライティングセンター関係者	東京大学教養学部附属教養教育開発機構	
東京大学現代GPシンポジウム 2009 「アクティブラーニングのための学習空間を創る」	駒場キャンパス 18号館ホール 2009.2.20	山内祐平(東京大学), 工藤和美(建築家, シーラカンスK&H代表, 東洋大学), 岸本章弘(ワークスケープ・ラボ代表, ECIFFO編集長), 筑紫一夫(東京大学), 永田敬(東京大学)	東京大学教養学部, 大学院情報学環, 大学総合教育研究センター	共催: 東京大学教養学部附属教養教育開発機構 後援: 東京大学教育企画室教育環境リデザインプロジェクト
UTCP対談: 「新しい普遍性」を求めて—ポストホロコースト世代とポストコロナル世代の対話	駒場キャンパス アドミニストレーション棟 学際交流ホール 2009.3.4	サラ・ロイ(ハーバード大学), 徐京植(作家・東京経済大学), 岡田泰平(神奈川大学)	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)	
GCOE Spring School on Representation Theory	数理学研究科123講義室 2009.3.12-17	Bernhard Krötz (Hannover), Salah Mehdi (Paris) 他	小林俊行(東大数理)	

題目／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
アメリカの自由—過去と現在— American Freedom: Past and Present 英語, 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2009.3.20	肥後本芳男(同志社大学教授), 横山良(神戸大学教授) 古矢旬(東京大学CPAS教授), エリック・フォーナー(米国コロンビア大学教授)	東京大学大学院総合文化研究科 附属アメリカ太平洋地域研究センター	
国際シンポジウム 「ヨーロッパ近世における1680年代の再検討——名譽革命からの射程」 英語	明治大学(駿河台キャンパス) リバティタワー8階1083番教室 2009.3.21	Tony Claydon(ウェールズ大学), David Onnekink(ユトレヒト大学・レイデン大学), 勝田俊輔(岐阜大学), 大峰真理(千葉大学)	科学研究費補助金基盤研究B(代表: 西川杉子) 「近世ヨーロッパにおける宗教・政治・商業空間の構造転換」	

講演会

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Miglena Angelova	University Pierre & Marie Curie (UPMC) - Paris 6/ Professor	Heterogeneous Membranes and Some Physical Chemistry of Membrane Interactions. The Role of Lipid (Rafts) 英語	駒場キャンパス I アドバンストラボラト リー410大会議室 2008.3.14	菅原 正
Robin Hicks	University of Victoria (Canada)/Professor	Verdazyl Radicals: Metals, Magnetochemistry, and More 英語	駒場キャンパス I アドバンストラボラト リー410大会議室 2008.3.19	菅原 正
李 全新	中国科学技術大学/教授	「中国における持続可能社会を目指したバイオマスエネルギーの有効利用」	駒場キャンパス 105号館213号室 (10521教室) 2008.4.4	東京大学NEDO新環境エネルギー科学 創成特別部門
石倉 昇 黒瀧正憲 梅沢由香里 兵頭俊夫 松田 剛	日本棋院 日本棋院 日本棋院 東京大学/教授 東京大学/特任教授	囲碁の魅力Ⅱ「わかりやすい囲碁入門とは」	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.4.5	東京大学教養学部附属教養教育開発機 構
Dorothee de Nève	ハレ・ヴィッテンベルク大学/准教授	DESK講演会：市民と国家の関係ー比較の視点からー 英語	18号館コラボレーシ ョ ンルーム3 2008.4.9	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究セン ター (DESK)
Muhammad Haji Salleh	詩人, 批評家	Possibilities of Contemporary Poetry 英語	101号館2階研修室 2008.4.11	東京大学グローバルCOE「共生のた めの国際哲学教育研究センター」 (UTCP)
Theo Sommer	デイ・ツァイト紙/元共同発行人	DESK講演会：European Supermarket, Super State, or Super Flop ? 英語	18号館コラボレーシ ョ ンルーム1 2008.4.15	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究セン ター (DESK)
美馬達哉	京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センタ ー/助手	「脳と主体をめぐる鏡の国の冒険」	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.4.15	東京大学教養学部附属教養教育開発機 構, 東京大学・グローバルCOE共生の ための国際哲学教育研究センター
米本 昌 平澤昭裕 松村幾敏	東京大学先端科学技術研究センター/特任教授 東京大学先端科学技術研究センター/教授 新日本石油株式会社/代表取締役・副社長	「地球温暖化問題への取り組み」	新丸の内ビルディング 10F エコツェリア サロンゾーン 2008.4.18	東京大学NEDO新環境エネルギー科学 創成特別部門

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
黒田玲子 (4.24)	東京大学/教授, 科学技術インタープリター養成プログラム代表	科学技術インタープリター養成プログラム 2008年春期社会人講座	駒場キャンパス 1号館109号室	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム
松田良一 (5.8)	東京大学/准教授	日本語	2008.4.24~7.3 全7回	
嶋田正和 (5.22)	東京大学/教授			
石浦章一 (5.29)	東京大学/教授			
廣野喜幸 (6.5)	東京大学/准教授			
村上陽一郎 (6.19)	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム /特任教授			
藤垣裕子 (7.3)	東京大学/准教授			
Neil Robertson	University of Edinburgh/Senior Lecturer	New Dyes for Dye-Sensitized Solar Cells 英語	駒場キャンパス I アドバンストラボラトリー410大会議室 2008.4.25	菅原 正
吉本光宏	ニューヨーク大学東アジア学科/准教授	陰謀・暴力・イメージ 日本語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.4.25	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Philip Buckley	マッギル大学/教授	フッサールにおける文化と間文化性 英語	14号館2階208教室 2008.5.8	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Denis Lacorne	Centre d'études et de recherches internationales/Directeur de recherche	The Rise and Fall of American Secularism 英語	18号館コラボレーションルーム3 2008.5.10	
藤井卓郎	赤十字国際委員会ICRCカンダハール支局プロテクション班通訳(パシュトー語)	紛争地における国際赤十字国際委員会 日本語	駒場キャンパス 18号館コラボレーションルーム3 2008.5.20	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
長嶺義宣	赤十字国際委員会在日本連絡調整員, 東京大学「人間の安全保障」プログラム博士課程			
Axel Schneider	ライデン大学/教授	Situation, Concepts, and Challenges Chinese Conservatism: History, National Identity and the Human Condition 英語	101号館2階研修室 2008.5.20	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Mary-Annick MOREL	パリ第3大学	UTCPセミナー「話すとは何か?—身振り・イントネーション・意味」 フランス語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム4 2008.5.21	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), フランス大使館
Christian Bode	ドイツ学術交流会(DAAD)/事務総長	DESK講演会: Reform and Trend in the European University Sector 英語	アドミニストレーション棟中会議室 2008.5.29	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)
池上高志	東京大学/准教授	動きが生命をつくる 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.5.30	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Linda Trinh Võ	カリフォルニア大学アーバイン校/准教授	The Politics of Race Relations for Asian Americans 英語	駒場キャンパス 14号館2階会議室 2008.6.4	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
ドミニク・レステル	フランス・高等師範学校	Entre la raison et la vie: Dialogue avec Dominique Lestel フランス語	駒場キャンパス 101号館2階研修室 2008.6.4	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
渡辺大樹	エクマットラ(バングラデシュの民間活動団体)	ストリートチルドレン支援活動を通してみてきたバングラデシュの可能性: エクマットラ活動報告 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2008.6.5	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
飯塚正人	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／教授	UTCPイスラーム理解講座第5回「なぜいまイスラーム復興なのか—近現代イスラーム思想史から考える」 日本語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.6.6	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
小林紀男 Dylan Scudder (ディラン・スカダー)	CSRコンサルタント コンサルタント・東京大学大学院総合文化研究科研究生	企業倫理とCSR～チャリティからCRMまで／平和構築とCSR: 多国籍企業の事例から学ぶ 日本語	産学連携本部2階会議室 2008.6.9	東京大学産学連携本部／平和構築研究会／東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
Michel Dalissier	大阪大学, 慶應義塾大学	UTCP日本思想セミナー「三木清『構想力の論理』」 日本語	101号館2階研修室 2008.6.10	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
石原孝二	東京大学／准教授	科学技術リテラシーと「合理的」市民参加—共生の知の哲学に向けて 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2008.6.11	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
下岡 郁	グラントソントンジャパン[ASG税理士法人]／中国デスクマネージャー	国際企業にとっての特別行政区の新たな役割～日本, 中国及び香港の税制を踏まえて～ 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.6.14	谷垣真理子(科学研究費・基盤研究C・華南地域社会の歴史的淵源と現在)
黒田嘉彰	資源エネルギー庁新エネルギー対策課／課長補佐	「新エネルギーの導入拡大に向けて」	駒場キャンパス 105号館213号室(10521教室) 2008.6.16	東京大学NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門
下條信輔	カリフォルニア工科大学／教授	「情動Emotion—体と心を動かすもの」	駒場キャンパス 900番教室 2008.6.17	大学総合教育研究センター, 東京大学教養学部附属教養教育開発機構
岡田利規	演劇カンパニー「チェルフィッチュ」／主宰	「現代口語演劇」の可能性 日本語	1号館106教室 2008.6.17	表象文化論研究室
Greg Robinson	ケベック大学モントリオール校／教授 Université du Québec a Montréal/Professeur	Farewell to Little Tokyo: Wartime Nisei Journalists and the Ambiguities of Assimilation 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.6.18	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
遠藤 貢	東京大学大学院総合文化研究科／教授	アフリカの国家変容の現実と理論：ソマリアを事例として 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2008.6.18	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)、科学研究費補助金(基盤研究(A))「破綻国家」の生成と再生をめぐる学術研究
Antonia Bertolino, Andrea Polini, Guglielmo De Angelis	Istituto di Scienza e Technologie dell'Informazione "A. Faedo", the Italian National Research Council	The Plastic Framework for Web Service Testing 英語	駒場キャンパス 16号館107会議室 2008.6.18	科学研究費補助金基盤研究(A)「生産性と安全性向上のためのアспект指向ソフトウェア開発に関する研究」
田村義雄	環境省／事務次官	「地球環境問題の現状と課題」	駒場キャンパス 数理科学研究棟大講義室 2008.6.23	東京大学教養学部、東京大学先端科学技術研究センター、東京大学NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門
Viren Murthy	オタワ大学／准教授	Buddhist Epistemology and Modern Self-Identity in Zhang Taiyan's 'On Establishing a Religion' 英語	101号館2階研修室 2008.6.24	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
矢内原美邦	ダンスカンパニー「ニブロール」主宰	「コンテンポラリー・ダンスの地平：身体と言葉」 日本語	1号館106教室 2008.6.24	表象文化論研究室
Monisha Das Gupta	ハワイ大学マノア校 准教授 University of Hawai'i at Manoa	Remembering 9/11 Vernaculars of Trauma 英語	駒場キャンパス 14号館2階会議室 2008.6.25	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座
Richard Rath	ハワイ大学マノア校 准教授	Hearing American History 英語	駒場キャンパス 14号館2階会議室 2008.6.25	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座
Susan George (スーザン・ジョージ)	トランス・ナショナル・インスティテュート 理事 長, ATTAC-France 名誉会長 University of Hawai'i at Manoa	Mondialisation de la faillite. Faillite de la mondialisation (破綻のグローバリゼーション、グローバリゼーションの破綻) フランス語(通訳あり)	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.7.1	高橋均(科学研究費・基盤研究A・デニズンシップ：非永住・非同化型広域移民の国際比較研究／総合文化研究科地域文化研究専攻／アメリカ太平洋地域研究センター(CPAS)／地域文化研究学科フランス分科)「人間の安全保障」プログラム
安藤忠雄	東京大学／特別栄誉教授	「建築をつくる、都市をつくる」	駒場キャンパス 900番教室 2008.7.2	大学総合教育研究センター、東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Christian Staffa	Aktion Sühnezeichen Friedensdienste／代表	DESK講演会：プロテスタントによる補償のための一つの試みとしての「Aktion Sühnezeichen(償いと平和のための行動)」 ドイツ語	18号館コラボレーションルーム1 2008.7.4	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)
Ezequiel Di Paolo	サセックス大学	From Life to Mind to Life/Mind 英語	18号館4階コラボレーションルーム2 2008.7.4	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
Thomas P. Kasulis	オハイオ州立大学比較研究学科／教授	UTCP日本思想セミナー Writing a History of Japanese Philosophy: What I Have Learned 英語	101号館2階研修室 2008.7.7	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP) 共催：科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」
吉原真里	ハワイ大学マノア校／准教授	自分について書くこと 日本語	駒場キャンパス 8号館209 2008.7.9	東京大学大学院総合文化研究科・教養学部国際ジャーナリズム寄付講座
Charles Shepherdson	ニューヨーク州立大学／教授	Antigone: The Work of Literature and the History of Subjectivity 英語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.7.9	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Viren Murthy	オタワ大学／准教授	UTCP日本思想セミナー「近代の超克と資本主義の超克——廣松渉の議論をめぐって」 日本語	101号館2階研修室 2008.7.10	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
武内進一	日本貿易振興機構アジア経済研究所／研究員	チャドの国家破綻とダルフル紛争 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2008.7.11	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 科学研究費補助金(基盤研究(A))「破綻国家」の生成と再生をめぐる学術研究」
Rob Reilly	IEEE(米国・電気電子学会) Education Society/Chair	「大学教育におけるICTを活用した教育方法」 英語	駒場キャンパス 17号館2階KALS 2008.7.12	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Jesse J. Prinz	ニューヨーク市立大学／教授	What Neuroscience Reveals About Moral Judgmentなど連続講演会 英語	アドミニストレーション棟学際交流ホールなど 2008.7.14,15,17,18,22,23	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
樹本 健	コーネル大学大学院博士課程	UTCP日本思想セミナー「戸坂潤の技術論」 日本語	101号館2階研修室 2008.7.15	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Dr. Johan van der Auwera	University of Antwerp, Faculty of Letters／教授, Center for Grammar, Cognition, and Typology／センター長, "Linguistics: An Interdisciplinary Journal of the Language Sciences"／編集長	On acquisitive modals: Or Revisiting modality's semantic map 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.7.16	言語情報科学専攻, 科学研究費補助金研究(基盤研究C)「話しことは談話における文法的機能語の語用標識化」(藤井聖子)
酒井清武 迫田一昭	東京大学教養学部等事務部経理課 東京大学本部環境グループ	「東京大学における環境・エネルギー対策について」	駒場キャンパス 105号館213号室 (10521教室) 2008.7.17	東京大学NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門
中村 覚	神戸大学大学院／准教授	UTCPイスラーム理解講座第6回「サウジアラビア王国の国家と宗教」 日本語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.7.18	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
クリスチャン・ウル	ベルギー・ゲント大学	UTCP日本思想セミナー Between Nietzsche and Evolutionary Theory: Lu Xun's Contradiction Revisited 英語	101号館2階研修室 2008.7.22	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Moishe Postone	シカゴ大学／教授	Marxism, Time and the Problem of History など連続講演会 英語	18号館4階コラボレーションルーム3, 101号館2階研修室 2008.7.26, 29, 31	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
梅沢由香里 王 唯任	日本棋院／棋士 日本棋院／棋士	親子で学ぶ囲碁の世界2008	駒場キャンパス 11号館1106教室 2008.8.23	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Miriam Bistrovic	ベルリン工科大学反ユダヤ主義研究所／研究員	D E S K 講演会: Antisemitismus und Philo-Semitismus in Japan ドイツ語	18号館コラボレーションルーム3 2008.9.2	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK)
Alan Taylor	University of California, Davis/Professor	The Migration Revolution in British North America 英語	18号館コラボレーションルーム4 2008.9.12	(科学研究費基盤研究A・公共文化の胎動, 代表 遠藤泰生), アメリカ太平洋地域研究センター
雨宮 清	山梨日立建機株式会社 代表取締役	地雷除去に挑む: 豊で平和な大地への復興 日本語	駒場キャンパス 18号館ホール 2008.9.14	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 東京大学産学連携本部, 平和構築研究会
Philip Bell	University of New South Wales/Professor Emeritus	The End(s) of Television: Institutional and Cultural Factors in "Television's" Many Future 英語	本郷キャンパス 福武ホール1階会議室 2008.9.17	東京大学大学院情報学環／東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター
Alan Taylor	University of California, Davis/Professor	Squaring the Circle: Colonial and Native Spaces 英語	14号館2階会議室 2008.9.18	(科学研究費基盤研究A・公共文化の胎動, 代表 遠藤泰生), アメリカ太平洋地域研究センター
Francois LAROQUE	パリ第三大学／教授	Italy vs. Africa. Topographies of desire in Othello, Antony and Cleopatra and The Tempest 英語	18号館4階コラボレーションルーム1 2008.9.24	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 日本シェイクスピア協会
Clyde Moneyhun	Hume Writing Center/Director Stanford University/Associate Director	"Recent Trends in American University Writing Instruction"	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.10.3	ALESSプログラム
Nguyen TK Thanh	Royal Society University/Research Fellow, Lecturer	Design, synthesis, characterization and applications of novel magnetic nanoparticles for biomedical applications 英語	駒場キャンパス I アドバンストラボラトリー410大会議室 2008.10.7	菅原 正
Pierre Bayard	パリ第8大学／教授・精神分析家	連続セミナー「極限のエクリチュール」 フランス語	18号館4階コラボレーションルーム1 2008.10.14, 22, 28	表象文化論研究室, 東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
クリスチャン・ボルタンスキー	美術家	La vie impossible de Christian Boltanski - クリスチャン・ボルタンスキーの世界 フランス語	1号館109番教室 2008.10.18	科学研究費補助金研究(基盤研究B)「翻訳と文化横断性についての総合的研究 - 翻訳の言語態を継承しつつ」(星守守之)

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Clark B. Lombardi	ワシントン大学/准教授	UTCPイスラーム理解講座第7回 Islamic Law, Human Rights and the State: The Case of Contemporary Egypt 英語	18号館4階コラボレーションルーム1 2008.10.21	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
木村秀雄	東京大学大学院総合文化研究科/教授	JICAボランティアと人間の安全保障 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーション・ルーム3 2008.10.22	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 社団法人青年海外協力協会(JOCA)
Pierre Bayard	パリ第8大学/教授・精神分析家	「探偵的批評入門」 フランス語	18号館4階コラボレーションルーム2 2008.10.23	表象文化論研究室, 東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
ピエール・バイヤール Pierre Bayard	パリ第8大学/教授(フランス文学)・精神分析家	「探偵的批評入門Introduction à la critique policière」 フランス語	18号館4階コラボレーションルーム2 2008.10.23	表象文化論研究室・東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
山科直子 (10.23) 岡本拓司 (11.6) 村上陽一郎 (11.20) 石原孝二 (12.4) 長谷川壽一 (12.18) 廣野喜幸 (1.15)	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム/特任准教授 東京大学/准教授 東京大学科学技術インタープリター養成プログラム/特任教授 東京大学/准教授 東京大学/教授 東京大学/准教授	科学技術インタープリター養成プログラム 2008年秋期社会人講座 日本語	駒場キャンパス 1号館109号室 2008.10.23~2009.1.15 全6回	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム
James Kneale	University College, London/Lecturer	Fantasy, Science Fiction and Geography 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.10.24	ホーンズ・シーラ(科学研究費・基盤研究B・18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究)
Ian Cook et al	University of Exeter/Associate Professor	Hydrocortisone relatedness 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.10.24	ホーンズ・シーラ(科学研究費・基盤研究B・18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究)
河合祥一郎	東京大学大学院/准教授	「日本のシェイクスピア表象——漫画, 映画, 舞台を通して」 日本語	同志社大学 2008.10.26	同志社大学英文学会
Tanja Petrović	スロヴェニア科学芸術アカデミー・人文科学学際研究部門/研究員	DESK講演会: From Balkanism to Colonialism: Western Balkan, Slovenia and EU 英語	18号館コラボレーションルーム3 2008.10.27	東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター(DESK)
松浦友亮	大阪大学大学院情報科学研究科バイオ情報工学専攻/特任准教授	Unraveling the complexity in protein biosynthesis by constructive biology approach 英語	駒場キャンパス 16号館827号室 2008.10.30	複雑系生命システム研究センター, ERATO複雑系生命プロジェクト
太田恵理子	キリン食生活文化研究所/所長	「キリン食卓調査から～学生の食卓実態と食リテラシー」	駒場キャンパス 101号館1階音楽室 2008.11.6	東京大学教養学部附属教養教育開発機構 共催: キリンホールディングス株式会社

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
佐藤将之	国立台湾大学哲学系助理／教授	台湾におけるアカデミズムの現在と日本 日本語	101号館2階研修室 2008.11.7	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Hiromi AMEMIYA	Associate Professor, Faculty of Economics, Toyama University	Formalization of Customary Land Rights and Development Issues in Africa: The Case of Tanzania 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2 2008.11.14	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
Guenter Radden	ハンブルグ大学／教授	Generic Reference: An instance of the INSTANCE FOR TYPE metonymy 英語	10号館3階会議室 2008.11.14	言語情報科学専攻(坪井栄治郎)
Jonathan Cole Manos Tsakiris Shaun Gallagher	Poole Hospital and the Universities of Bournemouth and Southampton Royal Holloway University of London University of Central Florida and University of Hertfordshire	「神経科学と哲学」NEUROSCIENCE AND PHILOSOPHY 英語	駒場ファカルティハウス1階セミナー室 2008.11.20	科学史・科学哲学研究室
Bill Loris (ビル・ロリス)	Director, International Development Law Organization	Law Reform Technical Cooperation for Human Security: IDLO's Experiences 英語	駒場キャンパス 10号館3階301号室 2008.11.21	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
Dr. Yan Huang	University of Auckland, Department of Applied Language Studies and Linguistics／教授	Anaphora, Generative Syntax, and Neo-Gricean Pragmatics 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム4 2008.11.22	言語情報科学専攻, 科学研究費補助金研究(基盤研究C)「話しことば談話における文法的機能語の語用標識化」(藤井聖子)
山科直子 稲垣光雄 小平 均 黒田玲子	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム／特任准教授 全国海水養魚協会／専務理事 内閣府食品安全委員会リスクコミュニケーション官 東京大学／教授, 科学技術インタープリター養成プログラム代表	インタープリターワークショップ: 食の安全を考えよう 日本語	日本科学未来館 2008.11.22	東京大学科学技術インタープリター養成プログラム
Marko Ursic	Department of Philosophy, University of Ljubljana／教授	Universe or Multiverse 英語	14号館308 2008.11.26	科学史・科学哲学研究室
崎坂香屋子	東京大学大学院医学系研究科／助教	JICAボランティアと国際保健 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2008.11.26	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 社団法人青年海外協力協会(JOCA)
津田新哉	中央農業総合研究センター／上席研究員	「農産物の安定生産と環境保全の間で～化学農薬と生物農薬の調和」	駒場キャンパス 101号館1階音楽室 2008.11.26	東京大学教養学部附属教養教育開発機構 共催: キリンホールディングス株式会社
Michael Marra	UCLA／教授	UTCP日本思想セミナー Aesthetic Categories: Past and Present	駒場キャンパス 101号館2階研修室 2008.11.28	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
Michael F. Marra	UCLA/教授	UTCP日本思想セミナー Italian Fireflies into the Darkness of History 英語	101号館2階研修室 2008.12.2	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Roger Robins	Marymount College/Assistant Professor, 東京大学フルブライト招聘教授	From Piety to Politics: The Social Evolution of Modern Pentecostalism 英語	14号館2階会議室 2008.12.3	東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター
Frederick Keck	フランス国立研究センター	UTCPセミナー「レヴィ=ストロースと鳥インフルエンザ, 潜在的カストロフィの構造人類学の方法」 英語	101号館2階研修室 2008.12.5	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
藤屋リカ	日本国際ボランティアセンター(JVC)パレスチナ事業担当	「私は行った, 見た, 感じた」: 中東から考える人間の安全保障・難民の視点から 日本語	駒場キャンパス 18号館1階メディア・ラボ2 2008.12.6	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
Barbara Harrell-Bond	カイロアメリカン大学/教授	難民支援の現場と難民研究の現状 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2 2008.12.8	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 財団法人トヨタ財団アジア・隣人ネットワーク・難民データベース構築プロジェクト
François Hartog	社会科学高等研究院/教授	UTCPセミナー「私たちとギリシア人」 フランス語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.12.8	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
島村 輝	女子美術大学/教授	UTCP日本思想セミナー「『蟹江船』再評価, その世界的動向—そして東大生はいかにこの作品を読んだか」 日本語	18号館4階コラボレーションルーム1 2008.12.9	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
石川文康	東北学院大学	カントの歴史哲学—理念の歴史性をめぐって 日本語	18号館4階コラボレーションルーム3 2008.12.10	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
西山雄二	東京大学	UTCP日本思想セミナー「丸山眞男—民主主義の名を救う」 日本語	101号館2階研修室 2008.12.16	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
神馬征峰	東京大学大学院医学系研究科/教授	グローバル・ヘルスのための人間の安全保障アプローチ 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2 2008.12.17	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 社団法人青年海外協力協会(JOCA)
エディ・デュフモン	ボルドー大学/助教	UTCP日本思想セミナー「パロディの精神—中江兆民の「歓喜の哲学」について」 日本語	101号館2階研修室 2009.1.9	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
ダヴィデ・スティミッリ Davide Stimilli	コロラド大学/准教授	連続講演会「Aby Warburg's Afterlife」 英語	18号館4階コラボレーションルーム2・3 2009.1.9, 16	表象文化論研究室・東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)

講師	所属機関／職	題目／使用言語	会場／期日	主催者
David D. Hall	Harvard University/Research Professor	Print Culture and Public Opinion in Early America: Rethinking the Connections 英語	14号館2階会議室 2009.1.13	東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター, 科学研究費基盤研究(A)・公共文化の胎動代表 遠藤泰生
藤掛洋子	東京家政学院大学／准教授	農村女性のエンパワーメントと社会変容 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2009.1.14	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP), 社団法人青年海外協力協会(JOCA)
十川幸司	精神科医・分析家	UTCPセミナー「来るべき精神分析のプログラム」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2 2009.1.14	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
ロバート・キャンベル	東京大学大学院総合文化研究科／教授	「米櫃が底をついた日のこと～江戸における飢饉と「食」の知恵」	駒場キャンパス 101号館1階音楽室 2009.1.15	東京大学教養学部附属教養教育開発機構 共催：キリンホールディングス株式会社
山本哲史	東京大学大学院総合文化研究科 特任研究員	難民の負担分配と国際法：難民にはどこに行ってもらえるのか？ コンヴォ難民の「航空移送」を手がかりに 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2009.1.16	東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)
Hsuan Hsu	University of California, Davis/Assistant Professor	Vagrancy and Comparative Racialization in Huckleberry Finn 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3 2009.1.21	科学研究費 基盤研究B 代表：ホーンズ・シーラ「18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究」
大宮勘一郎	慶應義塾大学	UTCPセミナー「分身—鏡像と木霊の間」 日本語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2 2009.1.21	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
Susan Smulyan	Brown University/Professor	Perry Arrives in Japan: Cultural Diplomacy in Old Manuscripts and New Media 英語	18号館コラボレーションルーム2 2009.1.27	能登路雅子(科学研究費基盤研究A・アメリカの世界戦略と文化外交に関する学際的研究)／東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター
ジョン・マラルド	ノース・フロリダ大学／名誉教授	UTCP日本思想セミナー “The Promise of Japanese Philosophy” 英語	101号館2階研修室 2009.1.27, 29	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
伊藤高明 鎗目 雅(コメント)	住友化学株式会社農業化学部門主幹 東京大学大学院新領域創成科学研究科サステイナビリティ学教育プログラム(GPSS)／准教授	昆虫媒介性疾病とオリセットネットについて 日本語	本郷キャンパス 総合図書館3階大会議室 2009.2.10	東京大学産学連携本部／東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム(HSP)／平和構築研究会／東京大学大学院新領域創成科学研究科サステイナビリティ学教育プログラム(GPSS)ほか

講師	所属機関/職	題目/使用言語	会場/期日	主催者
長谷川壽一 長谷川真理子 三中信宏 矢島道子 山科直子	東京大学/教授 総合研究大学院大学/教授 農業環境技術研究所/上席研究員 地質情報整備・活用機構 東京大学科学技術インタープリター養成プログラム /特任准教授	サイエンスカフェ@駒場「チャールズ・ダーウイン, 200年目の誕生会」 日本語	駒場キャンパス コミュニケーションプラザ南館3階交流ラウンジ 2009.2.12	日本学術会議, 東京大学科学技術インタープリター養成プログラム
ヴィクトル・I・ストイキツァ	フリブール大学	カラヴァッジオの天使たち フランス語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2009.2.27	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論研究室 共催: 東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学研究教育センター」(UTCP)
Sara Roy	ハーバード大学中東研究所上級研究員	Learning from the Holocaust and the Palestinian-Israeli Conflict 英語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1 2009.3.2	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)
大貫 隆	東京大学/教授	イメージの星座—イエスとパウロ 日本語	駒場キャンパス アドミニストレーション棟学際交流ホール 2009.3.3	東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP), 共催: 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻
石倉 昇 黒瀧正憲 荒木伸夫 兵頭俊夫 倉島 治	東京大学教養学部/特任教授 東京大学教養学部/特任講師 アマチュア囲碁ソフトプログラマ 東京大学教養学部/教授 東京大学教養学部/特任助教	囲碁の魅力Ⅲ - 東大式囲碁入門法の成果 -	駒場キャンパス 18号館ホール 2009.3.15	東京大学教養学部附属教養教育開発機構
Eric Foner	Columbia University/Professor	From Lincoln to Obama: The First and Second Reconstructions in American History 英語	14号館2階会議室 2009.3.16	アメリカ太平洋地域研究センター(科学研究費基盤研究A・現代アメリカナショナリズムの複合編制をめぐる学際的研究, 代表 古矢旬)
Keith Camacho Tritia Toyota	UCLA/Assistant Professor UCLA/Adjunct Professor	Changes in Trans-Pacific Dynamics: Colonial Legacies and Current Issues 英語	14号館2階会議室 2009.3.17	能登路雅子(科学研究費基盤研究A・アメリカの世界戦略と文化外交に関する学際的研究)
荘 国土 廖 大珂	中国厦門大学南洋研究所長/教授 中国厦門大学南洋研究所/教授	南洋研究所における華僑華人研究の現況/ 福建ネットワークの歴史的発展と現況 中国語	駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム4 2009.3.27	谷垣真理子(科学研究費・基盤研究C・華南地域社会の歴史的淵源と現在)

学外からの評価

受賞など

(平成20年1月2日～平成21年1月1日)

氏名	賞の名称	授与した機関等の名称	受賞・評価を受けた年月日
石原 秀至	井上研究奨励賞	井上科学振興財団	2008.2.4
柴田 大	第13回日本物理学会論文賞*1	日本物理学会	2008.3.25
渡邊 雄一郎	2007年Bioscience、Biotechnology and Biochemistry誌論文賞*2	日本農芸化学会	2008.3.26
下井 守	化学教育賞	社団法人 日本化学会	2008.3.27
松原 宏	日本地理学会賞(優秀賞)	(社)日本地理学会	2008.3.29
佐藤 守俊	文部科学大臣表彰若手科学者賞	文部科学省	2008.4.15
前田 京剛	第12回超伝導科学技術賞*3	超伝導科学技術研究会	2008.4.16
浅島 誠	エルヴィン・シュタイン賞	エルヴィン・シュタイン財団	2008.4.17
金井 崇	画像電子学会第13回最優秀論文賞	画像電子学会	2008.6.21
繁樹 算男	日本テスト学会賞	日本テスト学会	2008.8.28
渡邊 雄一郎	日本植物細胞分子生物学会論文賞	日本植物細胞分子生物学会	2008.9.1
太田 邦史	GGs Prize 2008*4	日本遺伝学会	2008.9.4
植田 一博	2007年論文賞	日本認知科学会	2008.9.7
菅原 正	平成20年度電子スピンスイエンズ学会賞*5	電子スピンスイエンズ学会	2008.10.2
伊藤 啓	グッドデザイン賞*6	財団法人日本産業デザイン振興会	2008.10.8
植田 一博	2007年優秀論文賞	日本教育心理学会	2008.10.12
植田 一博	第7回ドコモ・モバイル・サイエンス賞・奨励賞(社会科学部門)	NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド	2008.10.17
浅島 誠	文化功労者	文部科学大臣	2008.11.3
植田 一博	HAI-2007 Outstanding Research Award	HAIシンポジウム・プログラム実行委員会	2008.12.3

*1(備考) 2008年12月31日にて退職(京都大学基礎物理学研究所へ転出)

*2(備考) 共同研究

*3(備考) 西田信彦・平田和人・為ヶ井強との共同受賞

*4(備考) Genes & Genetic Systems誌掲載論文の優秀賞(年1報)

*5(備考) 研究業績「分子間スピン整列—有機強磁性体から磁性・導電性共存系へ—」に対して授与された。

*6(備考) 賞の定義上、個人でなくNPOを通じた活動に対しての受賞

2008(平成20)年 科学研究費補助金

(平成19年度終了研究課題：平成20年1月1日～平成20年3月31日)

研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)	
1	特定領域	鹿見島 誠一	教授	高圧縮された有機導体の構造と電子状態	3,800
2	特定領域	小島 憲道	教授	配位空間を活用したヘテロ分子集合体の構築と特異な光・磁気相乗効果の創出	2,900
3	特定領域	佐藤 直樹	教授	相同グループ法による系統プロファイリングを用いた植物遺伝子機能の大規模推定	3,900
4	特定領域	青木 誠志郎	産学官 連携研究員	遺伝子水平伝播による共生系の進化と起源の統合的研究—理論的推定および実験的検証—	1,500
5	特定領域	村田 昌之	教授	ER exit sitesの構造形成・機能発現制御機構の解明	3,300
6	特定領域	栗栖 源嗣	准教授	巨大モーター蛋白質ダイニンのX線による原子レベル構造研究	3,700
7	特定領域	永田 敬	教授	電子を含んだ少数分子集団の構造変化ダイナミクス	1,800
8	学術創成	山影 進	教授	マルチエージェント・シミュレータによる社会秩序変動の研究	27,500
9	基盤A	古田 元夫	教授	グローバリゼーション下における地域形成と地域連関に関する比較研究	5,800
10	基盤A	齊藤 文子	准教授	新しい情報技術を利用したオープンリソース型スペイン語教育標準の構築	7,300
11	基盤A	磯崎 行雄	教授	古生代末2段階大量絶滅の研究：G-L境界とP-T境界事件	3,100
12	基盤A	恒川 恵市	教授	民主主義体制の諸形態および当該体制の長期的持続における価値規範の役割	6,900
13	基盤A	木村 秀雄	教授	南米アンデス山地とアマゾン低地の社会文化的相互関係の人類学的研究	6,600
14	基盤B	広松 毅	教授	情報通信技術が経済構造へ与える影響に関する定量的分析	3,000
15	基盤B	河合 祥一郎	准教授	現代舞台芸術の映像資料デジタル・アーカイブ構築に向けて	2,700
16	基盤B	柴 宜弘	教授	バルカン諸国歴史教科書の比較研究	3,700
17	基盤B	川島 真	准教授	中国外交研究の再構築—外交史と現代外交研究間の断絶の克服と長期的視野の獲得—	1,400
18	基盤B	米谷 民明	教授	超弦理論に基づく量子重力統一理論の構築	2,300
19	基盤B	池内 昌彦	教授	シアノバクテリアの新規光受容体と光応答系の機能・構造解析	2,500
20	基盤B	鈴木 賢次郎	教授	グラフィックス・リテラシー・カリキュラムの開発	1,500
21	基盤B	三浦 篤	教授	日仏美術交流史研究 —ジャポニスム、コラン、日本近代洋画—	1,500
22	基盤B	岩本 通弥	教授	地域資源としての〈景観〉の保全および活用に関する民俗学的研究	4,300
23	基盤B	前田 京剛	准教授	精密ブロードバンドスペクトロスコープによる量子臨界性の探索と制御	2,100
24	基盤B	小川 桂一郎	准教授	光導波路分光法による有機固体の紫外可視吸収スペクトル	1,700
25	基盤B	菅原 正	教授	プロト細胞モデルの創出—膜複製ダイナミクスと内膜上DNA複製ダイナミクスの同期	1,100
26	基盤B	深津 晋	准教授	シリコンを障壁とする高輝度半導体量子ドットのシリコンベース光増幅器への応用	3,000
27	基盤B	川戸 佳	教授	脳海馬神経で合成される脳ステロイドは、シナプス可塑性を急性的に調節する	4,200
28	基盤B	小島 憲道	教授	有機・無機複合錯体による動的スピנקロスオーバー現象とその分子システムへの展開	5,700
29	基盤B	豊島 陽子	教授	ダイニン分子の作動マシナリー	4,400

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
30	基盤B	近藤 安月子	教授	日本語教育のグローバル・スタンダードの構築にむけて	2,300
31	基盤B	嶋田 正和	教授	マメ科植物とその寄生/共生生物における共進化の系統対応解析	2,900
32	基盤C	川中子 義勝	教授	ドイツ近代文学における「予型論」の系譜	500
33	基盤C	上田 博人	教授	スペイン語語彙バリエーションに関する調査とデータベース化	500
34	基盤C	蜂巢 泉	准教授	Ia型超新星の進化経路および爆発メカニズムの解明	900
35	基盤C	工藤 和俊	助教	動作シナジーの組織化に関する神経行動科学的研究	1,000
36	基盤C	岡本 拓司	准教授	第一高等学校田蔵実験機器・掛図・事務文書等の整理と調査	800
37	基盤C	門脇 俊介	教授	哲学的知覚論の再検討	600
38	基盤C	酒井 哲哉	教授	戦間期日本における植民政策学の展開とその遺産—国際関係論研究の視点から	400
39	基盤C	石垣 琢磨	准教授	中高生における妄想的観念および対人信頼感・攻撃性との関連についての実証的研究	900
40	基盤C	菊川 芳夫	准教授	2次元および4次元格子上の非可換群カイラルゲージ理論の非摂動的構成及び数値的応用	600
41	基盤C	加藤 雄介	准教授	超伝導・超流動体における、時間反転対称性をもつ量子渦の理論	900
42	基盤C	福島 孝治	准教授	拡張アンサンブル法の展開とフラストレート系への応用	800
43	基盤C	山田 茂	准教授	新たな運動適応機構の解明	800
44	基盤C	松原 宏	教授	工場の履歴効果と日本企業の立地転換に関する数量経済地理学分析	900
45	基盤C	内田 隆三	教授	探偵小説における言説形式の変容と消費社会の論理	1,100
46	基盤C	上井 靖生	助教	テラヘルツ大規模イメージングデバイスの開発	1,500
47	基盤C	吉岡 大二郎	教授	双極子型量子ホール系の基底状態と輸送現象の研究	800
48	基盤C	永田 敬	教授	電子・負イオンのヘテロ溶媒和構造—溶媒和による安定化の微視的理解を目指して—	1,400
49	基盤C	嶋田 正和	教授	ハエの記憶と学習による採餌と繁殖の適応戦略：探索軌跡とカオスの遍歴	1,000
50	基盤C	増田 建	准教授	植物細胞におけるテトラピロール分配・輸送の分子機構	2,000
51	萌芽	川島 真	准教授	国際連盟における中国外交と日中関係—中国外交檔案による「リットン史観」の克服—	700
52	萌芽	矢口 祐人	准教授	米回キリスト教原理主義団体の文化戦略に関する学際的研究	1,300
53	萌芽	伊藤 元己	教授	植物の陸上進出において共生菌類の果たした役割の解明	1,300
54	若手A	村上 郁也	准教授	人間の視覚情報処理の階層性および並列性とその相互作用に関する心理物理学的研究	4,500
55	若手A	栗栖 源嗣	准教授	複合体結晶構造解析で明らかにする高等植物に特有な光還元力分配システムの構造基盤	10,000
56	若手B	瀬屋 光男	助教	低酸素環境トレーニングを伴う持久性選手のパフォーマンスと生理反応の季節変動	500
57	若手B	佐藤 光	准教授	十八世紀英国における文化多元主義思想の発展とその衰退に関する研究	700
58	若手B	鍾 非	准教授	地方政府は民間中小企業の成長を促進しているのか—中国上海市のサンプル調査分析	500
59	若手B	有田 伸	准教授	経済危機後の韓国における労働市場と階層構造の変容に関する研究	500
60	若手B	堺 和光	助教	厳密解の手法を用いた1次元量子系の輸送特性および動的性質に関する研究	900
61	若手B	昆 隆英	助教	AAA型分子モータ、ダイニンの作動メカニズム解明	1,400
62	若手B	角 恵理	研究拠点特任 研究員	コオロギの歌の進化に及ぼすメスの選好性の影響	500
63	若手B	鹿毛 利枝子	准教授	非営利団体参加をめぐる歴史的比較研究	700
64	若手B	星野 崇宏	講師	準実験と調査観察研究における因果関係の推定と教育評価への応用	1,700

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
65	若手B	清河 幸子	産学官 連携研究員	言語化が暗黙知の獲得に及ぼす影響—潜在学習パラダイムを用いた実験的検討—	500
66	若手B	近藤 隆祐	助教	一軸性延伸法の開発とその有機導体研究への適用	1,600
67	若手B	吉川 豊	助教	フォトニック結晶光微小共振器を用いた単一原子検出	600
68	若手B	柴尾 晴信	助教	社会性アブラムシのフェロモン認識と社会行動の発現メカニズム	900
69	若手B	本瀬 宏康	助教	分化誘導因子xylogenの輸送機構・作用機構の解明	600
70	若手B	水澤 直樹	助教	光合成酸素発生反応の分子機構に関する研究	900
71	若手B	加納 ふみ	助教	mRNAの翻訳制御を司る凝集体・ストレスグラニューールの形態形成機構	1,800
72	特別研究員 奨励費	小笠原 菜穂子 (田邊)	PD	近世中期上方文化史の研究—京都東山文化圏における文人ネットワークを中心に—	1,100
73	特別研究員 奨励費	坂本 浩也	PD	ブルーストと第一次世界大戦：戦時社会の表象に関する生成論的・歴史的研究	700
74	特別研究員 奨励費	池田 和弘	PD	世代間倫理の実践的理論構築：近代社会における未来記述の意味論的解明	1,100
75	特別研究員 奨励費	大竹 弘二	PD	カントと両大戦間期の国際政治思想：正戦論と国際連盟をめぐるドイツ精神史	700
76	特別研究員 奨励費	笠間 直穂子	PD	規範と芸術フランス19世紀前半における国語教育と文学	700
77	特別研究員 奨励費	香西 豊子	PD	ドネーションに関する歴史社会学的研究	1,100
78	特別研究員 奨励費	郷原 佳以	PD	「無形イメージ」による文学的想像力の研究：モーリス・ブランショと現代文学論の帰趨	700
79	特別研究員 奨励費	須藤 温子	PD	パラノイアと権力の諸相—シュレーパー、ヴァイニンガー、カネッティ	700
80	特別研究員 奨励費	乗松 亨平	PD	ロシア19世紀リアリズム文学におけるカフカス（コーカサス）植民地の表象	700
81	特別研究員 奨励費	長谷川 紉子	PD	古代ローマ家族の研究：苦悩する家族関係と社会	700
82	特別研究員 奨励費	濱崎 加奈子	PD	香道の美学—新たな日本芸道思想の地平のために—	1,100
83	特別研究員 奨励費	原田 義也	PD	20世紀ウクライナ詩文学におけるナショナル・アイデンティティ	700
84	特別研究員 奨励費	鈴木 多聞	PD	戦争の終結と戦後体制の形成—統帥権から第九条へ—	1,100
85	特別研究員 奨励費	福永 美和子	PD	戦後ドイツ政治と司法を通じた「過去の克服」	700
86	特別研究員 奨励費	三村 太郎	PD	論証の登場する場—中世イスラーム世界における数学的諸学の正当をめぐる	1,000
87	特別研究員 奨励費	佐藤 靖	PD	米国におけるシステム工学の興隆とその我が国への導入に関する研究	600

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
88	特別研究員 奨励費	高橋 労太	PD	重力レンズと偏光で探るブラックホール時空構造とダークマターの正体	1,100
89	特別研究員 奨励費	山下 雄史	PD	生体分子のダイナミクスにおける量子効果の基礎理論と生体機能への応用	1,100
90	特別研究員 奨励費	後藤 一成	PD	レジスタンス運動による内分泌と成長因子局所分泌に関する活性機序解明と処方への応用	1,100
91	特別研究員 奨励費	竹田 篤史	PD	植物のRNAiおよび植物ウイルスのRNAi抑制に関する機能プロテオミクス解析	1,100
92	特別研究員 奨励費	田中 亜路	PD	セミインタクト細胞とGFP可視化解析を用いた小胞体ストレス応答機構の解明	1,100
93	特別研究員 奨励費	森田 千鶴子 (山室)	PD	戦略的細胞死とCAD1機能に着目した植物免疫機構の全容解明	1,100
94	特別研究員 奨励費	荒川 裕美	DC1	青年期における妄想的観念の発生メカニズムに関する研究	900
95	特別研究員 奨励費	稲村 一隆	DC1	アリストテレスを通じた知慮=倫理的知性の再生	500
96	特別研究員 奨励費	植原 亮	DC1	自然化された認識論と懐疑論：クワイン、ストラウド、ソウザらの議論をめぐって	300
97	特別研究員 奨励費	小黒 麻美	DC1	分子シャペロンからみた運動の生理学的効果—機動的刺激効果・代謝促進効果—	900
98	特別研究員 奨励費	北村 朋史	DC1	セーフガード制度の妥当基盤—国際経済法秩序における自由化概念の現代的意味—	800
99	特別研究員 奨励費	古泉 達矢	DC1	戦間期香港、台湾の阿片政策と国際関係	700
100	特別研究員 奨励費	高橋 雄介	DC1	パーソナリティと精神病理の認知的・生物学的メカニズムの検討	900
101	特別研究員 奨励費	田部 智子 (京極)	DC1	GATT/WTO体制における繊維貿易の位置付け	400
102	特別研究員 奨励費	東 健太郎	DC1	戦後政治家と象徴天皇制の関係に関する政治史的研究	900
103	特別研究員 奨励費	李 艶麗	DC1	近代初期中日文壇における都市知識人の状況と思想	900
104	特別研究員 奨励費	大橋 健良	DC1	マイクロ波伝導度スペクトル測定法の開発とそれを用いた高温超伝導体のゆらぎの研究	900
105	特別研究員 奨励費	辻 晶弘	DC1	ゲージ/重力対応におけるデュアリティの研究と、そのクォークの閉じ込めへの応用	900
106	特別研究員 奨励費	三塚 由浩	DC1	Plane-wave背景時空の行列理論を用いたM理論の解析	900
107	特別研究員 奨励費	片山 健太	DC1	膜脂質に注目したオルガネラ膜構築の分子機構に関する研究	900

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
108	特別研究員 奨励費	鈴木 郁郎	DC1	構成的アプローチによる神経回路の可変性の研究	900
109	特別研究員 奨励費	最上 聡文	DC1	組換え体とFRET法を用いた、ダイニンすべり運動を引き起こす構造変化の検出	900
110	特別研究員 奨励費	瀧ノ上 正浩	PD	自律的に動作するDNAナノデバイスのための核酸分子オシレータの開発	900
111	特別研究員 奨励費	金山 浩司	PD	スターリン期ソヴィエト連邦における物理学の制度史的・思想的解明	500
112	特別研究員 奨励費	倉田 明子	DC2	19世紀華南における社会変動と基督教、後期太平天国における洪仁 一の活動を中心に	500
113	特別研究員 奨励費	倉田 徹	DC2	中国大陸と香港の関係、特に中国政治の民主化における香港の役割の研究	500
114	特別研究員 奨励費	橋本 一径	PD	指紋を中心とする身元確認技術の歴史の総合的研究—「登録される身体」の誕生	500
115	特別研究員 奨励費	森元 庸介	DC2	17世紀末から18世紀前半のフランスにおける藝術と道徳混合感情の主題を基点に	500
116	特別研究員 奨励費	木内 久美子	DC2	サミュエル・ベケットにおける「翻訳行為」—バイリンガリズムとジャンル横断の帰趨	500
117	特別研究員 奨励費	藏本 龍介	DC2	ミャンマー都市部における社会変動と仏教実践の変容に関する文化人類学的研究	900
118	特別研究員 奨励費	高野 さやか	DC2	司法制度と地域社会：インドネシア・メダン市の地方裁判所における民事紛争処理の諸相	900
119	特別研究員 奨励費	金山 準	DC2	20世紀史における「暴力」と「革命」：ジョルジュ・ソレルを通じて	900
120	特別研究員 奨励費	福田 潤一	DC2	アメリカの同盟システムにおける「階層性」の研究	500
121	特別研究員 奨励費	野田 恵子	DC2	ヘテロセクシズムと近代家族—十九世紀イギリスにおける法制度の変容を中心に	500
122	特別研究員 奨励費	南後 由和	DC2	戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究	900
123	特別研究員 奨励費	池田 功毅	DC2	情動・ストレス・意思決定の認知神経科学	900
124	特別研究員 奨励費	増原 英彦	准教授	表現力の高いポイントカットと役割モデルによるアスペクト指向リファクタリングの改善	600
125	特別研究員 奨励費	小宮山 進	教授	量子ホール電子系における端状態の位相干渉性とその制御	600
126	特別研究員 奨励費	エリス 俊子	教授	村上春樹の文学テキストにおけるジェンダーの問題：現代日本文化における日常性の分析を中心に	600
127	特別研究員 奨励費	池上 高志	准教授	身体性に基づいた新しい音楽理論の研究	800

研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)	
128	特別研究員 奨励費	池上 高志	准教授	言語の普遍項と類型学のためのくりかえし学習パラダイムの開発	800
129	特別研究員 奨励費	信原 幸弘	准教授	探索行動の知覚経験に基づく感覚様相の解明	700
130	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	細胞サイズの内メオスタシスの理論：細胞の成長と分裂の調整のしくみ	800
合計				224,800	

※職名は、平成19年度の名称

※配分額は、平成19年度交付決定額

(平成20年度新規・継続研究課題：平成20年4月1日～平成20年12月31日)

研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)	
1	特別推進	山崎 泰規	教授	反水素原子と反水素イオンによる反物質科学の展開	63,700
2	特定領域	須藤 和夫	教授	ミオシンナノシステムによる細胞内情報制御	8,100
3	特定領域	本村 凌二	教授	カンパニア都市とヴィッラ集落をめぐる社会史的研究	15,800
4	特定領域	早川 眞一郎	教授	国際的なB2C取引（消費者契約）の法的規律に関する総合的研究	6,800
5	特定領域	酒井 邦嘉	准教授	文法処理を中心とする言語の脳内メカニズムの解明	3,500
6	特定領域	増田 茂	教授	分子一電極接合系の準安定原子電子分光	24,900
7	特定領域	太田 邦史	教授	複製・分配・クロマチン構造と組換え開始の相互作用	12,200
8	特定領域	尾中 篤	教授	ナノ細孔曲面を配位場とする不均一系メタセシス触媒の創製	8,300
9	特定領域	高塚 和夫	教授	分子超高速動力学過程の理論	8,300
10	特定領域	福島 孝治	准教授	確率的アルゴリズムの統計力学への応用と開発	5,800
11	特定領域	前田 京剛	教授	競合秩序系の電気伝導に現れる臨界性のテラスペクトロスコピーによる研究	3,200
12	特定領域	鈴木 建	助教	恒星風・輻射過程による原始惑星系円盤の散逸機構に関する理論的研究	1,800
13	特定領域	菅原 正	教授	チューブ状ベシクルを用いた外場応答性を示すエラストイカへの可塑性の導入	5,000
14	特定領域	栗栖 源嗣	准教授	膜面新規ヘム鉄の役割解明を目指す高等植物チトクロムb6f複合体のX線構造解析	3,400
15	特定領域	豊島 陽子	教授	組換え体を用いた軸糸外腕ダイニン運動機構の解明	2,400
16	特定領域	奥野 誠	准教授	局所阻害法を用いた、微小管の滑り一屈曲変換機構の解明	2,900
17	特定領域	佐藤 直樹	教授	多次元系統プロファイリングによる植物遺伝子機能の大規模推定	4,200
18	特定領域	青木 誠志郎	研究員	進化的特徴の類似性に基づくゲノム網羅的な共生遺伝子の探索—数理論と実験の統合解析—	2,000
19	特定領域	村上 郁也	准教授	眼球運動時における輝度および色変調運動刺激の運動視覚に関する認知神経科学的研究	2,700
20	特定領域	加藤 雄介	准教授	ポーズ凝縮体における異常散乱の理論と基礎理論の検証	700
21	特定領域	池上 高志	教授	生命の自律性解明のためのロボットの自律運動生成実験とハエの探索行動実験	4,800
22	特定領域	大沼 清	特任講師	鋸歯状の細胞可動領域を用いた細胞の長距離移動の制御	1,600
23	特定領域	永田 敬	教授	電子を含んだ少数分子集団の構造転移ダイナミクス	1,800
24	特定領域	菊川 芳夫	准教授	第4世代による荷電共役パリティ対称性の破れとバリオン数非対称性の生成	600

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
25	特定領域	松下 信之	准教授	白金錯体の結晶フォトクロミックシステムの構造論的解明	2,400
26	特定領域	栗栖 源嗣	准教授	巨大モーター蛋白質ダイニンのX線構造解析	3,500
27	特定領域	佐藤 健	准教授	完全再構成系を用いた輸送小胞形成機構の解析	2,800
28	特定領域	渡邊 雄一郎	教授	RNAサイレンシング機構からみたメリステムの解析	2,500
29	基盤S	須藤 和夫	教授	ダイニン組換え体発現と、その構造・動態に基づくエネルギー変換機構の解明	13,100
30	基盤S	高塚 和夫	教授	ボルン・オッペンハイマー描像を超えた動的分子理論と新しい化学の展開	21,100
31	基盤S	酒井 邦嘉	准教授	言語の脳機能に基づく手話の獲得メカニズムの解明	23,500
32	基盤S	磯崎 行雄	教授	大量絶滅の研究：P-T境界事件とV-C境界事件	31,900
33	基盤A	大貫 隆	教授	アブラハムの伝統の臨界：三大一神教の哲学、神学・政治論とその外部の地域文化研究	4,300
34	基盤A	中井 和夫	教授	「破綻国家」の生成と再生をめぐる学術研究	8,100
35	基盤A	丸山 真人	教授	「人間の安全保障」の実体的基礎としての地域経済の自立	4,500
36	基盤A	玉井 哲雄	教授	生産性と安全性向上のためのアスペクト指向ソフトウェア開発に関する研究	7,300
37	基盤A	松岡 心平	教授	観世文庫所蔵能楽関係資料のデジタル画像化と解題目録作成に向けた総合的研究	6,700
38	基盤A	古矢 旬	教授	現代アメリカ・ナショナリズムの複合的編制をめぐる学際的研究	8,100
39	基盤A	能登路 雅子	教授	アメリカの世界戦略と文化外交に関する学際的研究	8,600
40	基盤A	神野志 隆光	教授	東アジア古典学としての上代文学の構築	7,400
41	基盤A	遠藤 泰生	教授	公共文化の胎動：建国後の合衆国における植民地社会諸規範の継承と断絶に関する研究	7,000
42	基盤A	小宮山 進	教授	量子ホール電子系による位相および核スピンの制御	9,500
43	基盤A	遠藤 泰樹	教授	フーリエ変換マイクロ波分光法によるラジカル錯体の検出とその運動ダイナミクスの解明	10,900
44	基盤A	陶山 明	教授	耐熱性周期骨格DNAアレイを用いた大規模二次元非周期パターンの構築	26,300
45	基盤A	高橋 均	教授	デニズンシップ：非永住・非同化型広域移民の国際比較研究	6,700
46	基盤A	山影 進	教授	マルチエージェントモデルによる国際政治秩序変動の研究	5,000
47	基盤B	刈間 文俊	教授	漢字文化圏の「近代」に関する総合的研究	800
48	基盤B	HONES, Sheila	教授	18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究	3,700
49	基盤B	石井 洋二郎	教授	フランス第三共和制における文学・政治・宗教	500
50	基盤B	石井 直方	教授	運動と遺伝的特性が筋の無負荷最大速度に及ぼす影響：スラックテストによる検討	3,600
51	基盤B	高橋 哲哉	教授	宗教における時間、超越、倫理に関する哲学的研究	1,700
52	基盤B	CAMPBELL, Robert	教授	幕末明治初期の日本文学と「民衆」思考に関する総合比較研究	3,200
53	基盤B	井上 健	教授	近代東アジアにおける異文化同化過程における翻訳の問題	4,900
54	基盤B	西川 杉子	准教授	近世ヨーロッパにおける宗教・政治・商業空間の構造転換	4,900
55	基盤B	丹野 義彦	教授	統合失調症に対する認知行動療法の効果研究と臨床心理士への普及	4,400
56	基盤B	伊藤 元己	教授	植物における多細胞生物への進化の分子遺伝学基盤の解明	4,400
57	基盤B	山口 泰	教授	多次元実世界データの効率的な補完法	6,800
58	基盤B	植田 一博	准教授	投資行動における熟達化の解明とその投資教育支援システムへの応用	4,200
59	基盤B	池上 高志	教授	抽象化学系のシミュレーションのための形の言語の開発と専用計算システムの制作	4,900
60	基盤B	大築 立志	教授	心理的変動がヒトの随意運動制御に及ぼす影響に関する脳・神経科学的研究	4,900
61	基盤B	深代 千之	教授	ユビキタスによるトータルウェルネスシステムの構築	3,700

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
62	基盤B	福島 真人	准教授	科学研究のリサーチ・パス分析—そのダイナミズムとイノベーションの質的調査研究	3,800
63	基盤B	村田 雄二郎	教授	近現代中国におけるリベラリズム思想の受容と展開	4,100
64	基盤B	若林 正丈	教授	地域研究における「地域」の可塑性と重層性に関する比較研究	4,400
65	基盤B	GOTTSCHEWSKI, Hermann	准教授	音楽文化における機械の役割—その歴史・現状に関する多面的分析と展望	3,000
66	基盤B	湯浅 博雄	教授	翻訳と文化横断性についての総合的研究—翻訳の言語態を継承しつつ	4,600
67	基盤B	今橋 映子	准教授	視覚芸術とその文学的言説をめぐる総合研究	1,400
68	基盤B	川喜田 敦子	特任准教授	第二次世界大戦後のヨーロッパにおける崩壊社会の再建と地域和解	3,900
69	基盤B	高橋 直樹	教授	先進諸国の経済政策形成における専門性の役割—デモクラシーとの「相克」と「和解」	3,900
70	基盤B	繁樹 算男	教授	潜在変数モデルの統合と実際的問題の解決	4,300
71	基盤B	真船 文隆	准教授	気体—液体界面におけるヨウ化物イオンの溶媒和構造と不均一反応の解明	4,400
72	基盤B	瀬地山 角	准教授	発展途上国における都市貧困層のコミュニティ形成に関する国際比較研究	2,600
73	基盤B	中西 徹	教授	フィリピンにおける慢性的貧困と社会ネットワーク	1,800
74	基盤B	伊藤 元己	教授	ゴンドワナ植物・ナンキョクブナ属をめぐる共生・寄生系の進化史の解析	3,800
75	基盤B	古田 元夫	教授	ASEAN新規加盟国の「中進国」ベトナムと地域統合—日越関係を視野に入れて	4,900
76	基盤B	廣野 喜幸	准教授	脳神経倫理学の理論的基礎の確立	4,700
77	基盤B	齋藤 希史	准教授	近代東アジアにおける漢文体とキリスト教—『天路歷程』を中心に	2,900
78	基盤B	伊藤 たかね	教授	複雑述語の処理メカニズム—理論言語学と言語脳科学の協働による実証的研究	2,100
79	基盤B	SAALER, Sven	准教授	日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ	3,800
80	基盤B	岩本 通弥	教授	文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究	4,800
81	基盤B	川島 真	准教授	東アジアにおける「冊封・朝貢」の終焉とその記憶の形成過程	3,000
82	基盤B	古城 佳子	教授	経済的相互依存と対外経済政策の変容の研究—政府と国内集団の関連についての実証分析	3,500
83	基盤B	米谷 民明	教授	ゲージ重力対応と非摂動的超弦理論の構築	3,100
84	基盤B	小河 正基	准教授	比較惑星内部進化モデリング	4,000
85	基盤B	菅原 正	教授	有機局在スピン—伝導電子共存系を基盤とした新規物性の開拓	5,700
86	基盤B	嶋田 正和	教授	マメゾウムシと寄生蜂の記憶と学習を介した繁殖の適応戦略と個体群動態	5,900
87	基盤B	池内 昌彦	教授	新規光受容体シアノバクテリオクロムファミリーの光受容機構の解明	8,400
88	基盤B	渡邊 雄一郎	教授	RNAレベルでの遺伝子発現制御からみた植物の体制維持の理解	7,400
89	基盤B	豊島 陽子	教授	ダイニン分子の運動における複数頭部間の協同性	7,700
90	基盤B	吉川 雅之	准教授	湘南上話の総合的研究	2,900
91	基盤B	嶋田 正和	教授	マメ科植物と種子捕食性昆虫における共進化の分子系統解析：毒性物質の効果	4,800
92	基盤C	丹治 愛	教授	ヴィクトリア朝生体解剖論争の文化研究	900
93	基盤C	田尻 芳樹	准教授	モダニズム文学の身体表象のパラダイムに関する理論構築	800
94	基盤C	長谷川 まゆ帆	准教授	出産の社会史—17~18世紀フランスの産科医の進出と助産婦の制度化を中心に—	800
95	基盤C	箕口 友紀	助教	準安定量子流体の物性	700
96	基盤C	友田 修司	教授	有機反応活性種の研究とタンパク質化学への展開	800
97	基盤C	石光 泰夫	教授	ロマンティック・バレエ『ジゼル』を復曲する試み	400
98	基盤C	藤垣 裕子	准教授	科学者の社会的責任論の系譜	600

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
99	基盤C	信原 幸弘	教授	基礎行為に関する相互作用主義的観点からの研究	700
100	基盤C	村田 純一	教授	感覚・知覚・概念——知覚の「生態学的現象学」の可能性	1,200
101	基盤C	田中 純	准教授	イメージ分析に対する生命形態学の影響をめぐる思想史的研究	1,200
102	基盤C	松村 剛	准教授	中世フランス語版未刊行『金持ちとラザロ』の言語地理学的・文献学的語彙研究	1,100
103	基盤C	林 文代	教授	英米文学におけるテクノロジーとメディアの表象に関する研究	1,000
104	基盤C	高橋 英海	准教授	アリストテレス『天界論』および『生成消滅論』のシリア語における伝承の文献学的研究	900
105	基盤C	坂原 茂	教授	日仏名詞限定表現の対照研究	1,000
106	基盤C	藤井 聖子	准教授	話しことば談話における文法的機能語の語用標識化	700
107	基盤C	風間 洋一	教授	超弦理論とM理論のダイナミクスおよびその共变的定式化の研究	1,100
108	基盤C	錦織 紳一	准教授	シアノ架橋金属錯体ホスト包接体の誘電特性と機能性開拓	800
109	基盤C	田原 史起	准教授	中国中部内陸農村の開発と社会関係資本—湖北・江西村落コミュニティの比較を通じて	800
110	基盤C	木村 忠正	准教授	サイバー・エスノグラフィーの方法論的基礎に関する調査研究	1,300
111	基盤C	金久 博昭	教授	幼児および小学生児童における身体活動量と筋の量的および機能的発達との関係	700
112	基盤C	橋本 毅彦	教授	戦前日本の空気力学史の研究	1,000
113	基盤C	谷垣 真理子	准教授	華南地域社会の歴史的淵源と現在	1,600
114	基盤C	山本 巍	教授	個体存在とモイラ運命の形而上学—アリストテレス研究—	1,500
115	基盤C	山本 久美子	特任准教授	アッバス・キアロスタミにおけるイスラミック・モダニズムの諸相	600
116	基盤C	宮下 志朗	教授	「文芸の共和国」としてのプランタン＝モレトゥス出版工房の総合的な研究	900
117	基盤C	小林 宜子	准教授	中世後期イングランドにおける俗語文学の発達と世俗の精神の成熟に関する比較研究	500
118	基盤C	岡部 雄三	教授	ヨーロッパ近世キリスト教神秘思想文学の精神史的研究	1,000
119	基盤C	高田 康成	教授	シェイクスピアの近代における受容に関する表象文化論的考察	1,100
120	基盤C	近藤 安月子	教授	認知言語学の日本語教育への具体的導入—日本語教科書改善のために—	1,000
121	基盤C	荒井 良雄	教授	地理的位置情報に基づく携帯電話の情報サービスに関する実証的研究	1,400
122	基盤C	遠藤 貢	教授	「事実上の国家」の生成をめぐる国際政治：アフリカの事例を中心に	1,400
123	基盤C	木宮 正史	准教授	1970年代後半の朝鮮半島をめぐる国際関係：同盟の再編と緊張緩和逆流の政治過程	1,200
124	基盤C	柴田 大	准教授	中性子星・ブラックホール連星の合体に対する数値的研究	1,300
125	基盤C	松井 哲男	教授	超高エネルギー原子核衝突の非平衡時空発展の理論的研究	1,000
126	基盤C	加藤 光裕	教授	弦の場の理論の量子論的解析	800
127	基盤C	藤井 宏次	助教	極限条件のQCDにおける動的臨界現象	600
128	基盤C	国場 敦夫	准教授	超離散ソリトンと可解格子模型	700
129	基盤C	佐々 真一	准教授	揺らぐ動的現象の協同的振る舞い	900
130	基盤C	氷上 忍	教授	ランダム行列理論の位相的場の理論による解釈とその応用	1,200
131	基盤C	清水 明	教授	多自由度量子系の重ね合わせ状態の特徴付け・生成・操作・検出の理論	900
132	基盤C	住吉 吉英	助教	水和により誘起される過酸化ラジカルの分子構造変化と反応性に関する分光研究	500
133	基盤C	太田 邦史	教授	M26/CRE配列におけるクロマチン再編成とストレス応答	1,300
134	基盤C	若杉 桂輔	准教授	ニューログロビンの細胞死抑制機構の解明と蛋白質工学的改変	1,300
135	基盤C	佐藤 光	准教授	ウィリアム・ブレイクと柳宗悦に関する比較文学比較文化的研究	800

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
136	基盤C	内野 儀	教授	〈9・11〉以降における現代アメリカ演劇の比較演劇学的研究	700
137	基盤C	川中子 義勝	教授	ドイツ近現代文学における「神義論的思考」の変遷	1,100
138	基盤C	伊藤 徳也	准教授	現代中国における審美主義	1,200
139	基盤C	上田 博人	教授	スペイン語語彙バリエーションの総合的研究	2,000
140	基盤C	岡 秀夫	教授	バイリンガルの言語切り替えと第二言語産出のメカニズムに関する研究	1,400
141	基盤C	石田 淳	教授	国際秩序と国内秩序の共振に関する包括的研究	1,100
142	基盤C	荒巻 健二	教授	金融グローバル化の下での途上国の資本取引規制のあり方	1,200
143	基盤C	江里口 良治	教授	定常的星風を伴うポリトロープ星の統一的扱いと数値解法	1,200
144	基盤C	蜂巢 泉	准教授	Ia型超新星の進化経路の新展開	800
145	基盤C	村田 滋	准教授	脂質二分子膜による光エネルギー変換機能の高効率化に関する研究	1,800
146	基盤C	柴尾 晴信	助教	昆虫の社会行動を統御する分子遺伝学的、生理学的、生態学的機構	2,100
147	基盤C	和田 元	准教授	高等植物におけるカルジオリピンの機能に関する分子生物学的解析	2,000
148	基盤C	青木 誠志郎	研究員	機能進化ゲノミクス：進化解析を用いた共生遺伝子のゲノム網羅的探索とその実験的検証	1,200
149	基盤C	杉山 亨	助教	ストランドインベージョンを機序とするアンチジーン分子の医薬分子設計	1,600
150	基盤C	成川 礼	助教	シアノバクテリオクロムの縦断・横断的解析によるフィトクロム型光受容機構の解明	1,800
151	基盤C	水澤 直樹	助教	表在性蛋白質に着目した光合成光化学系2超分子複合体のアセンブリーに関する研究	1,800
152	萌芽	深代 千之	教授	日本古来の身体技法を西洋自然科学によって究明する	900
153	萌芽	アルヴィ なほ子 (宮本 なほ子)	准教授	ユートピアと廃墟—18世紀の進歩思想の転換と南半球におけるイギリスの植民地政策	900
154	萌芽	植田 一博	准教授	創造的コラボレーションにおける観察の役割の解明	1,000
155	萌芽	久保 啓太郎	助教	陸上長距離選手における「バネ」を考慮したコンディショニングの試み	900
156	萌芽	笛内 匡	准教授	「映像」に基づく人類学の構築—映像的・理論的パースペクティブの研究—	900
157	萌芽	佐藤 守俊	准教授	細胞機能を制御する分子の創製	1,300
158	萌芽	佐藤 直樹	教授	微細藻類における生物対流の分子機構と生物学的意義に関する研究	900
159	萌芽	村田 昌之	教授	セミインタクト上皮細胞を用いたタイトジャンクション構造形成制御メカニズムの解明	1,300
160	萌芽	山口 泰	教授	巨大ボリュームデータの主メモリ外描画	1,100
161	若手A	増原 英彦	准教授	アスペクト指向言語の基礎モデルとその応用	1,800
162	若手A	久保 啓太郎	助教	パフォーマンス向上および障害予防の観点からみた腱組織の可塑性に関する研究	6,200
163	若手A	鳥井 寿夫	准教授	コヒーレント原子波の生成および制御	6,700
164	若手A	坪井 貴司	准教授	開口放出様式を制御する分子機構の可視化解析	2,400
165	若手A	吉田 丈人	准教授	個体群動態の進化生物学：藻類—動物プランクトン系における実験的研究	2,000
166	若手A	佐藤 健	准教授	人工脂質平面膜を用いた輸送小胞形成のダイナミクス解析	5,000
167	若手A	佐藤 守俊	准教授	分解制御型プローブの創案と展開	9,300
168	若手A	昆 隆英	助教	ダイニンの構造解析に基づいた、AAA型分子モーター作動機構の解明	3,500
169	若手B	梶田 真	准教授	高度経済成長後の政府間補助金を通じた地域間所得再分配政策に関する日韓比較研究	800
170	若手B	飯嶋 裕治	助教	和辻哲郎の倫理学・思想史研究に関する比較哲学的考察	600
171	若手B	松本 和子	准教授	共時的・通時的分析を用いた言語衰退の研究—消滅の危機に瀕した「パラオ日本語」	800

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
172	若手B	渡邊 日日	講師	社会的知識としての人類学：ロシア民族学・ロシア社会学・社会人類学の総合化の試み	900
173	若手B	猪野 和住	助教	トポロジカル・オーダーを用いた量子コンピューティング	600
174	若手B	坂山 英俊	助教	シヤジクモ藻類Nitella属の全系統関係の解明	700
175	若手B	金井 崇	准教授	ネットワーク環境下における高品質3Dコンテンツのための陰関数曲面表現	1,400
176	若手B	金子 知適	助教	大量の経験的データから学習した知識を利用する効率的な探索技術の研究	900
177	若手B	桜井 隆史	助教	呼吸数増加を指標とした簡易的乳酸性作業閾値推定法	900
178	若手B	飯野 要一	助教	スポーツ動作における体幹の運動力学的分析方法の確立	500
179	若手B	我妻 玲	リサーチレジデント	血管形成とミトコンドリア発達のシンクロナイゼーション機構	1,000
180	若手B	清水 品子	准教授	日本の性的マイノリティにおける名づけと自己表象をめぐる分析と理論構築	900
181	若手B	広瀬 友紀	准教授	韻律情報の有効性と視覚的文脈情報の関わりについての聞き手と話し手の立場からの検討	700
182	若手B	井坂 理穂	准教授	近現代インドにおける歴史記述の変遷	500
183	若手B	林 知更	准教授	憲法解釈学における国家理論の役割とその変容—ドイツ憲法学史を題材に	800
184	若手B	榎本 真哉	助教	オキサラート誘導体を利用した有機・無機複合錯体における磁気構造の次元性制御	1,800
185	若手B	二井 勇人	助教	COP II 小胞形成機構とアルツハイマー病における小胞輸送の解析	800
186	若手B	長田 洋輔	助教	骨格筋幹細胞の自己複製機構の解明	900
187	若手B	襦屋 光男	助教	低酸素環境への累積的な間欠曝露を利用したトレーニング処方の開発	2,000
188	若手B	西 芳実	助教	社会秩序の再編過程における移民の役割：インドネシア・アチェ紛争の事例から	1,400
189	若手B	西山 雄二	特任講師	哲学、教育、大学をめぐるジャック・デリダの理論と実践	1,000
190	若手B	小嶋 美由紀	助教	構文拡張における人称代名詞の非指示化と非現実ムードの関係性について	500
191	若手B	鹿毛 利枝子	准教授	日本の戦後復興をめぐる比較政治学的研究	1,000
192	若手B	植月 美希	研究員	心理物理学的手法を用いた文処理の時間的特性に関する検討	1,300
193	若手B	鈴木 建	助教	宇宙における磁気流体乱流の理論的研究	2,000
194	若手B	山田 貴富	助教	多機能性転写因子による組換え活性化機構	1,300
195	若手B	本瀬 宏康	助教	タンパク質キナーゼIBO1による細胞形態の調節機構	2,000
196	若手B	志波 智生	助教	細胞質ダイニンのストロームドメインの構造研究	1,700
197	若手B	加納 ふみ	助教	ゴルジ体→小胞体輸送セミアクティブ細胞アッセイを用いたYip1Aの作用機序の解明	1,700
198	若手 (スタートアップ)	佐々木 一茂	助教	ヒト生体における骨格筋無負荷最大短縮速度とその加齢変化	1,260
199	若手 (スタートアップ)	和仁 健太郎	助教	伝統的海上捕獲法の正当化根拠	900
200	若手 (スタートアップ)	高橋 秀治	特任准教授	アフリカツメガエル卵の表層と内層の違いについての研究	1,350
201	若手 (スタートアップ)	小豆川 勝見	助教	堆積年代に応じた遠洋性海洋堆積物中の陸源碎屑物の供給源推定	1,280
202	若手 (スタートアップ)	梶原 優介	研究員	AFMを利用したエバネッセントTHz光散乱検出法の研究	1,330
203	若手 (スタートアップ)	向井 千夏	助教	精子形成時における細胞骨格—繊維鞘—と解糖系酵素のダイナミクス	1,340

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
204	研究成果公開 促進費 (学術図書)	石井 洋二郎	教授	ロートレアモン 越境と創造	1,400
205	研究成果公開 促進費 (学術図書)	宇野 良子	特任研究員	Detecting and Sharing Perspectives Using Causals in Japanese	1,000
206	研究成果公開 促進費 (学術図書)	金野 純	PD	中国社会と大衆動員	1,800
207	研究成果公開 促進費 (データベース)	伊藤 元己	教授	証拠標本データベース	5,400
208	新学術領域研究 (研究課題提案型)	佐藤 守俊	准教授	モデル小動物イメージングのための新しい遺伝子コード型プローブの開発	14,200
209	新学術領域研究 (研究課題提案型)	庄田 耕一郎	助教	分子コンピュータ内臓リボゾーム：自律的に考え判断するドラッグデリバリーシステム	10,000
210	特別研究員 奨励費	伊藤 洋	PD	生物群集の再帰的な放散と絶滅における生態的要因の理論解析	700
211	特別研究員 奨励費	井上 彰	PD	正義と平等に関する倫理学的研究 ―社会福祉の哲学的基礎―	700
212	特別研究員 奨励費	今村 謙士	DC1	ダイニンにおける長大なコイルドコイル構造を介した情報伝達機構	900
213	特別研究員 奨励費	岡田 謙介	DC1	心理データ解析における共分散構造分析（及びその関連モデル）の適合度指標の改善	900
214	特別研究員 奨励費	門林 岳史	PD	共通感覚の系譜学―その認識論的、美学的ならびに政治的射程についての総合的研究	700
215	特別研究員 奨励費	斎藤 拓也	DC1	カントにおける権利と政治―自然法論転換のラディカリズム	900
216	特別研究員 奨励費	櫻井 孝平	DC1	アスペクト指向プログラミング言語の言語拡張に対する新たな枠組みの導入	900
217	特別研究員 奨励費	佐藤 昌直	PD	病原体抵抗性遺伝子を介した抵抗性のシステムレベルでの解析および新規遺伝子同定	1,100
218	特別研究員 奨励費	白肌 邦生	DC1	科学技術研究者の研究動機付けと新事業創出意欲の研究	500
219	特別研究員 奨励費	岡野 宏樹	DC1	脊椎動物の中樞神経系の前後軸形成を制御するWnt経路の標的遺伝子の探索と解析	900
220	特別研究員 奨励費	土屋 和代	PD	日米の福祉政策における人種とジェンダー：1960・70年代のコミュニティ政策	700
221	特別研究員 奨励費	鶴見 太郎	DC1	シオニズムの歴史社会学―東方ユダヤ人と西欧ユダヤ人の差異と相互関係に注目して	500
222	特別研究員 奨励費	上畑 重人	DC1	アメアリアにおける複数レベル淘汰と社会構造：利己者と利他者の拮抗的共存	900

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
223	特別研究員 奨励費	西山 達也	PD	哲学的問題としての「翻訳」：ハイデガーの思想とそのフランスにおける受容の研究	700
224	特別研究員 奨励費	原 大地	PD	詩形式の現代性—フランス19世紀における散文詩の展開	1,100
225	特別研究員 奨励費	三輪 光嗣	PD	ゲージ理論との双対性に基づいた超弦理論の非摂動論的定式化の研究	1,100
226	特別研究員 奨励費	森前 智行	DC1	マクロ量子系におけるマクロ量子コヒーレンスの研究	900
227	特別研究員 奨励費	山本 成生	PD	中世・ルネサンス時代における音楽家の社会的身分とその組織構造	1,100
228	特別研究員 奨励費	刈 達郎	DC1	電気伝導系を舞台とした非平衡統計力学の研究	900
229	特別研究員 奨励費	吉田 純	DC1	金属錯体をゲスト、液晶・無機層状物質をホストとするホスト・ゲスト化合物の創製	900
230	特別研究員 奨励費	浅井 智久	DC1	身体化による自己意識とその障害としての精神病理の関係—統合失調症を中心に—	900
231	特別研究員 奨励費	碓 陽子	DC2	社会の医療化：アメリカ社会における「肥満」の社会的成立に関する文化人類学的研究	900
232	特別研究員 奨励費	池田 喬	PD	オントロジカルな環境内行為論：ハイデガーの<行為>概念に基づく展開と構築	700
233	特別研究員 奨励費	伊藤 綾	PD	ボードレールと「詩人の形象」の問題：19—20世紀における文学の社会的機能の研究	700
234	特別研究員 奨励費	井上 雅世	DC1	多段階適応反応による、新しい記憶機構に関する研究	900
235	特別研究員 奨励費	内田 諭	DC1	英語および日本語における談話標識の分析	500
236	特別研究員 奨励費	種田 佳紀	DC2	ロナルド・ドゥウォーキンの法思想、政治思想の研究。	900
237	特別研究員 奨励費	太田 健介	DC2	高温超伝導体固有ジョセフソン接合の位相ダイナミクスとそれを用いた量子ビットの研究	900
238	特別研究員 奨励費	緒方 宏海	DC2	経済移行期の中国における村民自治の実態と変容に関する社会人類学的研究	900
239	特別研究員 奨励費	岡本 年正	DC1	ペルー南部の民間医療の現場をめぐる包括的研究：クスコにおけるクランデリスモの諸相	900
240	特別研究員 奨励費	小山内 崇	PD	シアノバクテリアを用いた炭素・窒素・硫黄代謝間相互作用機構の解明	1,100
241	特別研究員 奨励費	小田切 健太	DC2	分子集合体の形態形成とダイナミクスについてのメゾスコピック理論の構築	900
242	特別研究員 奨励費	数森 寛子	DC2	ヴィクトル・ユゴーの作品における廃墟の表象	500
243	特別研究員 奨励費	我部 聖	DC2	戦後日本語文学における歴史認識	500

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
244	特別研究員 奨励費	川上 英	DC2	クルソフ百年史—ユカタン反乱マヤの自治とアイデンティティー—	900
245	特別研究員 奨励費	菊池 由葵子	DC1	自閉症児における他者の顔・表情への注意の解明およびその発達に関する検討	900
246	特別研究員 奨励費	後藤 絵美	DC2	現代エジプトにおけるムスリム女性のヴェールとイスラームの教義・思想に関する研究	900
247	特別研究員 奨励費	五野井 郁夫	PD	グローバル・デモクラシーと市民社会による規範形成：規範理論と最貧国の債務救済	1,100
248	特別研究員 奨励費	小林 康一	PD	葉緑体分化におけるチラコイド膜糖脂質とクロロフィル合成系の協調的な制御機構の解明	1,100
249	特別研究員 奨励費	近藤 久益子	DC2	集光超分子複合体フィコビリソームと光化学系との相互作用に関する研究	900
250	特別研究員 奨励費	金野 純	PD	プロレタリア文化大革命期中国における社会運動の研究	1,100
251	特別研究員 奨励費	三枝 大修	DC2	イジドール・デュカスの詩作品『マルドロールの歌』における演劇性の研究	500
252	特別研究員 奨励費	坂口 さやか	DC2	政治権力としての魔術的帝国理念—神聖ローマ皇帝ルドルフ二世に関する実証的研究	500
253	特別研究員 奨励費	坂本 邦暢	DC1	近代科学の起源と人文主義：ピエール・ガッサンディの人文主義的自然学	500
254	特別研究員 奨励費	佐藤 朋子	PD	二〇世紀後半フランスのフロイト派精神分析の言語観、とくに母語観の研究	700
255	特別研究員 奨励費	佐藤 公紀	DC2	社会復帰と規律—ヴァイマル期ドイツ（1919—33）の監獄改革と犯罪生物学の研究	500
256	特別研究員 奨励費	佐藤 温	DC2	幕末期儒者の勤王活動と文事—大橋訥庵を中心に—	900
257	特別研究員 奨励費	佐藤 愛	DC2	日米におけるコーポレートガバナンスの有効性—経営者に対するモニタリングの視点から	800
258	特別研究員 奨励費	三王 昌代	DC2	東アジア海域世界のなかのイスラーム—中国への国書と航海安全の信仰	900
259	特別研究員 奨励費	島 知弘	DC2	細胞質ダイニンが微小管上で「小股歩き」をする機構の解明	900
260	特別研究員 奨励費	杉本 尚子 (人江)	DC1	アジアゾウ <i>Elephas maximus</i> を対象とした相対的数量判断と長期記憶研究	900
261	特別研究員 奨励費	高里 実	DC2	腎臓の初期発生における新規重要遺伝子の探索とその機能解析	900
262	特別研究員 奨励費	高橋 悠介	PD	金春禪竹の能楽論とその思想的背景に関する研究	1,100
263	特別研究員 奨励費	立花 幸司	DC2	アリストテレス倫理学研究	900
264	特別研究員 奨励費	谷川 衝	DC2	球状星団に関する数値的研究	900

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
265	特別研究員 奨励費	千葉 雅也	DC2	ジル・ドゥルーズの動物的他者論：現代哲学の「生態学的パラダイム」とその政治的帰趨	500
266	特別研究員 奨励費	土松 隆志	DC1	トレードオフが適応進化をどう制約するのか：ゲンノショウコにおける花色多型維持機構	900
267	特別研究員 奨励費	渡名喜 庸哲	DC2	エマニュエル・レヴィナスを中心とした戦後現象学における政治の問題	900
268	特別研究員 奨励費	富田 広樹	DC1	18世紀スペイン文学における感覚論の受容（ホセ・デ・カダルソの作品を中心に）	500
269	特別研究員 奨励費	中川 亜希	PD	古代ローマ帝国元首政期における、皇帝権力と諸社会層との関係と交流に関する考察	1,100
270	特別研究員 奨励費	中野 貴文	PD	中世散文テキストに見える消息的性格と文学性の研究	700
271	特別研究員 奨励費	新倉 圭一郎	DC1	国際法におけるdenial of justiceの機能	500
272	特別研究員 奨励費	信岡 朝子	PD	近現代日米間における「環境問題」をめぐる言説体系の翻訳論的・クロスジャンルの研究	1,000
273	特別研究員 奨励費	パフロノヴァ ムニサ	DC1	言語とアイデンティティー—ウズベキスタンの言語政策とコミュニティ社会	900
274	特別研究員 奨励費	林 洋平	DC2	マウス胚性幹細胞における細胞外マトリックスの機能解析	900
275	特別研究員 奨励費	平野 達志	DC1	日本の防共・枢軸外交の再検討	900
276	特別研究員 奨励費	福岡 万里子	DC2	幕末維新期の日独外交史—近世後期蘭学の内的動態及び知的ネットワークとの連関から—	900
277	特別研究員 奨励費	藤岡 俊博	DC2	エマニュエル・レヴィナスにおける「場所」の倫理学	500
278	特別研究員 奨励費	藤田 美琴 (久木元)	DC1	子育て支援システムの変動とその妥当性—生活空間の視点から	900
279	特別研究員 奨励費	藤波 伸嘉	DC2	第二次立憲政期（1908-1918）オスマン帝国政治史研究	900
280	特別研究員 奨励費	藤村 健	DC1	翻訳停止装置ストレスグラニュールの形成機構とその生理機能の解明	900
281	特別研究員 奨励費	古田 健也	DC2	進化工学的手法による分子モーターのメカニズムの研究	900
282	特別研究員 奨励費	三浦 哲哉	DC2	サスペンス映画の歴史	500
283	特別研究員 奨励費	御園生 涼子	PD	小津安二郎初期作品とヴァナキュラー・モダニズム—両大戦間期日本における近代の経験	700
284	特別研究員 奨励費	三牧 聖子	DC2	帝国日本の理念外交—戦前・戦時期の太平洋問題調査会（1925-1945）を中心に	900
285	特別研究員 奨励費	宮崎 慧	DC1	無視不可能な欠測を含むデータに対する多群構造方程式モデルの適用	900

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
286	特別研究員 奨励費	宮地 隆廣	DC2	先住民運動の政治イデオロギー：エクアドルおよびボリビアの比較研究	900
287	特別研究員 奨励費	村上 善道	DC1	ラテンアメリカ開発政策における「第三の道」に関する研究	500
288	特別研究員 奨励費	守谷 順	DC1	社会不安の発生メカニズム—視覚的注意・認知のコントロール不可能性に関する研究	900
289	特別研究員 奨励費	森山 至貴	DC1	現代日本ゲイコミュニティの社会学：セクシュアリティと「文化」の関係をめぐって	900
290	特別研究員 奨励費	柳下 聡介	DC1	ガンマセクレターゼによるアミロイドベータタンパク質の産生機構	900
291	特別研究員 奨励費	山内 貴史	DC1	被害観念の生起メカニズムおよび被害観念がもたらす感情・行動についての実証的研究	900
292	特別研究員 奨励費	山根 ゆうこ (神原)	DC2	「西欧」と「東欧」の境界線の複層性：スロヴァキア国境地域における社会の動態	900
293	特別研究員 奨励費	山辺 弦	DC2	カストロ革命政権下におけるキューバ文学史の「失われた系譜」の再構築	500
294	特別研究員 奨励費	湯川 拓	DC1	加盟国の民主化が第三世界の地域主義に与える影響	900
295	特別研究員 奨励費	横井 直人	PD	超対称性を持ったゲージ場の理論に関連する強弱双対性の理解	1,100
296	特別研究員 奨励費	李 維涛	DC1	近世以後における生死空間の構築とその思想宗教的意味	900
297	特別研究員 奨励費	青谷 知幸	DC2	安全性と再利用性の高いアスペクト指向言語の設計と実現方式	600
298	特別研究員 奨励費	明地 洋典	DC1	自閉症者と定型発達者における共同注視の認知的・脳機能的基盤	500
299	特別研究員 奨励費	荒木 慎也	DC2	米国美術大学で学ぶアジア人留学生のアイデンティティと社会的影響	500
300	特別研究員 奨励費	家永 真幸	DC2	「中国文化」外交の形成と「正統性」争奪構造の解明——故宮、パンダと「台湾問題」	500
301	特別研究員 奨励費	石川 学	DC2	個別から普遍への移行を問題化する文学論の諸相——ジョルジュ・バタイユを起点として	400
302	特別研究員 奨励費	石塚 量見	DC2	好熱性シアノバクテリアの光受容体TePixJの構造・機能解析	600
303	特別研究員 奨励費	井上 暁子	DC2	移民文学のリゾーム性—ドイツのポーランド作家による現代文学	500
304	特別研究員 奨励費	井上 愛	DC2	金春禅竹と中世文化の心性史	400
305	特別研究員 奨励費	岩澤 全規	DC2	N体計算による大質量ブラックホール形成過程の研究	600
306	特別研究員 奨励費	上野 真弓	DC1	抑うつ者に見られる怒り・攻撃発生のメカニズムに関する検討	500

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
307	特別研究員 奨励費	植松 圭吾	DC1	社会性アブラムシにおける階級分化の制御機構と進化的起源の解明	600
308	特別研究員 奨励費	鶴戸 聡	DC2	カテブ・ヤシンを中心とするマグレブ伝語文学研究	500
309	特別研究員 奨励費	蝦名 麻衣子	DC2	アルツハイマー病発症に関わるBACE1の機能解析	600
310	特別研究員 奨励費	大澤 聡	DC2	植民地帝国日本のメディア編制—1930年代の文学・思想における相互連関とその変容	400
311	特別研究員 奨励費	大森 晋輔	DC2	ピエール・クロソフスキーの作品における演劇性の研究	400
312	特別研究員 奨励費	小黒 麻美	PD	神経疾患への運動効果と環境による影響～タンパク質品質管理の視点から～	800
313	特別研究員 奨励費	小野寺 研太	DC2	日本の戦後思想史における市民社会論の展開	500
314	特別研究員 奨励費	覚張 シルビア	PD	レフ・トルストイとエミール・ゾラの作品における文明空間	600
315	特別研究員 奨励費	苅谷 康太	DC2	西アフリカのアラビア語・イスラーム資料調査と同資料に基づく宗教的・知的連関の研究	500
316	特別研究員 奨励費	河村 彩	DC2	スターリン時代の芸術政策と視覚芸術の様式—写真とリアリズム絵画の興隆	500
317	特別研究員 奨励費	神林 尚子	DC2	幕末・明治初期における戯作と「巷談」の研究—仮名垣魯文の作品を中心に—	500
318	特別研究員 奨励費	木内 久美子	PD	ベケット文学による「自伝的エクリチュール」の系譜学：「幼児期」の形象と言語の起源	600
319	特別研究員 奨励費	菊池 有希	PD	文学における自我表象の研究：日本近代文学におけるパイロン受容を中心に	600
320	特別研究員 奨励費	北村 紗衣	DC1	エリザベス朝及びジェームズ朝の悲劇における女性の表象	400
321	特別研究員 奨励費	木村 健太	PD	変化する環境への適応は如何にして可能か？—行動・生理の最適化メカニズムの解明—	700
322	特別研究員 奨励費	熊谷 謙介	PD	フランス近・現代における祝祭・スペクタクル・舞台芸術と共同体の関係についての考察	700
323	特別研究員 奨励費	栗原 剛	PD	近世日本倫理思想史における自己と他者の関係性をめぐる研究—近現代への架橋に向けて	600
324	特別研究員 奨励費	桑田 学	DC2	市場と環境をめぐる環境哲学・倫理学的研究	500
325	特別研究員 奨励費	小口 峰樹	DC2	知覚・概念・行為——知覚経験の概念性および非概念性についての研究	400
326	特別研究員 奨励費	小寺 千絵	DC1	小胞輸送におけるタンパク質選別・濃縮機構の解析	600
327	特別研究員 奨励費	坂田 綾香	DC1	スピンモデルによる適応的進化の統計力学的研究	600

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
328	特別研究員 奨励費	笹川 幸治	PD	性選択と食性進化の相互作用がもたらす種多様性創出メカニズムの解明	800
329	特別研究員 奨励費	佐々木 直文	DC2	細胞間コミュニケーションと空間的ゆらぎの輻輳による形態形成の解明	600
330	特別研究員 奨励費	笹邊 俊和	DC1	ドーパミン受容体D2のSNPが選択的スプライシング及びアルコール依存症に与える影響	600
331	特別研究員 奨励費	澤田 哲生	DC2	メルロ＝ポンティにおける知覚概念の再考	500
332	特別研究員 奨励費	澁谷 由紀	DC2	家族史から描くホーチミン市形成史—抗仏・抗米戦争期の人口流入を中心に—	500
333	特別研究員 奨励費	島田 奈央	PD	細胞性粘菌を用いた新規動物型細胞質分裂関連因子の同定と機能解析	800
334	特別研究員 奨励費	清水 光明	DC1	近世日本社会における町人思想その様相と行方—懐徳堂と東アジア諸地域	500
335	特別研究員 奨励費	杉森 絵里子	PD	発話におけるアウトプットモニタリングに基づく幻聴メカニズムの解明	700
336	特別研究員 奨励費	鈴木 雄大	DC1	ハイデガー哲学における言語と公共性の研究	500
337	特別研究員 奨励費	鈴木 一敏	PD	通商交渉における交渉戦略と秩序の変化	700
338	特別研究員 奨励費	田上 優子	DC2	シロイヌナズナにおけるRNAサイレンシングに関与する新規因子の探索	600
339	特別研究員 奨励費	田邊 千晶	DC2	APPαセクレターゼであるADAM19の活性調節機構	600
340	特別研究員 奨励費	田上 智宣	DC2	客家エスニシティー形成に関する歴史社会学的研究	500
341	特別研究員 奨励費	丹治 直人	DC1	重イオン衝突実験における粒子生成の機構に関する理論的研究	600
342	特別研究員 奨励費	筒井 晴香	DC1	ミリカンの固有機能理論を手掛かりとした人間の自然的側面と文化的側面の関係の解明	400
343	特別研究員 奨励費	土居 伸彰	DC2	セルゲイ・エイゼンシュテインとアニメーション：エイゼンシュテインの芸術理論研究	500
344	特別研究員 奨励費	徳田 匡	DC1	戦後沖縄の思想 「反復帰・反国家」論の射程	400
345	特別研究員 奨励費	永井 佑紀	DC2	量子磁束系を中心とした異方的超伝導における動的・静的現象の理論的研究	600
346	特別研究員 奨励費	中村 大輔	DC1	テラヘルツスペクトロスコピーを利用した超伝導体磁束量子のダイナミクスの研究	600
347	特別研究員 奨励費	野田 恵子	PD	親密性の変容と家族の現代的展開—近現代イギリスの法制度とその社会的背景を中心に	700
348	特別研究員 奨励費	早川 美也子	RPD	食の安全をめぐる日仏政治過程分析—BSEとGMO（遺伝子組換え食品）を事例として	700

	研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)
349	特別研究員 奨励費	林 久美子	DC2	世紀転換期における日仏文化交渉史に関する総合的研究 (1890-1910年)	500
350	特別研究員 奨励費	平井 上総	PD	日本中～近世移行期における幕藩制的権力の形成とその政策	0
351	特別研究員 奨励費	笹田 千容	DC2	中米におけるビジネス・コミュニティの変容	500
352	特別研究員 奨励費	藤井 康平	DC2	地方自治体の環境政策とネットワークの影響力	500
353	特別研究員 奨励費	藤倉 哲郎	DC1	ドイモイ期ベトナムにおける労使関係および労働組合に関する政治経済学研究	500
354	特別研究員 奨励費	藤田 護	DC2	アンデス高地先住民社会の生活の思想	500
355	特別研究員 奨励費	裴 寛紋	DC2	『古事記伝』の「古事記」—本居宣長と朝鮮—	400
356	特別研究員 奨励費	堀部 直人	DC1	昆虫の記憶・学習にもとづく適応戦略：理想自由分布を実現する多様な戦術	600
357	特別研究員 奨励費	松岡 格	DC2	戦後台湾の統治体制と台湾原住民族社会の変容：周縁としての組み込み過程の検討	500
358	特別研究員 奨励費	宮原 克典	DC1	知覚・概念・行為——現象学、認知的観点、プラグマティズムを利用した経験の分析	400
359	特別研究員 奨励費	村上 克尚	DC2	大江健三郎の小説を通じた戦後研究	400
360	特別研究員 奨励費	森元 庸介	PD	藝術とその正当性：決疑論と萌芽期美学の思想連関を検討主題として	600
361	特別研究員 奨励費	安田 佳代	DC2	戦間期極東衛生行政の展開と日本の対国際連盟外交	500
362	特別研究員 奨励費	與倉 豊	DC2	産業集積とネットワーク—組織間関係・都市間関係の実証的研究—	500
363	特別研究員 奨励費	吉江 路子	DC1	神経行動科学的アプローチによる芸術的パフォーマンスの向上を目指して	500
364	特別研究員 奨励費	吉見 崇	DC1	中華民国国民政府の「司法改革」—近代国家建設における「司法」と国際関係—	400
365	特別研究員 奨励費	米田 尚輝	DC2	装飾と前衛 (1885-1935)：西欧近代美術史観の批判的再定義に向けて	500
366	特別研究員 奨励費	若林 大我	DC2	中央アンデス高地における牧畜活動とその牧民社会における意味に関する人類学的研究	500
367	特別研究員 奨励費	和田 杏実	DC1	20世紀前半の海戦法をめぐる国際関係史：戦時国際法とイギリス帝国防衛の交錯	500
368	特別研究員 奨励費	鰐淵 秀一	DC1	植民地時代フィラデルフィアにおける自発的結社と公共秩序の生成	500
369	特別研究員 奨励費	福本 理恵	DC1	自閉症スペクトラム障害の非言語コミュニケーション促進に関する認知神経心理学的研究	900

研究種目	研究代表者	職名	研究課題名	配分額(千円)	
370	特別研究員 奨励費	宮内 裕貴	DC1	言語における規範性をめぐる議論を手がかりとしたConventionの概念の分析。	300
371	特別研究員 奨励費	池上 高志	教授	人工生命と社会構造生成のシミュレーション	700
372	特別研究員 奨励費	風間 洋一	教授	ゲージ/重力対応とその物理的帰結の研究	900
373	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	粘菌の細胞集団の確率的遺伝子発現と閾値ダイナミクスの解析	600
374	特別研究員 奨励費	坂原 茂	教授	自然言語におけるスケール性と程度修飾 —日本語を中心とした研究—	700
375	特別研究員 奨励費	柴田 大	准教授	連星中性子星の合体に対する一般相対論的シミュレーション	1,100
376	特別研究員 奨励費	並木 頼寿	教授	愛国主義教育と少数民族—中国の国家統合下に於ける少数民族社会—	400
377	特別研究員 奨励費	矢口 祐人	准教授	繁栄の後—フリーターと新中産階級の限界	600
378	特別研究員 奨励費	木畑 洋一	教授	1930年代後半におけるイギリス外交への日本の対応	600
379	特別研究員 奨励費	村田 雄二郎	教授	国際秩序の再編における“内モンゴル”地域の形成—20世紀前半を中心に	400
				合計	899,360

※配分額は、平成20年度交付決定額

2008(平成20)年 科学研究費補助金

○平成19年度終了研究課題

(平成20年1月1日～平成20年3月31日)

	件	千円
総件数	130	224,800
内訳		
特定領域研究	7	20,900
学術創成研究費	1	27,500
基盤研究(A)	5	29,700
基盤研究(B)	18	50,300
基盤研究(C)	19	17,400
萌芽研究	3	3,300
若手研究(A)	2	14,500
若手研究(B)	16	14,300
特別研究員奨励費	59	46,900
(教員のみ)	71	177,900

○平成20年度新規・継続研究課題

(平成20年4月1日～平成20年12月31日)

	件	千円
総件数	379	899,360
内訳		
特別推進研究	1	63,700
特定領域研究	27	142,000
基盤研究(S)	4	89,600
基盤研究(A)	14	120,400
基盤研究(B)	45	182,200
基盤研究(C)	60	65,000
萌芽研究	9	9,200
若手研究(A)	8	36,900
若手研究(B)	29	31,400
若手研究(スタートアップ)	6	7,460
研究成果公開促進費	4	9,600
新学術領域研究	2	24,200
特別研究員奨励費	170	117,700
(教員のみ)	209	781,660

2008(平成20)年 研究拠点形成費補助金

●21世紀COEプログラム				(平成20年1月1日～平成20年3月31日)
	拠点リーダー	職名	プログラム名称	配分額(千円)
1	長谷川 寿一	教授	心とことば—進化認知科学的展開	100,000
合計				100,000

※配分額は、平成19年度交付決定額：平成19年度終了プログラム

●グローバルCOEプログラム				(平成20年1月1日～平成20年12月31日)
	拠点リーダー	職名	プログラム名称	配分額(千円)
1	小林 康夫	教授	共生のための国際哲学教育研究センター	74,800
合計				74,800

※配分額は、平成20年度交付決定額

2008(平成20)年 厚生労働科学研究費補助金

(平成20年1月1日～平成20年12月31日)

	主任研究者	職名	研究課題名	配分額(千円)
1	松田 良一	准教授	新規リードスルー惹起物質によるナンセンス変異型筋疾患治療のための前臨床試験	23,000
2	石浦 章一	教授	スプライシングを利用した筋強直性ジストロフィーの治療	14,000
3	久保田 俊一郎	教授	磁界の生体への影響とその機構の解明	18,900
			合計	37,000

※ 2及び3は、平成20年4月1日より開始

※ 配分額は、すべて平成20年度交付決定額

2008(平成20)年 寄附金

(平成20年1月1日～平成20年12月31日)

寄附者	金額	職名	受入教員	タイトル
1 財団法人上原記念生命科学財団	2,000,000	助教	二井 勇人	アルツハイマー病における小胞輸送の研究
2 財団法人光科学技術研究振興財団	2,000,000	准教授	坪井 貴司	細胞骨格による開口放出モード制御機構の解明
3 財団法人武田科学振興財団	500,000	助教	加納 ふみ	Development of analytical system for investigating the intracellular protein-networks using visualization techniques and semi-intact cell chip
4 清野 聡子 (財団法人日本科学協会)	182,000	助教	清野 聡子	海外発表促進助成
5 宇野 良子 (財団法人博報児童教育振興会)	647,207	特任研究員	宇野 良子	「ことばと文化・教育」研究助成
6 日産化学工業株式会社物質科学研究所	200,000	教授	尾中 篤	
7 田辺三菱製薬株式会社	1,000,000	教授	石浦 章一	
8 第一三共株式会社 プロセス技術研究所	500,000	教授	尾中 篤	
9 財団法人光科学技術研究振興財団	700,000	特任講師	大沼 清	光による神経ネットワークのパターン形成
10 株式会社タチバナ	1,000,000	技術専門 職員	小田嶋 豊	
11 株式会社読売新聞東京本社	100,000,000	教授	山内 昌之	国際ジャーナリズム (読売新聞社) 寄付講座
12 ドイツ学術交流会 東京事務所	10,221,875	センター長	木畑 洋一	
13 財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団	2,000,000	准教授	栗栖 源嗣	植物が持つ機能的還元力分配システムとその分子装置の構造研究
14 ニチアス株式会社	40,000,000	教授	久保田 俊一郎	中皮腫予防・治療法開発講座 (ニチアス株式会社)
15 財団法人ノバルティス科学振興財団	1,000,000	教授	太田 邦史	ADLibシステムを用いた抵抗原性物質に対するモノクローナル抗体作製法の開発
16 和光純薬工業株式会社	40,000,000	特任教授	浅島 誠	「細胞・器官制御講座 (和光純薬工業株式会社)」寄付講座
17 財団法人日本棋院	9,500,000	学部長	小島 憲道	「教養教育への開基の活用」寄付研究部門
18 株式会社日能研	8,500,000	学部長	小島 憲道	「教養教育への開基の活用」寄付研究部門
19 ドイツ学術交流会 東京事務所	19,835,000	センター長	木畑 洋一	
20 株式会社ベネッセコーポレーション	55,000,000	学部長	小島 憲道	寄付研究部門「教養教育社会連携 (ベネッセコーポレーション) 研究部門」
21 植田 一博 (財団法人東レ科学振興会)	7,300,000	准教授	植田 一博	人間らしい動きの科学的解明: 文楽人形の解析を通して
22 木畑 洋一	105,860	委員長	ピアノ委員会	
23 鍾 非 (財団法人日本経済研究奨励財団)	500,000	准教授	鍾 非	思想評価は人々の実際の行動様式を判断するのに役立つか: アンケート調査と実験
24 且 直子 (財団法人発達科学研究教育センター)	189,550	特任研究員	且 直子	乳幼児におけるテレビ映像理解の発達に関する研究
25 財団法人日本板硝子材料工学助成会	1,300,000	教授	兵頭 俊夫	シリカ超微粒子を生成媒体とするPsによる貴金属微粒子表面の研究
26 清野 聡子 (社団法人中部経済連合会)	1,000,000	助教	清野 聡子	水循環の調査研究
27 株式会社三啓	2,000,000	教授	川戸 佳	

	寄附者	金額	職名	受入教員	タイトル
28	マイクロソフト株式会社	2,000,000	准教授	増原 英彦	文書検索技術を応用したプログラミング開発支援
29	砂防広報センター	1,140,000	助教	清野 聡子	
30	財団法人ソルト・サイエンス研究財団	950,000	准教授	和田 元	表在性タンパク質の脂質修飾による光合成の安定化と耐塩性の改良
31	荒井 良雄 (財団法人鹿島学術振興財団)	2,500,000	教授	荒井 良雄	地方中核都市における居住空間の再編成-ライフコースアプローチによる分析
32	清水 剛 (財団法人二十一世紀文化学術財団)	1,450,000	准教授	清水 剛	株式会社の組織理論 一理論分析と計量分析によるアプローチ
33	第一三共株式会社	2,000,000	教授	黒田 玲子	DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究
34	財団法人東芝国際交流財団	750,000	准教授	SAALER, Sven	Publication of Pan-Asianism-A Documentary History
35	駒場友の会	235,000	学部長	小島 憲道	教養学部正門門扉復元費用の一部にあてるため
36	第一三共株式会社 プロセス技術研究所	500,000	教授	尾中 篤	
37	特定非営利活動法人 砂防広報センター	560,000	助教	清野 聡子	
38	社団法人日本鉄鋼協会	300,000	特任講師	山本 光夫	製鋼スラグから溶出する二価鉄と腐植物質の錯体形成に関する研究
39	一高同窓会	810,000	研究科長 ・学部長	小島 憲道	教養学部正門門扉復元費用の一部にあてるため
40	一高同窓会	464,000	研究科長 ・学部長	小島 憲道	
41	清野 聡子 (財団法人河川環境管理財団)	1,000,000	助教	清野 聡子	漁業者の経験知を活用した河口干潟の総合土砂管理の指標の研究
42	株式会社サトウスポーツプラザ	5,000,000	教授	石井 直方	
43	Human Frontier Science Program Organization	13,325,000	准教授	澤井 哲	
44	日産科学振興財団	6,660,000	准教授	村上 郁也	人と機械の自然な共生を目指す認知科学研究:楽しく安全なクルマ生活のため
45	財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団	1,000,000	助教	襦屋 光男	閩欠の人工低酸素環境曝露を伴う筋力トレーニング処方の開発
46	豪日交流基金	2,507,523	センター長	古矢 旬	
47	The Centre d'Etudes Francais sur la Chine Contemporaine (CEFC)	963,390	教授	小林 康夫	ワークショップ「中国伝統文化在当代中国角色」の企画・準備・運営のため
48	昭和電工株式会社	1,000,000	教授	尾中 篤	
49	ドイツ学術交流会	10,144,375	センター長	木畑 洋一	
50	株式会社SRA先端技術研究所	1,000,000	教授	玉井 哲雄	
51	株式会社山田養蜂場本社	1,500,000	助教	木本 哲也	脳海馬の記憶学習に及ぼすローヤルゼリーとプロポリスの効果
52	財団法人武田科学振興財団	2,000,000	准教授	佐藤 守俊	疾患細胞を早期診断・早期治療する分子プローブの創製
53	伊藤 元己 (自然科学博物館)	14,907	委員長	伊藤 元己	
54	株式会社朝日出版社	248,600	准教授	斎藤 文子	
55	柴田 節子	3,000,000	研究科長 ・学部長	小島 憲道	総合文化研究科・教養学部における学生奨学金
56	小島 憲道	1,800,000	教授	小島 憲道	
57	財団法人微生物化学研究会	2,250,000	准教授	松田 良一	
58	フリードリヒ・エーベルト財団 (FES)	404,510	特任准教授	川喜田 敦子	
59	伊藤 元己 (自然科学博物館)	11,743	委員長	伊藤 元己	
60	財団法人三豊学術振興協会	2,000,000	特任研究員	梶原 優介	シアフォース型AFMによるテラヘルツ近接場顕微鏡の開発

	寄附者	金額	職名	受入教員	タイトル
61	青木 貴稔 (財団法人松尾学術振興財団)	4,500,000	助教	青木 貴稔	強磁場中での極低温ルビジウム原子とストロンチウム原子混合体の研究
62	Human Frontier Science Program Organization	11,724,750	教授	石浦 章一	
63	財団法人浦上食品・食文化振興財団	1,100,000	助教	新井 秀明	ウコン由来クルクミンは本当に生体内で抗酸化作用をもつのか
64	財団法人リバーフロント整備センター	1,700,000	助教	清野 聡子	岩木川流域の環境の変遷および地域社会との関わりに関する研究
65	財団法人住友財団	1,300,000	助教	山田 貴富	配列特異的DNA結合性転写因子はいかにして広範な染色体現象を制御するか?
66	財団法人住友財団	1,500,000	特任研究員	梶原 優介	THz近接場フォトン検出へ向けた自己検知型AFMの開発
67	財団法人住友財団	700,000	助教	近藤 隆祐	有機超伝導体単結晶を用いた超伝導接合作成技術の開発
68	ピューラック・ジャパン株式会社	250,000	教授	八田 秀雄	
69	イタリア文化会館	2,799,763	学部長	小島 憲道	
70	Human Frontier Science Program Organization	11,481,600	助教	昆 隆英	
71	株式会社ナックイメージテクノロジー	720,000	教授	深代 千之	
72	財団法人アメリカ研究振興会	2,476,073	センター長	古矢 旬	
73	坪井 貴司 (財団法人内藤記念科学振興財団)	3,000,000	准教授	坪井 貴司	インスリン分泌を制御するマイクロRNAの可視化解析
74	財団法人栢森情報科学振興財団	900,000	准教授	増原 英彦	静的解析と動的検査を組み合わせたアスペクト指向プログラミング言語
75	丹下 巧 (一高同窓会)	1,000,000	研究科長 ・学部長	小島 憲道	
76	横田 裕治 (一高同窓会)	10,000	研究科長 ・学部長	小島 憲道	
77	株式会社東大総研	250,000	教授	増田 茂	
78	池田 信雄 (美術博物館)	4,425	委員長	池田 信雄	
79	株式会社MTG	300,000	教授	石井 直方	
80	財団法人光科学技術研究振興財団	1,400,000	准教授	坪井 貴司	細胞骨格による開口放出モード制御機構の解明
	合計	423,787,151			

2008(平成20)年 寄附金(数理学研究科)

(平成20年1月1日～平成20年12月31日)

	寄附者	金額	職	受入教員	タイトル
1	BNPパリバ証券 東京支店	30,000,000	教授	楠岡 成雄	ファイナンス数理 (BNPパリバ証券) 寄付講座
2	財団法人住友財団	200,000	特任研究員	境 圭一	配置空間積分及びオペラッドの作用を用いた、埋め込みの空間のトポロジーの研究
	合計	30,200,000			

2008(平成20)年 受託研究

平成20年12月26日現在(受人決定分)

委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル	
1	マイクロ化学プロセス技術研究組合 (NEDO再委託)	尾中 篤	教授	3,600,450	ナノ空孔反応場と分子触媒の協働作用技術の開発および、ナノ空孔反応場と分子触媒の協働作用技術への協奏的反応場の適用
2	社団法人青年海外協力協会	遠藤 貢	教授	10,000,000	国際協力における海外ボランティア活動の有効性の検証
3	独立行政法人日本学術振興会	高塚 和夫	教授	2,500,000	カオス科学の新展開と複雑系技術の構築
4	独立行政法人日本学術振興会	猪野 和住	助教	1,000,000	トポロジカルな量子秩序とその量子計算への応用
5	独立行政法人日本学術振興会	大貫 隆	教授	16,500,000	人文社会科学における大学院教育の国際化のための日独共同教育体制の整備
6	独立行政法人日本学術振興会	和田 元	准教授	2,500,000	光合成の調節機構とゲノミックス
7	独立行政法人日本学術振興会	佐藤 守俊	准教授	624,000	ひらめき：ときめきサイエンス「光を使って細胞の中の分子を見る」
8	文部科学省	黒田 玲子	教授	72,453,482	科学技術インタープリター養成プログラム
9	文部科学省	大沼 清	特任講師	22,230,000	ヒトiPS細胞等を用いた次世代遺伝子・細胞治療法の開発
10	文部科学省	浅島 誠	特任教授	4,028,121	ネットイヅメガエルの収集・保存・提供
11	文部科学省	佐藤 健	准教授	9,100,000	小胞輸送を制御するタンパク質複合体の構造機能解析
12	文部科学省	伊藤 元己	教授	19,000,000	情報発信体制の整備とプロジェクトの総合的推進
13	文部科学省	真船 文隆	准教授	5,830,000	蛋白質単粒子解析用液体・分子ビーム生成装置の開発
14	独立行政法人科学技術振興機構	酒井 邦嘉	准教授	39,650,000	脳機能計測・双生児研究による言語獲得メカニズムの解明
15	独立行政法人科学技術振興機構	小宮山 進	教授	76,661,000	テラヘルツ検出器と顕微鏡の開拓
16	独立行政法人科学技術振興機構	久我 隆弘	教授	6,279,000	原子ボーズ凝縮体と光双極子ポテンシャルを使った原子量子回路の開発
17	独立行政法人科学技術振興機構	若杉 桂輔	准教授	11,310,000	蛋白質工学的手法による細胞内環境の計測
18	独立行政法人科学技術振興機構	加納 ふみ	助教	22,100,000	セミインタクト細胞を用いた蛋白質の一生の可視化解析
19	独立行政法人科学技術振興機構	川戸 佳	教授	13,000,000	脳スライス中で可視化した神経シナプスの自動解析
20	独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	山本 泰	教授	34,623,050	NEDO新環境エネルギー科学創成特別部門
21	日本中央競馬会 競走馬総合研究所	八田 秀雄	准教授	3,000,000	サラブレッドの乳酸代謝及び乳酸輸送担体に関する研究
22	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構	太田 邦史	教授	11,600,000	組換え開始酵素Spo11による標的相同組換え活性化法の確立
23	独立行政法人科学技術振興機構	陶山 明	教授	36,400,000	DNAエンコード技術による生体情報分析法
24	財団法人埼玉県中小企業振興公社	太田 邦史	教授	19,400,000	タンパク質の高速分子育種を基盤技術とする先端バイオ産業の創出
25	独立行政法人科学技術振興機構	太田 邦史	教授	4,100,000	血管異常収縮関連因子に対するモノクローナル抗体作製
26	日本学術振興会	山田 広昭	教授	8,047,000	文学・芸術の社会的媒介機能
27	独立行政法人科学技術振興機構	信原 幸弘	教授	11,312,600	社会的影響の観点から見た神経科学研究
28	愛媛大学(環境省)	清野 聡子	助教	16,497,000	市民と研究者が協働する東シナ海沿岸における海岸漂流ゴミ予報実験
29	独立行政法人科学技術振興機構	浅島 誠	特任教授	100,000,000	器官再生の研究

	委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル
30	独立行政法人情報通信研究機構	小宮山 進	教授	2,310,000	ICTによる安全・安心を実現するためのテラヘルツ波技術の研究開発
31	国立精神・神経センター	石浦 章一	教授	2,000,000	効率の良いエキソスキッピングを用いた筋強直性ジストロフィー症状改善法の開発
		松田 良一	准教授	2,500,000	ネガマイシン及びその類似化合物によるリードスルー機構の解明
32	独立行政法人医薬基盤研究所	佐藤 守俊	准教授	18,600,000	脂質メッセンジャーの革新的可視化計測を実現する分子プローブの創製と展開
33	株式会社富士通研究所	玉井 哲雄	教授	1,000,000	ソフトウェアの高信頼化に関する研究
34	キリンホールディングス株式会社	渡邊 雄一郎	教授	3,900,000	「食」を考えるキリン・東大パートナーシッププログラム
35	日野市	石井 直方	教授	574,990	日野人四大運動事業効果測定
36	独立行政法人科学技術振興機構	陶山 明	教授	3,900,000	DNAセルフアセンブリによるナノシステムの創製
37	独立行政法人科学技術振興機構	石原 秀至	助教	11,700,000	形態形成を引き起こす力学過程の解明：分子・細胞・組織をつなぐ
38	独立行政法人科学技術振興機構	前田 京剛	教授	10,530,000	鉄ニクタイド系超伝導体の薄膜を用いた高周波スペクトロスコピーとその応用
			合計	640,360,693	

2008(平成20)年 受託研究(数理科学研究科)

平成20年12月26日現在(受入決定分)

	委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル
1	独立行政法人科学技術振興機構	新井 仁之	教授	6,537,700	ウェーブレットフレームを用いた視覚の数理モデル
2	独立行政法人科学技術振興機構	吉田 朋宏	教授	13,325,000	確率過程の統計推測法の基礎理論およびその実装
			合計	19,862,700	

2008(平成20)年 共同研究

平成20年12月26日現在(受入決定分)

委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル
1 日本電信電話株式会社 NTTコミュニケーション科学基礎研究所	広瀬 友紀	准教授	0	日本語発話構造の特異性に関する言語心理的研究
2 独立行政法人理化学研究所	坪井 貴司	准教授	495,000	新規ホルモン分泌反応可視化プローブによるホルモン顆粒産生制御機構の解明
3 塩野義製薬株式会社	村田 昌之	教授	4,000,000	創薬支援を目的とした汎用性の高いキナーゼネットワーク可視化解析システムの構築
4 塩野義製薬株式会社	佐藤 守俊	准教授	5,000,000	蛋白質リン酸化のin vivo分子イメージング法の開発
5 株式会社ProbeX	佐藤 守俊	准教授	2,526,135	新規分子プローブの開発
6 株式会社ドコモ	須藤 和夫	教授	3,500,000	分子モーターを利用した分子伝送に関する研究
7 協和発酵キリン株式会社	浅島 誠	特任教授	1,000,000	腎発生期に発現する創薬標的候補遺伝子の探索
8 独立行政法人科学技術振興機構	黒田 玲子	教授	19,652,000	カイロモルフォロジー基盤技術開発研究
9 福井コンピュータ株式会社	石井 直方	教授	2,200,000	電子制御式フィットネスマシンおよび筋力測定器を用いた新しい体力づくり支援システムの開発
10 協和メデックス株式会社	太田 邦史	教授	330,000	抗SPC (スフィンゴシルホスホリルコリン) 抗体
11 株式会社デンソー システム開発部	深津 晋	准教授	1,000,000	Si系導波路型光エミッタの研究
12 株式会社コンボン研究所	真船 文隆	准教授	3,150,000	レーザー照射下での金クラスターの局所高温高圧場を反応場とする科学反応の解明およびマルチエレメントクラスターへの展開
13 独立行政法人科学技術振興機構	金子 邦彦	教授	3,820,000	生命システムの可塑性の理論
14 豊田中央研究所・独立行政法人理化学研究所	山田 貴富	助教	130,000	大規模ゲノム再編システムによる酵母育種の開発
15 独立行政法人理化学研究所	本瀬 宏康	助教	0	serrateサプレッサー変異体の単離
16 株式会社豊田中央研究所	豊島 陽子	教授	1,000,000	生体分子モーターの再構築によるアクチュエータ機能の検証
17 株式会社博報堂	植田 一博 清水 剛	准教授 准教授	2,200,000	イノバーターの「知識のフラット化」についての研究
18 PMIコンサルティング株式会社	植田 一博 清水 剛	准教授 准教授	2,200,000	組織の創造性を高める人材ポートフォリオについての研究
19 独立行政法人産業技術総合研究所	近藤 隆祐	助教	0	強相関有機エレクトロニクスに関する研究
20 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構	久保田 俊一郎	教授	0	糖化タンパク質およびS100ファミリータンパク質の機能解明
21 株式会社エコ・グリーン	山本 光夫	特任講師	1,000,000	藻場再生に向けた森と川と海をつなぐ生態調査とCO2固定量評価
22 独立行政法人宇宙航空研究開発機構	石井 直方	教授	3,311,286	宇宙飛行士の加圧トレーニングプログラムの有効性検証地上実験
23 大正製薬株式会社	浅島 誠	特任教授	5,000,000 (2年分)	未分化維持因子導入細胞の多機能性誘導能の検討

	委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル
24	株式会社マルハニチロホールディングス	久保田 俊一郎	教授	0	昆布抽出液に含まれる機能性成分の同定
		合計	61,514,421		

2008(平成20)年 共同研究(数理学研究科)

平成20年12月26日現在(受入決定分)

委託団体	受託担当者	職名	金額	タイトル
1 新日本製鐵株式会社	山本 昌宏	准教授	15,000,000	数学者との国際連携による逆問題解析技術の進化
		合計	15,000,000	

2008(平成20)年度の役職者

研究科長・学部長および専攻・系長・学科長

研究科長・学部長	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
副研究科長・副学部長(評議員)	長谷川壽一
副研究科長・副学部長	木村 秀雄
副研究科長・副学部長(事務部長)	佐藤紀志雄
研究科長特任補佐	加藤 道夫 小寺 彰 高田 康成 永田 敬
総長補佐	古城 佳子
研究科長・学部長補佐	栗栖 源嗣 原 和之 平成20年9月30日まで 加藤 恒昭 平成20年10月1日から
言語情報科学専攻長	丹治 愛
超域文化科学専攻長	三角 洋一
地域文化研究専攻長	遠藤 泰生
国際社会科学専攻長	丸山 真人
広域科学専攻長	石浦 章一
生命環境科学系長	池内 昌彦
相関基礎科学系長	遠藤 泰樹
広域システム科学系長	伊藤 元己
超域文化科学科長	高橋 宗五
地域文化研究学科長	石田 勇治
総合社会科学科長	中西 徹
基礎科学科長	小宮山 進
広域科学科長	山口 泰
生命・認知科学科長	村田 昌之

総合文化研究科・教養学部内の各種委員長・議長・代表など

総務委員会	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
前期運営委員会	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
前期教務電算委員会	鈴木 啓二
後期運営委員会	石田 勇治
総合文化研究科教育会議	三角 洋一
教務委員会	鈴木 啓二
財務委員会	長谷川壽一
教育研究経費委員会	田尻三千夫
入試委員会	豊島 陽子
広報委員会	山脇 直司

情報基盤委員会	山口 泰
ネットワーク専門委員会	佐藤 俊樹
情報セキュリティ委員会	木村 秀雄
教育研究評価委員会	遠藤 泰樹
図書委員会	鍛冶 哲郎
学生委員会	佐藤 安信 平成20年9月まで
	高塚 和夫 平成20年10月から
三鷹国際学生宿舎運営委員会	鈴木 英夫 平成20年9月まで
	山田 茂 平成20年10月から
建設委員会	長谷川壽一
教養学部報委員会	村田 滋
社会連携委員会	下井 守
環境委員会	下井 守
知的財産室	小宮山 進
共用スペース運用委員会	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
研究棟管理運営委員会	村田雄二郎
国際連携委員会	木村 秀雄
国際交流・留学生委員会	刈間 文俊
駒場インターナショナルオフィス運営委員会	高田 康成
防災委員会	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
奨学委員会	相澤 隆
初年次活動プログラム運営委員会	長谷川壽一
学生相談協議会	佐藤 安信 平成20年9月まで
	高塚 和夫 平成20年10月から
進学情報センター運営委員会	安岡 治子 平成20年9月まで
	真船 文隆 平成20年10月から
学生相談所運営委員会	丹野 義彦
ハラスメントに関する相談員	小島 憲道 平成21年2月15日まで
	山影 進 平成21年2月16日から
教養教育開発室運営委員会	永田 敬
放射線安全委員会	渡邊雄一郎
放射線施設運営委員会	若杉 桂輔
核燃料物質調査委員会	石浦 章一
ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会	大築 立志

遺伝子組換え生物等実験安全委員会 ———— 久保田俊一郎
 実験動物委員会 ————— 松田 良一
 研究用微生物委員会 ————— 村田 昌之
 化学物質安全管理委員会 ————— 尾中 篤
 石綿問題委員会 ————— 長谷川壽一
 学友会評議員 ————— 山内 昌之
 文化施設運営委員会 ————— 加藤 道夫
 美術博物館委員会 ————— 池田 信雄
 自然科学博物館委員会 ————— 伊藤 元己
 学際交流ホール運営委員会 ————— 岩佐 鉄男
 オルガン委員会 ————— 吉岡大二郎
 ピアノ委員会 ————— 木畑 洋一
 TA委員会 ————— 長谷川壽一
 スペース・コラボレーションシステム運営委員会

鈴木 英夫
 アメリカ太平洋地域研究センター運営委員会 — 古矢 旬
 共通技術室運営委員会 ————— 小宮山 進
 情報倫理審査会 ————— 小島 憲道

平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

駒場ファカルティハウス運営委員会 ———— 小島 憲道
 平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

男女共同参画支援委員会 ————— 蜂巣 泉
 駒場地区衛生委員会 ————— 小島 憲道

平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

駒場地区苦情処理委員会 ————— 小島 憲道
 平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

部会主任およびその他の前期教育担当グループ責任者

英語 ————— 菅原 克也
 ドイツ語 ————— 相澤 隆
 フランス語・イタリア語 ————— 三浦 篤
 中国語・朝鮮語 ————— 若林 正文
 ロシア語 ————— 西中村 浩
 スペイン語 ————— 高橋 均
 古典語・地中海諸言語 ————— 杉田 英明
 法・政治 ————— 早川眞一郎
 経済・統計 ————— 中西 徹
 社会・社会思想史 ————— 山脇 直司
 国際関係 ————— 酒井 哲哉
 歴史学 ————— 岩本 通弥
 国文・漢文学 ————— 神野志隆光

文化人類学 ————— 山下 晋司
 哲学・科学史 ————— 高橋 哲哉
 心理・教育学 ————— 丹野 義彦
 人文地理学 ————— 荒井 良雄
 物理 ————— 加藤 光裕
 化学 ————— 下井 守
 生物 ————— 太田 邦史
 情報・図形 ————— 山口 和紀
 宇宙地球 ————— 江里口良治
 相関自然 ————— 小宮山 進
 スポーツ・身体運動 ————— 久保田俊一郎
 外国語委員会委員長 ————— 岩佐 鉄男
 人文科学委員会委員長 ————— 三角 洋一
 社会科学委員会委員長 ————— 酒井 哲哉
 前期課程数学委員会委員長 ————— 齋藤 毅

センターなど

アメリカ太平洋地域研究センター
 センター長 ————— 古矢 旬

教養教育開発機構
 機構長（学部長） ————— 小島 憲道

平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

生命科学構造化センター
 センター長 ————— 石浦 章一

ドイツ・ヨーロッパ研究センター
 センター長 ————— 木畑 洋一

複雑系生命システム研究センター
 センター長 ————— 菅原 正

保健センター駒場支所
 支所長 ————— 石川 隆

共通技術室
 室長 ————— 長谷川壽一

学生相談所
 所長 ————— 小島 憲道

平成21年2月15日まで

山影 進
平成21年2月16日から

事務部

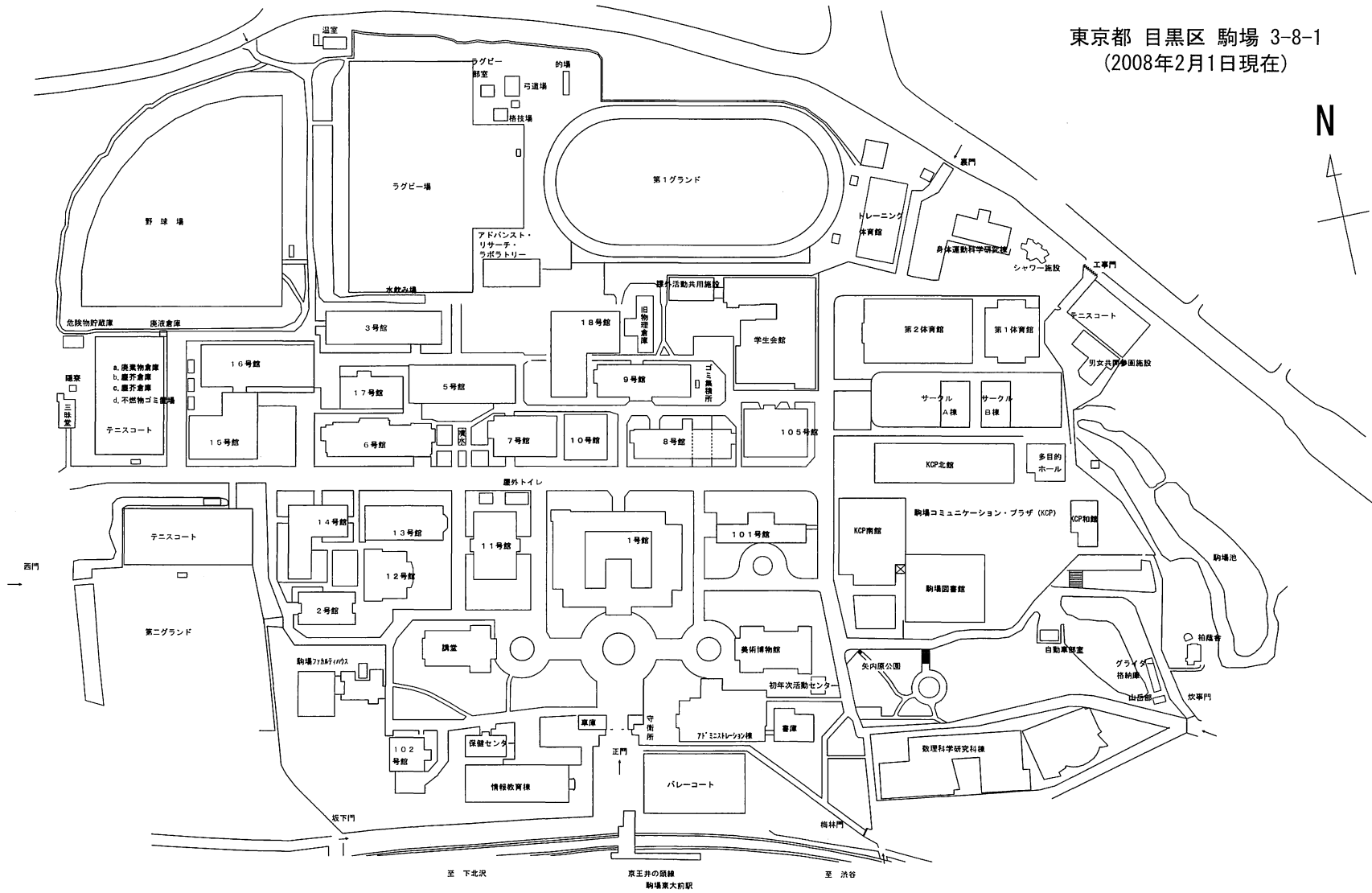
事務部長 ————— 佐藤紀志雄
 総務課長 ————— 木村 久

経理課長 ————— 武井 和夫
 教務課長 ————— 山岸 正

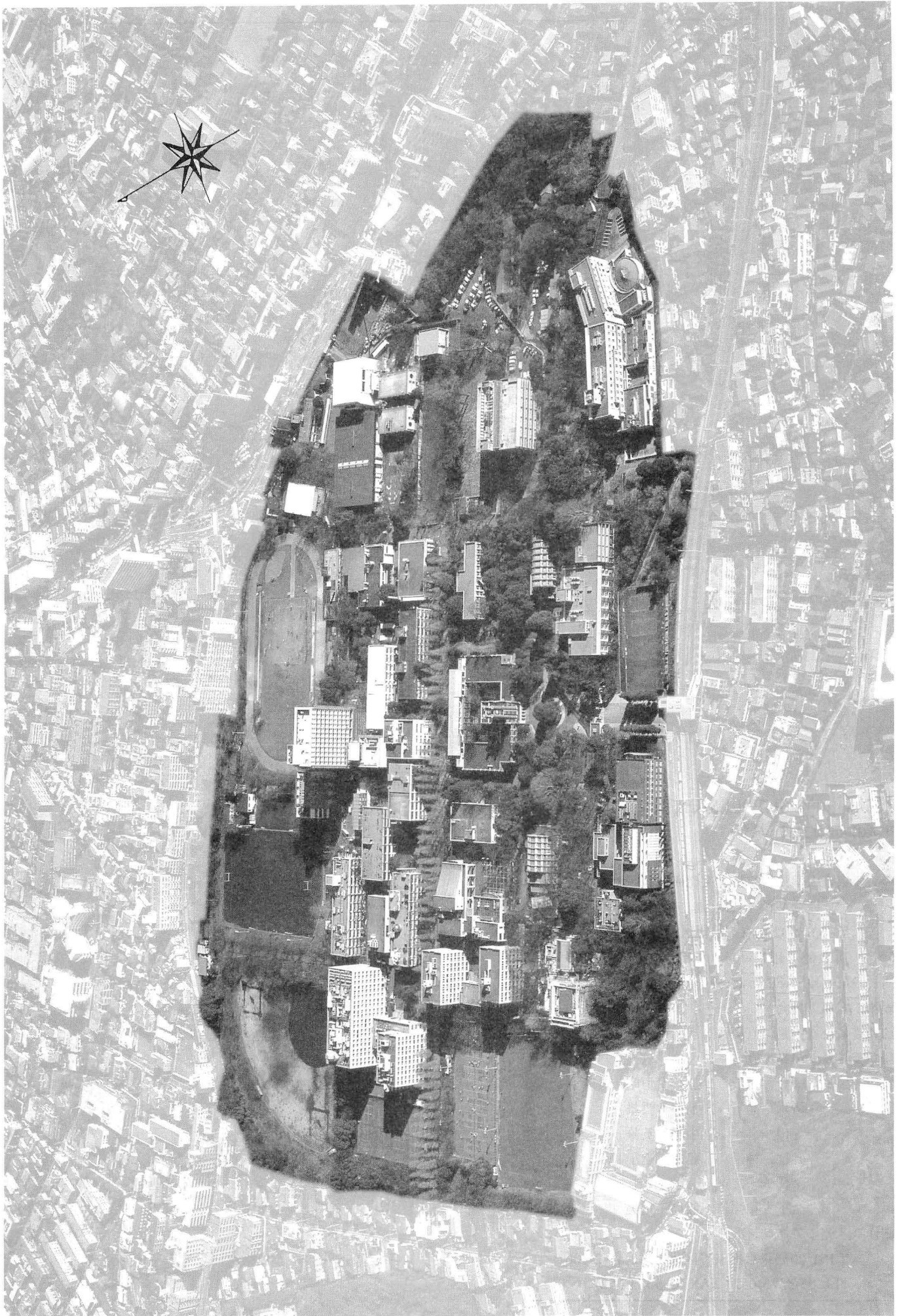
学生支援課長 ————— 関根 弘
 図書課長 ————— 市村 櫻子

キャンパス配置図

東京都 目黒区 駒場 3-8-1
(2008年2月1日現在)



駒場 I キャンパスの現状。平面図(2008年)



駒場 I キャンパスの現状。航空写真

[駒場]2008 SUPPLEMENT

平成21年3月31日 発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科

研究科長 山影 進

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6004 (ダイヤルイン)

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/>

編集：広報委員会

広報委員長：山脇 直司

編集委員長：山脇 直司

編集委員：網野 徹哉 加藤 恒昭

清水 晶子 玉井 哲雄

寺田 至 中澤 英雄

錦織 紳一 藤井 聖子

深代 千之

金子 和弥 飯島 重美

制作：メディアフロント

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-41-2-506

TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES, THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

